
翼の帰る処
THE HOME OF THE WINGS
Lower volume
下
YUFUKO SENOWO
妹尾ゆふ子

THE HOME OF THE WINGS
Lower volume

翼の帰る処［ところ］——下



妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO

Illustration
ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］——下

妹尾ゆふ子

THE HOME OF WINGS

Lower volume



YUFUKO SENOWO

Illustration

ことき——KOTOKI

GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
Lower volume



目次

第四章 ——— 11

第五章 ——— 73

第六章 ——— 171

あとがき ——— 272

人物紹介



ヤエト

「過去視」の力を持つ帝国の尚書官。病弱な身。



皇女

皇帝の娘であり、北嶺郡の太守として着任する。



セルク

北嶺郡の民。



ルーギン

皇女の騎士団長。



グランダク

北嶺郡の民。



皇妹

皇帝の妹。



イスヤーム

北嶺郡の民。



ウィーシャ

帝国の伝達官。



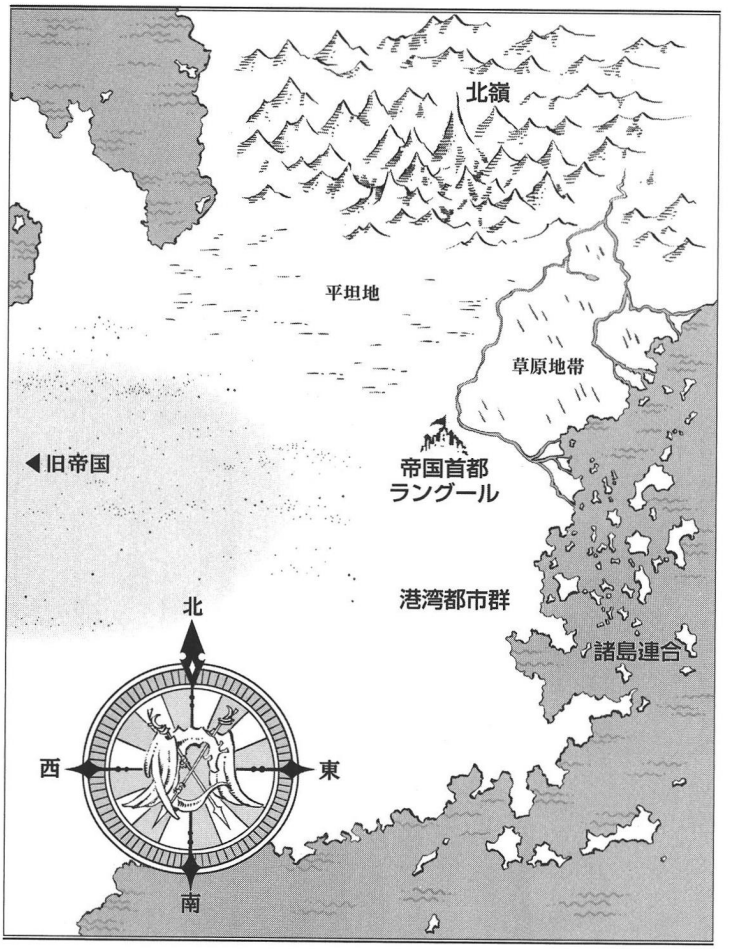
ジェイサルド

皇妹の騎士団長。



ナグウィン

商人。



THE HOME OF THE WINGS

第



章

1

ラングールとは、土地の古い言葉で《無数の塔》という意味だという。その名の通り尖塔が並ぶ古い都市は、かつての南方王国の中心、今は真上皇帝が坐す帝国の首都である。

遠望したところは、昔語りに登場する魔法の王国といった風情だ。屋根や壁にはあざやかな彩色がほどこされ、その輪郭は虹の光輝に包まれる。

大河のほとりの街は、雪崩を起こしたかのように計画性もなく広がりつづけていた。その無軌道な姿から、混沌の都と陰口を叩く者もいるほど。

人口は数十万を超えている、という。一説には百万とも。出入りが激しいため正確に把握できず、徴税吏の悩みの種、あるいは裏収入源になっている。

富裕な者ほど高い塔を建て、上層に住む。これも生活の知恵だろう。地上はうだるような暑さだ。

「風が、すっかり止まってしまいましたね」

南方出身でこの気候に慣れているはずの騎士が、うんざりした表情で汗を拭い、ヤエトに尋ねた。

「日没までには着けると思いますが……少し、休憩なさいますか」

「大丈夫ですよ」

「この暑さは、お身体にさわらないのですか？」

「主命ですから」

行けと命じられれば、どこへでも行くしかない。それが官吏というものだ。

「わたしは、御身第一とうけたまわっております。ご不調のときはお知らせください」

騎士は馬首を返して隊列の後方へ向かった。だらけて乱れた列をまとめようというのだろう。

ヤエトは馬車の中で息を吐いた。

数日前に乗り換えた馬車は、この気候に合わせたものだ。日を遮るための天蓋とそれを支える柱はあ

るが、壁は一切ない。日射しが強ければ厚手の布を下ろして遮り、風通しを優先したければ紗をかけ巡らせ、あるいはすべて巻き上げて使う。

便利は便利だが、自堕落な姿勢をとることができないのがつらい。座席は十分な広さで、上体を横たえることはできるが、人目を気にせず休めるのは支配者階級に育ってこそ。ヤエトには無理だ。

日没までにといわれたのを信じて我慢するしかないが、都に着いても楽になるとは思えない。そのことを考えると、今から頭痛がするほどだ。

――無理だ。

養生せよという表向きの命令はもちろん、皇女から受けた内命を果たすのも、無理に決まっている。

――やはり、生き延びるべきではなかった。

今度こそ死ぬだろうと思ったのに。

皇女とともに戸外で夜を明かしたとき、かなり無理をした自覚はあった。恩寵の力は夕刻から使いっぱなしだったし、慣れない山道を鳥に乗って長時間彷徨い、挙げ句に防寒具もなく野営した。

どれかひとつだけでも、かるく死ねそうだ。

夜明けにルーギンが部下を率いて迎えに来たのを認め、彼に皇女の身柄を委ねた時点で、意識は飛んだ。ほぼ瞬間的に視界が暗転し、これは死んだかもと思う暇すらなかったのだ。

意識が戻ったときに感じたのは、また死ななかったようだという淡々とした認識だけだった。

死んでいるにしては頭は痛いし吐き気はするし、手足は痺れて感覚がないし、セルクはたまに訪ねて来て大声をあげては誰かに連れ出されるし、ルーギンは恨みがましく文句をいうしで、これが死後の世界なのだったらまだ死にたくないと思うくらいの鬱陶しい現実が、彼を出迎えてくれた。

つまり、ヤエトは現世に辟易しながら、未だに生きている自分を発見したのだった。

――口先だけで謝られても困るんですよ。

まったくこの人は、とルーギンは寝台の横に並べ

られた椅子に腰を落として俯いた。
——皆をどれだけ心配させたと思ってるのかな。
ちゃんと連絡したじゃないですか、とヤエトが反論すると、鳥が鞍を空にして戻って来た時点で、心臓が止まりそうになりましたよ、と返された。セルクは真っ青になるし、ナオは金切り声をあげるし、伝達官はずっとヤエトを呼びつづけて眠ろうとしないし……。延々とつづいた愚痴が途切れた。
沈黙に耐えかねて騎士を見たが、相手はぴくりとも動かない。もういちど謝るべきか、どうせ口先だけだと責められるのだが、と悩んでいると、ルーギンが顔を上げた。
長い髪をかき上げた手の下からヤエトを凝視する眼の色は、いつも以上に淡く見えた。
——死ぬつもりでしたね？
——太守には、ご無事でお帰りいただくつもりでした。
——ちょっと殺意が湧きましたよ。
眼が笑っていなかった。
しかたなく、ヤエトは謝った。そして予想通り、誠意が感じられないとか、心から悪いとは思っていないだろうとか文句をつけられた。
——暗くて地味な趣味の場所で翌朝、と書いてあったから、一晩待ったんですよ。待った甲斐はあったと思っていいんですね？
もちろんです、とヤエトはうなずいた。
皇女の鬱屈を晴らすために時間が必要だったのもあるが、刺客の存在も疑わねばならなかった。暗い中で人が入り乱れるのは、いかにもまずい。それで朝まで待てといったのだが、どうやらルーギンは誤解しているらしい。手後れになるまで助けが来ないよう、謀られたと思っているのだ。
そこまでは考えていませんでした、とヤエトは正直に語ったが、信じてくれた風ではない。
太守の鬱屈の原因をお聞かせしましょう、と話題を逸らそうとしたが、あっさり断られた。

——結構。聞きたくない。
こうなると、難詰するのはヤエトの番だ。
——皇妹殿下のお輿入れは、おいくつで？
ルーギンは表情を変えずに答えた。
——十六、とうかがいました。
——太守は、十四歳でいらっしゃる。年明けには十五におなりです。
ヤエトは、畳みかけた。
——やはり、皇帝陛下のご存念は——
ルーギンは鬱陶しげにヤエトの言葉を遮った。
——状況次第で、あり得るとは考えておけ、と。父には申し渡されました。ご満足ですか。
——お嫌ですか、この縁組みが？
騎士はいつものように微笑した。胡散臭いほど愛想のよい笑顔は、天性身に着いた仮面だろう。
——選べる立場じゃないんですよ、わたしも、姫様も。考えるだけ無駄でしょう。違いますか？
選べるかではなく、受け入れるかどうかを訊いたのに。竜種の結婚に個人の好悪など関係ないことは、ヤエトも心得ている。だが、皇女とは嫌いあっている風でもないようなのに、ルーギンはこの縁組について考えたくないようだ。まさかとは思うが、皇妹のために独身を通すつもりだろうか。
さすがに、それを確認するのは気が引けた。
縁組みのもう一方の当事者である皇女の方は、気分一新、すっかりやる気を出した表情で病床のヤエトを訪ねて来た。人払いをして語りはじめる前から、眼が生き生きしている。嫌な予感がした。
そういう予感に限って、はずれないから困る。
——都へ行け。
は、と素で間抜けな声が出た。
皇女はおもしろそうに彼を見下ろして、うん、とうなずいた。
——おどろいたな？
なんだ冗談か、と気を抜きかけたら、真顔でつづけられた。

——北嶺の気候はそなたの身体によくないと、医師が申しておる。

先頃、各村を回って病人の治療にあたった医師のことだろう。自分はいったい何日眠りこけていたのだ、と思った。医師はもう巡回から戻ったのかと尋ねると、まだに決まっていると返された。

——視察のときに、そなたの話をしたのだ。この土地の寒さは、あまりよくないでしょうといわれてな。ずっと、考えていたのだ。しかし、今度のことがあって決心がついた。

はあ、と曖昧にうなずく彼に、皇女は命じた。

——そなたは都へ行け。行って、養生して参れ。

返す言葉がなかった。いろいろ予想外のことばかりで、頭が事態に追いつけない。

それなのに、皇女は顔をしかめた。

——もう少し、意外そうな顔をせよ。それから、おやさしいお心遣い痛み入ります……とか、なにかそういう言葉があってもよいのではないか？

指示されるまま礼をいっても、どうせ流されるだけだ。そこで、気になることだけ確認した。

——副官職は、どなたかにお譲りすることができるのでしょうか？

——大丈夫だ。伝達官がいる。

皇女の発言の意図が摑めず、ヤエトの頭は暫し空転した。まったくわけがわからない。

——そなたに褒美をやろうというのだ。隠居したいのだろう？　させてやる。喜べ。

少し考えてから、ヤエトは同じことを尋ねた。

——副官職を返上できるということでしょうか。

——それを望むなら、都で陛下に直訴せよ。

かるくいわれたが、皇帝への直訴など、殺してくださいというようなものだ。

——副官のままで、隠居ですか？

——そなたの知恵を借りる必要があれば、伝達官を通じて連絡する。

それは全然、まったく、隠居ではない。

隠居というのは、世の中とは没交渉が基本の生活のことであって、断じて、遠隔操作で厄介ごとを持ちこまれる状況ではあり得ない。

――兄上が、そなたを預かってくださる。

ヤエトは眼をしばたたいた。

そういえば、皇女は同母の兄皇子と仲がよく、伝達官を皇子のもとに置いているはず。しかし、皇子の邸？　夢の隠居生活とはますます相容れない。

――もう兄上にはお話ししてある。引き受けてくださったから、よく養生して参れ。

皇女の眼はきらきらしている。少し、元気になり過ぎではないだろうか。

なんとも返答しかねていると、皇女はヤエトに顔を寄せ、声を低めて告げた。

――なんでもよい。都の情報を集めるのだ。

思わず開きかけたくちびるを、皇女の指が押さえた。ヤエトは息を呑んだ。

この眼は本気だ。

――わかるな。取り引きに使える材料が必要だ。北嶺だけなら、もう押さえられる。だが、帝国にとって今の北嶺は、攻めづらい、攻めても利がないという程度の意味しかない。それでは困るのだ。帝国の弱味を見出し、それを利用するすべを考案せよ。

ものすごいことを、さらりと命じられた。

反論しようとしたが、皇女の指はまだ彼のくちびるを押さえていた。

――唆したのは、そなただ。

もちろんそうだが、まさか本気にするとは思わなかった。いや、本気にするにしても、自分とは無関係だと高をくくっていたのだ。

甘かった、とようやく気がついた。あの皇帝の娘なのだ、手段を選ばず目的を達成すると、心に決めてもおかしくはない。

――わたしを糾弾すれば、そなたの首も飛ぶことくらいは、わかっておろうな？

ようやく指がはなれた。

——首が飛ぶとわかっても、陛下にお話ししてしまうかもとは、お考えにならないのですか。

——陛下に泣きつくくらいなら、そなたはまず、わたしを直接諫めるであろう。違うか？

たしかに、はるばる都まで行ってから首を刎ねられるより、ここで皇女に逆らって討たれた方が楽だと考えるのがヤエトだ。

思った以上に把握されていることに、なんとも微妙な感覚を覚える。不安、あるいは焦りだろうか。

——今、ここで諫めようとはせぬ。それが、そなたの結論であろう。

——結論、ですか。

——間違っていると感じれば、そなたは即座にわたしに告げる。道を外れれば、引き戻す。違うか？　場合によるが、おおむねそんなところだろう。

無茶だとは思う。

だが、生まれ落ちた運命に従容と殉じるだけが、人の道でもないだろう。用意された未来を撥ね除けたいと望む権利は、誰にでも平等にある。

しかも、巻きこまないでくださいと請願する資格が彼にはない。皇女の言葉通り、唆したのはほかならぬヤエト自身なのだから。

——わたしには重過ぎる任かと存じます。

皇女はヤエトの手を握った。視線が合うと、彼の名を呼んだ。

——ヤエト、そなた以外の誰にできる？　そなたにしかできぬ。

——無理だと思いますが。

——それならそれで、かまわぬ。そなたにできる限りのことをなせばよい。それでわたしは満足だ。

——太守、よくお考えください。わたしは、たまたま皇帝陛下のお目にとまったというだけの理由で副官に任じられた、つまらぬ者です。

皇女は笑顔を消さなかった。

——陛下は関係ない。わたしがそなたを信じ、命じているのだ。そなたの人物を見損なっていたとし

ても、それはわたしの責任だ。決断をくだした者が背負うのだと、そなたが教えてくれたのだぞ。

そんなことを教えただろうか。

ヤエトは、少女の眼を見返した。同じ直系の竜種でも皇妹ほどの力はない、皇帝の愛娘。逃れることができると、ほんとうに思っているのだろうか。

――力を貸してくれるな？

声音は冷静でも、必死の問いかけであることはわかった。握った手にも力がこもっていた。

――ご命令とあらば、微力を尽くす所存です。

答えたヤエトの声には力がなかったが、皇女は満足げにうなずいて身を離した。

――忘れるでないぞ。そなたがなすべきことの第一は、養生だ。元気になって、帰って来い。

――帰るのですか……。

皇女は首をかしげた。

――そうだ。帰るのだ。どうかしたのか？

口籠った彼を見てなにを感じたのか、皇女は眉を上げ、くだらんな、といった。

――どうせ、自分には帰るところがないとか、故郷はどこだとか、面倒くさいことを考えているのだろう。そうだな？

否定できなかったので、ヤエトは黙っていた。

皇女はその沈黙を、笑いとばした。

――そなたはわたしの副官だぞ。そなたが帰るべきは、どこぞの土地ではない。当然、わたしのもとへ帰るのだと心得よ。よいな？

皇女の言葉を思いだす都度、なんともいえない気分になる。どうにか反論はできなかったか。諦めさせることは、不可能だったのかと。

思いつきで子どもに与えてしまった希望を、その目の前で砕くくらいの芸当、できなくてどうするのだ。やるべきだ。

しかし、できなかった。

ため息をついて、ヤエトは滲み出る汗を拭った。都の蒸し暑さを好む者などいるのだろうか。北嶺を

避暑用の別荘地として売り出してはどうだろう。

——遠大な野望だな。

皇女の騎士団の転戦歴を聞いた限りでは、帝国はまだ砂漠の東に覇権を確立したとはいえない。

別荘の需要など、夢のまた夢といったところだ。

気分転換に空を見上げようとして、豪奢な彫刻がほどこされた天蓋に視線を遮られてしまった。

やれやれ、とヤエトはまた息を吐いた。

出立にあたって依頼された諸々のことで、彼にもなんとかなりそうなのは、言伝と土産を持ってエイギルの家族を訪ねることくらいだ。

考えこんでいるあいだに一行は差し掛け小屋のあいだを抜け、古い市街へと入って行った。

沙漠を越えてから十数年、転任までは都に住んでいたというのに、なつかしさはなかった。

街の中に入りこんでしまうと、壁また壁が並ぶばかりで、塔の姿はあまり見えなくなる。

一行は速度を落とし、邸宅が並ぶ川岸へと向かった。補強に補強を重ねた護岸工事の上に建つ豪壮な邸宅のひとつが、彼の滞在先——すなわち第三皇子の住まいである。

ウィルトとは三をあらわす聖音で、皇子の皇家における位置付けを示す符号に過ぎない。

皇女はただひとりだから皇女と呼べば済むが、皇子は大勢いるから通称が必要になる。慣例として、数詞が選ばれる。

高貴な生まれというのも大変だ、とあらためて思う。番号で呼ばれるのが当たり前なのだから。

出迎えたのは、髪を南方風に布で巻いてまとめ、焦茶の服に身を包んだ痩身の男だった。年齢はルーギンと同じか、少し若いくらいではないだろうか。

男は、自分は第三皇子の家宰であると告げた。

暗くなった門前に立つ男の眼は、白い部分ばかりが明るく見えた。

「ダハールと申します。我があるじに代わって歓迎の意をお伝えできることを、喜びと存じます」

家宰の先導で、むせるほどの花の香りに満ちた、広い中庭を通り抜けた。

皇子の邸は、大小様々な塔の集合体であった。それぞれの地上階が繋がるように壁を抜き、屋根をつらねてあるが、いかにも後付けの工事である。元は雑多な建物だったものを、この一帯を皇家が接収した際、手を入れたと見える。

――帝国人は、現実家だからな。

気候を考えれば高層階の方が過ごしやすいことはすぐに学び、既存の塔を利用するとして、狭いから拡げて繋げました、という改築だ。

「こちらをお使いください」

三層ある小塔が、ヤエトのために用意された隠遁所らしい。皇子は夕餉の最中だとかで、挨拶はあらためて明日にでも、という運びになった。

ダハールは護衛の騎士を尚武官の宿舎へ案内するために立ち去り、ヤエトはひとりで残された。

皇子の家宰にとって、ヤエトは面倒な客のはずだ。都の誰もが皇女の太守就任をままごと遊びのようなものと考えているだろう。ヤエトは、その遊び相手として皇帝が任命した、一介の尚書官に過ぎない。歓待しても、割のいい投資にはならないはずだ。といって、粗略に扱うわけにもいかない。

――気の毒なことだな。

戸外はまだ明るいが、室内はすっかり影の中だ。人夫が運んで来た荷物をとくのは後回しにして、ヤエトは塔の中を検分しはじめた。

本来は遊興用の建物でもあろうか。ほかの塔からはかなり距離があり、繋げられていない。それだけに、古い建築様式がそのまま残っている。

熱気がこもるのを嫌ってのことだろう、広くはないが、各階の天井はかなり高く、窓は大きい。地上階は少し掘り下げられ、床には陶の細片が敷き詰めてある。古いものらしく、ところどころ彩色が剝げ落ちてはいるが、無限にひろがる渦巻きのような文様を表現した、見事な細工だ。壁にも陶片は埋めこ

まれ、曲線と直線がからみ合う複雑な文様が見える。ふれてみると、ひやりと冷たかった。

地上階には寝椅子が、その上階には寝台があるばかりで、ふつうの椅子がない。皇女はいったい彼をどの程度の病人と伝えたのだろう。あまり元気にしていると、追い出されてしまうかもしれない。

最上階にも寝椅子が置かれていた。暑い日にはここで風を待てということだろう、壁は腰高、精緻な彫刻がほどこされた柱が支える屋根は大きく張り出して、軒先には灯火を吊るための金具が見える。

すぐ裏はもう大河だ。船着き場は、母屋とヤエトのいる小塔のあいだにあった。邸と河とはしっかりした柵で隔てられ、門前には番兵も立っている。

――防備は固い、ということか。

三という数字は無視できないほど玉座に近い。たとえば、皇帝に溺愛される皇女と同母だという理由で、兄たちを飛び越えて太子に擁立されるかもしれないと噂されるほどに。

暗殺の危険性も、皇女の比ではなかろう。

もちろん、ヤエトも疑われているに違いない。無邪気な皇女がうっかり信用した尚書官が、実は暗殺者だったとしても、誰もおどろかないはずだ。

そもそも、転地療養という理由自体が胡散臭いのだ。尚書官など使い捨ての人材と看做すのが、帝国の流儀なのだから。

実際、療養は口実半分だしな、と考えながらヤエトは顔をしかめた。その口実の裏側に隠された、皇女の命令を思いだしたのだ。

大河を見下ろして今後のことを考えていると、庭の方から声をかけられた。

「もし、そこのかた」

声の主を探して庭側へ移動すると、人影が三つほど見えた。灯火を捧げ持つ者、盆を持つ者、そしてそのふたりの侍者を従えた小柄な男。

「なにかご用でしょうか」

「ご無事のご到着をお祝いに。入れていただいても、

よろしいかな」
　灯火が照らし出す男の肩に紫を認め、ヤエトは眼をほそめた。
「すぐ、参ります。暫しお待ちを」
　訪問者は予想通り、皇女の伝達官だった。黒衣に紫の肩衣をかけ、落ち着き払った顔だちは大人のものだが、上から見下ろしたときに感じたよりさらに背が低い。皇女とそう変わらないくらいだろうか。
「かるくお召し上がりものを準備させました」
　男が連れて来た召使いたちは、壁際に畳んであった食卓を手際よく広げ、その上に盆を載せた。色あざやかな果実がとりどりに盛られた高杯に、気泡を含んだ青い硝子の水差しと椀、そして都ではなによりの贅沢品、ふんわりと削った氷が並んでいる。
「北嶺では大ぶりの果物が滅多に手に入らぬと、姫様よりうかがっております」
　水差しの蓋を開いて匂いを確認すると、ヤエトは微笑んだ。
「わたしが下戸だということもご存じですね」
「左様。ご滞在のあいだ、なにくれとなく世話を焼けと命じられました。自分は適当にやりますよ」
　そういって、伝達官は懐から小瓶を出して呷った。
「お手をわずらわすわけには参りません」
　伝達官は、その言葉を運ぶ皇族自身に準ずる地位の持ち主と看做されるのが通例だ。本来なら、もっと威張りくさっていても問題ない。
　だが、皇女の伝達官は、あっさり告げた。
「どうせ暇なのだから働けと命じられましてな」
　どう答えてよいかわからず、ヤエトは曖昧な笑みを浮かべて問い返した。
「お暇なのですか？」
「姫様は、あまりお兄上様とお話しになりませんのでね、最近は。都にいらした頃は、近いんだから自分で来て話せや、と頭をはたきたくなるような頻度で使われましたが」
　伝達官はにやりと笑った。眼のまわりに皺が目立

ち、一気に老けて見えた。
「太守の――皇女殿下の伝達官になられて、もう長いのですか」
「姫様が言葉を話すようにおなりになってすぐ、任じられましたので。わりと、遠慮のない仲ですな」
なんとも反応しづらい。
無意識に、ウィーシャと似たような――つまり、人形じみた若い女性なのではないかと予測していた自分に気づいて、苦笑してしまう。
伝達官は氷の椀を取り上げた。
「まあ、溶けてしまう前に氷でもどうぞ。わたしもいただきますよ。お客さまのお相伴ということでないと、滅多に食べられないものでね」
勧められるままに、ヤエトは氷を口に含んだ。舌の上で溶けた後に、甘い果実酒の香りが残る。
「おいしいです」
「お疲れになったでしょう。そういうときは、甘いものを摂るのがよい。姿勢も、楽になさい。どうせ見ているのはわたしだけです……おっと、そうでもありませんでしたな。皆、下がっておれ」
伝達官は侍者たちを塔の外へ追い払った。
連絡役となる伝達官には、どれくらい打ち明けて大丈夫なのか、と事前に皇女には尋ねてあった。
なにも、と皇女は答えた。
――信用できないわけではないが、……なんといえばよいのかな。親戚のような感じだ。わたしを気遣う心根に、いつわりはない。だが、案じるあまり兄上や陛下に相談されては困ることもある。
説明を受けたときはぴんと来なかったが、喋ってみてようやく腑に落ちた。
この男にとって、皇女は守ってやらねばならない子どもなのだ。きっと、永遠に。
それでどうやって内密の情報をやりとりするのかと問えば、皇女が伝達官を完全にのっとれば、その間の会話の記憶は伝達官には残らないのだという。
北嶺に到着した直後にウィーシャがやってのけた

のと同じ技で、伝達官には負担が大きい。だから、そう頻繁には使えないと説明された。

「これを食べたら、姫様と代わります。眠いので、あまり時間をかけないでくださると助かります」

氷を盛った匙をゆっくりと口に入れると、伝達官は眼を閉じた。おいしい、とつぶやいて匙を置き、ふたたび眼を開いたと同時に空気がふるえた。

竜気が、伝達官の身体をかけ巡っている。その眼は、あざやかな紫に染まっていた。

「無事に着いたようだな」

「はい。そちらは、なにか異常はありませんか？」

「信じられないほど寒い以外は、夏とそう変わらぬな……ああ、野蛮人の尚書官どもが大挙して戻って来たぞ。冬越しの施設なのか、この城は」

「朝議はどうです。進んでいますか」

解決しておくべき問題は、いくらでもある。それは、ルーギンとセルクにも伝えてあった。

皇女にとって重要なのは、尚書官たち——すなわち、各村の代表として選出される、地域の実力者たちの心をしっかりと摑むことだ。朝議を通じて信頼を得るよう、皇女には進言してある。

伝達官は今、皇女と同じように顔をしかめていた。まるで違う顔なのに、親子のように似ている。

いや——皇女自身が、そこにいるように見える。

ヤエトは眼をしばたたいた。何度見直しても、卓を挟んで座っているのは皇女だ。眼を凝らしてようやく、伝達官本来の姿がうっすらと透けて見える。

やはり、竜気に過敏になっているようだ。ウィーシャが皇帝の言葉を伝えたときには、こんな風には見えなかった。

「進まぬな。セルクがわめいて、イスヤームが鼻で笑って、グランダクが賭けをしている。奴は、わたしには賭けさせてくれぬから、嫌いだ」

「太守……」

「そなたが、絶対にやらせるなと命じたそうだな」

「左様な些末な話をなさるのでしたら、もうお戻り

ください」
ぴしゃりと話を断ち切ると、ヤエトは果物を手にとった。名前も知らない黄金色の実は、ずしりと手に重かった。
「些末なこともよく心に留めよ、とそなたが申したのだぞ」
「すべてご報告くださいとは申しておりません」
皇女は黙ってしまった。
しかたなく、ヤエトは少し身を乗り出し、声をひそめて説明した。
「わたしの到着を聞いたとたん、伝達官がいそいそと訪ねてくるだけでも不自然なのです。いらぬ注目は集めたくありません」
「……あのな」
「はい？」
「それは無駄な努力だと思うぞ。それから、ずっと気になっていたのだが」
皇女の手がさっと動き、ヤエトの前髪をつまんだ。
「そなたのこれ。邪魔ではないのか？」
「べつに」
「嘘だろう？　こちらの眼など、ほとんど隠れているではないか」
「左は、あまり見えませんので」
答えながら思いついて左目を覆うと、皇女の姿が薄れ、伝達官本来の姿が浮かび上がってきた。
なるほど、竜気は眼で見ているわけではなく、むしろ本来の視力は邪魔なのだと納得しているあいだも、皇女は彼の前髪をつまんだままだった。
「初耳だぞ」
「些末なことですので」
「そなたの死角は常人より広いということではないか。気をつけねばなるまいな」
「まあ、そうなりますが」
戦場に出るわけではないし、どうでもよいことだ。
「ルーギンはな、なぜ髪を長くしているのかと訊いたら、切らないでほしいと乞われたことがあるから

だといっていた。セルクは、長いと面倒だから適当に切っているそうだ。イスヤームはな、奥方が手入れをしているらしいぞ。だから、冬のあいだは伸び放題で、春が間近になる頃には、髭も伸びてまるで別人のようになるらしい。楽しみだ」

「……ですから、すべてご報告いただく必要はないのですが」

「南の郡境に、防塁を造成している。南麓鎮のあたりは、まだまだ雪も積もらぬそうだから、それなりの数は作れるだろう。麓にも《雪鳩》と鳥使いを派遣することにした」

「はい」

「それで、さっそく引っ掛かったのが行商人だ」

「抜け道が、ありましたか？」

「道、というほどのものでもない。馬車は通れぬ。荷物は人が背負って運んでいた。検分して通したが、北の蛮族のところへ行くな、あれは」

真面目な顔で説明しながら、無意識にであろうか、ヤエトの前髪をひねり上げている。少々、痛い。彼は皇女の――正確には伝達官の手をはずし、髪を後ろに撫でつけた。

「荷はなんだったのですか」

「《青鉄》の剣が五本。それは没収した」

《青鉄》というのは、特殊な鍛鉄技術で造られた刃物の総称で、武器としての性能は鉄剣に倍する、といわれている。本来は神との契約にもちいる神剣だが、現在、製法は帝国が独占している。

真上皇帝は《青鉄》の職人を沙漠越えに同行し、守りきった。あるいは《青鉄》が彼とその軍を守ったといえるかもしれない。

鍛造に手間がかかるので、量を用意するのは困難だ。それを五本となると、ただごとではない。剣が流出するというだけでも、一大事なのだ。

「没収だけでは手ぬるかったかと」

「鳥頭どもめ、禁制品の密輸がどれほどのことか、わかっておらん。わたしの裁可を待たず、荷の没収

で事は終わったと勝手に思いこみおった……とにかく、陛下にはご報告申し上げた」
「賢明なご処置です。資金源が気になりますね」
「金鉱でも掘り当てたのかもしれぬな」
「それで購うのがまず剣というのは、あまりおもしろくありません」
「北辺にも防塁が欲しいが……三日に一日は吹雪で、身動きがとれぬ。材料は雪と氷が揃っているがな」
そのまま埋もれてしまいかねぬ、と皇女は顔をしかめた。
――気になるな。
北から攻めてくるかもというのは、可能性として考えていた程度だったが、一気に現実味が増した。
「あの荷物でこの天候を行くのだから、勇者だ」
「北の蛮族には、天候をあやつる術師がいるそうです。噂に過ぎませんが」
「配下にほしいな」
さらりといわれて、ヤエトは苦笑した。
「自分たちと同じ血が流れている者にしか心を許さないと聞きました」
「どこにでも異端者はいるものだろう」
もちろん、北嶺にもいるはずだ。今の境遇を善しとせず、機会さえ与えられれば裏切る者が。
「とにかく、お身のまわりに一層のご注意を」
「無論だ。なにか質問はあるか？」
「シロバは元気にしていますか」
「先にセルクのことを訊いてやれ。泣くぞ」
「彼はいつでも元気でしょうから」
「そうでもないぞ。そなたが出立してから三日ほどは、隠れてめそめそ泣いておった」
「聞かなかったことにします」
「つれないな。わたしも泣いて惜しもうかと思ったが、彼奴のおかげで嘆く気が失せた。臣たる者、あるじに遠慮すべきではないのか？」
誰が都行きを命じたか、忘れてはいまいか。
「ルーギン殿がおっしゃるには、太守の泣き顔を拝

見したことがないと」
「そうだったかな。まあよい、明日また」
「明日は倒れて寝込みますので」
皇女は眉を上げた。
「また具合が悪いのか」
「転地療養が必要なほどの重病人です。少しは倒れておきませんと」
「嘘をつくな。よいか、療養はただの方便ではないのだぞ。養生せよ」
その言葉を最後に皇女の気配は消え、伝達官は卓に突っ伏してしまった。
あわてて、ヤエトは立ち上がった。
「伝達官殿」
彼が卓を回りこんで助け起こすあいだに、伝達官は意識を取り戻した。今は、ひどく老けて見える。
「や……これはこれは」
「大丈夫ですか」
伝達官は、すっかり色を失った眼をこすりながら顔を上げ、まじまじとヤエトを見た。
「おどろきました」
「如何なされました」
「……すみませんが、供の者を呼んでください」
立ち上がろうとして、伝達官はふらついた。思いだしたように小瓶の中身をまた呷る。酔っぱらいのふりで、疲労をごまかすのだろう。
ヤエトは急いで扉を開け、侍者を呼び寄せた。酒臭い伝達官がゆらゆらと外へ出ると、かれらは慣れた様子であるじを支え、庭を歩み去った。
とり残されたヤエトは、伝達官が倒れたときに転がった果物を床から拾い上げ、そのまま三層に上がった。夜が街を満たしている。
ラングールは別名を魔都という。魔王を奉じていた王がここに都したからで、往時はあやしい術を使う呪師たちが技を競い、人ならぬ者が闊歩する地でもあったと。
——伝説ではない。

ここは今も魔都なのだ。
黄金の果実を齧ると、腐敗寸前まで熟した甘味が舌を刺した。
情報を集めろといわれても、漠然とし過ぎている。なにをしようにも、目標も手段も不明瞭だ。
――まずは、家主への挨拶からだ。
第三皇子に気に入られる必要はない。ただ無害な存在と思われたいだけだが、うまくいくだろうか。
暗い庭のどこかで鳥が啼いた。切り裂くような声は、不吉な翳りを帯びていた。

2

予定通りにヤエトが発熱したり、皇子が留守だったりで、正式の対面は順調にずれ込んだ。目通りがかなったのは結局、到着後十日を過ぎてからだ。
拝謁を待つ者たちは控えの間に行儀よく並び、順番に部屋に招じ入れられる。中に入ったら頭を下げて挨拶をし、退出する。それだけのはずだ。
「北嶺太守副官、ヤエト殿」
呼び出されるまま、謁見のための部屋に入る。床に膝をつき、両手をあわせて頭を下げた。
「このたびは拝謁の栄に浴し、まことに――」
「挨拶はよい、面を上げさせよ」
相手は貴人である。声をかけられても、迂闊に反応すれば不敬にあたる。相手は皇女ではないし、ここは北嶺ではない。彼は黙って指示を待った。
家宰が、皇子の言葉を伝え直す。
「皇子殿下のご命令である、面を上げられよ」
部屋の奥の一段高くなった場所に大きな椅子が据えられているのが、まず見えた。光輪と、たなびく雲を描いた黄金の椅子だ。
皇子は皇女に似ていると、ルーギンから聞いていた。さすがに最近は皇子の背が伸び、声が変わり、見間違えはしないものの、それでも似ていると。
たしかに妹と近い面貌の持ち主なのに――皇子が



身に纏う雰囲気は、皇女とはまったく違っていた。
ふれれば砕けてしまいそうな透明感のある肌に、性差を感じさせない顔だち、どこかこの世のものならぬ気配をただよわせた少年。それが、ヤエトの見た第三皇子だった。
金色の巻き毛は皇女よりもさらに豪奢にひろがって、その肩や背を飾っていた。すんなりと長い首が目立つ。大きな眼はあざやかな紫だが、少し色が沈んで見えるのは、この部屋が暗いせいだろうか。
皇子の声は、やわらかだった。
「叔母上は、北嶺でこの者をご覧になっておいでなのですね？」
第三皇子の足下には、皇妹が座っていた。
皇子の膝にしなだれかかる姿には、なぜか視線を逸らしたくなるあやうさがあった。北嶺にいたときとは別人のようだ。大きく開いた白い胸元に、煙水晶の首飾りがきらめいている。それを指先でもてあそびながら、皇妹はゆっくりと答えた。
「そのはずよ」
答える声には甘えの響きがあった。
ヤエトは混乱した。なぜ、ここに皇妹が。
自分のためか、と疑った次の瞬間に否定した。まさか。叔母が甥を訪ねたのが、たまたま今日だっただけだ。不自然なことはないだろう。
皇妹はヤエトを見ていない。長い睫毛の下から、きらめく眸が見上げているのは甥の顔だ。
「だけど、尚書官の顔は皆、同じに見えてしまうの。あの人たちって、見分けがつかなくて」
「それはお困りですね」
「困らないわ。用があれば、そのとき近くにいた者に命じるだけだもの」
皇妹は静かに立ち上がると、水面に浮かぶ泡のような裳裾を引いて、ヤエトの方に歩み寄った。
北嶺で会ったときほどではないが、竜気は見えざる圧力となってヤエトを襲った。平伏しようとした彼の前に身を屈め、駄目よ、と皇妹はささやいた。

「ちゃんと顔をお見せ。覚えられるかどうか、やってみるから」
　ダハールの取り次ぎを待っていると、皇妹は畳んだ扇の先で、彼の顎を上げさせた。
　しかたなく、ヤエトは低い声で告げた。
「失礼ながら殿下に申し上げます」
「無礼でありますぞ」
　すかさず声をあげたダハールを、皇妹が抑えた。
「かまわないわ。この者とは、北嶺で言葉をかわしたことがあるもの。直言を許します」
「……ご記憶いただく必要はございません。尚書官の仕事など、誰にでもつとまるもの。今まで通り、お側に控える者になんなりとお命じください」
「では、わたしがあなたを引き取ったらどう？　かわいい姪は、怒らないかしら」
　甘い声だった。上体をかがめてヤエトの顔を覗きこむその髪が、今にもヤエトにふれそうだ。目の前には、白い胸のふくらみが見える。なかばまで、いやそれ以上覗けそうだ。
　眼を伏せると、ヤエトは大きく息を吸った。
「別の者が、副官に任じられるだけかと存じます。ただ……」
「ただ？」
「自分は皇帝陛下の勅命を賜って、この職にあります。お役を御免になるにも、勅許を賜る必要があると聞いております」
　皇妹は声をあげて笑った。すっと身体をのばすと、長い裾をさばいて甥に向き直る。
「覚えても無駄そうね。つれない男だわ」
「叔母上、お控えください。その者はわたしの客です。妹に顔向けできなくなるようなことは、たとえ叔母上でもわたしが許しません」
「わたしと妹なら、妹の方が大事ということ？」
「叔母上」
　皇子が眉をひそめると、皇妹はまた笑った。
「冗談よ。あなたの困った顔を見るのが好きなの」

皇子はヤエトを見た。
「案ずるな、そなたは大事な客だ。ここで養生して健康をとり戻すように」
ヤエトは深く頭を下げた。その頭上から、皇妹の声が降ってくる。
「ほんとうに、よい子ね」
皇妹が立ち去るのを待ってふたたび顔を上げた。裳裾を引いてゆっくりと壇上に戻る後ろ姿は空気をかき乱し、濃厚な花の香をあたりに残していた。
皇子のかたわらに立つと、皇妹はあらためてヤエトを見下ろし、駄目ねぇとつぶやいた。
「どうなさいました、叔母上」
「顔を覚えたかしらと思って……でも無理ね」
それから、甥の肩に手をかけて身を屈め、その耳もとに顔を寄せてなにかをささやいた。
一瞬、皇子は眉根を寄せたが、すぐに表情をやわらげた。
「わかりました。叔母上のおっしゃるように」
「やさしい子」
皇妹は皇子の首に手をまわし、そっと抱きしめた。皇妹が身を離すのを待って、皇子は告げた。
「不足があれば、家宰に申せ。そなたの一日も早い本復を、妹と同様、わたしも強く望んでいることを忘れぬように。激務であったと聞き及ぶ。せめて我が邸では、ゆるりと過ごすがよい」
ダハールはあるじの言葉を復唱しなかった。ヤエトの持ち時間は終わったらしい。
「殿下、次の者を招じ入れてよろしいでしょうか」
「そのようにせよ」
ヤエトは一礼すると、後ずさってその部屋を後にした。廊下は室内よりさらに暗い。窓外に広がる庭には燦々と陽光がふりそそぎ、なにもかも真っ白に見える。対比が強過ぎて、眼がくらむほどだ。
皇妹がなにをささやいたのか気になるが、それこそが狙いなのではないか、と思う。
——疑わせたいのだろう。

後ろ暗いところがあるほど、気になるはずだ。考えないのが正解だろう、とヤエトは結論した。

それにしても、自分は皇妹に用心されるような、なにをしたというのか。

考えこみながら歩いていると、廊下を向こうから来る人物にぶつかりかけた。

「これは失礼」

「いえ」

相手は頭を下げた。暗い赤が視界を染める。顔を上げても、暗くて面立ちはよくわからない。豊かな黒髪を赤い布でまとめ、たっぷりと布を使った豪勢な衣服から、金褐色の肌がわずかに覗いていた。

自分が相手をまじまじとみつめていることに気がつき、ヤエトはあらためて非礼を詫びた。

「考えごとをしていたもので」

南方人はかるく頭を下げると、ヤエトを避けて奥へ進んだ。

——あの赤は……。

後ろ姿を見送って、ヤエトは顔をしかめた。あれは南方の古い呪術使いが好んで身に着けるものだ。

かれら呪師は鬼神を使役し、名前をもって人をあやつり、あるいは致死の呪いをはなつという。

公式には、帝国はかれらの存在を認めていないはずだ。禍々(まがまが)しい力を、しかし権力者自身はそっと飼っていたとしても不思議はない。

第三皇子もまた、権力闘争の渦中の人なのだ。

「呪師ですか」

塔で待っていた皇女の伝達官は、顔をしかめた。皇子との謁見がとどこおりなく終わったか、確認しに来ていたのだ。

「よく出入りしているのですか？」

「ダハールには、あのような者の出入りを許すのは感心しない、と申し上げておいたのですが……」

皇女の伝達官が皇子に意見をするのは筋違いだ。家宰のダハールに告げるのも、ぎりぎりだろう。

善良な人物だな、とヤエトは感心した。

「呪師のように見えたというだけですが」
「赤い布を頭に巻く南方人は、呪師だけです。呪師を騙れば、三日以内に悲惨な死を迎えますから」
「……悲惨、ですか？」
伝達官は香りをつけた水を飲み、汗を拭った。
「その悲惨な死とやらを身近に見聞きしたことはありませんよ。誰もやりませんからな。それくらい信じられている、ということです」
「立ち入ったことになりますが……皇子殿下に目立った敵はおいでなのですか？」
伝達官は眉根を寄せて考えこんでいたが、やがて口を開いた。
「ご想像の通り、といったところでしょうな。御継嗣がさだまらぬあいだは、腹の探り合いでしょう」
「皇位以外の問題は、とくには？」
伝達官は飲んでいた水を吹きそうになり、こらえて、むせた。
「存じませんよ」
知らないにしては胡乱な反応だ。
「妙なことばかりお尋ねして、申しわけない」
「かまいません。それが貴殿のお役目でしょうし」
一瞬、皇女が独立するすべを模索するために都へ派遣されたことが、知られているのかと思った。
だが、伝達官の意図したところは違った。
「三の君は同母の兄君におわします。その周辺に変事があれば、姫様に危険が及ぶ可能性も高い。我らは、それを未然に防がねばなりません」
「変事ですか……」
伝達官は肩をすくめた。
「裏での争いはひどいようです。ほとんどの皇子殿下が、領地を得ながら都に留まっておられるのも、留守にして隙をつくらぬためでしょうしね」
たとえば、皇帝崩御の機に乗じて宮殿を制圧し、帝位をかすめ取ってしまうとか。
そこまでは伝達官は口にしなかったが、いかにもありそうな話だ。よほど周到に根回しを済ませてい

なければ、そのまま内乱になるだろう。
　逆に考えれば、そういう事態になったとき、皇女は独立の機会を得るともいえる。一切の干渉を撥ねつけて、高みの見物が可能だ。
　分裂してくれた方が好都合なのだ。帝国をまるごと敵にまわすよりも、ずっと。
　――しかし、それを皇女が望むだろうか。
　父が死に、兄たちの殺しあいに巻きこまれるのだ。楽しい事態ではないだろう。
「呪師は、なんのために呼ばれているのでしょう。見当はつきませんか」
「以前、わたしが姿を見たときは、凶兆を祓うためだとダハールから説明されました。軒下に鳥が巣をかけたとかで。取り払うと祟りがあると」
「鳥……？」
「仲間を連れて報復に来るからと、召使いが怯えたそうで。まったく、南方の迷信はわけがわからない。あんな小さな鳥のどこが危険なのやら」
「では、また巣を外すためなのかも」
　伝達官は首を左右にふった。
「あり得ませんね。冬へ向かう季節に、子育てをする鳥はいません」
「ああ……失礼、たしかにそうですね」
「今年は、やけに夏が終わりませんがね。姫様のお話では、北嶺はもう雪に覆われて、麓への通行も途絶えがちだとか」
「伝達官殿とお言葉をかわされるのが、よい気散じになるでしょう」
「わたしを通じて副官殿と、の間違いでは？　まあ、若い殿方の方が楽しいでしょう、姫様も」
　ヤエトは苦笑して、少し拗ねた風の伝達官に教えてやった。
「わたしは太守に『おまえは若いのか？』と問われたことがあります」
「ひどいですな」
「太守からすれば、三十六はかなりの年寄りかと」

え、と声をあげたきり、伝達官が凍りついた。
空になった伝達官の杯に水を注ぎ足して、ヤエトは尋ねた。
「……見えませんか」
「見えませんよ。わたしと八歳しか違わないとは」
伝達官は歳相応といった外貌だ。皇女とはちょうど三十歳違うことになる。
「皇妹殿下は、尚書官は皆同じ顔に見えるとおっしゃっておいでした」
「都の尚書局には、古王国の流れを引くかたが多いですからな。しかし……それでは、皇妹殿下は貴殿が本人であると明言なさらなかった？　つまり、北嶺でお会いになった『副官』と同一人物だと、確認なさらなかったわけですね？」
「はい」
「それは、貴殿をご自分の庇護下には置かない、という意味ではありませんかな」
「そうですね……その通りかと思います」
貴人特有の婉曲な話法という代物に違いない。思わず、ため息が漏れた。
北嶺は遠い。しかもヤエトは無名の官吏だ。偽者を送りこもうと思えばできないことはない。無論、皇女には伝達官を通じて発覚するが、そもそも皇女自身が偽者を送りこまないという保証もない——と、第三皇子の部下なら考えるだろう。確認のため、皇妹が招かれたとみて間違いない。
謁見の間での彼女の言動は、兄妹の争いには干渉しないという意思表示なのではないか。たとえば、皇子がヤエトを偽者であると断じて処分しようとしても、異議は唱えないという含みがありそうだ。
あからさまに庇護の姿勢を見せられても、別種の誤解を招くに違いない。たとえば、皇妹と皇女は共謀している、とか。
疑えるものはすべて疑うべし、と皇子の臣下は思っているだろう。かれらの疑念が完全に晴れることはないはずだ。事情はわかるが、迷惑な話だ。

「同じ顔に見えるかはともかく……尚書官は皆、見た目よりずっと年長なのかが気になりますな」
「わたしは軽薄な人間で、とくに若く見られます」
「浮き世離れしておいでなのです。貴殿が無欲なればこそ、姫様もお話しになりやすいのでしょう」
「誤解です。わたしにだって欲くらいは――」
「聞いていますよ。隠居なさりたいのでしょう？」
かるく流され、ヤエトは気勢を削がれた。
「……はあ」
「隠居志願者だから、適当にそういう気分を満喫させてやってくれ、と姫様に命じられました」
「適当に満喫させてもらえるのですか？」
思わず真面目に尋ねると、伝達官は吹きだした。
「はっきり申しますがね、一介の尚書官が皇帝陛下の勅命で郡太守の――それも皇女殿下の副官におさまったら、今までにない欲が出るはずなのです。姫様に取り入ろうとか陛下の歓心を買おうとか。あるいは、こうして都においでになった今なら、皇族のかたがたの知遇を得てご自分を売り込もうとかね」
「……」
真っ当な意見過ぎて、返す言葉がない。
「しかし、貴殿はそうは見えない。本音を隠しておいでなのなら、大した役者だと思います」
伝達官も、警戒していたに違いない。強運に舞い上がり、分不相応な野望を抱いた男が来るだろうと。皇子やその部下も同様に身構えているはずだ。
「……うわ、面倒くさいな」
思わずつぶやくと、伝達官が眉を上げた。
「なにかおっしゃいましたか？」
「いえ……わたしはただ、怠け者なだけですよ。権力など持っても、忙しくなるばかりです」
「人を従わせることは、望まないと？」
伝達官に問われたとき、真っ先に思い浮かんだのはセルクの顔だった。
なんでもヤエトの判断を仰ぎ、真似しようとするあの男に対して、まず覚えるのは鬱陶しいという感

覚でしかない。我ながら薄情なことだとは思うが、価値判断の基準を丸投げされても重荷なだけだ。
「そんな責任は負えません。自分の人生ひとつでも手に余るかと思うほど、怠け者ですので」
伝達官は困ったように笑った。
「やはり、おもしろい人だ。皇妹殿下には、欲がなさ過ぎて却って疑われたのかもしれませんな」
「その皇妹殿下なのですが……こちらには、よくおいでになるのですか？」
「そう頻繁には。今日は、貴殿が本人かを見きわめるため、三の君が招かれたのではないですかな」
やはり、そう考えるべきだろう。皇妹が今日、偶然この邸を訪ねて来たとは思えない。
「もっとも、仔細はわかりません。皇妹殿下がおいでになったからといって、誰かが教えてくれるわけでもない。わたしの立場は空気のようなものです」
「空気？」
「姫様のお言葉を宿していないときのわたしは、ここにいるだけの存在です。情報収集のお役には立ちませんよ。姫様が移動を命じてくだされればともかく、三の君のお邸を出る口実もありませんのでね」
少し考えて、ヤエトは答えた。
「では、太守に命じていただきましょう」
「……は？」
「都を遠く離れて氷雪に閉じこめられ、退屈している。皆の消息が知りたいので、多くの者と話して報告せよ――と、命じていただくのです。ご命令さえあれば、貴殿は紫の肩衣にものをいわせて風に乗り、空気が流れるように何処へなりと行けましょう」
「しかし」
「伝達官が担う役目は、あるじの言葉を伝えることだけでしょうか？　遠く離れてもその耳目となり、居合わせねば知り得ないはずの情報をあるじに伝える――それも重要な使命のはず。違いますか？」
伝達官は眼をまるくしていたが、やがて自分で水を注ぎ足すと、ぐいと飲み干した。

「無茶なことをおっしゃる」
断られるかと思ったが、伝達官は生真面目な表情でこうつづけた。
「姫様に、お伝えしてみます」

3

翌日から、伝達官は留守がちになった。
といっても午後からのことで、昼前にはかならずヤエトのもとを訪れる。歴史を学ぶためだ。
皇女に歴史を学ばせるのは、難しい。本人にやる気がないからだ。ご協力願いますとたのんでみたものの、伝達官もやる気は薄そうだ。
伝達官を介しての講義は迂遠になる。やりとりが少なくて済むよう工夫せねばならなかった。
そこで、あらましを本にまかせることにした。どこからどこまでと頁を指定して、皇女に読んでおいてもらう。翌日、その課題の感想を聞き、質問に答え、また次の指示を出す。
都へ行っても歴史の講義はつづけると宣言したとき、皇女はあからさまに嫌そうな顔をした。ヤエトは皇女を説き伏せねばならなかった。
まず、毎日の定時連絡が必要だと教えた。任務が任務である、身に危険が及ぶこともあるだろう。異変をいち早く察知するために、定時連絡は必要だ。
次に、それを歴史の講義に擬するのは自然であると説いた。北嶺でもやっていたことだ。場所を移してつづけているだけと、皇女の身辺に監視が及んでいるほど、保証がなされる。
また、これに託して暗号を伝えることもできる、と利点を訴えた。
単純な内容は、符牒を決めておく。たとえば、《化鳥の騎士団》の話をしたら、ヤエトは都を脱して北嶺に帰還する、といった具合に。複雑なことを伝えたければ、手元の本を鍵に暗号を作成する。
皇女は納得し、鍵となる言葉やその指示するとこ

ろを自分でも提案しながら、即座に暗記した。
伝達官にも、いくつか心得てもらう必要があった。来られないときは、かならず連絡を入れること。可能なら文を寄越すこと、そこに歴史に関する内容を添えること。年代が古いほど危険に巻きこまれたということになり、万事窮すというときは、皇祖の名を出すことになっている。これなら忘れるまい。
おのずと伝達官もヤエトの講義を真剣に聞くようになり、生徒がふたりに増えた。
実のところ、暗号などというのは方便である。そんな事態になっては困るのだ。
ヤエトの詐術にひっかかったとも知らず、今日も伝達官は卓を挟んで座り、皇女の言葉を一言一句、間違いなく伝えるべく意識を凝らしていた。
「滅竜都市ルーグに興味がある、との仰せです。場所もはっきりしないとは、どういうことかと」
「太古、世界は今と同じ姿ではなかったと伝えられております」
ヤエトは地図を広げ、伝達官に見せた。伝達官の視覚を、そのまま皇女が共有しているわけではない。乗っ取り状態――正式には《臨》という用語があるらしい――にならない限り、伝達官はすべてを心の中で言葉にして皇女に送ることしかできない。
指で場所を示し、言葉を補いながら説明した。
「神が未だこの地上にかりそめのお姿をあらわしておいでになった頃、このあたりを今は消失した大河が流れていたそうです。対岸を見ることもできないほどの川幅だったとか。これが流れを変えたものが現在のヌーラグーンであるという伝えもありますが、さだかではありません。その大河をまたぐようにして、滅竜都市ルーグがあったと申します」
暫しの間を置いて、伝達官が口を開いた。
「それは北嶺の古い城が崩れたより昔のことか、とお尋ねです」
符牒に含まれているので、《化鳥の騎士団》という言葉は使えない。

「はい。北嶺が傭兵王国として栄えていた頃、すでに大河ヌーラグーンは南方の低地へ向かって流れ、あたりは藩王たちが割拠しておりました」
「……ルーグが滅びた原因は河が干上がったからにしても、なぜ干上がったのか、とのお尋ねです」
「偉大なるひとつ神の万能なること、その化身が百も千もに分かたれて、それぞれに考え、また活動するほどであることはご存じかと思います。相反する考えのどちらが正しいかを示すため、その化身同士が争って天地が鳴動した結果、地形が変わったと伝えられております。また、ルーグが奉じていた神の化身が負けたせいだとも」
「……本にそれがないのは、なぜかとのお尋ねです」
「異伝まで含むような本は、太守がご覧になる気も起きないほどの大冊になりますので」
伝達官が吹きだした。
「質問は以上である、とのことです」
「では、明日までにお読みいただくのは、つづきの部分、五頁になります」
「たしかに、お伝えしました。ご苦労、とのことです。姫様、お離れになります」
伝達官と皇女との接続が切れる、という意味だ。
「お疲れさまです」
「これで今日のおつとめは終了ですね」
伝達官の言葉は、ヤエトに向けられたものだ。
ヤエトに許されているのは皇女への講義をつづけることと、与えられた塔の中でじっとしていること。それ以外は封じられていた。
外出の許可を願っても、家宰の返事は決まっている。いわく、皇女殿下からお預かりした大事なお身体です、先日も倒れられたばかり、出先で不調になられては申し開きが立ちません、と。
二度三度と申し入れても、断られるばかり。こうなると、ヤエトの立場は空気以下だ。
皇女に口添えしてもらえばどうか、と伝達官は提案したが、ヤエトは応じなかった。皇女の言を左右

する人物だと思われるのは、避けたい。
「隠居気分を味わうどころか、ほんとうに隠居だ」
伝達官にいわれて、ヤエトは笑った。
「望むところです」
「爽やかに、断言しましたな。……では、これはお預かりします」
卓上に置いてあった布包みを手にすると、伝達官は立ち上がった。
妻子へ、とエイギルから言付かってきた土産の品を、このままではとても渡せそうにない。伝達官にたのむと、かるく引き受けてくれた。
「お手間をとらせて恐縮ですが、よろしくお願いします。余人に任せるわけには参りませんので」
「きちんとお渡しして参りますよ。では」
伝達官は張り切って出かけて行った。まだ暑さが残るというのに、元気なことだ。
「上で休む。邪魔しないように」
ヤエトにつけられた召使いは小柄な南方人の少年で、ほとんど口をきかない。今も飲み物をかたづけながら、黙ってうなずいただけだ。
ヤエトは三層に上がり、寝椅子に腰を下ろして大河を眺めた。かすむ大気の向こう、判然としない水平線は褪せた水色の空へと繋がっている。
川面を渡ってくる風は湿っぽい。椅子を少し動かすと、座ったままでも船着き場が見えた。
――やってみるか。
ヤエトは、過去を視るつもりだった。
この場から動けないのはしかたがない。その上で、自分になにができるかと考えて、思いついたのはこれだけだった。過去へなら、自由に遡れる。
第三皇子の邸に出入りするのが誰かくらいは、調べがつくだろう。正門はいささか遠いので、まずは手近の船着き場からだ。
ごく近い過去を視ることで、力に慣れるのも期待できる。幸い、相手はヤエトの体調にだけは気を遣ってくれる。倒れても、なんとかなるだろう。

——どうやって、視たのだったか。
皇女の姿を追ってからまだ日も浅い。あのときは、ただ必死だった。
幼い頃も、必死だった。父に連れて行かれたあの塔が怖かった。早く、終わらせたかったのだ。
——まず、昨晩だ。
少し意識を集中すると、周囲が暗くなりはじめたが、目指す船着き場を透かし見ることができない。自分の周辺にしか力が及んでいないようだ。
そろそろと、意識を遠くへ向けた。夜の気配が、少しずつ周囲を侵蝕していく。
塔の裾に闇が達したとき、人の姿が見えた。
こちらを見上げる眼は、あたりを包む夜より暗く、深い黒。額にかかった髪を無意識にかき上げ、男はそれを布のあいだに押しこんだ。
暗闇に、わずかに滲んだ色は赤。
「我が術は、乱れておりません」
「確かなのだろうな」
尋ねる声は、ダハールのものだ。姿は見えない。
どこだ、とヤエトは視界を押し広げた。
——いた。
呪師から十歩ほど距離をとったところに、ぼんやりした人影が見えた。意識を凝らすと、人影はダハールの姿になった。かたわらに、もうひとつ影がある。ヤエトはさらに集中した。
ほどなくダハールの隣に立つ人影は輪郭をととのえ、その姿をあらわした。第三皇子だ。微笑の影もない冷徹な声音で、告げた。
「時間の無駄だといったはずだ。あの者には、呪術のたぐいは扱えぬ。古王国の血が濃い。無理だ」
「しかし、腑に落ちません……なぜ、皇女殿下はあの者をお寄越しになったのか」
「妹の言葉は信じてやれ。療養のためだろう」
「は……」
家宰は畏(かしこ)まった様子を見せ、皇子は部下に視線を向けた。表情は、ヤエトが拝謁したときと同じだ。

やわらかに微笑んでいる。だが、声は違う。
「妹の気に入りだ、せいぜい歓待してやるがよい。だが、今後も自由にはさせぬように。嗅ぎ回られるのも面倒だ。ただびとならば、閉じ込めておけば始末がつく。安いものよ」
「御意」
「監視の術をといておけ」
赤い布を巻いた男が、不思議そうにつぶやいた。
「殺してしまえばよい」
深く、やわらかな声だった。思わず同意してしまいそうなほど。だが、皇子はあっさり否定した。
「ならぬ。ひとり殺したばかりだろう。そなたの神は、血に飢えているようだな」
「あのような小物、殺した数には入りません」
皇子は少し、おもしろそうな表情をした。
「あれなる尚書官は、小物ではないと申すか」
「魂の重さを判断するのは鬼神です。殺して捧げてみなければ、わかりません」
「無駄な殺しは騒ぎの元。遠からずまた役立ってもらうゆえ、今は諦めろ。でないと、鬼神に魂の重みを量られるのはそなたの方だということになる」
呪師はぞっとするような笑みを浮かべ、連れのふたりをふり返った。血の色をした耳飾りが揺れる。
「わたしを殺すのは難しいことです、殿下」
それに答える皇子の硬質な美貌は、今や強靭さと冷淡さをそなえていた。
「やり甲斐があって結構。行くぞ、時間が惜しい」
歩きだした皇子と家宰を見送って、呪師はヤエトを——いや、塔を見た。それともやはり、塔の中にいるはずのヤエトを見ていたのか。
笑みが消え、男はゆっくりと口を開いた。
唱えられた言葉は、太古の響きを帯びていた。
「我が名はひとつ名にてふたつ名はなく、古き誓約によりすべてを支配するものなり。その名において命ず、塔よ、その耳目を塞いで石に戻り、今は眠れ。その名を還せ、我が下僕の名を」

男は言葉を切った。
ほとんど声にならない吐息を押し出すように、くちびるが動く。
夜そのものが脈打ち、大気がふるえた。
え、と思った瞬間、呪師の姿が、彼を包んだ夜が、星空を映してかがやく遠い川面、静かに流れる雲、風が鳴らす葉擦れの音、低く啼く鳥の声、遠くに響く哀調を帯びた歌声——それまでヤエトの意識に入りきらず閉め出されていた夜のすべてが、轟音とともに流れ去った。
そして、耳が痛いほどの空白。
我に返った。
呼吸が止まりかけているのに気づいて、あわてて息を吸い、吐いてまた吸った。
——幻視に過ぎない。
自身を失うほど呑みこまれたが、過ぎたことだ。
握りしめた両手を見下ろした。ふるえている。
——落ち着け。
全身をかるい倦怠感が包んでいたが、逆にいえば消耗はその程度。昨夜あたりの光景だろう。
霞がかかったようにぼやけた思考をはっきりさせようと、ヤエトは頭をふった。
恩寵の力が御しがたいことは知っていたが、今回ばかりはそれを幸運と思うべきだろう。
今や、ヤエトは知っている。第三皇子には、探られて皇女に報告されては困る秘密があることを。
だが、その正体はなにか？
部下もなく、つてもなく——皇子がこの塔の近くで本音を口にしてくれる幸運は、そうないだろう。
「ほんとうに隠居だな」
つぶやいて、顔を撫でた。
気苦労ばかりで休まらないのが隠居の実態だとは、知らなかった。

4

翌日、ヤエトは召使いに体調不良を訴え、皇女の都合がよければ講義は夜にしてもらえないか、と伝達官に打診した。

伝達官はいつもより少し早くにヤエトを訪れ、今日は休みにすればよい、と彼の身を案じた。

一日研鑽を怠れば、せっかくの学問の成果が失われますと論じてヤエトは譲らず、予定よりも進度が遅れているからと、伝達官の眼を見据えて告げた。

「太守にお伝えください。歴史の講義より遠乗りをお好みなのは存じておりますが、これからの季節、屋内でおできになることに励まれるべきです。シロバも休ませてやってください……と」

伝達官は妙な顔をした。

「疲れているのは、貴殿に見えますが。声もおかしいですよ。喉をやられましたか？」

「問題ありません。少し休めば、いつも通りです」

「いつも大して元気ではないから、とでも？」

「隠居の愉しみなど、若い者に昔のことを話して聞かせるくらいですからね。正統派隠居としては、これを逃すわけには参りません」

「……正統派を名のるには、若過ぎやしませんか。実年齢もですが、見た目も」

「見目より心です。心構えが、隠居なのです。正統派が駄目なら、本格派隠居でも結構です」

「かすれた声で力説なさいませんよう。……姫様からは、わかったからおとなしく寝て、夜までに元気になっておけ、というお言葉を賜りました」

ヤエトはうなずいた。

「今日はどこへ？」

「昨日、エイギル殿の奥方やお子さまがたとお会いした話を姫様にお伝えしたところ、騎士団の家族の様子を見て回れと、御命を賜りました。騎士たちも、家族の近況を聞きたいでしょうし」

伝達官は忙しそうに出かけて行った。

ヤエトは頭を枕に戻し、早く頭痛が去ってくれることを祈りながら眼を閉じた。

伝達官がヤエトの塔を再訪したのは、日が没した直後のことだった。

到着した日に似ているな、とヤエトは思った。

さすがに暑さも少しはやわらいで、今日は秋を思わせる風が吹いているが、それでも気温はなかなか下がらない。街全体があたためられて、その熱が消え去るまでにまだ時間がかかりそうだった。

伝達官は、小さく切った果実と氷を盛った器を持参していた。

「氷がお好きなのですね」

「今日は日射しが強くてね。くたびれました。ですが、どうしても講義をなさるとおっしゃいますからね？　疲れた身体に鞭打って、伺ったわけですよ。これくらいのご褒美がないことには、やっていられません。……さて、お加減は如何ですか」

「まずまずです。上へ参りませんか」

「上ですか？」

三層へ上がるための梯子を引き降ろしたヤエトを見て、伝達官はできれば遠慮したそうな顔をした。

だが、ヤエトはにっこり笑って彼の手から器を取り上げた。

「さあ、どうぞ。今宵の風は心地よい。これはわたしが運びましょう。慣れていますから」

「本はどうなさいますか」

「もう上に用意してありますよ、お気遣いなく」

伝達官はしかたなく梯子に取り付いた。

心地良いのは夕暮れの風ばかりではない。無数の塔の影が、深い赤の手前に浮かぶ眺めは幻想的だ。

「見事な眺望ですな」

「……死んだ石でできているのではなく、生きているのではないかと感じますね」

「おやおや、詩人でいらっしゃる」

伝達官はあたりを見回し、座れるものが寝椅子ひとつしかないことに気づいた。

「椅子を運ばせましょう」

「並んでお座りください。声が出ませんので」

「喉が痛いなら、暫く口をつぐんでおいでなさい。これを食べてしまいましょう」
異議を唱える暇を与えてはなるものかという勢いで、伝達官は皿の上のものをかたづけにかかった。
ヤエトも果物をひと切れだけ食べた。氷のおかげでよく冷えている。甘い果汁が喉に染みた。
庭のどこかで、鳥が啼いた。いつ聞いてもぎょっとする、するどい声だ。
「あの声、よく聞きますね。姿は見ませんが」
「猛禽(もうきん)だそうですよ。あれがこの庭に棲みついてからは、他の鳥の声を聞きません。召使いを騒がす迷信の元が減るのは結構ですが、不気味な声ですな」
「まことに。……では、始めましょうか」
伝達官が食べ終えたのを見て、ヤエトは下に通じる引き戸を開け、召使いを呼んで皿を下げさせた。
「飲み物でも？」
「わたしには、香料入りの葡萄酒を」
「……酔ってはお役目を果たしていただけません」
「念のため、煮切って酒気をとばしたのをね。甘くして。香料は強めに、よく煮てしっかり香りをつけて、……そのへんは厨房の者が心得ていますが。わたしの注文だといえば通じるはずです」
ヤエトは苦笑して、召使いを見下ろした。
「伝達官殿のおっしゃるように、たのむ」
無言で一礼して、召使いは梯子を下りた。
戸を閉めて少し待つと、ヤエトは伝達官に向き直り、ささやいた。
「急いで、太守を――」
呼んでくださいという前に、口をつぐんだ。竜気を感じたからだ。伝達官が閉じた眼を開いたときには、その色は紫に変わっていた。
「無事か？」
「お呼びたてして、申しわけありません」
内密に皇女と話をしたいときには、シロバの名を出すという約束をしてあった。
使う気がなかった符牒を、真っ先に自分自身が使

ってしまったのには参る。だが、伝達官を含めて誰にも聞かれたくない話なのだから、しかたがない。
「なにがあった」
「三の君は、呪師をお使いです。……呪師というものは、ご存じですか？」
伝達官は顔をしかめた。皇女にそっくりだ。
「知っておる。呪殺されかけたことがあるからな」
北嶺での暗殺未遂の一件を思いだし、ヤエトはなんともいえない気分になったが、気を取り直して報告をつづけた。時間がない。
「わたしの動きを監視していました。皇子殿下は、わたしに探られては困ることがおありで――」
「待て、それをどうやって知った」
喉の痛みに、自分が無意識に唾を呑みこんだと気づいた。この話題になると未だに緊張するのか、と苦笑したくなる。
「視たのです。ですから、直接お伝えするしか」
伝達官に、恩寵の力を明かす気はない。
「それで倒れたのか。……そなた、まさか呪師相手に名告ってはおらぬだろうな」
「顔は合わせましたが、名は告げていません。よくよく考えたのですが、皇子殿下にも、直接はお伝えしていないと思います。家宰には告げました」
呪師のまじないは、名前を媒介にしておこなうといわれている。それで、昨晩以来ずっと、自分が名告った相手について厳密に記憶をさらってきた。
都に戻ってからは、一回しか名告っていない。
「では、呪師を雇っているのはダハールかな」
「わかりません。今は監視はとかれています。殿下は呪師をお手元に置かれて既に長く、わたしの監視のために呼び寄せられたわけではありません」
ヤエトの視界では、少女の姿に変わった伝達官が、組んだ膝の上に肘を突き、顎を支えて考えこんでいる。眉根に寄った皺までくっきり見えた。
彼が竜気に敏感過ぎるせいで錯覚が生じているに過ぎないが、体格も年齢も、あれだけ違うのに……

と、ふしぎでならない。
「気に入らんな。そなたを呼び戻したいくらいだ」
だったら最初から来させなければよいのに、と文句のひとつも口にしたいところだ。
「わたしも気に入りません。皇子殿下の秘密が明かされるとき、万が一にも太守の御身に禍が及ぶことがあってはなりません」
政争か、と皇女は低くつぶやいた。
その可能性がもっとも高いが、断言はできない。
「伝達官殿には明日から、皇子殿下の利害関係について、探っていただく方がよいかもしれません」
「皇宮に行かせよう。陛下に申し上げる」
「陛下に、ですか？」
「都を離れて久しければ、皇宮をなつかしむ心地がします。せめて我が伝達官を耳目とし、皇宮の様子を窺い見たいものです、と。……どうだ？」
「よいお考えかと存じます」
勘繰る者はいるだろうが、名目さえ立てばよい。
「よし。わたしから、陛下にお伝えしておこう」
皇女の伝達官は、ふたりいる。ひとりは目の前で皇女になりかわって喋っているが、もうひとりは皇帝のもとにいる。皇女から皇帝に連絡をするときは、そちらの伝達官を使う。
ウィーシャを使うこともできるが、皇帝の伝達官はあくまで上意下達のために配されているため、緊急事態を除いて、呼びかけは無礼にあたるらしい。
「しかし、寂しいなら戻って来るようにという話には、なりませんか？」
「驍への道は、もう馬車では通れぬぞ」
「冬が終わってからのことです」
ああ、と皇女は吐息とともにつぶやき、深く濃くなっていく西の空の色を眺めて告げた。
「その頃には、嫌でも呼び戻されるだろう」
「……お逃げにならないのですか？」
「北嶺が、どれだけの犠牲を払うことになるか、考えてもみよ。戦にならずに済む方法を思いつけぬ」

その方策を探すために、自分がここにいるのです——とは、ヤエトには口にできなかった。

具体的な提案のあてがない。

「お父上は、その犠牲を支払われました」

「陛下の真似はできぬし、したくもない。聞けば聞くほど、陛下と同じにはできぬ」

「誰にお聞きになりました？」

「ナオだ。ナオの親族は、隊商を組んで沙漠を渡る途上、帝国の軍に遭遇した。ひとりが道案内として命を繋いだが、ほかは……わかるであろう？」

ため息をついて、皇女は言葉をつづけた。

「陛下を責めはせぬ。生き延びたいと望まれるのは、当然のことだ。わたしとは状況が違う。わたしの場合、むしろへたに動けば命が懸かる」

そうだろう、という顔で見られては、うなずくしかない。

「賢明なご判断です」

「それにな、北嶺の民にとって、わたしは侵略者の係累に過ぎぬ。それに従って、なんの得がある？」

「……おどろきました」

皇女が眉を上げたので、心の声が言葉に出てしまったと気づいた。

——おどろくだろう、これは。

竜種は、そういう考えかたをするものではない。民の犠牲を考えて自分の意を通すのをやめよう、とは思わない。その理由に、自分が侵略者だからということを据えたりもしない。それでは、異民族支配などやっていられないからだ。

ナオの影響が少なくないのだろう。皇女以外の竜種がこんな考えかたをするとは思えない。

皇女は生真面目な表情でヤエトを見て、はっきりと告げた。すでに決定したことだ、というように。

「やはり、わたしにはできぬ」

「姿をくらましてしまわれることも？」

「それはもう、やってみた。そなたに捕まってしまったではないか」

皇女は笑った。あのときほどには痛々しくもなく——といって、楽しんでいる風でもなかった。

逃げてしまいたいとつぶやいた少女の横顔は、彼の記憶の中ではまだ鮮明だ。それなのに、皇女自身はもうあの日と同じではない。

——十四歳、か。

若いとは、変化するということだ。

自分には真似できない、とヤエトは思う。彼は少しも変わっていない。だから、同じように答えた。

「次は、もう追いません」

「……たわけ。こういうときはな、自分もどこまでもお供つかまつります、というのだ」

「いささか、体力に不安がありますので。太守の足手纏いになるのは不本意です」

「くだらん。どうせ『セルク殿なら喜んでお供するでしょう』とでもぬかすつもりだろう？」

思わず、笑ってしまう。

「ご明察ですが……セルク殿であれば、お逃げになる必要はない、ずっと北嶺太守でいらっしゃればよい、と申し上げるでしょう。皇女殿下以外を主君とは認めない、と宣言しておいででしたから」

「そういえば、そんなことをいっていたかな」

セルクが聞いたら泣きそうな台詞だ。

「彼の言葉であれば、従う者も少なくないかと」

皇女は首をかしげた。

「そうか？　なぜだ？」

「ただの印象ですが」

「セルクといえば、《雪鳩》を都まで飛ばす訓練をしているそうだ。そなたの助言欲しさに」

思わず、頭を抱えてしまう。

「お止めください。この庭には猛禽がいます」

「残念だな。うまくいったら、わたしもやってみようと思っていたのに」

「しかし太守、お逃げにならないのでしたら、三の君と距離を置かれれば、ことたりるのでは。噂を探る必要もなく、わたしもお役御免ではないですか」

「そして、本格派楽隠居まっしぐらと？」
「いえ、そのようなことは考えておりませんが」
「どうだかな」
「むしろ、なんのために自分はここにいるのかと、そう思っておりました」
「なんのため？」
「お逃がしする方策を探す必要はないとおっしゃる。ならば、わたしは都でなにをすればよいのか、と」
皇女はまじまじとヤエトを見た。
自分でも、見てみたいものだ。どういう顔で、こんな子どもみたいなことをいっているのか。
皇女は小さく息を吐くと、表情をあらためた。
「養生せよと、命じたはずだ」
「それでは太守のお役に立てません」
「役に立ちたいのか？」
「なんの働きもせず、俸給をいただくわけには」
「ならば、まず身体を治せ。なにかたのめるような顔色になってみよ。……噂を探らせる件はな、ただ利用されるだけでは済ませたくないゆえだ」
「危険なことです」
「短期間に、そこまで立ち入れるものでもないだろう。伝達官にも無理をせぬよう申しつけておく」
庭に光がさし、どこかの扉が開いたのがわかった。召使いが頭に籠を載せ、一方の手でこれを支え、もう一方の手で手燭を掲げて庭を歩いてくる。
「先ほどの者が、戻って参ります」
「わかっておらぬようだがな」
「……は？」
「死ぬだの倒れるだのせず、そなたが元気でいてくれることが、なによりわたしを安心させるのだ。相談すれば答えてくれると知っていることが」
視線が合った。
伝達官の眼は未だあざやかな紫のままだったが、皇女を戻す準備をしているのだろう、竜気があたりをかき乱しているのが感じられた。
「身に余るお言葉です」

「自分ではなく、セルクにでも相談せよ……などと申せば、ひっぱたくからな」
思わず苦笑した。
「そのお言葉を伺わなくとも、さすがに彼を相談役に推挙するつもりはございません」
「それを聞いて安心した」
笑顔が滲んだと思うと、そこにいるのは疲れた顔つきの伝達官に変わっていた。
ぼうっとしたまま、彼はヤエトを見返していた。
「大丈夫ですか？」
「……疲れましたな、かなり」
「申しわけありません、長話をし過ぎましたか」
伝達官は両手で顔をこすり、頭をふった。
「いや。わたしが歳をとったということです」
「お若いですよ」
ヤエトの言葉を払い除けるように、伝達官は手をふった。そのまま、また放心状態に戻ってしまう。
たしかに、今の伝達官はひどく老いて見えた。本来の年齢より、ずっと。疲れているのは嘘ではないはずだ。このままでは倒れてしまうのではないか。
皇女との連絡は、伝達官を通してしかできない。目の前の男が自分の命綱なのだと感じ、ヤエトは不意に不安に襲われた。
伝達官は眼をしばたたき、ふたたび顔をこすった。そして、つぶやいた。
「疲れました。ですが、とても幸福な気分です」
そこへ、下から戸を叩く音がした。
「ご所望のものが、届きました。ずいぶんお疲れのようですが、飲んで行かれますか？」
伝達官は肩をすくめ、器の上に溶け残っていた氷をつまむと、口に放りこんだ。
「もちろんです。早く寄越してください」
召使いから水差しと杯を受け取ると、ヤエトはそれを卓上に並べた。伝達官はさっそく杯を手にとってすすると、大きく息を吐いた。
「よくはわかりませんが、貴殿の存在は、姫様によ

い影響を与えているのでしょうな」
「……は？」
「姫様の歴史嫌いの理由をご存じですか？」
「いいえ。つまらぬ、としか」
「女性が出てこないからだそうですよ。以前、そうおっしゃっておいでした。どの話も男ばかりが活躍して、いったい女はどこにいるのか、と」
「ああ……なるほど」
たしかに、歴史に出てくるのは男の名ばかりだ。皇女が男装し、剣を学んだ理由はそのあたりにもありそうだが、その嗜好をお勇ましいといった褒め言葉で過ごせる年代は、過ぎ去ろうとしている。
「その姫様が、歴史を学ばれる……最近の姫様は、どこか人生を投げておられるような雰囲気でした」
意外なつぶやきに、ヤエトは眉を上げた。
「そうですか？」
「ここ二年ほどは、殊にひどかった」
赴任当初の皇女の様子を、ヤエトはもう思いだせない。命ずることに慣れた少女だが、頑迷ではないという印象を抱いた、という程度のことしか。
事情がわかった今なら、皇女が皇帝にせがんで太守の位を手に入れたことも、みずから任地へおもむいて治めたことも、理解できる。
北嶺は皇女の避難場所だったのだ――そして今、行き止まりだと心に決めたのだ。この先に、もはや逃げる場所はないと。
「姫様は、ほんとうに変わられた。貴殿のおかげなのでしょうな」
「まさか。太守としての任をたまわり、一郡をまかされたことで、落ち着かれたものと存じます」
「そうかもしれません。さて、ではもう帰ります」
伝達官は大欠伸（おおあくび）と一緒にそう答えると、大儀そうに立ち上がった。
「人を呼びましょう」
「いや、この程度。ひとりで帰れますよ」
香料の匂いをふりまきながら、伝達官はヤエトの

もとを立ち去った。無事にお部屋に着くまで後からついて行ってくれとたのむと、召使いの少年は一礼して、すぐに後を追った。

遠ざかる後ろ姿は、すぐに闇に呑まれた。

――なんのために自分はここにいるのか……。

役に立ちたいのかと問い返されたとき、少しだけ怯んだという自覚はあった。

あの感覚を、どう説明すればよいのだろう。

そこにいるだけでよい、と皇女がいったのは、彼の不満を敏感に察知してのことかもしれない。

そんな風に気を遣わせてしまったことが、よけいに腑甲斐なく感じられ、波立った心はなかなかおさまらなかった。

5

三日後の朝、珍しい訪問者があった。ダハールだ。

「畏れ多くも真上陛下よりお召しがありました」

ヤエトは黙って相手の顔を見返した。

明るいところで皇子の家宰に会うのは、はじめてだ。思っていたより若い、と感じた。皺のない顔だちはやや平板で、表情に乏しい。眼はくすんだ灰色で、髪も似たような色合いをしていた。

沙漠の西では彼のような容貌の持ち主を《色なし》と呼び習わし、よく見かけた。混血が進み、人種の特徴が薄れて平均化された人々のことだ。

しかし、沙漠の東では《色なし》は珍しい。沙漠越えに従った数が少なく、多くは戦死したからだ。

少数派を引き上げることで、第三皇子は勢力を確保しているのかも、という考えがちらりと過った。

「昼過ぎに馬車をお出しします。お支度は――」

「どのようなご用件でしょう」

「陛下が臣民をお召しになるときに、理由をご説明なさる必要などあるでしょうか？　お支度は、手伝いの者を寄越しますので、ご心配なく」

一礼して、ダハールは立ち去ってしまった。

ヤエトは第三皇子の客として皇宮へ行くことになる。身支度に粗相があれば皇子の体面に傷がつき、家宰の責任となる。気を尖らせるのも無理はない。

それにしても、とヤエトは思う。

――皇帝に拝謁？

まったく、嬉しくない。

じきに顔を出した伝達官の挨拶を断ち切り、どういうことです、とヤエトは尋ねた。

「なぜ、陛下のご注意をわたしに向けるようなことをなさったのです」

伝達官は眼をみはり、意外そうに尋ねた。

「いけませんでしたか？」

やはり、この男か。昨日は皇宮へ行ったようだが、たった一日でやらかすとは。

「いけないもなにも、……理由がわかりません」

「むしろ、陛下のお目にとまるのを嫌がられる、貴殿のお考えがわかりませんぞ」

顔を上げると、こちらを見下ろす伝達官と視線が合った。いささか気分を害したという表情だ。

「残念ながら、わたしは隠居志望の病人で、これ以上の栄達は望んでいません」

「欲のないことですな」

「それくらいで結構、とおっしゃったはず」

ぴしゃりと返してから、ヤエトはため息をついた。これでは駄目だ。ゆっくりと両手を上げて、わかりました、とうなずく。

「お召しを受けてしまったものは、しかたがありません。今さら文句をつけるのはやめます。ですが、こういうことは、これきりにしていただきたい」

「いわれなくても。だいたい、わたしから話をふったわけでもないのですよ。皇妹殿下が――」

ヤエトは口がぽかんと開いてしまうのを自覚した。そのまま、え、と声が漏れる。

伝達官は、かまわず言葉をつづけた。

「――陛下にお尋ねになったのです。なぜ、貴殿を北嶺太守の副官に任じられたのか、と」

なぜ、とヤエトは口の中でつぶやいた。なぜ皇妹は、こうも彼を気にするのだろう。

「三の君のところにいるのはご存じかしら、とね」

伝達官は皇妹の口調を真似た。

妙に似ているので、却って気もち悪い。あれは、皇妹がやるから許されるのだ。

「姫様は、わたしを通じてしばしば副官と話しておいでのようだと。よほどおもしろい話をするのかしら、初心な子だし、恋でもしたのかしらねぇ、と」

ヤエトは目を剝いたが、口は閉じておいた。

もし開いたら、限度を超えた罵倒の文句が飛び出してきそうだ。

「どんな話をしているのかとご下問がありましたので、歴史の講義をとご説明申し上げました。それも毎日休まずに、と。それで、陛下がご興味を」

その興味とは、娘をたぶらかす不埒な男に対して父親が抱く種類のものであって、首を刎ねるべきか否かを判断しようとしているのではあるまいか。

伝達官はヤエトの不機嫌な出迎えすら忘れたように胸を張り、姫様もお喜びでしょう、といった。

「太守には報告を？」

「今日はふたりでお召しを受けました、とは」

「……皇帝陛下のご面前に出られるような身分でもないのですが」

「しかし、陛下の伝達官は貴殿を信頼しているそうではないですか」

なんの関係が、と尋ねようとしたところへ、召使いたちが続々と到着した。お支度のお手伝いをといって、さっそく沐浴の準備にかかる。

ヤエトは人にさわられるのが好きではない。断ろうとしたが、家宰に強く命じられているのだろう、召使いたちも一歩も引かない。助けを求めて伝達官を見ると、諦めろ、と目顔で告げられた。

「あるじが信を置かない者を、伝達官が信用することはありません。ですから、ご安心を！」

気軽にいって、彼は退出した。

ダハールが寄越したその一団は、ヤエトを徹底的に洗い上げ、眼もくらむような衣装を取り出した。

ヤエトはたじろいで固辞した。官吏には、官服という便利な正装がある。

それでは、と召使いたちは官服を洗い直し、火のしをかけて見違えるように形を整えてしまった。

徹底的に皺をのばされた官服は身体に添わず、妙な感じがした。ヤエトは腰帯に、お守りを結びつけた。出立のとき、皇女から下賜されたものだ。

なくすなよ、と皇女はヤエトに告げた。

――かならず帰れるそうだからな。そなたが帰る場所を忘れないためにも。

シロバの羽根の色がなつかしい。剣にからみつく竜の彫り物は指先に冷たく、白い石のせいか、冠雪を戴いた霊峰の姿を想起させた。

門へ向かって歩きだすと、秋の風が袖を揺らした。日射しは強く、木陰を出るのが嫌になるほどだ。

いつも通りの黒衣に紫の肩衣をつけた伝達官は、すでに門前に停まっている馬車に乗っていた。

「なかなかお似合いですよ」

官服に似合うもなにもないものだが、どうもと一礼し、馬車に乗りこんだ。

見送りに来たダハールは、ヤエトのいでたちを一瞥すると、わずかに歪めた口の端から命じた。

「やれ」

手綱がするどく鳴って、馬車は動きだした。

「よい馬車ですね」

「そうですか？」

「揺れが少なくはありませんか」

「なんでも最近、車軸の震動を殺す工夫を考えた者がいるとか。きっとそれでしょう。どうだ？」

御者席から、はい、と返答があった。ほらね、と伝達官は満足げにうなずいた。

「三の君は、新奇なものがお好きだそうですよ」

第三皇子の邸から皇宮への道のりは、遠くない。さして話をする暇もなく、馬車は門をくぐった。

もちろん、ヤエトも皇宮に来たことはある。尚書局も、皇宮の敷地内にあるからだ。

だが、これから連れて行かれる領域は、ヤエトのような卑官にとっては別世界である。馬車は尚書局の前を過ぎ、皇宮の奥へとヤエトを運んでいく。

皇家の人々や貴族が私的なやりとりをかわす奥向きはもちろん、公式の行事や謁見にもちいられる表の領域にさえ立ち入る機会はなかった。

皇女の副官となり、第三皇子の客となり、今また皇帝に名指しで呼び出されるなど、昔のヤエトを知る誰が想像し得ただろう。

「なんだか、覚悟が座ったという顔ですね」

「どうしようもないですから」

係累はいないから、禍が及ぶ心配は無用だ。案ずるのはおのれの身ひとつ、いざとなったらこの世とおさらばするだけで、それはつねに念頭にある。

馬車を降りると、案内されるまま表の広間に入った。ここで一回、人物をあらためられるが、伝達官の肩衣の権威は絶大で、詮議らしいものもない。

拝謁の順番取りの段になって、伝達官は態度に不満を滲ませた。かなり待つことになるらしい。担当の官吏が顎をかすかに動かすと、控えていた少年が飛び出して来て、ふたりを奥へ案内した。

辿り着いたのは、廊下をいくつも抜けた先にある小さな部屋で、光のあふれる中庭に面していた。

透かし細工越しに覗き見る庭は、夢の情景のようだ。方形の池には正確な円に切り出した飛び石が置かれ、とりどりの色や形の葉を茂らせた水草が瑞々しい緑をしたたらせている。池の上をなかばまで覆う天蓋を支える柱には蔓性の植物が巻きついて、房状の花をこぼれんばかりに咲かせていた。

その白い花のあいだに淡い人影が見えたように感じ、ヤエトは顔をこすった。

恩寵の力に魅入られている場合ではない。拝謁を控え、吐いたり倒れたりはまずいだろう。

中庭に背を向けて腰を下ろすと、額の汗を拭って

いる伝達官と視線が合った。
「広いでしょう」
「もう疲れました」
意図せず過去を視てしまうのは、ヤエト自身が疲れているときのことが多い。自制の問題だろう。
思った以上に体力が落ちているようだ。
「修行時代、瞑想ばかりしていたら、すっかり立ち上がれなくなったことがありましたよ」
髪に花を飾った華奢な娘が、果物を盛った皿を手に入って来た。水差しや杯、あるいは焼き菓子、串に刺して炙った団子などを捧げ盛った娘たちがつづく。卓に並べたところで、伝達官がさりげなく顎を動かすと、娘たちは潮が引くように出て行った。あとには、残り香だけがただよっている。
——別世界だ。
ため息をつくと、伝達官に眉を上げられた。
「なにか？　お好みの娘がいたら呼びますが」
「結構です。それより、伝達官になるには、どの程度の期間の修行が必要なのですか？」
「平均的には十五年ほどですね。わたしは天賦の才が薄いので、二十年近くかかりました」
二十年。若者には、どれほど歯痒く、もどかしく感じられるものだろう。
「忍耐ですね」
「そんなものじゃありませんよ。五年、十年と修行してごらんなさい。世の中は自分を置き去りに進んでしまう。もうやめたと外へ出て別の人生を探すには、勇気が必要だった……それだけのことです」
ましてや二十年ですよ、と彼は笑った。
伝達官の笑顔には鬱屈したところがなく、それが却ってヤエトの胸を衝いた。
「それでも、二十年は長いと思います」
「親が食べるに困って神殿に売られたような子どもでしたから、食べられるなら伝達官になれなくてもべつにいいな、と思っていたんです。瞑想も、黙って座っているだけで衣食住が保証されるならこんな

に楽なことはない、と考えていました」
思わず、ヤエトは深くうなずいてしまった。
「わかります。自分も、官吏を辞めたら食べられなくなるし、と思いながら身を過ごしてきたので」
「隠居が目標なのでは？」
「職を返上しても食べるに困らない程度の蓄財ができるまでは、せいぜい帝国に寄生しますよ」
伝達官は笑った。
「それをわたしに白状しますか？」
「誰にでも、隠すところなく。今さらでしょう、隠居志願の話はいつもしていますし」
「しかし、仕事に手を抜かない。変な人だ」
伝達官は果物の皮を器用に剝いて、口の中に放りこんだ。彼が喋れなくなった隙に、話を戻す。
「人それぞれというと、修行期間が短い場合も？」
「片親は貴族なのだろうという子は、とても速い」
――私生児か。
貴族の血が混ざっていても、北嶺の民なら見かけではわからない。容貌の親和性は高い。
ヤエトは顎をこすりながら考えた。
目の前の男は、二十年も修行をしたという。
だが、ウィーシャは？　真帝国が興ってからの生まれのようには見えない。混血ではないはずだ。訓練に要した時間は、しかし長くはない。
そもそも、すでに成年の域に達している人物に、伝達官としての修行が授けられるものなのか。
「何歳頃から訓練を始めるのですか？」
「わたしは五歳くらいだったかな」
「けっこう、歳のいった入門者もいますか」
「どうしたんです、隠居はやめて伝達官を目指すつもりですか？」
苦笑混じりに問い返された。
「まさか。太守のもとにいる皇帝陛下の伝達官は、修行が短かったようなので……気になりまして」
へえ、と伝達官は気のない返事をした。
「陛下の伝達官には、とくに優秀な者が選ばれます

からな。わたしのように、二十年ものろのろとやっていた人間が、皇女殿下の伝達官になれたこと自体が、奇蹟ですよ」

ふと思いついて、ヤエトはさらに尋ねた。

「しかし、優秀なのはおもに貴族の血胤につらなるかたがたということは、……失礼ながら、親族のために便宜をはかったりする危険性があるのでは？」

「ない、とは断言できませんが、難しいでしょう」

「しかし、陛下や竜種のかたがたのお側に控えているのですから――」

「我々は、竜種の会話を補助するだけの存在です」

ヤエトは口をつぐんだ。伝達官の口調に、いつもとは違うものを感じたのだ。彼は言葉をつづけた。

「嘘やごまかしは許されません。しないのではなく、できない。伝える内容に手を加えるのは不可能だ。それで、どうやって権力をふるうのですかね。取り次ぎ役や、それこそ皇子殿下の家宰あたりの方が、よほど権力に近いですよ」

たしかに、伝達官にできることは少なく、自由もない。考えてみれば辛い役目だ、とヤエトは思う。

――自分自身など、とり戻さない方が楽なのか。

鳥に会いたいと訴えたウィーシャの表情を思いだすと、気の毒に感じた。

この先、帝国に搾取されつづけることだけが約束された状態で我に返って、幸せを見出せるのか。

「貴殿は、伝言役以上のおはたらきをなさっておいでではありませんか」

「そういうのは、本来のお役目ではないのですよ。すっかり唆されて、いろいろやっていますがね」

「ご立派なことだと思います。太守もきっと、貴殿を誇りに思ってくださるはずです」

「うるさい小男だと思われているだけですよ」

彼には、この職業に満足していてほしい。自己欺瞞かもしれないと思いつつ、ヤエトは告げた。

「わたしが太守の信を得ていると、教えてくださいましたね。ですが、太守が無条件に信頼なさってい

るのは、わたしではなく貴殿の方でしょう」
「伝達官とあるじとは、そういうものですからな」
「皆が皆、そうでしょうか？　太守は貴殿を親戚のようなものだとおっしゃっていましたよ」
伝達官が答えるまでに、少し、間があいた。
「小うるさいおじさんだと？」
「ご自分のことを、心配してくれる人だと」
「……やめてください、涙もろいお年頃なんですよ。ああいかん、鼻にツンと来た」
不意に、派手な音がするほどの強さでヤエトの膝をはたくと、伝達官は立ち上がった。
見上げても、視線を合わせようとしない。
「ちょっと、順番が回るまでどれくらいかかるか、確認して来ます」
後ろ姿を見送って、ヤエトは膝をさすった。そんなに照れなくていいのに、と思いながら。
周囲は皇女を利用しようとする人間でいっぱいだ。例外なく疑ってかからねばならない中で、伝達官の忠誠は、かならず皇女にも届いているだろう。
あるじの心が伝達官に伝わるなら、その逆もあるはずだ。
やがて、戻って来た伝達官は、なにごともなかったかのようにヤエトに告げた。
「ちょっと脅してやったら、前倒しになりました」
「脅しですか」
「伝達官に権力はありませんがね、あるじの威を借りるのは常套手段なんですな。さあ、こちらへ」
案内されたのは奥向きにある部屋だった。愛娘の副官を引見するのは、皇帝の公務ではないらしい。
部屋の中には大勢の人がいた。
いや、皇帝の意識の上では、かれらは人ではないのかもしれない。そのほとんどは、黒衣に紫の肩衣をかけた伝達官だったのだ。
皇帝の子どもたち全員がそれぞれ伝達官を置いているだけではない。重要な地域に派遣した、高位の部下とやりとりをするための伝達官もいるのだ。



これだけの情報を瞬時に把握することが可能だと見せつけられたようで、ヤエトは圧倒された。

そのあいだに皇妹の姿をみつけたとき、ヤエトは表情を変えないよう努力せねばならなかった。黒衣の中で、白い装いはいつも以上に印象的だ。

――これは、あてられるかもしれないな。

伝達官たちが発する竜気を、皇妹の存在がさらに底上げしているように感じられた。

取り次ぎ役が、控えめな声で告げた。

「皇女殿下の伝達官並びに北嶺太守副官ヤエト」

伝達官が床に膝をついて平伏したので、ヤエトもそれに倣った。

「顔を上げさせよ」

皇帝の声だ。取り次ぎ役が、ふたりに命じる。

「面を上げよ」

命じられるままに顔を上げると、黒衣の集団に囲まれて座る皇帝の姿が見えた。

かなり距離があるのに、はっきり顔がわかるように感じるのは、ヤエトが皇帝を間近で見たことがあるせいだろう。記憶で、おぎなってしまうのだ。

「療養中と聞いたが、加減はどうか？」

「体調は如何か？」

取り次ぎ役の質問に、ヤエトは慎重に答えた。

「陛下におかれましてはご機嫌うるわしく、小官に親しくお言葉を賜り、感激のあまり言葉も失うほどです。小官の健康につきましては、こうして御前にまかり越す幸運を享受できるほどであります」

取り次ぎ役は、ひとことで返答をまとめた。

「良好でございます」

その後も、社交儀礼的な挨拶がつづいた。太守副官としてよくやっているそうだな、ありがとうございます、といった言葉を婉曲にやりとりするのだ。

「都の見物はしたか？」

「療養第一と考え、皇子殿下にお貸しいただいた部屋から景色を眺めるのみでございます」

「養生につとめております」

発言を短くまとめるのは取り次ぎ役の得意とするところなのだろうが、瞬時に判断して適当に端折る技術に、ヤエトはかなり感心させられた。

「たまには皇宮へも出仕するように」

「今後は皇宮へ出仕せよ」

「御意にございます」

答えながら、やった、とヤエトは快哉を叫んでいた。これで第三皇子の邸を出る口実が手に入った。

「皇女に、歴史を教えておるそうだな。そなたは史官の家系か？」

「史官の家系か？」

「御意にございます」

「学問嫌いの我が娘が進んで学ぶのだ。よほど教えかたがうまいのであろうな」

「いかにして歴史を教えるのか？」

取り次ぎ役が質問を強引にまとめてくれたので、ヤエトは却って答えやすくなった。

「伝達官を通じてですので、皇女殿下に本の頁をここからここまでとお願いしてあらかじめお読みいただきます。その後、殿下のご下問に小官がお答えする、という手法をとっております」

「殿下のご質問にお答えするのみです」

歴史の講義について質疑応答がいくつかつづいただけで、謁見はごく短時間で終わった。とくに波乱もなく解放され、気味が悪いほどだ。

皇妹が居合わせたのに無言をつらぬいたのも、つねにないことで、妙な感じがした。

最後まで、皇妹は彼と視線を合わせなかった。

彼女の周囲をとりまく伝達官たちも、少しも表情を動かすことなく、そういった存在を無視することに慣れていないヤエトは、どうにも気疲れした。

噂を集めるからという伝達官を残し、第三皇子の邸に戻る道すがら、ヤエトは考えつづけていた。

皇帝は、あんなに印象の薄い人物だったろうか。

以前の皇帝は違った。偶然に言葉をかわしたとき、皇帝の発する声の一音ずつに圧され、彼の前に立っ

ているだけで必死にならねばならなかったことを、今も忘れられずにいる。

だがもう、あの頃とは違うのだ。

彼も歳をとったが、皇帝も老いた。命懸けの逃避行を終え、生への執着が稀薄になったのか。

あるいは、あまり考えたくないことだが……。

——死期が近いのかもしれない。

皇帝が崩御すれば、帝国は割れる。

皇女は嵐に巻きこまれる。その副官である限り、ヤエトも自動的に渦中の人となるはずだ。

皇帝の長寿と健康を、今までになく真剣に祈りたい気もちで塔の扉を開けたとたん、ざっ、と周囲の空気が引いていく音がした。

暗い室内に、灯火が揺れている。その光を映してかがやく眸が窓辺に立つ人影を見遣り、尋ねた。

「さっきから、なにを弾いているの？」

「古い歌ですよ。とても古い……今はもう誰も覚えていないほど昔の歌」

三日月のような形をした楽器から、途切れがちな音が聞こえている。弾いているのは若い男だ。

「あなたは声をださずにうたうのだね」

「歌は魔法ですからね。地下に眠る過去を呼び起こしたくはありません……今はまだ」

紐をかけた荷物の上に座ったまま、少年は男の方を向いた。ひとつに結んだ髪の房がその肩からこぼれ落ち、胸の方へと流れていく。

「あなたの眼は見えないものを見て、あなたの耳は聞こえないものを聞く。あなたはどこにいるの？」

「どこにでもいるし、どこにもいない。わたしの半分は風、残りは人。空を渡り、時を渡るだけ、留まりはしません」

「ここにいてほしいのに」

「いつも、どこでも、あなたの側に」

男の声は、人がこの世に生まれるより前から吹いていた風のようだ。永遠でありながら、瞬間に失われる——それは、耳にした者の心を波立たせた。

「明日どうなるかも知っているんだね」
「そうですね。知りたければ知っています」
「知りたくないの？」
男は顔を上げた。巻いた布のあいだから、黒い髪がひと房、こぼれてその額に落ちていた。
「明日、あなたは神を殺す。世界は割れます」
「世界が……割れる？」
いつの間に楽器を置いたのか。男はなにも持っていない。積み上げられた荷物のあいだを優雅にすり抜け、壁際に立て掛けられた剣を手にとった。
「この剣で断たれたものは、珠に吸いとられる」
じりじりと灯火の芯が燃える音が聞こえた。
少年が、かすれた声で尋ねる。
「ほんとうに？」
「嘘かもしれないですね」
「吸い取られるのは、この世界？　それとも神？」
「同じことです。重要なのは、世界と神との繋がりが断ち切られるという結果だけ。でも、この世に永遠はない。やがて神はよみがえる。世界とおのれを繋ぐ鎖を引いて、境界を突き破るでしょう」
「それは……どうすることもできないの？」
剣は長く、しかし彼の手の中では軽く見えた。柄と鍔のあいだに、半透明の珠が嵌めこまれている。
「あなたはあなたの人生を生きるのです。その先のことは、その先の人々が引き受けるでしょう」
「だけど、ジャヤヴァーラは」
「ジャヤヴァーラは間違った契約のもとに生まれました。彼女の母親は、復讐に眼が眩んだ。その契約が、生ける者の世界を蹂躙した。魔物たちが生命を食らい尽くす前に、あなたはそれを止めます。そこまでが、この時代の人々の仕事」
男は顔を上げた。その眼差しは夏の夜のように甘く、暗い。
「そこから先は、はるかな時の彼方の人々の仕事。予兆を見失わないようになさい。神与の力がよみがえり、沙漠を軍旅が渡ります。言葉と名前が始源の

力を取り戻し、子ども騙しのまじないが人を呪い殺すでしょう。剣を鍛え、竜を呼びなさい。世界の境界は、長い時間をかけて安定したはず。履行されなかった契約の残りを受け取ろうとする魔物たちを、本来の領分へ戻らせなさい。血と悲鳴、死と破壊、絶望の朝。そのとき、わたしはどこにもいない。そしてわたしの救い主は、北の大地でふるえている」

男の背後で、少年が不安げに立ち上がった。

「誰に喋っているの？」

「わたしには行けない未来の誰かが、この伝言を受け取る機会が増えるように」

男は微笑むと、少年の前に膝をつき、うやうやしく剣を差し出した。少年が剣の柄を手にすると、嵌めこまれた珠が淡い光をはなった。

「まずぼくが勝たないと、未来はない」

「そういうことです」

「明日は一緒にいてくれるの？」

「いったでしょう。わたしはいつでも、どこでも、側にいるのだと。世界が砕け散るまでのすべての時間、風が吹く場所ならどこにでも。すべてが終わってから、わたしははじめてあなたに会うのかもしれない。あなたを探して旅をするのは、この先のことかもしれない。無事にみつけられるかな？」

男は楽器を抱えて弦をかき鳴らした。と同時に彼の姿はかき消え、少年は虚空に向かって叫んだ。

「待って！」

幻視の光景は弾け、ヤエトはその場に昏倒した。

第



章

1

意識を取り戻したとき、あまりにもきれいに記憶が抜け落ちていることにヤエトは感心した。

全身を倦怠感が覆っている。頭を上げることもできない。口の中が粘ついて、開くと嫌な音がした。絞り出した声はひどくかすれて、自分が喋っているのではないようだった。

「何日たった？」

「三日」

答えて召使いは立ち上がり、内壁に添って刻まれた階段を下りて行った。

ヤエトは天井を見上げ、ため息をついた。

室内の暗さから見て日没直後といったところか。伝達官はどうしているだろう。皇女に叱られるだろうなと思った。養生せよと命じられたばかりだ。

皇女は正しい。こんな体調の部下に、なにか仕事をまかせることなどできない。

——やっぱり隠居だな。

つまり自分の望みも正しいのだ、と考えてみたが、あまり楽な気分にはなれない。

寒いような暑いような感じで、節々が痛む。とくに腰が痛い。背中も軋む。頭を動かそうとすると、最高に痛いのはここだという自己主張が首筋とその上、額と後頭部で同時に開始された。

ヤエトの判定では、後頭部が勝利をおさめたようだ。以後、後頭部の痛みが主になり、それ以外は背景に遠のいた。人がつねに意識していられる痛みの量には限度があると、彼は経験的に知っていた。

人の身体というのは、うまくできているものだ。

なんとか起き上がり、水差しから水を飲んだ。手に力が入らず、水が顎へとこぼれたのを意識するだけで、痛みの自己主張がわずかに弱まる。この調子で消えてしまえばよいのに、と思う。

倒れる前に視たものも、忘れられればよいのに。
時を隔ててヤエトがそこに立つのを知っていたかのように、まっすぐに向けられた黒い眸。
そして……あの声。
——予兆を見失わないようになさい。
神与の力がよみがえり、沙漠を軍旅が渡る——帝国の侵攻を示しているかのようではないか。
予言や占いを、ヤエトは信じない。彼が信じるのは、今この世を生きている人々の営みと、かれらが築き上げてきた過去だけだ。彼自身の未来もまた、彼が積み上げて来た行為の結果でしかない。
ちょっとした偶然や、どうとでも解釈できる抽象的な示唆を大袈裟にいいたて、都合のよいところだけ当たったと大騒ぎ、あるいは不安を煽って商売する。そういった輩を腐るほど見てきた。
予言者のほとんどが、やたらと人に指図をするのも気に食わない。ああしろこうしろと他人に指図されて安心する者もいるのだろうが、ヤエトは逆だ。人に命じられてなにかをするのが嫌いなのだ。
憎んでいるとさえ、いっていい。
俸祿のためなら我慢もするが、それ以外で人に指図されるいわれはない。
冷静に考えれば、あの幻視で語られた予言も、さして信憑性があるとは思えない。抽象的な表現だから、似た事例を探して当てはめやすい。
人はみずから予言を信じようと努力してしまうものだが、まさか自分がその轍を踏むとは。
痛む頭をさすり、ヤエトは気もちを切り換えようと努力した。
——ジャヤヴァーラか……。
三代つづいた南方の覇者、黄金時代にして暗黒時代を築いた最後のひとり。最強最悪を謳われる女王が、ジャヤヴァーラである。
なにしろ記録のない土地柄だから、ジャヤヴァーラの最期も判然としない。ただ、若者に倒されたとは伝わっているから、幻視にあらわれた少年が、あ

の剣で女王の息の根を止めた可能性はある。
すごいものを視たのかもしれないな、と今さら気がついた。どうせなら、どこで実行するかも教えてくれればよかった。そこへ見物しに行けるのに。
——そんなことをしたら、今度こそ死ぬな。
抑えきれずにこぼれた笑みが咳になり、それがひどく頭に響いて、ヤエトは顔をしかめた。
せめて、正確に何年前かが特定できればよいのにと思いながら、周囲を見回した。
——その時代から建っていたのか。
内装は違っていたが、たしかにこの塔だった。扉や窓の場所も同じ、階段のあたりは暗くて見えなかったが、天井の高さも同じだと思われた。
水差しは、すぐ空になった。
召使いはまだかと窓枠に手を突いて立ち上がり、外を覗いて——思わず、声が出た。
「おい……」
ヤエトに与えられた塔からそう遠くない別の塔の扉の横に、召使いの少年の姿があったのだ。
ひとりではない。男が、少年の喉のあたりに手をかけて、小さな身体を建物に押しつけている。
やめろ、と声をあげようとしたが、咳込んだだけで言葉にならない。
——なんでこんなことに。
くらくらする頭を抱えて階段を這いずり下り、そのへんにあった棒を摑んで杖の代わりにした。
なにをしているんだ、と思うゆとりもない。
息を切らして辿り着いてみれば、少年は地面に倒され、男はその上にのしかかっていた。
ヤエトは棒をふり上げようとして果たせず、ろくに持ち上がらないまま男の脇腹に当たった。
ふり返った男の表情が、一瞬で怯えに変わった。
「その、召使いに、用がある」
一語ずつ区切らねば喋れなかったが、それでもなんとか言葉にはなった。
男は意味不明な声をあげて逃げ去った。

棒を地面に突いて身体を支え、ヤエトはそのまま大きく息を吐いた。

——わたしが誰かを知っているのか。

これは、少し考えねばならない。

少年はと見れば、半身を起こしたまま硬直していた。召使いのお仕着せは乱れ、一方の足が腿のなかばまで露出している。深まる夕闇の中で、痩せた足は少年の不幸を主張するように、妙に生々しく感じられた。襟元もはだけられ、薄い胸が覗いている。

そこで、ヤエトの視線は停止した。

召使いは我に返ったように胸元をかき合わせ、身体を縮こめてその場にまるくなった。

——女だったのか。

目眩がひどくなった。今のはそういうことか。なんと声をかければよいか、わからない。

——駄目だ、これは。

彼は召使いが押し付けられていた塔の扉を開き、中を覗いた。手前は物置きのようだが、その先には別の塔につづく廊下が見え、ちょうど灯り受けに火を入れて回っているらしい召使いの姿が見えた。

「誰か」

はい、とこちらを向いた召使いは、ヤエトを見て眼をまるくした。名告る手間が省けて、助かる。

「伝達官殿に、お越し願いたいとお伝えせよ」

「かしこまりました」

「それと、水を持って来てくれ。急げ」

「はい」

ヤエトは扉を閉めると、そのまま壁に寄り掛かった。あとは、自分の塔に戻るだけだ。

恐るべき難事業を前にして気が弛んだと思うと、ふっと目の前になにかが見えた。

さっき逃げ去った男の顔だ。

なるほど。今の一件を見物できるわけだ。

ヤエトが立っている位置は、ちょうど召使いの少女が押しつけられたあたりらしい。

「まだ手がつかないのか」

喉を締め上げては答えることもできないだろう、とヤエトは思う。たぶん、返事を聞く必要はないのだろう。知っていて訊いているのだ。

恐怖が膨れあがり、ヤエトの呼吸を乱した。これは少女が感じたものだろう。北嶺で視た男の幻影といい、ヤエトは過去を見聞きするだけでなく、強い情動なら感じとることもできるようだ。

こんな力は必要ないんだが、と心底辟易しながら、男を見下ろした。遺憾なことながら、男が感じている劣情もかなり強かったらしいことがわかる。

「だから家宰様に申し上げたんだ、こんな胸もふくらんでいない小娘じゃ、無理だってよ。……俺が揉んでやろうか？　少しは大きくなるだろうよ」

男のもう一方の手が動いた。

ヤエトはげんなりした。頭痛を押してまで見物したいものではない。彼は今に意識を戻した。

「戻るぞ」

召使いの少女は、まだ地面に座りこんだままだ。

しかたなく、ヤエトは棒を突き直して壁から背を離し、一歩、二歩と数えながら歩きだした。

よろよろと四歩まで進んだところで少女が追いついて、彼の腕を自分の肩にかけた。助かった、と思ったとたんに気が抜けて、足が萎えそうになった。

塔までの道のりが、永遠を要する難路に思える。

「修行者の道のようだな」

「……はい？」

「昔、神に会いたいと念じた修行者がいた。神のもとに通じると信じた道を歩きつづけて死んだんだ」

一気に喋ったせいで息苦しくなったが、おかげで気が紛れた。苦しい痛いもう死ぬ駄目ださようなら、ばかり考えているよりましだ。

なんとか塔に辿り着き、もうここでいい、とヤエトは寝椅子に座りこんだ。

「名は、なんという」

口にしてから、このあたりでは不用意に名を尋ねてはいけないのだったか、と思いだした。

案の定、少女は身を縮めた。

「いや、もうよい。つまり……おまえに手を出すつもりはない、ということだ。安心しなさい」

なにがつまりなのか、我ながらさっぱりわからないが、伝えたいことは伝えた。もう知らん、とばかりにヤエトは寝椅子に身体を横たえた。

頭痛は側頭部へ移った。内側から頭蓋を叩かれているようだ。一定の感覚で力強く、唸るように。

ひやりとしたものが額にふれたのに気づいて薄目を開けると、召使いの手が見えた。濡らした布を当てているらしい。ヤエトの視線を受けて、少女は手を引くと、ささやいた。

「スーリヤです」

濡らした布のことをスーリヤという方言でもあるのか、と素で勘違いしかけたが、あやういところで気がついた。もちろん、少女の名に違いない。

「あの……ありがとうございました」

気にするなと答えたかったが、曖昧にうなずくのがやっとだった。

少し、気を失ったらしい。人の声で、目覚めた。誰かが彼の背に手を当てて起こし、頭を持ち上げようとしている。

「薬湯を」

返事をしようと開いた口に、すかさず湯気のたつ器があてがわれる。

「飲め」

ほとんど無意識に、苦い液体をすすっていた。喉に染みるのは、腫れているせいだろう。まだ暫く、熱は下がりそうもないなと思った。

無理矢理視線を上げると、霞む視界の中に皇女の顔が見えた。彼は当惑し、眼をしばたたいた。幻覚だろうか。皇女の輪郭が揺れる。

——伝達官か。

こう頻繁に皇女に身体を明け渡して、彼は大丈夫なのだろうか。

ヤエトは必死で口を動かした。ささやき声くらい

にはなるかと思ったが、ほとんど吐息と同じだ。
「人払いを」
皇女はうなずき、ヤエトの身体をふたたび横たわらせ、そっと頭を枕に戻してから答えた。
「大丈夫、誰もいない」
「太守……ですか？」
「そうだ。なにを視た？　よほど古いのか」
ヤエトは息を吐き、眼を閉じた。
三日も寝込めば、彼が恩寵の力にとらわれてしまったのだと説明しているようなものだ。参ったな、と思いながら答えた。
「ずいぶん古い時代の、予言のようなものを」
「……予言？」
「疲れていたせいで、不意に呑みこまれました」
「陛下のところで、竜気にあてられたかな……。呪師の仕業ということは、ないのだな？」
「わたしを殺すのに、そんな小細工は不要です」
皇女はくちびるを噛み、ヤエトを睨んだ。
「……案じたのだぞ。兄上も、父上も、疑った」
「それは……ないでしょう」
「兄上は隠し事をなさっておいでだと教えたのは、そなただぞ。わたしの気に入りの部下と見られれば、そなたの身になにが起きるかわからぬ」
「そうなのですか？」
我ながら間抜けな問いだと思った。
皇女は少し考えこむように顎に手をあて、眉根を寄せて俯いた。そこにいるのは伝達官のはずなのに、どうやっても皇女に見えるから不思議だ。
「そなたが鬱陶しいから遠ざけた、という風に見せるつもりだったのだが。うまくいかなかったな」
「ですが、皇子殿下にせよ、陛下にせよ……わたしを殺してなにか、得があるとは……」
「損得など関係あるものか。気に入らないと思えば排除なさる。それだけだ」
説得力のある回答ありがとうございます、といいたいところだ。涙がでる。

「とにかく、今回は……恩寵の力が、少し暴走しただけです。お気遣いなきよう」
「だが、おかしいのではないか？」
皇女の眼が揺れている。いや、揺れているのは自分の頭だろうか、とヤエトは思った。そんなはずはない。横になっているのに。
「そなたは申した、恩寵の力を使うことは滅多にない、と。以前から頻々と暴走していたのか？」
「わかりません」
「それより案じられるのはな……誰かに気づかれることだ。そなたの利用価値は、高い。気づく者あらば、かならず手に入れんとするだろう。かなわねば、命を狙うはずだ。わかっているのか？」
ヤエトは口をつぐんだ。
頭が痛い。彼の頭蓋を内側から叩きつづけている職人がいるとするなら、目覚めた当初は抑制の効いた控えめな打撃、今は狂ったように力まかせに叩いているという状況だ。頭を割って、中から出てくる気なのだろう。
なにが出るのかな、とぼんやり考えた。
「わかりません。太守、ほんとうに、もう。伝達官殿を疲れさせても困りますから」
「ひとつだけ、約束せよ」
ひとつどころか、命じられたらなんでも果たさねばならない立場の部下に向かって、皇女は真面目な顔で言葉をつづけた。
「その力がそなたの自由を奪う前に、わたしに助けを求めよ。できる限りのことをする。だから、隠すな。ひとりで抱えこむな。わかったな？」
「はい……ですが」
「肯定以外の返事は許さぬ」
「はい」
皇女はうなずいた。
「それでよい。ではな」
ヤエトは片手を上げて、目頭を押さえた。眼を開けているのもつらい。

――ですが、なぜ？　と、つづくのだが。
なぜ、助けてくれようというのだろう。尋ねたら、皇女は答えただろうか。
――どうせ、約束したからだというのだろうな。
絶対に幽閉しないという誓いを、少女らしい潔癖さで守り通そうとしているに違いない。
伝達官が大きく息を吐いたのが聞こえた。
「大丈夫ですか？」
「わたしよりも、貴殿に向けるべき言葉でしょう」
「召使いは、どこにいます」
「外です。誰か来ても入れないように命じて……あの者が、なにか？」
ヤエトは自分が意識を取り戻してから見たもののあらましを語った。恩寵の力を借りて視た部分も含めて、目撃談に仕立ててしまう。
話が進むにつれ、伝達官の表情は険しくなった。
彼は立ち上がると、塔の外から召使いの少女を連れて戻って来た。
「どこの者だ？　尚書官殿の到着に合わせて、買われて来たのだろう。もとは、どこにいた」
少女は小さい声でぼそりとつぶやいた。ヤエトには聞き取れなかったが、伝達官はうなずいて、その意味するところを明かした。
「売春宿です。首尾よくいかないので、ダハールめが売り主か仲介役に苦情をいったのでしょうな。どうも挙措がなっていないと思っていました」
……挙措？　と首をひねりかけ、途中で自制した。頭が痛くなるだけだ。伝達官は召使いが女だと察していたのかと疑いながら、別のことを尋ねた。
「元いたところに突き返されるのでしょうか？」
「お手がついていないなら、まだ初物でしょうからね。向こうでも使いようはいくらでもある。ただ、ダハールが払った金を返せなければ、この娘を戻されても困るでしょうな」
本人を前に、伝達官はずけずけと口にした。少女は俯いたまま動かない。

「それで、せっつきに来た……と？」
「ついでに『もう傷物になっていますから』と返品拒否をするわけです」
「なるほど」
ため息をついたヤエトの横に、伝達官は腰を下ろした。彼も疲労の色が濃い。
「問題なのは、ダハールのやりようです。こんな子どもをあてがうなど……」
ヤエトはげんなりして答えた。
「子どもでも大人でも関係ないですよ」
他人に性欲の処理を心配されたのかと思うだけで、うんざりする。
だが、伝達官の非難は意味が違っていた。
「ダハールが幼い娘を選んで送りこんで来たのは、姫様との仲を疑っているという意味ですぞ？」
「は……？」
予想もしなかった言葉に、一瞬、頭痛も忘れた。
「この娘は生っ粋の南方人ではない。肌の色が薄い。髪もさほど黒くない。昼の光で見れば、金褐色に近い色合いだ。背丈も年頃も、姫様に合わせて選んだに違いありません。貴殿はもう少し怒るべきです」
ヤエトはまじまじと少女を見た。
どこが似ているというのか。どこも似ていない。
「ダハール殿は、太守にお会いになったことがないのですか」
「まさか。姫様は、よくお邸においでしたよ」
「……そうですか」
頭痛が戻って来た。今度は目の奥が痛い。
「とにかく、ただのもてなしとは思えません。手を出したらなにか仕掛けが動くのでしょう。ダハールは、無駄金は使わない男ですからな。貴殿を取り込んでどんな見返りを期待するのか……」
「今回は無駄金に終わってもらいたいものです」
皇女とはうまくやっているが、子どもの面倒をみているようなものである。この少女もだが、ヤエトの娘だといっても通る年頃なのだ。それに手を出す

に違いないという前提自体が、おかしい。
「召使いを交替させますか？」
「いや」
でしょうね、と伝達官はうなずいた。
今度はもっとめりはりのある体型の女性が来るかもしれない、というだけの話だ。意味がない。
「しかし……ご自分を陥れるための道具まで救おうとなさるとは。つくづく高潔なかただ」
ヤエトは苦笑した。
「行ったときは、まだ知りませんでした」
「変わらんでしょう。事情を知っていても、同じ場面に遭遇すれば、貴殿は助けに行かれるはずだ」
「……さあ、それはどうかと」
「行くでしょうな。間違いない」
ヤエトは眼を閉じた。自分は強くない。弱い。なによりも、自分自身に弱い。
「わたしは小心なのです。怖いのですよ、自分を恥じるような行為をするのが。誰が知らなくても自分は知っていますし、一生、許されることはない。自分の内面の声に責め殺されるのは、嫌でしょう？」
「それはそうですが……」
自分と同じ力を持つ者に、今の自分を覗き視られたら——それを案じれば一層、誰にも恥じない人生を選びとるしかない。
「高潔などではありません」
長いため息をつくと、伝達官は少女の方を見た。
「出ていろ」
召使いは無言で外に出た。怖くないのだろうか、とヤエトは思った。あの男が戻って来たら——と考えたとたん、あのとき少女が感じていた恐怖がよみがえり、吐き気がこみあげてきた。そこへ、不意に伝達官が顔を寄せてささやいた。
「わたしには、わかるのです」
眼が座っている。さっきの幻視を連想して、ヤエトは無意識に身を引こうとした。
「なにがです」

「姫様と貴殿がなにをお話しになったかは、わかりません。ですがね、姫様がなにをお感じになったかは、わかるんですな、これが」

ヤエトは眼をしばたたいた。

「……お感じになったことが？」

「姫様は、貴殿に全幅の信頼を置いておられる。そして、……たいせつに思っておいでですよ」

痛む頭をさすりながら、ヤエトはつぶやいた。

「光栄なことですが……しかし、なぜです」

ため息が、降ってきた。

「さあ？　わたし同様、親戚のおじさん……で悪ければ、お兄さん、的な？」

「本物が何人もいらっしゃるのに」

「血の繋がった兄君を、無邪気に信じられるお立場ではありませんよ」

父も兄も疑ったという皇女の言葉が、重い。

竜種とは寂しい一族だ。生まれながらに与えられる家族を、信じることができないのだから。

ヤエトが黙っていると、伝達官は立ち上がった。

「伝達官には無理な役回りです。我々は影に過ぎず、形に従うばかり。信じるとか信じないとかいう問題が、そもそもさし挟まれる余地がないのですよ。貴殿は違う……だから、ではないですかな」

「疑う余地があるから信じると？　それは矛盾ではありませんか」

見上げると、視線が合った。

「人は矛盾した生き物なのですよ。奇妙な方へ傾斜してこそ、人生です」

また来ます、といって伝達官は立ち去った。

2

翌日、伝達官は姿をあらわさなかった。

ヤエトは人を遣ったが、お留守だそうですという返事を得ただけだった。体調を考えて遠慮したのかとも思ったが、さらにその翌日も訪ねて来ないとな

ると、あきらかにおかしい。

意識を取り戻して三日目になると、頭痛も並の上程度で落ち着いた。不調と折り合いをつけるのには慣れている。ヤエトは官服の袖に手を通し、床を払ってみずから塔を出、家宰に面会を申し入れた。

勝手に塔を出て来た客人を、召使いたちは扱いかねた。頭痛由来の不機嫌な表情が、効果を上げた。

来客中ですから暫しお待ちをと通された部屋は、先日、第三皇子に拝謁したときの控えの間だった。部屋の狭さの割に、窓は大きい。光に満ちた庭は白々として、妙に現実味が薄かった。

もう少し暗くなってくれた方が眼が楽だ、と思ったのがよくなかったのか。

景色が色を失い、闇に沈んでいくのを感じた。

まずい、とヤエトは思った。

――恩寵だ。

今は絶対に駄目だ、と自分を押し止めようとしたとき、窓の近くに見慣れた後ろ姿を発見した。

ほとんど黒に見えるが間違いない、あの肩衣は紫だ。月光をはじいて、黄金の竜の刺繍は夜目にもまばゆくかがやいている。

伝達官は走っているようだ。不安定な姿勢のまま、時は静止している。

動け、とほとんど無意識に念じた。その瞬間。

その肩衣めがけて、銀光が一閃(いっせん)した。

ヤエトは眼をみはった。黒い、いや赤いはずだが黒く見える血がしぶき、視界はますます暗くなる。

両手を握りしめた。

視界を広げなければ。誰がやったのかを知る必要がある。いや、それだけではない。

なぜ斬(き)られたのか。時を巻き戻さねば。

伝達官は倒れ、そのまま動かない。

敷物に織りこまれた見事な文様が次第に輪郭を失い、黒ずんでいく。血を吸っているのだ。

血はヤエトの足下まで及んだ。

見下ろしても自分の足が見えないことに一瞬、違

和感を覚えた。視界がぶれて、現実が力を取り戻す。過去が遠ざかりかけた。

「これで時期を……できなく……」

耳鳴りがして、すべてが遠い。

――駄目だ、聞かせてくれ。

ヤエトは必死で念じた。すると昼の世界が弱まり、過ぎ去った過去の景色が明瞭さを増した。

次の声は、別の人物のものだった。耳もとで告げられたかのように、はっきりと聞こえた。

「皇女殿下の影とはいえ、殿下の名だけでは拘束しきれませんでしたな。これを完全な支配下に置ければ、皇女殿下の方も早く進んだのですが」

やわらかな、しかし背筋が寒くなるような声。

その正体に思いあたったのと同時に、ゆらりと人影が視界に踏み入って来た。頭に巻いた赤い布、ゆるやかに揺れる古風な衣装に装身具。床に膝をつき、倒れた伝達官の傷に指をはしらせる顔は影の中。表情は窺えない。

呪師は顔を上げ、肩越しにふり返った。

「死んでいます。見事な腕前ですね」

その眼差しの先に立つ人物を、ヤエトは見ねばならなかった。

「伝達官には……名などない」

答える声は、ますます遠くなっていく。

そう遠いはずはない、伝達官は今、彼の目の前で斬られたのだ。なのに、剣を揮った者は視界に入らない。声すら聞こえなくなった。

反対側から、陰鬱な表情の家宰が進み出た。血だまりに足を踏み入れかけ、あやうく踏み止まる。

「今さらそなたの腕を疑うわけではないが、皇女殿下の方、大丈夫なのだろうな」

呪師は、血にまみれた指を星あかりにかざし、うっとりと眺めた。

「ご心配なく。たしかな名さえあれば十分。遠からず、皇女殿下は我が術中に」

「ただの殺しではないぞ。わかっているのだな？」

ゆっくりと、呪師はうなずいた。
「無論。破滅への道を走っていただきます」
「副官殿」
不意に、今に引き戻された。身体が重い。
声のした方を見ると、次の間につづく扉が開いて、そこにダハールの姿があった。家宰の眼差しは磨きあげた鉄のように冷たく、するどい。
「勝手に出歩かれては困ります。お顔の色が……」
「顔色は、よかった例などありませんので」
自分の声が平静に響くかどうか、ヤエトにはわからなかった。動揺しても、いつもと変わりませんねと周囲にいわれてきたのを信じるしかない。
「しかし、先日お倒れになったばかりでは」
「その先日ですが……陛下より、この後も皇宮へ出仕するようお言葉を賜っておりました。気づけば無為に日が経ってしまい、困り果てております」
ダハールは眉を上げた。初耳らしい。
「それは大変なことですな」
ええ、とうなずいてヤエトは俯いた。
——吐きそうだ。
体調のせいだけではない。気を抜くと、さっきの光景にとらわれる。血の匂いが、今ごろになって鼻孔に届いた。あれは昨晩か。いや、その前か……。
「伝達官殿にお願いして、倒れたことだけでもお知らせいただこうとしたのですが、連絡がつかず」
顔を上げ、視線を合わせた。
「左様。お戻りになりませんので、連絡のとりようがございません」
ダハールの表情は、まったく変わらない。
「馬車をお借りできませんか。ご引見賜ることは無理でしょうが、せめて参じてご説明を」
「申しわけありませんが、今日は無理です」
「なぜです？」
「馬車が使えませんので」
「そうですか。では、歩いて参ります」
「とんでもない。徒歩で皇宮へ上がらせるなど、我

が主君の恥。第一、お身体に障ります。連絡はわたしが手配いたしましょう。ご健康を害されて出仕がかなわなかった由、かならずお伝えいたします」

反論しようと口を開いたものの、気が変わった。

「それは……かたじけない」

相手は、彼をこの邸から出す気がない。へたをすれば、客扱いはこの場で終了だ。

「どうぞ、お部屋にお戻りください」

ダハールはヤエトを見ている。

兇行のおこなわれた場所をふり返りたい気もちを堪え、彼は一礼して部屋を出た。

伝達官を斬ったのが誰かは、明白だ。呪師が慇懃な言葉で語りかける相手は、そういない。

――しかし、なぜ第三皇子が。

気に入らないという理由でヤエトを殺しても、第三皇子ならそう問題にはならない。竜種にとって、平民の命など塵も同然だ。

だが、相手が皇女の伝達官なら話は違う。伝達官は、竜種の分身である。邸内で皇女の伝達官が命を落としたことが明るみに出ただけで、皇子の汚点となる。伝達官の安全に責任を負う立場なのだから。

しかも、ことは伝達官に限らない。皇女もだ。皇帝の寵愛深い妹を害して、ただで済むはずがない。

その危険をおかすに見合う価値があるなにかを、皇子は得ようとしている……おそらく、皇帝位。

第三皇子は仕掛けているのだ。

――だが、なにを？

わかるわけがない。帝国の頂点に立つのが誰でも、関係ない。卑官とは本来、そういうものだ。

ただし、今は困る。彼は太守の副官だ。北嶺とその太守を守るために考え、行動する義務がある。

――自分になにができる？

ヤエトはくちびるを噛んだ。

伝達官を同伴できない今、皇宮へ行っても皇帝や皇妹のもとへは辿り着けまい。そもそも、この邸を出られないし、無理に意を通せば殺されてもおかし

くはない。伝達官ですら、命を奪われたのだから。
だが、このままでは死ねない。今は駄目だ。
皇女が陥れられると知っていて、その事実を抱いたまま墓に入るわけにはいかないのだ。
――なにができる？
ヤエトは廊下に立ち尽くしていた。
伝達官は死んだ。殺された。命綱は切れたのだ。
しかも皇女は呪師の術中にある……。
落ち着け、とヤエトは自分に命じた。
どんな術にも、破るすべがあるはずだ。それを探して、北嶺に知らせねばならない。
だが、どうやって。
――役立たずな力だ。
視たときには、終わっている。変えられない。
――だから、古王国は滅びたのだ。
過ぎ去った時の彼方に耽溺し、今を生きることを拒んだ。帝国の前にその首を差し出し、戦うことなく統治権を委ね――国の名も実体も失われ、過去視の技術さえ時の流れに見失った。結局、手元にはなにも残っていないではないか。
皇家の恩寵の力なら、即座に皇女に危険を知らせることができるのに。
不安と苛立ちから動悸が激しくなり、息苦しさに襲われた。
――うろたえるな、愚か者が。
彼は呼吸をととのえた。
――突っ立っている場合か。あやしまれたら、どうする。歩け。
召使いの少女を助けたときに辿った道のりを、いにしえの《修行者の道》のようだとうそぶいたことを思いだし、ヤエトは眼を閉じた。
今日の方が、道は遠い。
神に通じると信じて歩きつづけ、修行者はついにどこにも辿り着かなかった。老齢と疲労が彼を殺したが、信仰を奪うことはできなかった。
――できることを、やるしかない。

自分にできもしないことを望んでも、無駄だ。
塔に戻る頃には呼吸も落ち着いていた。出迎えた召使いの少女に、彼は尋ねた。
「邸の外に、出られるか？」
少女はおどろいて彼を見返し、しかしすぐに首を左右にふった。ヤエトはさらに畳み掛けた。
「誰か、邸の外に出られる召使いは？」
少女はまた首を左右にふり、答えた。
「召使いは誰も。死ぬまで出られないと」
「買い物はどうしている」
「出入りの商人が注文されたものを持って来ます」
ヤエトは顔を撫でた。家宰が目を光らせているのは間違いないが、接点は接点だ。
「商人は、いつ来る。毎日か。それとも何日かごとにか。決まった日や時刻があるのか」
「存じません。……訊いて参りますか？」
「いや、わたしが命じるまで他言は無用だ」
「はい」
少女は熱心にうなずいた。やはり皇女には似ていない、と思う。皇女なら、なぜだと尋ねるだろう。
「それとなく注意をしておくように……」
痰がからんで咳込むと、少女は跳ね上がり、上着をお持ちします、と上層へ取りに行った。
ヤエトは窓の外を眺め、もう秋も深いのだと考えた。彼が寝込んでいたあいだに、季節は一気に進んだようだ。風が冷たい。
ゆったりとした丈の長い上着を彼の肩に着せかけた少女の手を、ヤエトは摑んだ。
「これではない」
「……はい？」
「北嶺の、獣の皮が欲しい」
少女の表情はめまぐるしく変化した。
間近で見れば、なるほどその眸は生っ粋の南方人ほどには黒くない。ヤエトの眼の方が黒いだろう。同じ黒でも古王国人の眼は青みがかっており、南方人の茶がかった色より暗く冷たく見えるはずだ。

「北嶺産の、獣の皮を買い入れたい。費用は払う。品質を確認するので、商人はここへ呼びなさい」
「かしこまりました」
「疲れた。わたしは上で休む」
ヤエトは二層に上がり、庭を横切る少女の姿を窓から見下ろした。古参の召使いにでも、ヤエトの望みを話しに行くのだろう。家宰の耳に入って止められるだろうが、やってみるだけなら損はない。
彼は視線を上げ、正門の方を見た。いつか果たせなかったことを、今こそやり遂げるのだ。
この邸に出入りする者を、視る。できれば表の門から堂々と入って来るのが誰かを確認する。そういう存在なら、一緒に出て行けるかもしれない。
消耗する危険はあるが、近い過去ならさほど影響はない。とりあえず、ほんの何日かでよい。
ヤエトは眼を閉じた。
集中すればできるはずだという確信があった。子どもの頃に、できたことなのだから。

兄弟に内緒で菓子を食べたと母に叱られたとき、犯人を見つけようと、その場ですぐ時を遡った。今でも当時をあざやかに思いだすことができる。
窓から差す光の方向が変わり、影の長さと形、濃さが変わっていく。もっと、もっと速くと念じるのに応じて彼の視界の中で時は縮まり、てのひらの中に握りこめそうなほど縮めた時の向こう、動いた人影をみつけたところで、ぱっと止めた。
あれと同じことだ。
門を凝視し、ヤエトは時間を縮めはじめた。
子どもの頃を思いだし、手の中にどんどん握りこむ感覚で時を縮め、遡行する。日射しの角度が変わり、影が動く。衛兵の姿がぶれ、何度か交替する。朝になり、空が暗くなって夜になる。昨日に戻った。闇の中から塔の輪郭がいくつも立ち上がり、空が少しずつ明るさを増していく。昨日の昼。
幻視の門は少し遠い。視界に入るぎりぎりだから、声は聞こえない。といって、その場まで行ってこの

芸当をやってのけるわけにもいかない。
今、門の向こうに人影があるのがわかった。馬車が停まっている。衛兵が立ち位置を変え、柵越しに話をしているのがわかる。
少しでもなにか聞こえないかと、ヤエトは真剣に耳を澄ませつつ、時間を少し進ませた。
ひとつの音だけが、はっきりと聞こえた。
「エイギル」
思いがけない名前に、息を呑んだ。
――もう一回、念のために。
もう少し遡って、また聞き直す。
「エイギルの……尚書官……答礼に」
少年の声だ。声変わりが終わっていないのか、甲高くてよく通る。おかげで、聞こえた。
「……明日、……」
ヤエトは握っていた時を手放した。すると幻視の光景は一気に遠ざかり、はじけて消えた。
階下からの物音に、彼は大きく息を吐いた。召使いが戻って来た。急がねばならない。
棚に載せてあった本を手にとり、昨晩書いておいた覚え書きを見直した。短い追伸を書き添えて、さらに見直してから紙を折り畳み、薄紙で封をしながら召使いを呼んだ。
階下から少女が顔を出したときには、通信文は油を引いた防水紙にくるんであった。
「今日、わたしを訪ねて来る者がいるはずだ。この邸のあちら側から――」
ヤエトは手をふって、大雑把に方向を示した。
「――たぶん、柵を回りこんで来る。門前払いになるだろうが、これを渡したい。どこか物陰で、柵越しに物を渡せる場所を知らないか」
少し考えてから、少女はうなずいた。
「あると思います」
「案内してくれ」
「お身体に障ります」
「かまわん」

少女は頑固に拒んだ。
「人目につきます。連れ戻されます」
「どうしても渡さねばならない」
「わたしがお持ちします」
少しだけ、ヤエトは迷った。あまり時間がない。相手はいつ来るかわからないのだ。
「わかった、ではたのむ」
少女はほっとした表情で包みを受け取った。
「ありがとうございます」
なぜ礼をいわれるのかわからなかったが、とりあえず、うなずいておいた。
「貴族の若者だ。エイギル殿のお身内のかたですか、と声をかけるんだ。そうだといわれたら、その包みを渡せ。北嶺太守にお送りください、と」
「エイギル様の……お身内」
「誰からと訊かれたら、ヤエトからというのだ」
詳しく人相を教えられないのは残念だが、ヤエト自身、顔はよく見えたわけではない。
少女はうなずいた。真剣な顔つきである。
「かならず、お渡しします」
あまり思いつめた風にいうので、無茶はするな、と口にしかけたが、結局、その言葉は呑みこまざるを得なかった。
おそらく、少女が思っている以上に危険なことだ。無茶を承知でやらせるのに、無茶をするなとは、矛盾するにもほどがある。
代わりに、謝罪の言葉がこぼれた。
「すまない」
包みを胸に抱いたまま少女は首を左右にふると、身を翻して階下へ下りた。
扉が開閉する音を聞きながら、ヤエトは寝台に身を横たえた。幻視の力を使った反動が、ようやくあらわれはじめたようだった。
召使いの行方を見守りたかったが、彼が窓から同じ方向を眺めていたら、あやしまれるだろう。
裏切られる恐れも皆無ではない。自由と引き換え

に取り引きを持ちかける度胸があれば、ダハールにあの手紙を売ることだってできる。

あの少女のためにも、そんな間違った勇気をふり絞らないでいてくれることを、ヤエトは願った。まず間違いなく、始末されるだろうから。

ただの手紙ではない。暗号だ。

どの頁の何行と指定して、その頁に二十二を足した頁の該当する行頭の文字を抜き出して、繋げていくという決まりになっている。鍵になる本が手元にあり、読み替えの頁差さえわかっていれば解読は容易だが、そうでなければ暗号文を手に入れても読みとくのは至難のわざだ。単純だが強力な暗号だ。

二十二とは、皇女と彼の年齢差だ。これなら忘れないでしょうというと、皇女は肩をすくめて答えたものだ。そうでもないぞ、と。

昨晩書いたものは、伝達官が姿を見せないので案じている、第三皇子が陰謀に加担していることは確実、巻きこまれないようにご注意を、という内容だった。今や、それだけでは済まない。

——呪師が御名を呪っています。

書き添えたのは、この一文だった。署名はせず、きっと帰りますとだけ書いて、封をした。

帰れるかどうか、さっぱり自信がないが。

ヤエトは大きく息を吐くと、寝返りをうった。

頭が痛い。こめかみが痺れるように痛む。忘れていることはないかと考えながら、額を揉んだ。

——本だ。

さっきの通信文が第三皇子の手に入ってしまったら、解読せよと要求されるに違いない。暗号の決まりを知られ、皇女に偽りの通信文でも送られれば、困ったことになる。

——処分しなければ。

燃やすしかない。

時刻が早く、室内にまだ火はない。

痛む頭を気遣いながら起き上がると、彼はあの角灯を持ち出した。この高価な細工物の底には物入れ

があり、予備の火熾しが仕込まれている。滅多に使うことはないので苦労して底を外すと、小さな包みがころがり出た。

薄手の紙で円形のものを包んであるようだ。ほどいてみると、金貨が転がり出た。西の帝国の、古い貨幣だ。縁に沿って文字が刻まれている。

――長寿と健康を祝って

皇帝の在位が長くなると発行される、記念貨幣だった。金の含有率が高い上、稀少価値もあるから、出すところに出せば高額で取引される代物だ。

今の皇帝があと何年か位を守れば、こうした貨幣が鋳造されるかもしれない。

包み紙にも、文字がしるされている。少しずつ皺をのばしながら、ヤエトは目で文字を追った。

――元気になって帰って来い。

苦笑が漏れた。どこまで信用がないのか。

参ったな、とつぶやいたつもりが咳に変わってしまい、おさまるまで火を熾すこともできなかった。

召使いが戻って来るまでに、ヤエトは本をきれいに燃やし尽くしたばかりか、塔のてっぺんから風に乗せて、灰を撒いてしまった。

呪師がどんなわざを使うかわからない。灰から元の本がなにかを探られても困る。

「旦那様」

三層の寝椅子に座り、灯を入れた角灯を眺めていたヤエトに、少女が声をかけた。

「首尾は？」

「お渡ししました。馬車の中のかたから、お返事をいただきました」

「馬車の中？」

「エイギル様の奥方様だそうです」

ああ、あの……、とつぶやきが漏れた。副団長が自慢していた、求婚者をちぎっては投げちぎっては投げしてようやく結婚したという、あの奥方か。

反射的に、美人だったかと訊きかけたのを、なんとか自重した。

「なんとおっしゃったのか」
「かならずお助けします……と」
ヤエトは眉を上げた。聞き間違いだろうか。
「助ける、と？」
「はい」
ヤエト自身、はっきり窮状にあると認識したのはついさっきのことだというのに、会ったこともない貴族の女性が、なぜ彼を気にかけるのだろう。
わからないな、と悩みながらヤエトは座り直した。その肩に、召使いがまた上掛けを羽織らせた。
「ありがとう。助かった」
少女は少し緊張した面持ちで、小さくうなずいた。それから、食事をとって参りますと下りて行った。
もうそんな時刻か、と思った。空には薄い雲がかかり、風は肌寒い。日が翳（かげ）ると急に秋らしくなると思いながら、ヤエトは立ち上がった。
このまま風にあたっていたら、体力を奪われる。川向こうは雨だろうか、かなり厚い雲がかかっている……と思いながら、視界の隅に動くものを認め、庭に視線を戻した。大きな荷物を抱えた召使いがふたり、彼の塔の方にやって来る。
ヤエトが下りるのと、塔の扉を叩かれるのとが、ほぼ同時だった。
男たちは汗だくだった。ひとりが一礼して、丁重に告げた。
「ご依頼のお品物でございます」
「……ああ。ずいぶん早かったな」
縄でくくってあるだけの荷物は、どう見ても毛皮の束だ。一財産になりそうな、見事なものばかり。
「皇子殿下よりのお言葉です。都にあっても北嶺の毛皮をと願うほどの忠義は天晴れ。今はまだ、ここを北嶺と考えて養生につとめよ、のことです」
「謹（つつし）んで、ご厚意をお受けする」
どさどさと荷物を落とし、男たちは立ち去った。
ヤエトは毛皮の束を見下ろして、出入りの邪魔だなと思った。しかし、とても動かせそうにない。

そこへ、食事の盆を手に少女が戻って来た。あやうくつんのめりかけたが、機敏に平衡をとった。
「旦那様？」
「旦那様はやめてくれ。尚書官でいい」
「尚書官……様？　あの、これは？」
「毛皮が欲しいなら好きなだけくれてやる、これでどうだ、……と、いうことらしい」
少女はまだ面喰らった表情のままだ。
「気にするな。それより、食事にしよう」
「はい」
毛皮は口実で、目的は北嶺への経路を確保している商人と繋ぎをつけることだったのだが、第三皇子をおもしろがらせただけだったようだ。表向きはまだ、大事な客という体裁を捨てないつもりらしい。
――それを利用して、なんとかならないか。
卓上に並べられた夕食を、ほとんど上の空で口に運んでいると、少女が気遣わしげに声をあげた。
「旦……尚書官様」
「なんだ？」
「外が」
匙ですくった汁ものを口に運んでしまってから、ヤエトはその匙をゆっくりと元の器に戻した。
たしかに、外が騒がしい。それも、次第にこちらに近づいて来るようだ。
「……許され……しかし……」
「陛下の……控えよ！」
――陛下？
扉の方を向いたまま、ヤエトは少女に命じた。
「角灯を取って来てくれ」
少女はすぐさま階段を上りはじめた。口数が少ない召使いは楽でいい、と思う。もう少しちゃんと喋ってくれないかと思うこともあるが。
じきに扉が開き、一歩中に入った――ところで、闖入者（ちんにゅうしゃ）はつんのめりかけ、信じられないという顔つきで足もとの毛皮の束を見下ろした。
黄金竜の縫い取りもきらきらしい青の制服は、下

位伝達官のものだ。

下位伝達官とは、竜種専属の伝令のことだ。竜種の言葉を伝えるのに本職の伝達官だけで済ませるには、帝国はあまりに広い。そのため、特別の力を持たない者が、下位伝達官として採用される。

要は使い走りなのだが、ほとんどが貴族出身なので、威張りかただけは心得ている。

第三皇子の邸に押し入って来たこの伝達官も、かなり心細くなった頭髪はあきらかに金色で、顔だちから見ても貴族であることは間違いなさそうだ。

「わたしは真上皇帝陛下の伝達官である。北嶺太守副官、ヤエトとはその方か。畏れ多くも陛下のお召しである。即刻、付いて参れ」

そういう人々であるから、自分を下位伝達官などとはいわない。必ず、伝達官とだけ称する。

「左様なお話は伺っておりません」

呼ばれて駆け付けたのだろう、横から割り込んだダハールは息を乱している。先客同様、彼も毛皮につんのめりかけ、ぎょっとして後ずさった。

「竜声こそ帝国の法である。控えよ！」

皇帝の意向だから逆らうな、という意味だ。それでも、ダハールは食い下がった。

「このかたは、当家の大事な客人である。我があるじに断りもなく連れ去られるとは、あまりに無体。それに、斯様な時刻に突然のお召しとは、信じがたい。紫衣の伝達官ならともかく――」

「なんたる侮辱！」

下位伝達官のこめかみに、青筋が立った。大袈裟に腕をふり回し、胸元の黄金竜を示して叫ぶ。

「皇家の竜を胸にする栄誉を得たときより、虚偽の報せを口にしたことなど！　その方こそ、この者の意を無視して不当に監禁しているのではないか？」

「左様な仰せはきわめて不本意。当家では――」

「黙れ。本人に訊く」

伝達官は、くるりと向き直った。後頭部がてかりと光って見える。ありがたいものには後光がさすと

いうのはほんとうだな、とヤエトは思った。
「畏れ多くも陛下のお召しに従うか」
「謹んで、参上つかまつります」
「では参れ」
ヤエトはゆっくりと立ち上がった。今度はダハールの額に青筋が立っているような気がしないでもないが、伝達官を邸内に入れ、ヤエトと対面させてしまった時点で、彼の負けは決まったようなものだ。
「申しわけありませんが、その荷物を避けていただけませんか。伝達官殿の前で、跨いで通るような見苦しい真似はできかねますので」
伝達官はうなずいた。よい心掛けだといわんばかりの表情だ。だからといって、彼が毛皮を移動させるはずはない。ダハールは後ろに控えていた尚武官に命じ、毛皮の束を動かした。
召使いの少女は角灯を手に、どうすればよいかわからないという表情で、かたまっている。
「来なさい」
命じたが、眼をみはるばかりで動かない。おそらく、動けないのだろう。
しかたなく、ヤエトは少女の手をとって引き寄せると、肩に腕をかけて体重を預けた。少しよろけた風をよそおって、少女の耳もとでささやく。
「ここから出してやる」
そのままゆっくり身を起こし、命じた。
「しっかりと支えよ。……病み上がりで足もともおぼつかず、御迷惑をおかけします」
「案ずるな。外に馬車がある。行くぞ」
踵を返す下位伝達官につづき、ヤエトは召使いの少女をともなって塔を出た。
すれ違いざま、ダハールが低くつぶやいた。
「ここにいれば、命の保証はしてやろう」
思わず、笑みがこぼれてしまった。
命の保証？　どうやって？　医者にも見放され、未だに命永らえているのが不思議なほどのこの身を、あと何年、生かしてくれるというのか。

家宰はそのままヤエトに歩調を合わせて歩きはじめ、召使いの少女の頭越しに言葉をかさねた。
「命を懸けるほどのものが、あるのか？」
「わたしの命は軽いのですよ、ダハール殿」
「出て行けば、その軽い命が吹き飛ぶぞ」
「鳥の羽毛ほどの重みしか持たずとも……なし得るのなら、羽撃いてみようと思うものです」
ダハールは足を止めた。
「後悔するぞ」
「後悔できる贅沢を、せいぜい嚙み締めましょう」
家宰は答えず、ヤエトは門へと進んだ。
この邸を出られるのは大歓迎だが、下位伝達官が口上通り、皇帝の命令を伝えているかどうかはあやしいものだ。罠を逃れてあらたな罠に飛びこむ予感もするが、今を逃せばここを出るのは難しい。
伝達官が颯爽と馬にまたがるあいだに、ヤエトは声をひそめて少女に尋ねた。
「外に出れば命の保証はないそうだ。どうする？」
少女は即座に応じた。
「お供します」
「先に乗れ」
無駄金を使わないと評判のダハールが召使いを取り戻しに来る前にと、ヤエトは少女を急かして馬車に乗せた。つづいて自分も乗りこむ。
伝達官の助手が喇叭を高く掲げ、吹き鳴らした。あまりうまくないようで、音がこもっている。
――偽者ではあるまいな。
皇帝の代理人を騙るとなれば、重罪である。人相風体から見て、伝達官は本物と踏んでいたのだが、ひょっとするとひょっとするかもしれない。
一行は動きはじめた。あたりはすっかり薄暗くなり、夕映えの名残りは空の底をわずかに赤く染めるだけ、それもこのあたりではほとんど建物の陰だ。
並んで座っている少女に、ヤエトはささやいた。
「機会があったら、逃げなさい」
「お供します」

「おまえの面倒までみていられなくなる」
少女は頑固にくり返した。
「お供します」
少女には戻るべき場所も、たよる人もないに違いない。同行する以外、身の立てかたがないと思いさだめても不思議はないだろう。
厄介なものを自分から背負ったのかもしれないと、ちらりと思ったが、今はまだ考えないことにした。
後刻、考えればよい——後があればの話だが。
邸宅街を抜ける前に、馬車は停まった。
道の前後を塞がれている。鞘から刃が抜き放たれる音がいくつも響いた。従軍経験のあるヤエトには、聞き慣れた戦闘の序曲だ。
「ずいぶん気が早い……」
もっと遠くへ行くまで待てなかったのか。
下位伝達官は落ち着いて口上を発した。
「畏れ多くも真上陛下の竜声を運ぶ伝達官の行列であるぞ！　それを知っての狼藉か！」
行列とは、ずいぶんふかしたものだ。護衛の尚武官もいないのに。
助手の少年が喇叭を構えた。
そのとき、ヤエトの眼前を風が薙いだ。
馬車が揺れ、驚愕のあまり声も出ないヤエトのかたわらに、男が膝をついていた。
一瞬、視線が合う。
あっと声をあげる暇もない、頭を下に押しつけられた。伏せていろということだ。
重たい音がして、悲鳴があがった。
好奇心に負けておそるおそる顔を上げたヤエトは、すぐに馬鹿のように上を見ることになった。
雨のように、人が降って来ているのだ。
たしかに、潜める場所は高所にいくらでもありそうだが、尋常のことではない。相手の気勢を削ぐ作戦か、と考えた。きっと、数が少ないのだ。
軽業師の一団かと思うほど身軽に飛び跳ね、とんぼを切って攪乱する人影を、正確に数えるのはとて

も無理だ。しかし、多くないのは確かなことだ。
馬車の上に飛び乗った男が声を発した。
「伝達官殿、後は部下が引き受ける。我々は先へ」
「あいわかった。行くぞ！」
御者が手綱を鳴らしたのが合図だったように、それまで防戦一方だった襲撃者たちが、馬車に殺到した。逃がすなと命じられているのだろう。
馬車に手をかけた賊の指を、車上の男は無造作にふり下ろした剣で叩き切った。
しぶいた血が、召使いの少女の頬に飛び散る。
あわてて、ヤエトは少女の身体を抱き取り、御者席の後ろに引き寄せた。
その間にも、剣士は凄まじい勢いで戦っていた。
しがみついて来た別の男の頭を剣の柄で叩いて昏倒させ、馬車の縁にかかった手を踏みつぶして落とし、背後からよじ登って来た男の襲撃を躱して身を沈めざま、相手の足を払って転ばせると、剣を握った利き腕を思いきり踏みつけた。嫌な音がしていたから、どこかの骨が折れたのだろう。
悲鳴をあげてのたうつ男を蹴り落とし、次の瞬間にはもう剣を構えている。敵を始末する手順は流れ作業のようで、一切の無駄がない。
びゅっと空気を切る音が間近に聞こえ、おどろいてふり返ると、御者に襲い掛かろうとしていた男が落ちて行くところだった。馬車が強く揺れたので、たぶん轢いたのだろう。あまり考えたくないが。
最後に馬車にとりついた男は、多少頭がまわった。先客の剣士を無視して、いきなりヤエトに武器を向けたのだ。
自分に迫ってくる剣尖を見ながら、これはまずいと思ったが、動く余裕もない。その一瞬で思ったのは、お守りの効能がほんものなら、魂だけで北嶺に帰ることになるな、ということだった。
だがヤエトに届く寸前、剣は勢いを失った。
襲撃者は腹を蹴られて床に這っていた。うめきながらも立ち上がり、今度は剣士めがけて突進したの

を、相手はひょいと躱した。
襲撃者の身体が一回転していたから、ただ躱したのではなく、腕を摑んで捻ったのだろうと思う。
回転して宙を飛んだ身体は御者席のすぐ左前あたりに落ちて行き、またしても、なにがあったか考えたくないような揺れが馬車を襲った。横転するかと案じたほどだ。
剣をふって血を飛ばすと、男は慣れた手付きで刃を拭い、鞘に納めた。ヤエトの前に跪き、にこりと笑みを見せる。
「ご無事でなにより」
ヤエトは唾を呑みこんで、暴れまわる心臓が早く落ち着いてくれないかと思いながら答えた。
「わたしは、皇妹殿下に招かれているのですか？」
皇妹の騎士団長は、肯定も否定もしなかった。
「暫し、おつきあいくださり」

3

丁重に、しかし有無をいわせず、ヤエトは目隠しをされた。召使いも同行するかと問われたので、彼はうなずいた——置いて行けば、始末されかねない——そこで、少女も目隠しをされることになった。
はじめは馬車に、次いで舟に乗せられた。櫓を使う音は聞こえたが、その場からまったく動いていなくても、ヤエトには判断がつかなかっただろう。
舟を降ろされて歩かされ、目隠しを取られたときには皇宮の中だった。
迷路のように入り組んだ建物のあいだにある中庭だ。昼ならば日射しが惜しみなく降りそそぐのだろうが、今はもう夜だ。月は地平の近くに出ているに違いない。空の下の方が、かなり明るい。
夜になると皇宮の門は鎖され、一切の出入りが禁じられてしまう。特別な出入口があるだろうとは思っていたが、まさか自分がそれを使うとは。
「……人生は発見の連続だ」

ヤエトがつぶやくと、皇妹の騎士はわずかに眉を上げたが、なにも答えなかった。老騎士はヤエトと召使いの少女を庭の奥へと進ませた。

夜香花の蔓が巻きついた柱が支える四阿（あずまや）が、闇の底に白く浮かび上がっていた。花は盛りを過ぎていたが、香りはあふれんばかりだ。腰ほどの高さにつくられた水盤からは水がつねにあふれ、その裾には小川ができていた。陶片を敷いた川底は、連続する幾何学文様をさざ波の下に眠らせている。

不思議、という言葉がヤエトの胸中に浮かびあがった。それは、魔法という言葉に変わって消えた。

「ここで待たれよ」

そう告げて、騎士は姿を消した。

逃走をはかっても無駄だろう、と思いながらヤエトは周囲を見回した。なにしろ道が入り組み過ぎている。外に出ることさえおぼつかない。

心細げな顔をしている少女と視線が合うと、顔が勝手に笑みをつくった。

「気を楽にしていなさい」

四阿に視線を戻すと、最初にこの建物を見たときに感じた印象が深まるのを覚えた——ここは人ならざる力と密接に結びついた場所だ。

陶片で描かれた文様のせいか、あるいは水場の雰囲気か。それとも、四阿に仕掛けがあるのか。

引きこまれるようにヤエトは四阿の中に入り、椅子に座った。夜風を感じると背筋がぞくぞくする。発熱しかけているのかもしれない。

——妥当な展開といったところだな。

もとより丈夫な身体ではない上に、病み上がりだったのだ。それで日に二回も過去を視た上、さっきの逃走劇である。気疲れもそうだが、馬車の揺れは体力をひどく消耗させるのだ。

倒れている場合ではないから保っているだけで、とうに限界は超えているだろう。

それでも、とヤエトは苦々しく思った。

——それでも、自分しかいない。

そして自分にできることといえば、過去を視ることくらいなのだ。

最近、過去は容易に彼を訪れ、必要な場面を拾い上げている。沙漠の西にいた頃には、こんなことはなかった。なにかが変わったのだとしか思えない。

無意識に握りしめた手の内に、ひやりとした手触りを感じて視線を落とした。

――わかるかね、帝国のお人。

厩舎長（きゅうしゃちょう）の声と、厩舎の前のあの音――鳥たちが啼きかわす声や羽撃きの音、独特の匂い、それに北嶺の乾いた風を思いだした。

――これを持っていれば、かならず帰れる。

シロバの羽根を結んだ小さなお守りを握り直し、ヤエトは眼を閉じた。

予言が真実かどうかはともかく、恩寵の力が増しているのは間違いない。ならば、この小さな呪物にも実効があるはずだ。

――かならず帰れる。

帰ろう、とヤエトは自分に誓った。そして、帰ろうと思える自分におどろいた。

大袈裟だな、と苦笑が漏れた。

彼の任地は北嶺郡で、上官はその郡太守だ。だから、北嶺に帰る。それだけのことだ。

そして今、彼にできそうなことは、ただひとつ。呪師のわざに対抗する手段をみつけることだ。

――やってみるか。

恩寵の力が強まっていて、無意識にでもあれだけの幻視を得られるなら、意識して探せばどうなる。必要な情報を得られない方がおかしい。

自分を信じ、恩寵の力を信じるべきではないか。

皇宮が建つのは、覇王が都したラングールの城趾（じょうし）だ。呪師に関する情報は眠っているはず。

眼を閉じ、彼は念じた。呪師のわざ、名を支配する術をとく方法を知るために、過去を覗きたい。

念じる内に意識が平坦に、より単純に変化する。

――名前。

気がつくと、その言葉に集中していた。
——名前だ。
かすかな耳鳴りがして、景色がざわりと動く。
不意に恐怖が押し寄せたが、ヤエトはそれをねじ伏せた。心臓が激しく自己主張をはじめ、胸が刺すように痛んだ。だが、ヤエトはそれも圧殺した。視なければならない。
——名前の魔法を。
眼を開く。あたりは静まり返っていた。庭はすっかり様変わりをしている。四阿はなく、緑も少ない。泉盤はあったが、水はあふれていなかった。しなびた葉が弱々しく地面に垂れている。すっかり枯れて黄色くなった花房は、手入れをする者もなく、かさかさと風に揺れていた。
見捨てられた庭から視線を上方に転じると。
——浮いている？
じっと視線を凝らしても、はっきりしない。だが、半透明のその影は、やはり人の姿をしている。
ゆっくりと、影は降りて来た。次第に輪郭がはっきりとして、地に足が着いたときにはすっかり人の姿だった——しかし、向こう側が透けて見えるのは相変わらずだ。
枯れ草のあいだに降り立ち、人影はあたりを見回した。どこかで見たような顔の南方人だ。手には、三日月に似た形の楽器を抱いている。
——あのときの……？
城から戻って、ばったり倒れたときの幻視に登場した男だ。予言めいたことをいってかき消えた。同一人物だとしたら、かなり古い幻だ。
空を見上げ、男はつぶやいた。
「風が止まってしまった」
枯れ葉がふれあうほどの、かすかなささやき。
男は楽器を落とし、地面に手をついた。楽器がたてた耳障りな音に、男の声がかさなる。
「罠だと知りながら、行くしかないとは。彼が聞いたら笑うだろうな」

吐息をひとつ。

「もしも、彼の名が歪められているのであれば、呼んでやらねばならない。耳もとで呼び、返事をさせねばならない。この世で彼の名を知る者は、ほかにいないのだから……。まして、彼がみずから名告った者など」

男は人ではない——もはや実体をもって存在することがかなわないのではと思われるほど稀薄な、異質な、なにかだった。

実際、彼の輪郭は揺れ、ほどけはじめていた。声だけが以前にも増してやわらかく、強く響く。

「わたしの名が歪められたら、そのときはハルウィオン、おまえが正しい名を奏でておくれ。時至るまで、その姿を隠しているのだ。わたしの分身であり、半身である者よ……」

そっと撫でると、楽器はその姿を消した。

さあ、と男は視線を遠くへ向けた。

「北へ行こう」

ささやきと同時に、男は消えた。まるで風にほどけるように。

その場には、喪失感だけが残った。

「眠ってしまったの、尚書官？」

ヤエトは眼をしばたたいた。

たちまち、幻視の風景は拭い去られた。

四阿に並べられた椅子に座っているのは、今や彼ひとりではなかった。

いつものように白一色の装いで、皇妹が彼をみつめていた。こちらに向けられた眼の紫のあざやかさ。吸いこまれてしまいそうだ。

「起きていて？」

ヤエトは椅子から転がり落ちると、地面に膝をついて頭を垂れた。そして、予想したほどには自分が消耗していないことを、いぶかしく思った。

何日も寝込むほどの時の彼方を覗きこんだものと覚悟していたのに。

「顔をお上げ。面倒な挨拶は必要ないわ、ここには

誰もいないから……あら、いたわね」
皇妹の視線が、背後に立つ少女の上にとまった。
「あちらで待っていなさい。大丈夫だ」
ヤエトが中庭の端を示すと、少女は小走りでそちらへ向かった。
ほぼ無意識にふたたび頭を垂れると、皇妹がうんざりしたように告げた。
「お立ち」
ヤエトが従うと、皇妹は彼を見上げて告げた。
「命ずるだけなら顔を見る必要も覚える必要もないけれど、今は違う。わたしはね、そなたと話しに来たの。そんなに警戒しなくてもいいわ。助けてやろうというのだから」
――助ける？
ヤエトは大きく息を吸った。
「直言を――」
「許します。でも、今は話しているのはわたし。そなたにとって聞く価値があることを話すのだから、おとなしく聞いていなさい。よくって？」
「御意」
「それでいいわ。まず、そなたと行動を共にしていた伝達官が、死んだということを教えておきたいの。……知っているようだけれど」
ヤエトは答えず、無言を通した。
皇妹は彼をまっすぐに見上げている。今夜の彼女は竜気をしっかりと抑えこんでいるようだった。
そこに力があるのはわかる。相変わらず、とてつもない力だ。だが、かつてないほど完全に制御されていて、間近に立ってもヤエトを刺激することはない。容器に入れて封をほどこしたかのようだ。
待っても彼が答えないと悟ったのか、皇妹は不意に彼の手をとった。
「これは知っているかしら？　陛下が皇女のところに遣った伝達官と、うまく連絡がとれなくなっているの……ああ、知らなかったようね。そうね？」
皇妹はヤエトの手をはなすと、自分の手をためつ

すがめつしながら言葉をつづけた。
「まったく連絡がとれないわけではないの。伝達官だけではなくてね、わたしがあの子に連絡をとろうとしても、同じようにおかしい。声は届くし心は繋がるけれど、なにかが変なの。陛下にも申し上げたわ。でも、気のせいだとおっしゃって……」
吐息を漏らして、皇妹は指輪をくるくると回しはじめた。なんの抵抗もなく回る指輪を見て、痩せたのだろうか、とヤエトは思った。
指輪は銀で、小粒の水晶がついている。皇妹の指を飾るにしては質素なものだが、飽かずに回しながら彼女は言葉をつづけた。
「皇子たちが揃いも揃って喧嘩に夢中だから、お忙しいのね。それで……そなたはなにか知っているのかしら？　あの子やあの子のところにいる伝達官と、うまく連絡がとれなくなった理由。それとも、あの伝達官が死んだ理由でもいいわ」
「存じません」
無節操に話題が飛んでいくように見えて、実は皇妹は会話を制御している、とヤエトは感じていた。突飛な質問や話題の転換で、相手を試すのだ。
こちらから与える情報は少ないほどよい。伝達官が殺された理由を知っていればともかく、知らずに憶測を口にするのは避けねばならない。
「用心深いのね」
そうありたいと思いつつ、問いが口をついて出た。
「おかしいとは、どのようにおかしいのですか」
「そうね……たとえば、ジェイサルドと話しているつもりで、そなたに返事をされるような。偽者というのは、あり得ないことなのだけど。でも、今の姪に内緒話を聞かせる気にはなれないわ。わかる？」
「……はい」
呪師が狙っていると、皇妹を通して皇女に伝えるのは、諦めねばならないということだ。
皇妹は、彼女の騎士であるジェイサルドとともに庭の隅で待っている少女の方を見遣った。

「あの娘は？」
「三の君にお借りしている召使いです」
「そなたに貸し与えたの？　あの子のやりかたは、知っているわ。愚劣で、情けないこと」
「……あの者がなにか？」
　少女にも聞こえるような声で、皇妹は宣言した。
「伝達官になる才があるわよ」
　皇妹は立ち上がり、優雅な身ごなしでヤエトの横をすり抜けると、少女の前に膝をついた。
　少女はおどろいて後ずさったが、その背はすぐに壁にぶつかってしまった。
「誤解しては駄目。わたしは敵じゃないわ、味方よ。そなたを助けてあげようとしているの」
　少女はヤエトに託された角灯の環を握りしめている。その手に、皇妹が白い手をかさねた。
「わからなくて？　男たちに殴られたり、望まずに足を開かされたりしなくてもよい未来を選ばせてあげる、といっているのよ」
　ヤエトは唖然とした。およそ皇妹の口から発されるとは思えない言葉だったからだ。
「そんな荷物も、もう持たなくていいわ」
「……お預かりしたものですから」
「それが、そなたのお守りなの？　でもね、そなたを守ることができるのはそなただけ。わたしと来れば、その方法を教えてあげるわ」
　少女はヤエトを見、そして皇妹を見た。
「旦那様を裏切ることには、なりませんか」
「そなたのあるじは誰？　そこに立っている尚書官かしら、それとも雇い主の皇子？」
「……わたしを殴ったり、無理に足を開かせたりしないかたです」
　皇妹は笑った。ちらりと見られて、ヤエトは顔が熱くなった。恥じることはないはずなのに。
「すてきな旦那様ね。このまま、お仕えしたい？」
　少女は俯いた。なにか答えたのかもしれないが、ヤエトのところまでは声が届かない。

聞こえるのは、皇妹の声だけだ。

「でも駄目よ。自分のあるじは自分自身だといえるようにならなければ。そうなってから、それでも仕えたい相手がみつかったら好きになさい。そうよ、そうなれるの。望むならわたしが教えてあげる——人の判断を仰いでは駄目よ。そなたが決めるの、自分の人生ですもの。そこから、はじまるのよ」

少女が黙っていると、皇妹はその小さな手をとり、そっと角灯から引き剝がした。

今度は、少女は抵抗しなかった。

「戦いたいなら、わたしはそなたの味方よ。でも、戦わないというなら、手助けはできない。どう、戦う？　わたしと来る？」

「……はい」

「辛かったわね、今まで。これからも辛くないとはいわないわ。でも、そなたは知ったのよ。自分で選ぶことができる。これは、とてもたいせつなこと」

ゆっくりと、皇妹はその腕を少女の身体にまわし、抱き寄せた。少女の頬を涙がころがり落ちる。

わかった？　と皇妹は少女の耳にささやいた。

「この先わたしがそなたに与えるものも、気に入らなければ突き返せるの。実際にそうできなくても、そう考えることができる。それが、大事なの」

皇妹は身を離し、少し距離を置いて少女を眺めた。それから立ち上がり、やさしく告げた。

「もう少し、お待ちなさい。旦那様のことも心配しなくていいわ。わたしが助けてあげる」

くるりと向き直ると、皇妹は挑むように尋ねた。

「どう、わたしは好意的ではなくて？　そなたもそろそろ笑顔くらい見せてもかまわないと思うのよ」

「不調法者で、申しわけありません」

四阿に戻って来ると、皇妹はまた椅子に腰を下ろし、ヤエトにも座るように顎で示した。同じ高さの椅子に座れる身分ではなかったが、疲れていたので、ありがたく腰掛けた。

「そなたがあの娘のことを気にかけているようだか

ら、助けることにしたのよ。……もっと多くの不幸な娘たちを救えたらと思うけれど、難しくて。わたしのこの身はひとつだし、手は二本しかないのが、もどかしいわ」

伝達官にというのは微妙なところだ。

だが、少女を同行させるわけにもいかないし、預けられる知人もいない。受け入れるしかなかった。

「あの者も、殿下に深く感謝するでしょう」

「馬鹿ね、そなたの感謝を得たくてやっているのだと、説明してあげたでしょう?」

声を低めながら、皇妹は顔を寄せて来た。反射的に身を引くと、皇妹は笑った。

「失礼な男ね」

「申しわけありません」

「そなたに迫っているわけではないのよ。内緒の話がしたいだけ。……ルーギンに聞いたわ」

今、この場で持ち出されるとは思っていなかった名だ。皇妹はヤエトの眼をみつめて、告げた。

「わたしたちは、そなたに借りがあるそうね」

「いえ、そのようなことは」

「否定しても無駄よ。わたしは彼を信じているの。その彼が、わたしたちはそなたに借りがあると教えてくれたわ。だから、借りはあるのよ」

低い声は甘く、長い睫毛の下からみつめられると、ヤエトの心臓の鼓動は高まった——おもに竜気のせいだが、それだけではないと認めざるを得ない。

「借りがあるとルーギン殿がお考えになっていたことは、存じております。ですが、わたしはなにも」

「そなたがどう思っているかなど、関係ないわ。わたしはルーギンの判断を信じるだけ。今、そなたにはわたしの助けが必要よ。伝達官が消えたから」

「伝達官殿の消息は……どうしてご存じなのです」

皇妹は肩をすくめた。

「わたしはすべての伝達官と心を繋ぐことができるのよ? かれらの死もわかるわ。姪にも伝わっているでしょう……伝わらなければよいと思うけれど。

伝達官の死はつらいものよ、いつだって」
あらためて皇妹の口から告げられることで、伝達官の死は揺るぎない事実として彼の心に届いた。
幻視を信じたくない気もちが、心のどこかに残っていたようだ。神の恩寵とは無慈悲な真実であることくらい、とうに心得ているはずなのに。
「伝達官殿が亡くなられたから、わたしの身に危険が迫っていると思われたのですか？」
「そうよ。そこへミアーシャから連絡があって、猶予がないと知ったの」
「ミアーシャというのは……どなたでしょう？」
「エイギルの妻、といえばよくて？　自分の力では門をこじ開けることができない、と報せて来たわ。でも、わたしだって皇子の門を開く魔法の杖は持っていないのよ。だから伝達官を使ったの」
「皇妹殿下であれば、開かない門はないでしょう」
馬鹿ね、と皇妹は笑った。
「あの子に宣戦布告しろというの？　敵になる気もないのに。ところで、もう教えてくれるかしら。そなたはなぜ知っているの、伝達官が死んだことを」
「かならず、毎日連絡をするという約束がありました。それが途絶えた以上、なにかあったと……」
「わたしに教えられることは、それだけ？」
少し迷ったが、皇女に害を与えることにはなるまいと踏んで、ヤエトは懸念を明かした。
「皇女殿下は、呪師に術をかけられておいでです」
「どうしてそう思うの？」
「以前、お寝みになるときに、誰かに呼ばれている気がして気味が悪いとおっしゃっておいででした。そのときは、ただの夢かと……ですが……」
ああ、と皇妹は小さく息を吐いた。
「呪師ね。そう、やっているのは呪師でしょうね」
その口ぶりから、ヤエトはどうしてもあの古い幻視を想起せざるを得なかった。刺客の名は不要、首謀者を教えよと、皇妹もいうだろうか。
だが、彼女は顔をしかめてつぶやいた。

「嫌な話ね。あの子の名を知る者は、ほんとうに限られるの。甥たちだって、全員は知らないわ」
「どなたがご存じなのでしょうか」
「犯人探し？　そなたに、なにができるの？」
皇帝と皇妹、それに皇子。いずれにせよ、ヤエトがどうこうできる相手ではない。
「それでは、殿下がどうにかしてくださいますか」
「わたしが？　わたしはこの皇宮では存在しないも同然の影のようなものよ。どうにもできないわ」
思いがけない返答に、ヤエトはまじまじと相手の顔を見てしまった。
「おたわむれを」
「わたしは自由に動けるけれど、公的な権力の持ち合わせはないわ。陛下にお願いしなければ、なにもできないの。皇家の女なんて、そんなものよ」
「しかし、殿下ほど神の恩寵を――」
「わたしには、人に強制する力はないのよ。皆の好意にすがり、お願いをきいてもらえることを期待するだけ。それが、宮廷におけるわたしの立場よ」
皇妹はじっとヤエトを見た。
視線を逸らすわけにもいかず、彼はその眼を見返した。そして、なるほどと思った。
――皇女に期待しておられるのだろう。
だから皇女が太守になるために口添えし、同じ口で姪が女になったと暴く。
皇妹にとって、皇女は愛しくて憎い、分身のような存在に違いない。希望と嫉妬の糸は複雑に絡み、容易にはほどくこともできるまい。
「そなたは、なにを知っているの？」
「……申し上げられることは、もうなにも」
「そう？　そなたには秘密がたくさんありそうね」
「ひとつ、お願いしたいことが」
「なにかしら」
「皇帝陛下に奏上し、太守に術をかけている呪師を探し出し、やめさせることは――」
「無理よ」

皇妹は叩きつけるように彼の言葉を遮った。それから、声を低めて早口にささやいた。
「わからなくて？　このわたしが、あの子と心を繋ぐことができないのよ？　術はもう完成してしまったの。相手は周到に計画を立て、実行した。ことが起きてから気づいたのでは、遅過ぎるわ」
「手後れだと、おっしゃるのですか」
「そうよ」
「では、お諦めになるのですか」
少し間を置いて、皇妹は答えた。花がほころぶようにやわらかな笑みと、祈るような口調で。
「でも、そなたは諦めないわ。そうでしょう？」
ほとんど無意識に、ヤエトは腰から下げたお守りを握りしめていた。
――もしも、彼の名が歪められているのであれば、呼んでやらねばならない。
呪師のわざで名が歪められてしまい、竜種に与えられた恩寵の力さえ及ばなくても――耳もとで正しい名を呼ぶことで、術がとける可能性があるなら。行かねばならない。皇女の名を知る者として。
――やはり、こうなった。
名を教えられたときに、嫌な予感がしたのだ。身に過ぎた秘密だ、背負うには重過ぎると。
「微力を尽くしてからでも、諦めるには遅くないと」
皇妹は眼をほそめて彼を眺めていたが、やがて小さく息を吐いた。
「ジェイサルドに供をさせるわ。引退したいと申し出ていたのを皆が知っているから、姿を消してもあやしまれない。これは値段のつかない贈り物よ」
どう、といわんばかりに眉を上げる。
「助かります」
「これで借りを返したことになればよいのだけど。ルーギンに叱られてしまうもの」
「……叱られるのですか？」
「そう。わたしを叱ったりするのは、彼だけよ」
「勇者ですね」

皇妹は立ち上がり、ヤエトを見下ろした。
「彼がいうには、そなたもかなりの勇者だそうね。たしかに、そうかもしれない。おのれの命のことなど、案じていないように見えるもの」
「いつ死んでもおかしくない身ですので。それより、呪師のわざを破る方法について、ご存じのことがあれば、お教え願えませんか」
「わたしは詳しくないの。ジェイサルドにお聞き」
「もうひとつ。恩寵の力が以前より増したと、お感じになられませんか？　ことに最近」
皇妹の表情は動かない。ひと呼吸置いてから、首筋にかかる髪をかき上げて、告げた。
「もう行くわ。ジェイサルド、たのむわね」
「御意」
殿下、とヤエトは声をあげた。皇妹は鬱陶しげに視線を戻し、無言でつづきをうながした。
「ご尽力に心から感謝いたします。……殿下は誰よりも、人を動かす力をお持ちでいらっしゃいます。国が認める大権とは別の次元で、殿下はお強い」
「お黙り。そんな戯言、聞きたくもない」
膝をつくヤエトを見返りもせず、皇妹はその場を立ち去った。顔を上げたときにはもう、皇妹はもちろん、召使いの少女の姿もない。老将軍だけが、角灯を手に佇立していた。
ヤエトが歩み寄ると、彼は表情をやわらげた。
「……さて、どちらへお供つかまつりましょうか」
「北嶺へ。太守にお会いせねばなりません」
ジェイサルドはうなずいた。無理だと否定はしないんだな、と感心した直後、老将は現実的かつ単純な問いをはなった。
「いかにして、ですかな？」

4

街道の原形は、帝国が興る以前からあった。
割れた石を取り除いて新しい石を埋め、路面を整

備して道幅を広げ、帝国はその再生工事を進めた。一定距離ごとに駅を置き、駅逓制(えきていせい)をととのえた。

民間の流通も街道に依存する。駅には貸し馬や代書、護衛から、飲食や宿泊、娯楽施設までととのっているが、すべてに不当な上納金が上乗せされる。うっかりすると、通行しただけでも金を取られる。

ヤエトは公用でしか旅した経験がないから、むしられたこともないが、街道の不正は知っている。

「替え馬を得られる符があります。駅逓を使えば、北嶺の麓までは十日とかからぬはずです」

ジェイサルドの提案を、ヤエトはしりぞけた。

駅逓制を使えば、都に筒抜けだ。皇家の恩寵は馬より速く伝わる。先回りされるに違いない。

なにより、その案には無視できない問題がある。

「わたしの体力が、保ちません」

馬は交替できても、乗り手は無理だ。皇女の名を不安なく明かせる人物など、ひとりもいない。

困ったことだ、と思う。どうして自分なのか。もっと心身の強い人間と役割を交替したい。

「では、どうなさいます」

「裏道が、あると思うのです」

なにを求めているかを説明すると、ジェイサルドはうなずいた。

「部下に探させます。今宵(こよい)はお休みくだされ」

案内されたのは、豪勢なつづき部屋だった。考えることが多くて眠れないのではないかと思ったが、疲労の方が勝っていたようだ。夢もみなかった。

目覚めるとすぐ、ジェイサルドがあらわれた。

「定宿がわかりましたぞ。部下を遣ってあります」

「助かります」

皇妹なら、そなたを助けるためにやっているのだから、助かったと思ってくれねば困るわ、とでもいうところだ。だが、ジェイサルドは洗濯の済んだ官服を差し出しただけだった。

「お召し物を」

「貴殿はわたしの召使いというわけではないのです

し、そこまで世話を焼いてくださらなくても……」
「息をするのと喋るのと考えるの以外は、お引き受けするようにと命じられております」
ジェイサルドは、にやりと笑った。冗談のつもりらしい。しかたなくヤエトも笑顔を返した。
「ありがたいことです」
ヤエトが着替えているあいだに、ジェイサルドは器用に寝台をととのえた。おそるべき早業だ。
帯を締めながら、ヤエトは断言した。
「隠居後は、宿屋を経営なさるべきです」
「隠居なのに、まだ働けと？　宿屋の親父というのは悪くない考えですがな。飲み放題だ」
ジェイサルドは続き部屋の方へ姿を消した。
ヤエトは枕許にあった角灯を取り上げ、少し思案した。置いて行くには忍びない。
悩んでいると、ジェイサルドが戻って来た。
「北嶺でお使いだった品ですな？」
「よくご記憶ですね」
「ここまでよい硝子は、昨今ではなかなか……アラムヤラムの職人の仕事ですかな」
「アラムヤラムの品かどうかはわかりません。沙漠の西では、そう珍しいものでもなかったので……」
「儂の目利きは確かです。さ、朝食を」
ヤエトは卓上に並べられた朝食を眺めた。なんとなく、試練の時を迎えているような気がする。
「ジェイサルド殿は、お食べにならないのですか」
「儂は、もう済ませました。まず、粥でもどうぞ」
緑の葉を散らした粥は、湯気がたっている。この葉はなんだ、変な味がしないだろうなと疑いながら木の匙ですくう。いかにも熱そうだ。
「食べながら、お聞きくだされ。まずひとつ。三の君から皇帝陛下への使者が参っております。じきにお目通りもかなうはず。用件は、昨夜、三の君のもとから連れ去られた尚書官をお返し願いたい、と。つまり貴殿を探しに来たわけですな」
意外さに、ヤエトは匙を吹く息をとめた。

なにも門前で待たずとも、伝達官を通じて皇帝に問い合わせればよいのに。
「どういうことでしょう？」
「伝達官が、うまく機能しなくなっているのです」
とんでもないことを、さらりと告げられた。
「竜種同士で話ができるほどの修練を積んでおいでなのは、皇妹殿下のみ。帝国にとっては、いささか深刻な事態と申せましょうな」
「……あまり深刻そうに聞こえませんが」
「儂は隠居ですからな」
淡々と、そんなことまでいってのけた。ついでに、匙から粥がこぼれますぞとヤエトの世話を焼く。
あわてて口に入れてみると、粥自体はともかく、散らされた葉には想像を絶する酸味と苦味があって、顔を歪めずにはおれなかった。
「それは、滋養強壮と疲労回復の効能がありましてな。残さずお召し上がりくだされ」
「……食べると死にそうです」
「気のせいですな。さて、次です。皇妹殿下は昨夜の下位伝達官を同伴して、お出かけになりました。よって、我々は皇妹殿下に連絡することはできない状況です。口直しに水は、やめた方が」
遅かった。苦味が強調され、舌がよじれそうだ。
「……どうすればいいですか」
「そちらの蒸しものを」
緑の葉でくるんだ正体不明のものを示された。
「中はなんです？」
「身体の芯をあたため、病毒を外に出す効果があります。葉っぱごと、がぶりと参りましょうか」
今度の葉は甘かった。中身も甘い。いや、辛い。しかも、辛みが後から増してくる。汗がどっと吹きだし、ヤエトは咳込んだ。
「水は飲まない方が？」
「無論。それを粥と交互にどうぞ」
もう死ぬ、と思いながらヤエトはいわれた通りにした。きちんと食べないと、力ずくで口の中に押し

こまれそうな気がしたからだ。
「昨晩の召使いは、エイギル殿の奥方にお預かりいただきました。くだんの娘から、ご無事を祈っております、くれぐれもよろしく、と」
なんとなく意味ありげな顔をされたが、ヤエトはそこをさらりと流し、興味がある方に話を向けた。
「エイギル殿の奥方とは、面識がおありですか？」
「はい」
「美人ですか？」
「儂も、若い頃は胸をときめかせたものでした」
どうやら、ちぎって投げるほど競争相手がいたという話は、エイギルの大法螺ではないようだ。
「以前からのお知り合いなのですか」
「左様。《黒狼公》閣下の、末のお妹君でいらっしゃいましたので」
もう少しで、ぽかんと開いた口から粥をこぼすところだった。それがほんとうなら、家柄だけでも求婚者が雲霞のごとく押し寄せるはずだ。
「よくエイギル殿と……」
「押しても駄目なら押しまくれという、凄まじい口説きっぷりで。ミアーシャ様が根負けなさいました。……そういえば、ミアーシャ様もお尋ねでした」
「なにをです？」
「皇女殿下の副官殿は、いい男なのかと」
匙から粥が吹き飛んだ。冷ますために適切な息の三倍くらいの勢いで吹いてしまったからだ。
「……失礼しました」
「なにしろ、お預かりした娘がすっかり尚書官殿に心酔しておりましたし。皇女殿下も、尚書官殿に夢中なのではと噂になっておりますからな。実際、儂から見ましても、尚書官殿と話しておいでのときの皇女殿下は、いつにも増しておかわいらしく」
ジェイサルドが夢見がちに語るのは、皇女が珍しく着飾っていたときのことだろう。男装よりかわいくて当たり前だ。手を引かれ、噂になりかねないと案じた覚えがあるが、杞憂ではなかったのだ。

だから、ダハールが皇女と同じ年頃の娘を召使いにつけたりするのだ。参った。
「……勘弁してください。畏れ多い喩えですが、わたしの娘であられてもおかしくないお年頃ですよ」
今度はジェイサルドがおどろいたようだった。
「失礼ですが尚書官殿、お歳は？」
「三十六です」
「それはそれは」
若く見えるのも考えものだ。
「十かそこら、若く見えるらしいですがね」
「左様。追手がかかっても、三十六歳の尚書官という触れ書きなら、ごまかせますな」
ジェイサルドは真顔である。
つきあいきれないと思いながら、ヤエトは匙の上に残っていた粥をすすり、顔をしかめた。冷めると苦味がきつい。毒と薬は表裏一体というが、この野菜は少なくとも味の上では毒で決まりだ。
「楽しい余談はここまでとしましょう」
楽しくありませんよ、とつっこみたい気分でいっぱいだったが、ヤエトはおとなしくうなずいた。
「本題に戻ってください」
「ミアーシャ様から、貴殿にお話しした方がよかろうという噂をいくつか伺っております。皇妹殿下の高貴なお耳には入らない話も、いくつかあるそうで。まずは、お助けに行くのが遅れたこと、お詫び申し上げてくださいとのお言葉でした」
ジェイサルドは身を乗り出し、ヤエトの汗を拭いた。世話を焼き過ぎだと思う。
「それが気になるのですが……なぜ、ミアーシャ様はわたしを救わねばならないと思われたのです」
「伝達官殿が土産を渡しに行かれましたな。そのとき、貴殿が軟禁状態にあるとお知りになり、あやういと思われたそうです。人質なのではないか、と」
「なんのための人質でしょう」
「そこまでは。ですが、兄君が妹君から人質をとろうとなさる、その発想自体が危険の先触れであると

お考えだったのでしょうな。慧眼です」

なるほど、と納得せざるを得ない。

似たようなことはヤエトもちらりと考えたが、計算をあやまった。人質としての価値を読み間違えたのだ。皇女と噂になっているとは知らなかった。

「また来ますと約束なさったのに、伝達官殿がおいでにならなかった。そこで即座に行動を起こされたのです。お助けするのが間に合ったのは、ミアーシャ様に拠るところが大きい。主家の姫君だから申すわけではありませんが、聡いかたです」

蒸し物を飲みこみながら、ヤエトは考えていた。

皇妹は、呪師のわざはすでに完成しているという。だが、それならヤエトに人質としての価値はない。

やはり、呪いはまだ完全ではないのではないか。

「伝達官殿をお救いするのは間に合わなかったと、ミアーシャ様は悔いておいでした」

「それを申せば、わたしなど……同じ邸の中にいながら、なにもできなかったのですから」

「伝達官殿は、三の君の邸内で亡くなられたのですかな？」

ジェイサルドの問いは静かだったが、静か過ぎて逆に危険を感じた。

「そうなのですか？」

質問に質問で返すのも、あまり機転がきいているとはいえないが、とっさに、それしかできなかった。首を左右にふり、さあ、と曖昧に答えたジェイサルドから視線をはずし、ヤエトは粥をすくった。

肝に銘じておかねばならない。

――完全には信用できない。

ジェイサルドは皇女のために動いているわけではない。それを、つねに意識に留めておくべきだ。

「亡くなったということだけですな、確実なのは。事情が明らかになる日が来るのかどうか……。話を戻しますぞ。立太子には、陛下は気乗り薄でおられる。いずれかの皇子の支持者が無理に進めようにも、ほかの派閥から横槍が入り、うやむやになる始末。

派閥間の争いは今や隠しようもないほどで、この夏だけでも暗殺の噂が百ほど駆け巡りました」
「剣呑ですね」
皇女のもとにも、刺客ははなたれた。あれはこの夏の流行だったのか、とヤエトは考えた。
ルーギンとは、示威行動だったのだろうという合意に至った。脅しをかけるのが目的だったのだ。いつでも殺せますよ、と。
都の情勢がジェイサルドに聞かされた通りのものなら、その推測が当たっていたということだろう。
「三の君の派閥というものは、とくに見えてこぬのですが、それが却って無気味でしてな。同腹の妹君が、皇帝陛下のご寵愛ひとかたならぬことが強みといわれていたのに、その皇女殿下が陛下のご勘気をこうむられても、やはり動きがない」
え、と思わず声が出た。
「ご勘気……ですか？」
「左様。これも噂に過ぎませんが……年があらたまった頃より、陛下は皇女殿下に姫らしくせよとおっしゃるようになり、殿下はそれを拒まれたのです。どうしても従えぬなら、顔も見えぬところへやってしまえ、一年も苦労すればおとなしくなる……と。無論、殿下は領地をお望みではありましたが、まさかあれほどの辺地にと、皆々驚愕した次第」
ヤエトは唖然とした。
噂が真実なら、皇帝は愛娘のわがままを聞き入れたのではない。お仕置きだ。年が明ければ呼び戻されると皇女がいっていたのは、このことだろう。
皇女は絶望していたのだ。ヤエトが想像したよりも、ずっと深く。
「しかし、三の君はとりなしもなさらず、貴族とも結ばず……表向きは、無気味なほど動きがない」
そして、裏では呪師を使っている。
「……三の君は、貴族の力を借りようとは思っておられないのかもしれませんね」
ジェイサルドは眉を上げ、唸るように答えた。

「しかし、それでは皇帝位に就くことは無理だ」
「土着の民をお使いになるのではないでしょうか。今の支配者への不満を認め、同情を寄せ、叛逆を煽る。戦わせて援助し、最終的には支配権を奪ってしまう――帝国のお家芸です」
　今も南部の土豪を潰し、東部の海賊領主を叩いているように。もともとの支配者を土地から除くのが、帝国は非常にたくみだ。
「それを、血族相手にですか？」
「憶測に過ぎませんが」
　ヤエトはなんとか粥を食べきって、皮を剝いてある果物に手をのばした。水を飲むよりはましだろうと思ったのだが、その期待は裏切られた。
「酸っぱいですか」
「……」
　ものもいえない。ジェイサルドが宿屋の親父になったとして、こんな朝食ばかり出していたら、絶対に流行らないと思う。
「もうひとつ。これも噂ですが……貴殿のお話を伺って、得心しました。三の君の邸には、赤毛の男たちが出入りしているとか。ご存じでしたか？　北嶺よりさらに北から来ているそうです」
　食べ物とは関係のない苦味を、口中に感じた。
　北の蛮族の戦闘力は、高まっているはずだ。
　たとえば、名前の魔法が以前とは比較にならない拘束力を発揮しているように――ヤエト自身、わずかな労力ではっきりと過去を幻視できるように。
　たしか、かれらは天候を左右し、落雷を招くと聞いた。それが自在にできるなら、脅威である。
　見返りはもちろん、北嶺だろう。
　春先には皇女が都に戻されるなら、この冬が勝負だ。ただの殺しではない、とダハールは念を押していた。皇女を襲うのは、死よりも暗い運命だ。
「北嶺へ、急を知らせないと」
「ミアーシャ様がお預かりになった書状は、すでに騎士に託して北嶺へ送ったとのことです」

「ありがたいことです」
反射的に答えたが、あれでは駄目だ。あれではたりない。情報も、なにもかも。
ジェイサルドが嘘をいっているならよい。ヤエトを騙すために、口からでまかせを並べたなら。
だが、老騎士の言葉がでたらめでも、祭りのときに、北方人の血が混ざっているという商人を見たのは間違いない。《青鉄》の一件もある。
手がかりは見えていたのだ。
「定宿がみつかったと、おっしゃいましたね」
「左様」
「連れて行ってください」
ヤエトが食べた量を目で量るように卓上を一瞥してから、ジェイサルドは立ち上がった。
「参りましょう」
ヤエトはふたたび、目隠しをされた。
「申しわけありません。ご不安でしょう」
「貴殿に案内していただく方が、自分の目で見て歩くより、ずっと安心できるくらいです」
笑った気配がした後は、目隠しをとるまで、ジェイサルドは誘導のために必要なことしか話さなかった。目隠しをほどかれたのは、舟上でのことだ。
「このまま、商業街区へ参ります」
まともにものが見えず、ヤエトは眼をしばたたいた。白くとんだ視界に浮かぶ石の壁を眺めながら、こんなものあったかなと考えて、気がついた。
――まずい。
過去を視ている。あわてて眼を閉じ、意識を幻視の光景からもぎ離した。
昔はあのあたりに壁があったのだろう。
「お加減でも？」
「明るさに眼が慣れず、目眩がしただけです」
大丈夫ですと答えて居住まいを正し、顔を上げた。
暴走しがちな恩寵の力を制御する方法がわかればよいのだが――それより、なんとなく気もちが悪いのだが、これが船酔いなのだろうか、とヤエトが悩

みはじめたところで、幸い、舟は桟橋に着いた。
足もとが揺れるのを克服する頃には、河は見えなくなっていた。とにかく壁が多く、見通しは悪い。
商業街区には、やはり低地の南方人が多い。次いで多いのが沙漠の民だが、どんな人種も少し歩けば見かけないということはないから、紛れやすい。
官服姿では違和感もあるだろうが、ジェイサルドに手抜かりはなく、ヤエトは官服の上から薄手の外套を羽織らされていた。
「あそこです」
ジェイサルドは、少し先の路地を示した。よく見れば酒場の所在を示す小旗がかかっていたが、古びて色褪せ、縁もすり切れている。
「中にいるようです」
ヤエトは路地の入口に向けていた視線を自分の連れの方に戻した。とくに部下と接触した様子もないのに、なぜわかるのだろう。
考えてもしかたがないと諦め、ヤエトは路地に向かった。正確には、建物の下をくぐる通路だ。奥には中庭がある。正面奥は厩で、半分ほどが馬車で埋まっていた。商人に人気の宿らしい。
左手の扉をくぐり、中に入った。今度は暗さに眼が慣れず、ヤエトは漠とした薄闇に眼を凝らした。
酒場兼宿屋の亭主らしい男が、微妙な距離をとって立っている。声をかけるか、かけられるかするのを待っているのだろう。
しかし、用があるのは亭主ではない。
「おお、尚書官殿！」
当の本人がヤエトをみつけてくれた。こっちこっちと酒場の隅から手をふっている。卓上には酒瓶が並び、朝から景気がよさそうだ。
ナグウィンは上機嫌で彼を見、次いで少し怖そうにジェイサルドを見上げた。
「お久しぶりです。そちらは……護衛官ですか？」
「商談をしたいのです。よい場所はありませんか」
「儲かりますか？」

「それは貴殿の判断次第ですよ」
ナグウィンは立ち上がると、硬貨を指で弾いて亭主の方に飛ばした。
「奥、借りるぞ」
亭主がうなずくのを見て、ナグウィンはふたりを建物の奥へと導いた。
またしても中庭だった。
建物が高く、中庭自体が狭いので、日射しはない。植物も日陰を好む羊歯や苔が目立ち、黒ずんだ泉盤から水がしたたるせいで、地面は湿っていた。
異様なのは、中庭を囲む壁に窓がないことだ。
「ここなら、立ち聞きはできません」
「なるほど……商談用ですか」
「元は塔だったらしいですよ。床も天井も抜け落ちた後、こんなになったそうで」
「窓のない塔か。牢獄かな」
ジェイサルドが漏らしたつぶやきに、ヤエトは顔を引きつらせたが、嫌悪を堪えて本題に入った。
「北嶺へ、連れて行ってほしいのです」
ナグウィンは、呆れ顔になった。
「春までお待ちなさい。峠はもう通れませんよ」
「待てないから、ここにいます。あなたなら、別の道をご存じのはずだ」
「ありませんよ、そんなもの」
「真冬の北嶺へ行ったはずではないですか」
「いや……参ったな。本気になさったんですか？」
「わたしはいつでも大真面目ですよ」
ヤエトを北嶺に送る旅の途上、ナグウィンは何度か、自分しか知らない抜け道を使って商売を成功させたという話を聞かせてくれた。話半分にしてもなにかあると踏み、この商人を探していたのだ。
「こうもおっしゃいましたね。途中の商売を諦めても四、五十日はかかると。どう計算しても、都と北嶺のあいだはそこまで離れていません」
「それは、うちの馬と馬車と、経路の問題で」
「それどころか、わたしを北嶺まで送ったあと、都

に引き返して仕入れをし、《夏入りの祭り》に姿を見せた。これは逆に、異常な速さです」

商人は頭を掻いた。

「都まで戻ったりしていませんよ」

「都で仕入れて来たと、おっしゃいました」

「嘘ですよ。景気のいいことを、いってみただけです。信じられるとは思わなかったな」

「引き受けてくだされば、功績を鑑みて通行料を割り引きます」

「……は？」

「南麓鎮で通行料を徴集する予定ですが、それを割り引きすると、そういっているのです」

北嶺から隣の郡に通じるまともな道は一本きり、しかも麓に騎士団の駐屯所を作ったばかりだ。

これで通行料を徴集しない方がおかしい。

「祭りのとき、商売敵が様子を見に来ているとおっしゃっていましたね。かれらとは違う特権を与えようと、提案しているのです」

「おかしな話ですよ、尚書官殿。抜け道を知っているなら、街道を通らなければ済むことでしょう」

「街道を通る方が楽に決まっています。馬車に荷物を山盛りにして通りたくはありませんか？」

「しかし……まだ決まってはいないのでしょう」

「わたしが太守に進言すれば、かならずかなえられます。そのように、お約束いただいております。畏れ多くも真上皇帝陛下から」

ナグウィンはゆっくりと眼を閉じ、そして開いた。じっとヤエトを見て答える。

「無理ですって」

「二度と北嶺で商売ができなくなるご覚悟がおありですか。新しい商い先や経路を開拓するのは難儀なのではないですか、失礼ながら、その年齢では」

「いや……ええ？　なんでそうなりますか」

「特産物の、市場価格を確認しました。どれだけ買い叩かれていたかを民に教えたら……大変そうだ」

実をいうとはったりだが、ナグウィンの表情から

すると、図星らしい。あれだけの距離を運ぶのだ、かなり上乗せしないと商売にならない。

「待ってください、わたしが売るときだって、かなり買い叩かれて――」

「仕入れ先の、沸点の低い男たちに殺されたくないでしょう？」

ヤエトがにっこり笑うと、商人は顔をしかめた。

「いいですか。冬の北嶺に行くのは、武装もせずに戦場へ行くのと同じですよ？　地元の奴らはあの寒さでも平気で動きまわりますがね、わたしらは保ちません。ましてや、失礼ながら尚書官殿ではね」

気もちはわかるし理屈も通っているし完全に同意するが、ここで引き下がるわけにはいかなかった。

「行かねばならないのです」

「春まで待てない理由でもおありなのですか？」

どこまで明かすかの覚悟はあったので、ヤエトは即答した。

「あります。太守のお命にかかわることで、余人にはまかせられません。どうしても、わたしが北嶺へ帰らねばならないのです」

商人は頭を掻いていた手で顔を撫で下ろし、うーんと唸った。

「今のは聞かなかったことにしますよ」

「看過すれば、北嶺は商いのできない状況になります。良心に誓って、これは真実です」

北方の人々は同族としか取り引きをしないと、教えてくれたのはナグウィンだ。北嶺の支配者が交替すれば、取り引きができる商人は非常に限られるだろう。そして、ナグウィンはその中に入らない。

「あなたの良心は、既に天秤に乗せられているはずでしょう。利権を条件に含めた時点でね」

「おっしゃる通りです」

商人はため息をつき、いやはや、とつぶやいた。

「考えさせてください」

「あまり長くは待てません」

静かになると、水音が耳に心地よかった。日陰だ

が、風は通らないので涼しくもない。
——牢獄か。
天井や床が抜けたのは、ずっと昔のことなのだろう。どの時代のことかと考えかけて、やめた。
恩寵の力は、あまりにも容易に発動するようになっている。へたに興味をもてば、過去に捕まる。
ただでさえ、体力の持ち合わせがないのだ。無駄に消耗してよい場合ではない。
ジェイサルドがすっと身体を寄せ、ささやいた。
「大丈夫ですか。お顔の色が……」
「あれだけしっかり食べさせていただいたのですから、今日は大丈夫です」
「今日は？」
ヤエトは大きく息を吐き、微笑んだ。
「できれば明日も、その次も」
口先だけの答えだ。自分の体力については、まともに考えるだけ時間の無駄だと諦めている。
その彼が、頑健な者すら二の足を踏む冬の北嶺に、生きて帰らねばならないとは。
——いざとなったら、誰かに皇女の名前を託すべきだろうか。
究極の選択だな、とヤエトは思った。
「抜け道が使えるとして、何日かかるのかを明言させるべきですな」
「そうですね」
いかにも後出しにしそうな情報だ。だからこそ、先にいわせろといっているのだろうが。
ヤエトはナグウィンの肩を叩いた。
「そろそろ決めてもらえませんか」
商人はもう考えをまとめていたらしく、すらすらと答えた。
「優遇措置が口約束で終わらない保証が必要です」
「わかりました。書面にしましょう」
それで相手が満足するなら安いものだ。
「それと、お連れできるのはおひとりです」
「ふたりにしてください」

ジェイサルド抜きでは、追手に対応できない。
「無理です」
「なぜですか？」
「秘密というのは、知られていないからこそ価値があるのですよ。それくらい、おわかりでしょう」
「そこまで含めて買い取らせてくれませんか」
ナグウィンはくるりと目を回して見せた。
「たしかに、北嶺で仕入れたものは、都では高い値がつきますよ。ただ、需要はそれほどじゃない。将来性を考えても、そう儲からないですね」
「現太守は英明なかたでいらっしゃる。竜種の特権で、中央との繋がりも深い。物流は盛んになり、北嶺はかならず栄えるでしょう」
「またそんな胡散臭いことを……」
「信じていただけませんか」
「あなたのことは信じますよ。信じますが、それと商売は別物でね。それに、そちらのかたを信じる理由がありません」
ジェイサルドは落ち着き払っている。
「わたしが歩けなくなったとき、彼が運んでくれるのではないかと期待しています」
「それも嫌なんですよね。途中で死なないという保証もないし」
「人は皆、いずれは死ぬものですから」
「そういう問題じゃないですよ！　あなたを北嶺に送り届けるなら、生きたままでないと空手形になりかねない、でもそれが難しいという話です！」
「なるほど」
商人は気味悪そうにジェイサルドを見た。
「そちらのかたについては、抜け道をお教えしたところで、ご苦労、と一刀両断にされそうで」
ここでようやく、ジェイサルドが声を発した。
「儂も誓えばよろしいかな？　良心に？」
「あなた様の良心に値をつけられるほど、存じ上げておりませんのでね」
「こちらは皇妹殿下の騎士で、ジェイサルド殿とお

っしゃいます」
　ヤエトが紹介すると、ナグウィンはするどく息を吸い、半歩ほど後ずさった。
「まさか《沙漠の悪鬼》をお連れになろうとおっしゃるんで？」
「……なんです、それは」
　商人は答えない。ヤエトがふり返ると、老騎士は肩をすくめて答えた。
「そう呼ばれたことも、あったかもしれませんな」
「かもしれませんな!?　なんだそれは！」
　わめきながら、ナグウィンはさらに後ずさり、ジェイサルドを指して糾弾した。
「こいつの正体をご存じなんですか、尚書官殿は!?　比喩でなく、ひとりで百人殺す男ですよ」
「儂は、成り上がり者でしてな。アルハンで雇われるまでは、盗賊団を率いておったのですわ。追い剝ぎ、強盗に殺人……隊商狙いで荒稼ぎをした時代があった。それは認めざるを得ません。だが、百人とは大袈裟な。そんなに斬らねばならない作戦を立てるのは、もう強盗でもなんでもありませんな」
「あんたは強盗だったんだ！」
「左様。だが、百人殺したのは軍に入ってからだ」
　なるほど、とヤエトは思った。ジェイサルドの言葉は、筋が通っているし、ありそうな話だ。沙漠越えの殲滅戦を生き延びた将軍だ、百人どころか千人殺していてもおかしくはない。
「もうたくさんだ！」
　ナグウィンは叫ぶと、出口を示した。
「今すぐ、出て行ってください！」
「それはできません。ここまで明かして、ではなかったことにと立ち去るのは無理ですよ」
「商売上の秘密は明かしませんから、ご安心を！」
　ジェイサルドが不意に動いた。
　ナグウィンの腕をとり、背後にねじ上げている。
　ヤエトが呆然としているあいだに、ジェイサルドはもう一方の手を商人の首に回し、今までに聞いた

ことがないような声音で告げた。
「商人の分際で、ああだこうだと贅沢をいえる立場かどうか、思い知りたいと見える」
ナグウィンは口をぱくぱくさせているが、声が出ない。呼吸はできているのかと心配になった。
「ジェイサルド殿、おやめください」
「今の儂のあるじが、そこにおいでの尚書官殿だったことを幸運に思え。アルハンの王であれば、そなたはとうに拷問にかけられている。あるいは《沙漠の悪鬼》に捕まったとしたら……」
「ジェイサルド殿！」
ようやく、老将は腕をはなし、商人は咳込みながらヤエトの方に倒れこんできた。
「……狂ってる」
「最善を尽くしてくださっているだけです」
同意を求めてそちらを見ると、ジェイサルドはいつもの穏やかな表情に戻ってうなずいた。
「時間がありませんのでな。話を進めようとしたまでのこと。商人が商売上の秘密を明かさないのと同様、騎士は誓いを守るもの。そなたを殺すのは容易だが、それはしないと誓おう」
「もういっそ殺してほしいですよ……」
「どうか、たのみます」
ヤエトはナグウィンの手をとった。
「どうしても、わたしは生きて北嶺に辿り着かねばならない。助けてください」
「わたしには関係のないことです」
「関係はあります」
商人は俯いた。今まで見たこともないほど真剣な表情で、考えこんでいる。
やがて顔を上げると、ヤエトの眼を見て尋ねた。
「断ると、悪鬼に殺される。そうですね？」
答えようがない問いに肩をすくめ、ヤエトは逆に問い返した。
「何日で行けますか？」
「条件によります。難しいんですよ、いろいろと」

「目安だけでも」
「五日はかかると思ってください」
駅逓を使うより速い。半信半疑ながら、どうしようもなくてこの商人を探したのだが、これは当たりと見るべきか。それとも、その場凌ぎの嘘なのか。
ジェイサルドがヤエトの背後から口を出した。
「三日にしろ」
「条件によるんだと、いっているでしょう。右手から左手にものを渡すんじゃないんですよ」
あるいは、とヤエトは考えた——この男も、失われた恩寵の力のどれかを受け継いでいるのか。
稀にしか使えなかった力でも、今なら安定し、強力になっているはずだ。
「三日で行けるかもしれないですね」
ヤエトの言葉に、ナグウィンは眼をしばたたいた。そして、いやいやと首を左右にふった。
「無理ですよ」
「条件なら、きっとよくなっていると思いますよ。……それより、必要なら契約の条項に、ジェイサルド殿が貴殿に手を出さないという項目を盛りこみましょう。お望みのものに懸けて誓ってもらいます」
その方が、ヤエトも安心できる。
いいですね、とジェイサルドに念を押すと、彼は鷹揚にうなずいた。ナグウィンは喉もとをさすっていたが、すぐにこう答えた。
「……それなら、《黒狼公》のお名前に」
「結構。《黒狼公》のお名前に懸けて、そなたを害することはないと誓おう。ただし、そなたが尚書官殿を裏切らなければ、の話だが」
「裏切りませんよ。誰に売っていいかわからない上に、それこそ自分の命があやういとあってはね」
ため息をついたナグウィンに、ヤエトは尋ねた。
「秘密を守ることも、誓いに含めるべきでは？」
「商売を無難につづける秘訣は、あれもこれもと欲張らないことですよ」
証文を作りましょう、とナグウィンは宿の方へ歩

きだした。彼の後について行こうとするヤエトを、ジェイサルドが引き留めた。
「あれは、気をつけた方がいい」
「なんのことです？」
「あの商人です。儂の昔の名前を知っている上、誓う対象に《黒狼公》を選ぶ。かなりの事情通です」
「なぜ《黒狼公》なのでしょう？」
「それを察しているゆえ、ただ者ではないと申すのです。胡散臭い男です、ご油断めされぬよう」
「彼とふたりきりになったら、貴殿のことを同じようにいわれそうな予感がしますが」
「でしょうな。どちらを信じますか」
「どちらも信じますよ。おふたりとも、わたしなどよりずっと危険な男だと思います」
ジェイサルドは笑ってヤエトの肩を叩くと、先に立って宿の方へ戻って行った。

5

話が決まると、商人の行動は素早かった。
「一日遅れるごとに、吹雪がひどくなりますからね。少しでも早い方がいい」
荷造りも手早かったが、防寒具だけは人数分揃えるのに時間がかかった。厳冬期用の外套は、ナグウィンの手元には一着しかなかったのだ。
毛皮の在庫があればよかったのですがね、とナグウィンは肩をすくめた。
「つい先日、払底（ふってい）しましてな」
ああ、とヤエトは相槌をうった。どう考えても自分の仕業だ。一枚くらい、持ってくればよかった。
「それは返品されるかもしれませんね」
「冗談じゃない！　あんな大金、手元に持っておけないから、東方へ回る商人にかなり投資しましたよ……ってちょっと。なんで返品されるんです」
「購（あがな）われたのは三の君でしょう？　わたしへのちょっとした嫌がらせだったのです。あそこの家宰は、

無駄金を使わないので有名だとか。未使用だから品物と引き換えに金を返せと来るかもしれません」

ナグウィンは笑った。

「そんな理屈を通すようでは、都で商いはできませんな。……おい」

留守番をつとめる小僧になにごとか伝授しはじめたのは、返品と返金問題への対策だろう。

行くと決めたら肚を据えたらしく、商人はほがらかに見えるほどだ。本性は冒険家なのだろう。

五日なり三日なりで着くのかどうか、ジェイサルドの狙いはなにか、第三皇子は今なにをしているのか、ヤエトの憶測通り北方の蛮族と結んでいるのか、北嶺はどういう状況なのか——考えることは多かったが、敢えて、ヤエトは思考を停止していた。

考えてもしかたのないことがほとんどだ。

——皇女のところへ、生きて帰る。

その一事以外は切り捨てようと、決意していた。

馬車の座席は、ひどく揺れた。これだけは第三皇子のところに居候していた頃がなつかしいと思いながら、ヤエトは沈む夕日を眺めていた。

大河の向こう岸には、崩れ落ちた城があるという。親殺しの女王ジャヤヴァーラの城だ。

歴史的には価値がありそうだが、覗いてみたくはなかった。殺戮とか拷問とか、いろいろな意味で吐き気を催す伝説が残っているからだ。

真実が伝説よりましだとは、あまり思えない。ならば伝説のままで、たくさんだ。

気分を切り替えようと、ジェイサルドに尋ねた。

「将軍がもし、北方の人間で、北嶺を攻めようと思われたなら……どんな作戦を立てますか」

「ふむ……。まず、地図を作るところからですな」

「だいたい覚えています」

ヤエトは筆記用具を取り出した。角灯と一緒に、ジェイサルドがまとめてくれた荷に入っていた。強いだけでなく、気の利く男だ。

彼は帳面を広げ、北嶺の地形と集落の場所をしる

した。馬車が揺れるので線が歪んだり途切れたりはしたものの、大まかなところは押さえて書けた。
「よくご記憶で。……道はない、と。馬は無理か」
「向こうは鳥も使えませんから、歩兵のみです」
「渡河可能な地点は、ここと……ここですか？」
「過去の事例からいえば、その二か所は可能性が高いです。それと、これは不確かな噂なのですが、北方の民は気候をあやつるとか」
「やりますよ」
御者台から、ナグウィンが口を挟んだ。
そういえばこの男、こういった噂や昔話のたぐいに詳しいのだった。
「とくに神官は、雷を呼ぶとかでね。《雷霆（らいてい）の使者》というそうです」
「胡散臭い話だ」
ジェイサルドが感想を告げた。ヤエトも、以前なら意見を同じくしていたことだろう。今となっては、無邪気に迷信だとしりぞける気にはなれない。
言葉と名前が力を取り戻し、子ども騙しのまじないが人を殺す時代が訪れようとしている。北方の神官は雷を自在に扱えると想定すべきだ。
「その力が使えるとして、どう攻めます」
「集落を、ひとつずつ潰しますな。吹雪を呼んで人の出入りを完全に支配し、敵を雷霆で燃やし尽くします……いや、これは現実的ではないな」
「なぜです？」
「無制限に使える力などというものは、まずありませんからな。決めどころのために、力は温存するでしょう。使い手の数にもよるでしょうが」
「神官に別の呼び名があるほどです。術を使える者は限られていると考えるのが妥当かと」
「……すると、自然の吹雪を利用するかな」
「吹雪を利用？」
ジェイサルドは顎をしごきながらつぶやいた。
「北嶺と戦うなら、まず機動力を潰します。つまり、鳥が動けない悪天候こそが味方です。自然の吹雪に

力を添えるだけなら、負担も少なくて済む」
　それで、過去の襲撃もだいたい冬のことなのだ、とヤエトはようやく気がついた。
　凶作が原因かと思っていた。作柄も関係はあるだろうが、鳥を封じる意義の方が大きいはずだ。
「吹雪に閉じ込めておいてから天候を緩め、自分たちが望む戦場へ相手を誘導するのもいい。やっと移動できる、と外に出たら罠が仕掛けてある、と。相手の油断や、気の緩みに乗じるのです」
「隊商を襲うのとは違うんですよ」
　ナグウィンの厭味に、老騎士は律儀に答えた。
「儂が想定していたのは隊商ではなく、街ですな。いくつか、襲ってみたことが」
　沙漠の都市には、帝国が長年苦戦を強いられたほどの地力がある。ジェイサルドが率いていた盗賊団は、かなりの規模のものだったようだ。
「しかし、油断を誘うとはどのようにして？」
「何年か前から襲撃は止んでいると聞き及びましたが、それは確かですかな？」
「正確に何年前からかは、わかりませんが」
「毎年のことであれば、備えを怠りはしないでしょう。ですが、襲撃の間隔が長ければ、緩みます」
「緩む……」
「来るか来ないかわからない。それだけなら、天秤は釣り合っていますな？　ですから、来ないだろうと期待してしまう方に、錘を載せてやるのです。襲撃を控えれば、おもしろいように用心が緩みます」
　おもしろくありませんよ、というつぶやきが御者台から聞こえてきた。
　今度はジェイサルドも相手にせず、それで、とヤエトの方を見た。
「貴殿は、太守をお救いしたいのですか。それとも、北嶺を守りたいのですか。それによって儂の行動も違って来ますのでな、確認させていただきたい」
　少し考えてから、ヤエトは答えた。
「両方を、望んでいます。切り離すことのできない

つとめですから」
「欲張らないのが商売を長続きさせる秘訣だとか、そこの商人に教わりませんでしたかな」
「商売ではありませんからね。官としての職務です。それに、長続きはしなくてもよいので」
「隠居なさるから？」
「それは困ります。長続きしてもらわないと」
「なるほど。あちらの御者の意見を取り入れるなら、まず北嶺大事、次が太守ですかな」
「わたしが太守副官だからこそ力をふるえることを、お忘れですよ。ナグウィン殿こそ、どちらも救ってほしいと切に願わねばならない立場にある」
「……あんたがた、わたしで遊んでいなさるでしょう。そうですね」
ヤエトは笑って首を左右にふった。
「いいえ。とにかく、今のでおわかりでしょうが、空証文に終わらせないために、貴殿には頑張ってもらわねばなりません」
「物騒なことには背中を向けて全力で逃げ出しても責められないから、商人になったのに」
文句をいいながら、ナグウィンは前に向き直った。あたりはそろそろ暗くなりはじめている。
ヤエトは遠ざかる都を眺めた。まだ夕焼けが残る空に、いくつもの塔がその輪郭を黒く刻んでいる。そのあいだを、鳥たちが啼き交わしながら飛んでいく。夜を過ごす場所へ戻るのだろう。
するどい啼き声が思いのほか近くから聞こえ、ヤエトは顔を上げた。
「なにか？」
ジェイサルドが、即座に反応した。
「今の声は」
「鳥のようですが……？」
ヤエトは商人に声をかけた。
「あの声は、なんの鳥かわかりますか」
「わたしも存じません。無気味な声ですね」
「三の君の庭で、よく聞いた声です」

ジェイサルドが剣の柄に手をやった。
「商人、馬を急がせろ」
「無理ですよ」
答を待たず、ジェイサルドは立ち上がっていた。揺れる馬車の上だというのに、下半身ですべての震動を殺し、上体はぴたりと止まって見える。
ジェイサルドが見上げた方を、ヤエトも視線で追った。赤黒い影が、矢のように空を過る。いや、矢ではない——戻って来る。
円を描いて飛ぶその半径が次第に狭まり、勢いはそのままに、降下しはじめた。
「毛布をかぶって！」
するどく命じられ、ヤエトはあわてて従った。
「頭を低く！」
ひい、と御者席からナグウィンの声がした。ジェイサルドが裂帛の気合いをはなち、剣が唸った。
視界の隅を、なにやら赤いものが過った……ような気がした。あまりにも、速い。
馬が嘶いて暴れ、馬車の揺れが激しくなる。
「失礼」
はっと顔を上げると、ジェイサルドが彼の手をとっていた。なにを考える暇もなく、青白く光る刃に指を押しつけられ、血がひと筋、流れた。
それをジェイサルドはさっきヤエトが広げていた帳面の上に垂らし、指先でさっとこすりつけた。
するどい啼き声が上空を渡り、御者台からは手綱を鳴らす音が響いた。馬車は、激しく揺れている。
ジェイサルドは血染めの紙を高く掲げた。
「持って行け！」
啼き声が響くと同時に、紙がもぎ取られた。
その一瞬、ヤエトはあの啼き声の正体らしきものの姿をちらりと見た。風に舞う布きれのような、あるいは鳥のような、なんともいいがたい姿をしたものだった。実体を得た炎のようでもあった。それは、もがくように飛んでいた。自分自身から逃れたいとでも思っているかのように。

なにより強く印象に残ったのは、その深く暗い色合いだった。これ以上はないというほど濃い赤だ。

——呪師が頭に巻いている布のようだ。

血の雫がぽたりと馬車の床に落ちた。見下ろしていると、ふたたびジェイサルドが彼の手をとった。

「すぐ止まるでしょうが」

押さえられた手首を見下ろして、ヤエトは呆然とするばかりだ。

——今のは、なんなのだ。

彼の疑問をナグウィンが代弁した。

「今のはなんです」

「呪師の使いだろう」

ジェイサルドはあっさり答えたが、商人は興奮し、あやうく御者席で立ち上がりそうになった。

「呪師に狙われてるんですか!?」

「違う」

ナグウィンは顔をしかめた。

「あのねぇ……尚書官殿、違っていたら、呪師が変なものを寄越しやしないでしょう?」

「呪師が狙っているのは、太守です。わたしがそれに気づいたことを、悟られたのでしょう」

丁寧に説明したつもりだが、ナグウィンは頭を左右にふり、前に向き直りながらつぶやいた。

「……やっぱり狙われてるんじゃないですか」

「商人、もう少し急げないのか」

「だからいってるでしょう、さっきから！　これ以上は馬が潰れて馬車が壊れるだけです」

ジェイサルドはまだ彼の手を放さない。指先に鈍い痛みがあり、一連のできごとが夢ではなかったと、ヤエトに教えていた。

呪師の使いとはなんなのか。ジェイサルドはそれを追い払ったようだ。また来るのだろうか？

「せめて街道を離れろ。使い魔でおおよその場所の見当がつけば、兵士が来るかもしれん」

「めったやたらと追われてるじゃないですか」

ちゃんと説明しておいてくれないと、と小声で文

句をいいながらも、ナグウィンは逆らわなかった。
「すぐには無理ですよ。もう少し先に、いい場所がありますがね。それまでになにか来たら、悪鬼の加護を祈りますよ」
「案ずるな。百人殺す現場を見せてやる」
「見ませんよ。頭を抱えて、眼を瞑ってやり過ごします。終わったら教えてください」
ジェイサルドはヤエトの方に向き直ると、真面目な表情で告げた。
「名前の魔法について、ご存じのことは？」
「名告ると相手に支配される……という程度で」
「いかにも。名前の魔法には、ふたつの系統がありしてな。一方が呪師のわざで、それは『望んだ名を相手に被せる』術、名被せと呼ばれております」
「名被せ……」
「先ほど、貴殿の血でお名前を書きました。だから、呪師の使いはあれを貴殿と錯覚して持ち帰った。紙切れに貴殿の名を被せたようなものですな」
血をなすっているとしか見えなかったが、そういうことなら納得できる。
「呪師のわざも使えるんですか」
尋ねたのはナグウィンだ。
「あの程度なら、誰にでもできる。相手が呪師のことわりで動いている以上、それに合わせるだけだ」
誰にでもはできないですよとつぶやく商人を無視して、ジェイサルドはヤエトに向き直った。
「呪師が今の儂のように貴殿の血をとって名を書けば、それはかりそめの命を得て、動くはず。儂には左様な力はござらんのでな、あれは血文字が書かれた紙でしかない。しかし、相手は呪物。貴殿の血と名をそなえただけで、あの紙に吸い寄せられる。本物よりも、本物らしく思えるのでしょう」
「名被せとは、偽者をつくるわざですか」
「左様。呪師どもは、あの布に精――南方ではそう呼びますが、帝国のかたはどう呼ばれるのか。魔物とでも申せばよいですかな――そういった人外の者

の名を被せて宿らせ、自在に使いもします」
「呪師が太守を支配すると、どうなるのです」
「本来の名を歪めて新たな名を被せ、自分たちの扱いやすいものへと変貌させるのでしょう。見た目は以前と同じでも、中身は違う。巧妙な術です」
「見分ける方法は」
「名を呼べば。名被せが効けば、もとの名を呼んでも答えられなくなりますのでな」
「術をとく方法はご存じですか」
ジェイサルドは首を左右にふった。
「名被せが完成していれば、戻す方法はない、としか。呪師を殺しても術がとけないのはたしかです。それで効果があるのは、術が完成する前ですな」
やってみたことがあるかのような口ぶりだ。
呪師をみつけ出し、間に合うように殺すのは難しいだろう。相手は皇子の庇護下にある。
だが、第三皇子が本気でヤエトを始末しようとしているのは、好材料だ。彼を北嶺に行かせたくないと思われているなら、行く価値があるのだ。
いや、第三皇子など関係ない。かならず、北嶺に帰るのだ。皇女のもとへ。
――迷うな。
信じるしかない。呪術などというものは、結局、意志の力に依存するのだ。信じる力を失ったら、その時点でヤエトの負けが決まる。
馬車の揺れが激しくなった。街道を離れたのだ。
あたりは暗くなり、周囲の様子を見てとるのも困難だ。星明かりで察するに、少し低くなった場所を走っているようだが、ときどき大きめの石に乗り上げては、横転するのではないかと思うほど揺れる。
「野営できる場所を探せ。地面があるところだ」
「地面がないところを探す方が難しいですよ」
「石では魔除けが描けない。寝ているあいだに、さっきのようなものに襲われたいか」
「……悪鬼殿の、仰せのままに」
ジェイサルドはヤエトを見、かすかに眉を上げた。

「笑っておいでですか。豪毅なおかただ」
「いや、違います。皇妹殿下は、ずいぶん気前のよい贈り物をしてくださったと思っていただけです」
皇妹がそれだけルーギンの判断に重きを置き、彼のためにジェイサルドを貸してくれたのではないかと思うと、笑みがこぼれてしまったのだ。
ルーギンが皇妹にいかれているのは傍目にもよくわかったが、その逆は見えなかった。偏った慕情は、悲劇につながりかねないと案じていたのだが、つりあいはとれているようだ。
せめてルーギンを無事に助けださないと、ジェイサルドを借り受けた恩は返せないだろう。
――ああ、また使命が増えたな。
一介の尚書官には、荷が重過ぎないだろうか。
ナグウィンが野営場所に選んだのは、まばらな木立のあいだにある、湧き水のほとりだった。
木切れを拾い、ジェイサルドはさっそく魔除けの陣を描きはじめた。苔に覆われた地面をひっかいて、あやしげな円や直線を組み合わせていく。思いだしながらなのか、時折手が止まることもあるが、それでも馬車のぐるりを囲むようにして陣は完成した。
「それは、なんなのです？」
「単純な魔除けですよ。人外のものが入れなくなります。沙漠には、いろいろ伝わっていましてね。昔は、子ども騙しだと思っていましたが――」
そこで言葉を切ると、ジェイサルドは自分が描いたばかりの図形をじっとみつめた。
「――なにが起きているのか……。呪師とて、以前はこれほどの力はなかった。使い魔だの名被せだの、気味の悪い話はどれも、年寄りが子どもを怖がらせるための昔語りの材料に過ぎなかったのです」
なんとも答えようがない。ヤエトが黙っていると、商人があまり緊張感のない口ぶりで尋ねた。
「その陣とやらは、ちゃんと効果があるんでしょうね？　こんなことと知っていたら、護符を買ったんですが、手持ちがなくて」

「あやしの者にはな。人や獣には効果がない」
「兵が来たらどうするんですか」
「向こうより先にこちらがみつけられれば、問題ない。儂とそなたが交替で不寝番をしよう」
「寝首をかかないという保証はあるんでしょうね」
「証文を書いた。信じろ」
「悪鬼の甘言を信じて命を落とした人間の、どれほど多いことかを考えるとね」
ジェイサルドは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「わたしが一緒に起きていましょう」
ふたりが同時にヤエトを睨んだ。反射的にごめんなさいと謝りたくなるほどの迫力だ。
「馬鹿をいっちゃいけません。わたしは、自分だけ余分に働くのは御免ですよ。ですがね、尚書官殿に徹夜をさせるくらいなら、わたしがずっと起きていた方が明日が楽だってことくらい、知ってますよ」
「遺憾ながら、この者と意見が合いました」
「ひとりが寝て、残りが起きて見張れば公平です」
結局、ヤエトの意見が通った。残るふたりが視線をかわしたのを見れば、適当に寝かせてしまえと思っているのは間違いない。
それでもかまわなかった。口論をとめるのが第一の目的で、不寝番に参加するのはその口実だ。
困った尚書官殿の面倒をみるために、ふたりが仲間意識を抱いてくれれば幸運というものだ。
焚火は目立って危険だろうというので、乾いて固い保存食ばかりの冷たい夕食をとった。
「では、お先に寝ませていただきますよ」
まず商人が横になる。寝つきがよいらしく、すぐに寝息が聞こえてきた。異常な事態に巻きこまれているくせに、落ち着いたものだ。
「残り二日で、どうやって北嶺に連れて行ってくれようというのですかな、この者は」
ジェイサルドが低くつぶやく。
「本人は五日と申しておりましたよ」
「しかし、それでも無理な話だ」

ヤエトは微笑んで、同意を示した。常識では無理だ。その無理を通す手段を求めて商人のもとを訪れたのだから、信じないことには話にならない。
「沙漠の西では、神はひとつです」
「存じております」
「全智の神のすべてを人が知り得ることはない。神を呼び下ろした人の祈りに応じ、その一部分のみがようやく人に認識し得ると申します」
「はい」
「ですが、神はあまりに遠く、昨今では祈りも滅多に届かぬほど……と、いわれておりました。それが、変わってきているのではないかと思うのです。先ほど、おっしゃいましたね。なにが起きているのか、と。わたしは思うのです……昔語りを介して伝わる不思議の数々が、今によみがえりはじめているのではないか。神の力もそうです。すべての恩寵の力が強まっているのではないか、と」
ジェイサルドは暫し黙したまま考えこんでいるようだったが、やがてぽつりと告げた。
「馬に乗って行くのではない、ということですか」
「そうであってほしいと思っています。奇蹟でもない限り、間に合わないでしょうから」
「しかし、そんな力は聞いたことがない」
「知る者が少ないからこそ、秘密といえるのでしょう。彼は、わたしたちにそれを明かすべきか否か、迷っているのかもしれません」
商人は秘密を明かすのに迷いがあるのか、ごまかす方法を探しているのか、あるいは特別な用意のある特定の場所に行く必要があるのだろう。
ジェイサルドは諦め顔でこう尋ねた。
「締め上げて、さっさと運ばせるというのは駄目なのでしょうな？」
「わたしは臆病なのです、ジェイサルド殿。一瞬にして世界の果てまで送れるような力を、その男が持っていたとしたら、どうします？」
剣で脅しても、金で買っても、ではさようならと

二度と戻ることのできない遠方へ送られてしまえば、こちらにできることはない。
「……なるほど」
「強制が効果的なこともあるでしょう。たしかに、ことは迅速に運びます。表向きは、とくに」
「だが、この男に関して、そういう手段を講じるおつもりはない、ということですな」
「そうですね」
ジェイサルドは少し、頼もし過ぎる。ため息をつくと、あくびをかみ殺したのかと勘違いされた。
「お寝みになっても大丈夫ですぞ」
「いえ。せめてもう少しはつきあわせてください」
ジェイサルドは淡い笑みを見せた。そうしていると、とても悪鬼などと呼ばれる人物には見えない。
知り合った当初から、ふつうの騎士とは毛色が変わったところがあるとは感じていたが、沙漠出身の降将であるせいかと思っていた。
「ほどほどに、お願いしたいですな」
「ジェイサルド殿は……宮仕えを選ばれたのは、なぜです？　沙漠の盗賊であれば、自由に生きられたのではないですか」
ジェイサルドは子どもをあやすように微笑みながら、ヤエトの肩にもう一枚の毛布をかけた。
「さあ？　なにゆえでしょうな」
それ以上は答えてくれそうにないと感じ、ヤエトは口をつぐんだ。
特段の望みもなく、ただ大過なくとだけ念じて生きている自分にすら秘密はある。自分より長く転変の多い人生を歩んで来たこの騎士ならば、人には語り得ぬことも多かろう。
悪鬼という名を知れば、若干の不安がないとはいえない。だが、これ以上問い質すのは不粋だろう。
「もうひとつだけ、伺ってもよいですか？」
「なんでしょう」
「先ほど、名前の魔法には系統がふたつあるとおっしゃいましたね。そのひとつが、呪師が扱う名被せ

の術であると。もう一方は、どのような？」
　ジェイサルドは顎を撫で、ふむ、といった。
「そちらは、儂もよくは知りませんでな。名明かし、とでも呼ぶべきでしょうか。発祥は名被せより古く、人のわざではありません。可能なのは人外だと」
「人外……ですか」
　ちょっと想像がつかないという顔をしたヤエトに、ジェイサルドはうなずいた。
「呪師とは違い、外から被せるのではなく、内から呼び出してしまうのです。たとえば、盗賊の中に忠実な騎士の要素を見い出せば、それに応じた名を明かして、名付けてしまう。外部から強制するのとは違い、自身の内から変化させるわざですな」
「安定しそうですね」
「左様。術によって壊されるのではなく、むしろ修復されるといわれます。本来あるべき姿を発見し、理想に近づける――それだけに、神の力なのだと」
　少し考えて、ヤエトは答えた。
「それは、神々から恩寵を得るために必要な能力だったのかもしれません。沙漠の西では、ひとつ神をどう呼ぶべきか、人は探しつづけてきました。正しい名につきあたった者だけが、恩寵の力を得た」
「そういうものなのですか」
「ええ。恩寵の力は皆、神の名をあらたに発見し、呼び、答を得た者だけが手に入れたのです」
　ジェイサルドはうなずいた。
「たしかに、名明かしの術に近いようですな」
「今は失われた術です。もう何百年も、あらたに神の名を明かして恩寵を得た者はいません……」
　ヤエトは眼を閉じた。
　呪師が呪師でなければよかった。名被せではなく名明かしの術をもって、皇女を皇女という軛から解放してくれるなら、よかったのに。
　だが、現実は甘くない。皇女はより重く厳しい枷に繋がれ、ほんのわずかの自由さえ失いかねない。
　――どこにあるのだ、自由というものは。

あのとき、皇女の問いにヤエトは答えた——心の中に、と。呪師は、それすら取り上げてしまおうとしている……。

不意に、ヤエトは激しい憎悪を感じた。

自分のどこに潜んでいたのかと思うほどの強さで、それは彼を摑み、揺さぶった。

皇女が北嶺に来たのはなんのためか。自由でいるためだ。切望して、しかし生まれと育ちを考えれば諦めるしかないとわかって、手放すことも決意している儚い自由だ。

望むままに生きることはできなくとも、心の中にだけは自由を確保してやりたい。都に派遣された当初の使命は果たせなくても、せめてそれだけは。

——ほんとうに、困った姫君だ。

皇女にかかわって以来、ヤエトの人生は面倒くさくなる一方だ。生きて果たさねばならぬことばかり、増えていく。

眼を開くと、すかさず諭された。

「もうお寝みになった方がよい」

「名明かしの術を扱える者は、どこにいるのです」

「儂の知る限りでは、今の世にはおりません。それこそ、昔語りの中に聞くのみで——」

「昔語りが、まことになろうとしているのです」

遮られても、ジェイサルドはとくに気を悪くした様子ではなかった。

「そうでしたな……しかし、人外のわざです。扱える者がいたとしても、人のことわりは通じぬでしょう。どこにいるか、いつあらわれるか、なんのために動くのか」

深く息を吐いて、つぶやく。

「——すべて、理解を超えるでしょう」

「もし、間に合わなければ、名明かしの術で戻せるでしょうか。正しい名を呼び覚ませば」

暫しの沈黙の後、ジェイサルドは答えた。

「儂には、なんとも申せませんな。名被せが解かれた試しはありません。少なくとも人においては、名

前だけがその者の本質ではありませんからな。肉があり骨があり、血がある。そのすべての繋がりを歪められ、断ち切られてしまった名が、元の通りになるとは思えませんが……。なんにせよ、術者がいないことには無理な話だとしか」

「いないのでしょうか」

「……間に合うように祈りましょう。さあ、もうお寝みください。貴殿が倒れては元も子もない」

しかたなくヤエトは眼を閉じ、眠ったふりをしようとした。どうせ気が昂って眠れないはずだ。

だが、我に返ったときには朝で、身体中がみしみしと軋んでいた。

不景気な顔をした商人とジェイサルドが、視線を合わせずむっつりと座りこんでいる。

彼が寝ているあいだにどんな会話があったのか、知りたいようで知りたくない。微妙なところだ。

ヤエトが起き出すと、すかさずジェイサルドが声をかけた。ほとんど寝ていないのだろうが、疲労のかけらも感じさせない顔だ。

「今、お起こししようとしていました。お加減は」

「大丈夫です」

実際は、頭も腰も背中も痛いし、昨日頑張り過ぎたせいで足もだるいが、意識があるだけ上等だ。

「偵察して参ります。商人、食べ物をお出ししろ」

はいはい、と袋の口を緩めはじめた商人とヤエトを置き去りに、ジェイサルドは木立の中に姿を消してしまった。

「昨日と同じものしかありませんがね。干し肉と、干し瓜と、二日前の平焼き……ああ、香草茶をつくってありますよ。煎じていませんから、どれだけ薬効があるかは保証の限りではありませんが」

なにも食べないわけにはいかないから、平焼きに小さく切った肉と瓜を並べて包み、あとは結構、と辞退した。どれも保存食で味が濃い。香草茶で流しこむようにして食べた。

切り取った肉の切れ端を齧りながら、ナグウィン

はつぶやいた。
「ああ、うまい飯が食べたいなぁ」
「北嶺に着いたら、厨房の者にいくらでも注文してください」
「この季節じゃ、北嶺の厨房で用意できるのも保存食ばかりです。悪鬼の邪魔が入らなくても、まともなものが食べられるとは思えませんね」
「また喧嘩したのですか？」
商人は顔を歪めた。
「喧嘩なんかしませんよ。まだ死にたくありません。機嫌を損じたら、ずんばらりと頭からふたつに割られます。わたしは奴に背中を見せる気はないですね……御者台に座るのも嫌なくらいで」
「そんなに評判の――」
悪党だったのですか、とはさすがに訊きづらく、言葉を探しているあいだに商人が語りはじめた。
「沙漠の隊商道の東半分、無事に通りたければ悪鬼の一味に上納金を払うのが常識、という時代がありましてね。無論、命知らずだの腕自慢だのが、払わず通ろうとはしましたよ。ですが、旅立って数日後には、首だけになって戻ってるんでね」
「それは……すごいですね」
いつでも、現実は想像を凌駕する。商人の話はつづいた。
「胴は戻らないんで、一味が食べるのだといわれてました。わたしの従姉の嫁ぎ先の家では、三人ほど、首になって戻りましたよ。従姉の夫は、棺桶が小さくて安上がりで済んだといってましたがね」
どう答えればよいのか。笑うところなのか？
「……お気の毒に」
「きりがないので端折りますが、アルハンの戦いで悪鬼が生き延びたと聞いたときは、最初からアルハンを裏切るつもりだったんだと確信しましたね」
「しかし、ジェイサルド殿と悪鬼が同一人物だったことを知っていたのはなぜです？」
「あれの部下だった男に聞いたんですよ。アルハン

の将軍は、元悪鬼だとね。そいつも死にましたがね。足を洗って商人になったのに、沙漠越えの軍にやられたとか。……ほんとうのところ、悪鬼かその手下にやられたんじゃないかと思ってます」

「あなたのおっしゃる悪鬼も、帝国の尚武官です。軍が殺したのと変わりはないともいえますよ」

ちら、とナグウィンはヤエトを見た。

「尚書官殿も、あの軍に同行なさってたんですよね？　なんだか想像がつきませんが」

「そうでしょうね」

「ご自分のことなのに、他人事のようにお話しになりますねぇ、相変わらず」

いささか咎めるような口調である。気分を害されても困るので、ヤエトは説明を補うことにした。

「沙漠に近い砦に勤務していたのですよ。それで辞令がくだってしまって。武器をとって戦ったりはしませんよ。物資の管理をしていただけです」

「辞令ねぇ……。北嶺へ行かれるときも、そんな感じでいらっしゃいましたね」

その通りだ。進歩のなさに、笑うしかない。

「帝国の祿を食む身です。命じられれば、沙漠だろうが高山だろうが、行くしかありません」

「下野なさろうとは、思われないのですか」

「わたしなどを養ってくれるのは、帝国くらいのものです。ひもじいのはつらいですからね……」

「それで思いだした。長もちしない食料があるんですよ。食べてしまいましょう」

商人が取り出したのは、果物だった。ジェイサルドにとんでもない味の果実を食べさせられたばかりなので、ヤエトは用心深くそれを眺めた。

「おいしいですよ」

ヤエトには、果物の見分けがつかない。根本的に、食への執着が不足しているのだ。腹が減るのは嫌だが、おいしいものを食べたいと熱心には思わない。

商人が投げて寄越したので、しかたなく受け止める。思ったより、やわらかい。

「皮ごと食べられるんですか？」
「はい。熟れてますからね、大丈夫。ただ、皮はちょっと苦味があります」
説明しながら、ナグウィンは果物に歯を立てた。
苦いのは嫌だと思いつつ、ヤエトもナグウィンに倣った。汁気たっぷりの果肉が口の中でとろけていく。甘い。苦味などないじゃないかと思いながら口を動かしていたら、だんだん嫌な味がしてきた。
なるほど、たしかに苦いのは皮だ。
ヤエトが苦味を噛み締めていると、ナグウィンはさらりと話を戻した。
「とにかく、わたしは悪鬼を信じません。右手と左手で違うことができる種類の人間です」
商人の意見に否を唱える気はないが、少しばかり弁護すべきかという気分になった。ジェイサルドがいなければ、ここまでで確実に二回は死んでいる。
「帝国の中枢を生き延びていくには、その程度の才覚は必要でしょうね。左右の手を使い分けるだけで済めば、楽なものではないですか」
「そうはおっしゃいますがね……尚書官殿は、どうなのです。器用に使い分けておいでなのですか」
「わたしは中枢とは関係ないですよ」
「皇女殿下の副官でいらっしゃるのだから、かなり中枢に近いのでは」
「では、これから死ぬところでしょうか。巻き込まれないように、注意なさい」
これ以上はないというほど長いため息の後、ナグウィンはつぶやいた。
「あなたねぇ。だったら、わたしのところに来ないでくださいよ……。だいたい、北嶺へお連れするとはお約束しましたが、こんな風に物騒な相手に追われているだなんて、聞いてませんよ」
「すみません」
「謝らないでくださいよ」
「でも、行かねばならないのです」
商人はヤエトを見て、はあ、と息を吐いた。

「それで、ほだされちゃうんだよなぁ」
「ほだされる……ですか？」
「なにごとも恬淡としてこだわらない尚書官殿が、これだけは真剣におっしゃいますからね。ほだされなかったら、男じゃないですよ。でもまぁ……やっぱり、わたしのところに来ないでいただければ、ありがたかったんですけどね」
「ほかに、たよれる人がいなかったので」
ヤエトが正直なところを告げると、商人はいやいやと頭を左右にふりながら、荷物の口を締め直し、荷台に投げ上げた。

6

昨晩、街道を離れてから辿った道の正体は、干上がった川床だった。泥土が乾いて平坦に均された、天然の道である。
帝国が新たに引いた灌漑用水路のせいで、水が来なくなってしまったのだ。まだ朽ち果ててはいないが人が住める状況でもない建物が、所在なげな風情でぽつぽつと残っていた。
かつては増水から周辺を守る土手だったと思しき斜面には、枯れて黄色くなった草の葉が風に揺れ、さわさわと音をたてている。
ふと、ヤエトはセルクの話を思いだした。
――夏の終わりには、その草地がいっせいに枯れて、金色になるんだ。
北嶺ではとうに過ぎた季節が、今ようやく低地に訪れようとしているのだろう。このあたりに住んでいた子どもたちも、セルクの村の子たちのように、草を揺らして駆け回っただろうか。
「なにか、気がかりなものでも見えますか？」
「いえ、草を見ていただけです」
ジェイサルドが妙な顔をしたので、ヤエトは笑って説明した。
「北嶺人の部下が、彼の村の話をしてくれたのです。

子どもの背丈と同じくらいの草が生い茂る中を走って遊んだ、と。秋には枯れて、金色になるといっていました……きっと、あんな風景なんだろうなと」

近くにいると鬱陶しいだけだったセルクだが、こうして遠くで思いだすと、妙になつかしい。

「草だらけか。贅沢な話ですな」

「アルハンは水の恵み豊かな街だと聞きましたが」

「沙漠にしては、ということです。南方の低地とは比べものになりません」

同じような景色がつづいた。

馬車が長く静寂の中を進むほど、見捨てられた土地を旅しているのだという感覚が強まった。

草の中を走り回る子どもたちの姿はなく、笑い声も聞こえない。

灌漑用の水路は、より都に食料を運びやすい地域での耕作を目標に整備が進んだが、同時に、反抗的な地域を干上がらせる目的もあったと聞いている。

今はまだ姿が残っている無人の家々も、遠からず朽ち果てて姿を消すはずだ。ここに生まれ住んでいた者たちは、帰るべき場所を失ったのだ。

――帝国が滅ぼしたも同然だ。

それをいえば、元は沙漠の民であるジェイサルドやナグウィンも故郷を失っており、帝国に恨みはあっても恩はないだろう。

ヤエトの体調を慮って休憩をとったときに、どうした流れかそういう話題になった。

「まあでも、もう帝国は帝国で悪くないって感じになっちゃいましたからね」

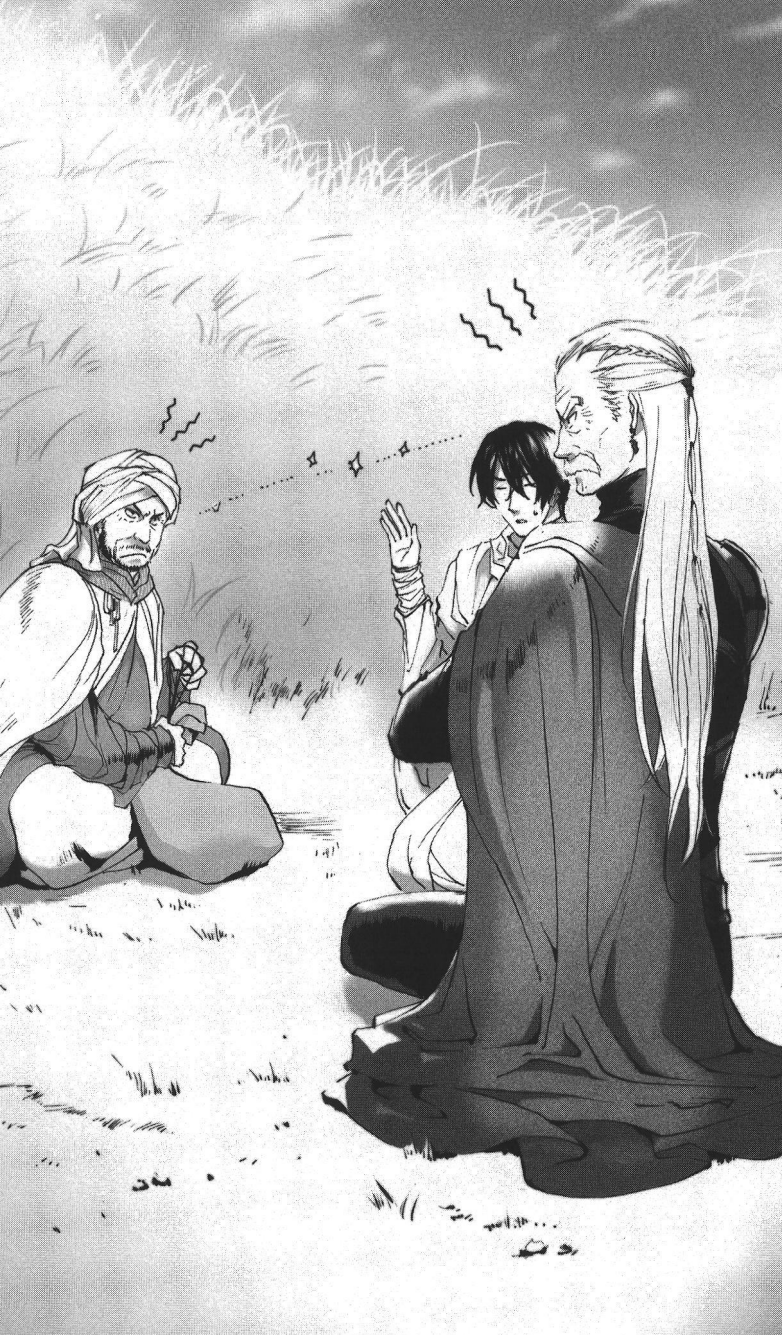
現実的な台詞でかたづけてから、ナグウィンはあらためて考え直す風に顎をしごいた。

「多少の通行料はとられますが、南方人の諸藩王が好き勝手に暴利をむさぼっていたのと比べると、まだ節度を感じるし。混血だからって差別もしないし、威張りっぷりも南方人ほどは気に障りません。総合すると、悪くないですね、やっぱり」

「悪くない、ですか……」

ちら、とジェイサルドを見て商人はつぶやいた。
「あちらの悪鬼殿は、望んで故郷を滅ぼしたんでしょうしね」
「左様。故郷といって、心を寄せる理由はないも同然でしたからな。残酷な王、上辺の繁栄をむさぼる街。とても帰りたいと思えるような場所ではない。美しい景色を他人事のように思いだすだけです」
北嶺でアルハンについて語ったとき、たしかにジェイサルドの回想ではその美しさが語られるのみで、人にまつわる逸話はなかったが、そういう意味だったのかとヤエトは愕然とした。
「愛着は、ないと？」
「そうおっしゃる尚書官殿こそ、あまり故郷をなつかしむ風ではないですが」
「わたしはなにごとも、そういう人間のようです」
「ほんとうに、他人事のようにお話しになる」
「今さらですよ」
なにか考えていた風だったジェイサルドが、ゆっくりと口にした。
「人がどこかに帰りたいと思うのは、そこに親しい他者の存在を感じてこそでしょうな」
「誰かいたのかね」
商人が意地悪く口を挟むと、ジェイサルドは鷹揚に肩をすくめた。どうやら彼は、ことごとに反抗的な商人の態度を、楽しむことに決めたらしい。
「アルハンにはいなかった。無力な子どもだった頃、儂に親切にしてくれた者は皆、戦になる前に死んだからな。といって、悪鬼の一味にも心許せる者はいなかった。儂が心からお仕えしたのは《黒狼公》のみだったが、公もこの世の人ではなくなられた」
「死んでまたお仕えするのかね」
「公はそれを望まれなかった。以来、儂が生きているのは余生だな」
「身も蓋もない人生だな」
「だが、悪くない」
「かもな」

意気投合している風に見えなくもない……と思ったとたん、話題が変わった。
「ところで抜け道とやらには、明日のうちには着くのだろうな？　ここがそうだとはいわせん」
「うるさいな、念押しが多過ぎるんだよ。悪鬼というよりは、嫁いびりに精を出す鬼姑のようだ」
「悪鬼らしくしてほしいのか？　指の骨を一本ずつ折りながら、吐くまで質問だ」
「……やめてください。せっかく食べたものを、わたしが吐くことになりますから」
「尚書官殿には見えないところで静かにやります」
ジェイサルドは真顔だ。冗談なのか本気なのか、どうも読めない。
しかたなく、ヤエトはナグウィンに向き直り、居住まいを正して一礼した。
「わたしからも、お願いします。もう少し、教えていただけませんか。どうやって行くのか」
少し、間があった。
「術者がいるんですよ」
やはり、とヤエトは思ったが、声に出してはただ、そうですか、とうなずいただけだった。
商人はぺこりと頭を下げた。
「すみませんが、これで精一杯です。他言無用という約束になっているのでね」
「北嶺に連れて行ってもらえることさえ確実ならよいのです。無理に喋らせて、申しわけない」
「いや、そんな。いやいや……」
手をふるナグウィンを見て、ジェイサルドがぼそりとつぶやいた。
「確実ではないのだろう」
商人は、さらに手をふった。
「いやいやいや。大丈夫、ちゃんとお連れします」
「渡りはどうやってつけるのだ」
「もう連絡は行ってますよ。運んでもらうことに、なってます。ただ、ちょっと難しい人なので、機嫌を損じたらとりなす自信はありません。墓穴を掘っ



たらひとりで入ってください。道連れは御免です」
「大丈夫。その気になれば、ジェイサルド殿はとても感じのよい人物を演じることもできますから」
やけに重い沈黙の後、商人がため息をついた。
「尚書官殿は……怖いもの知らずというか」
「よくいわれます」
「感じのよい人物に見せるよう最善を尽くします」
ジェイサルドはごく真面目な顔でうなずいた。
その後も、緊張感なく馬車は進んだ。追手の姿も見えなければ気配もない。
呪師はヤエトを追うのを諦めたのか。だとすると、それは悪い徴候だ。
「名を被せるためには、まず本来の名を知らねばならないそうです。正しい名を呼ぶことで相手を捕らえ、押さえ込んだ上で、新たな名を被せるとか。呪師の術で呼ばれるのは、ふつうに名を呼ばれるのとは違いますよ」
ジェイサルドによれば、それはむしろ雑踏の中で見知らぬ誰かを呼ぶ声に似ているのだそうだ。呼んでいるのは、呼ばれているのは誰だろうと気になって、ふり返ってしまう感覚に近いという。
「呼ばれたことがあるみたいな口ぶりだ」
商人が口を挟むと、ジェイサルドは肯定した。
「そうだ。呼ばれたことがある」
「……滅ぼされてしまえばよかったのに」
「そうすれば、そなたも今こうして巻きこまれずに済んだだろうしな」
「まったくだ。呪師の野郎め、半端な仕事しやがって。絞め殺してやりたいね」
「それは無理だな。儂が斬り殺した」
商人は顔をしかめ、冗談の通じない奴、とつぶやきながら手綱を鳴らした。さっさとこの仕事を終わらせてしまいたい気分になったのだろう。
「それで呪師のわざに詳しくなられたのですか」
「対抗手段といわれるものは、片端から試してみましたな。自分が心を蝕まれていくのを感じながら、

なすすべもなく待つだけでは、呪師のわざが効くより先に神経が参ってしまいます」

「どれくらい持ちこたえられるものなのですか？」

「呪師の腕前にもよりますし、術にかけられた者の魂魄（こんぱく）の重さにもよります。それから、被せられようとしている名が本来の資質と離れているほど、難しくなると申しますな」

呪師による名被せがある程度以上進行したとき、魂魄は激しく反発するそうだ、とジェイサルドは説明した。そのため日常生活が不自由になり、あきらかにおかしくなる。会話もできず、世話をしてくれる者がいなければ命の危険もある――が、皇女の立場ならこれは心配いらないだろう。

「儂自身は、そこまで行く前に呪師を探し当ててしまいましたので、経験はないのですが」

かれらが北嶺に着いたときに皇女が廃人のようであれば、間に合ったということだ。

間に合わなかったらどうするかについては、ヤエトは考えないことにしていた。

それはきっと、ジェイサルドの領分だ。

――はっきり始末をつけるために、皇妹はこの男を選んだのだろう。

この老将が、皇女が皇家の名を穢（けが）す状態にあり、とり返しがつかないと思えばすみやかにその命を断つようにという密命を帯びていたとしても、ヤエトはおどろかない。

それを阻止するのはルーギンあたりにまかせるとしてだ、と彼は額を撫でながら考えた。

――ほんとうに、名前を呼ぶだけで呪師のわざに対抗できるのだろうか。

中庭で過去を探り、幻視を得たときにあった確信は、時間が経つにつれ薄まっていた。なぜそんな風に思えたのか、と首をひねりたくなるほどだ。

今からでも都に引き返し、呪師を探して命を奪う方策を探すべきなのではないか。

迷う気もちを、ヤエトはなんとか抑えこんだ。

無理だ、とわかっていた。呪師を押さえられるなら、最初からやっている。

相手は第三皇子の保護を受けているに違いなく、もし邸内に匿われていれば、踏み込んで引きずり出すには、動かぬ証拠が必要だ。邸の外にいるのであれば、これも逆に探し出すのは困難だ。

その点、皇女は居場所がわかっている。そこに辿り着くのが少しばかり大変なだけだ。

着実に進んでいるのに、焦ってもしかたがない。寂しい風景を眺めていると、どうしても気が滅入ってしまう。やることがなくて、悪い方にばかり考える。それだけのことだ。

日暮れ前に、商人は馬車を停めた。

「ひと足先に挨拶して来ます」

術者のところへ行くのだという。手土産を詰めた袋を持って、やや緊張した面持ちだ。

「よろしくお願いします。お気をつけて」

ちらとジェイサルドの方を見てから商人は一礼し、土手を登ってその向こう側に消えた。

商人が消えたとたん、ジェイサルドはヤエトを見て低く告げた。

「少し見回って参ります」

「追うのですか？」

ジェイサルドは否定しなかった。

「付近に危険がなさそうであれば、追います。そうでなければ、戻って護衛をつとめます。尚書官殿をお守りするのが第一ですからな」

逆らっても無駄だろう。ヤエトはうなずいた。

「貴殿がよいと思われるようになさってください」

一礼して、ジェイサルドはナグウィンと同じ方向へ姿を消した。

ひとりになると、どっと疲れが襲って来た。

そうと気づかないまま、同行者の手前、気を張っていたのだろう。微熱を帯びた身体は火照って息苦しく、風にあたると寒気がした。馬車に揺さぶられた関節はひどく軋み、身体を動かすことを考えただ

けで吐き気がした。
こんな状態で北嶺に辿り着けるのか、と思う。
――なにも考えるな。
それが賢明なことは知っているが、実行するのは難しい。
北嶺に行けないのではないか、行けても遅いのではないか、遅くなくても自分では駄目なのではないか……適任ではないのではないか。
たとえばセルクなら。疑いを挟まずひたすら信ずることが必要な今、彼の資質こそが望ましい。
もっとも、セルク自身はそれを認めないかもしれない。ヤエトなら、どんな問題でも解決してくれると信じているようだから。おかげでふり回されて、ずいぶん余分にはたらかされたような気がする。
特別手当てを払ってほしいくらいだと思いながら空を見上げ、ヤエトは眼をしばたたいた。
湿気で霞んだ空を、白い鳥が旋回している。あまり大きくはない。
――まさか。
鳥が描く輪は次第に狭まって、最後には矢のようにまっすぐ飛んで来た。
呆然と見守るヤエトのすぐ目の前、立てた膝の上に着地して少しふらついたが、羽撃いてなんとか持ちこたえる。まるい眼が、彼をみつめていた。
ヤエトは周囲を見回した。誰もいない。
「セルクか？　セルクだったら、指を突ついて」
指を差し出すなり、もどかしげに突つかれた。うっかり昨夜切った指を出してしまい、傷が開いた。
「……もう少し、控えめに」
鳥は従順に、今度はふれるかふれないか程度に彼の指先を突ついた。
――間違いない。《雪鳩》だ。
都まで飛ばせるように訓練していると、聞かされた。あれは、冗談ではなかったのだ。
どうやって自分をみつけたのかとか、いろいろ訊きたいことはあったが、諦めざるを得なかった。

「時間がない。返事は肯定一回、否定二回で」
鳥はヤエトの顔を見ている。さっさと返事をしてくれないと、真剣に語りかけている自分が馬鹿のように見えるな、と思いながら言葉をつづけた。
「わたしには連れがいます。《雪鳩》のことは知られない方がいい。誰か来たら、すぐ逃げなさい」
鳥が動いた。ヤエトの指を勢いよく突つく。一回……二回。
いきなり、予想外の反応だ。間抜けの鳥頭めが、とヤエトは口を歪めた。説得している暇はない。
時間がないのだと思いながら、迷った。
ここで皇女の名を教え、呼べと命じれば間に合うに違いない。ヤエトも北嶺まで苦労して戻る必要はなく、ふたたび《雪鳩》を通じて報告が来るのを、適当な場所で待てば済む。
しかし、セルクかと尋ねてそうだと反応されただけでは、無邪気に信じるわけにもいかない。相手がセルク自身だと確信できても、安心して皇女の名前を預けられるかは微妙なところなのに、偽者の可能性があってはとても無理だ。
とはいえ、皇女が呪師の手に落ちてしまえば、名前の秘密など無意味になってしまう。
どちらがより危険かの判断など、したくない。だが、しないわけにもいかない。
「太守が呪師に狙われています。長老や厩舎長なら、まじないを返す方法を知っているかもしれない。訊いてみてください。それと……ルーギン殿に、伝えてほしい。もし太守のお名前を知っているなら、お呼びするように、と。それから、北の守りを厳重になさい。北辺からの侵入を警戒すること」
鳥は首をかしげてヤエトの顔を覗きこんだ。セルクより、よほど賢げに見える。
「わたしも、できるだけ急いで帰ります」
鳥の嘴（くちばし）が指にふれた。一回。
ほっとした。
「わたしが教えられるのは、これだけです。こんな

ところまで来なくてよかったのですよ……早く戻りなさい。貴殿が必要とされているのは、ここではない。北嶺で、はたらきなさい」

鳥は羽撃いて、小さく啼いた。それから、力強くヤエトの膝頭を蹴ると、一気に空へと舞い上がった。その白い姿はすぐ点になり、淡い色の空に紛れて見分けがつかなくなってしまった。

――これで、よかったのだろうか。

ルーギンが皇女の名前を知っている可能性は、皆無ではないだろうが、かなり低い。

――セルクに託すべきだったのではないか。

これからずっと悩みつづけることになるのだろうと思うと、げんなりした。勘弁してほしい。

鳥の感触を消し去るように膝を払い、ヤエトは立ち上がった。身体を動かしていれば、余分なことを考えずに済むだろう。ひどい立ち眩みと頭痛に襲われたが、ヤエトは気にせず両手を頭上に突き上げて背伸びをした。

やがて戻って来たジェイサルドは、妙な顔をした。

「……大丈夫ですか？　お顔の色が」

「大丈夫です」

実際どうかは考えもせず即答した。ジェイサルドの表情からは信じた様子は見えなかったが、ともあれ、報告を優先することにしたらしい。

「商人は小屋に入りました。周囲に手の者を伏せている風はありません」

「そうですか。お疲れさまです」

「疲れるほどの距離ではないですな。では、これをお召し上がりください」

話の繋がりは見えなかったが、差し出された果実には見覚えがあった。ものすごく酸っぱいあれだ。

「いや、これはちょっと」

「お召し上がりください」

ジェイサルドの顔がかなり怖かったので、しかたなく食べることにしたが、そのあたりからどうも地に足が着いている実感がなくなってきた。

動くと気もち悪い。せっかく酷い味のものを無理して食べたのに、吐きそうだ。

ほどなく商人も姿をあらわしたが、最初にまずヤエトの顔を見て、大丈夫ですかと案じた。

大丈夫ですと答えながら、皆その質問をして時間を浪費するのはやめればよいのに、と思った。

「顔を合わせないという条件でなら、三人、送ってもよいとはいうのですが……金子がたりません」

「いくら要求された」

「金貨で三枚。わたし個人については信用貸しもしてくれるそうですが」

ジェイサルドは渋面をつくった。

「そんな値で、いつも使っているのか」

「いつもは使いませんよ。それに今回は、事情が事情ですし……」

行方をくらますつもりなのだろうな、とぼんやり考えた。ジェイサルドがさらに問う。

「先払いか。腕はたしかなのだろうな？」

「それはもう、一瞬で。ただし、どこへでもというわけではないので、お城の前には着きません」

「どこに着く」

「崩れた城趾の近くです」

それなら見とがめられる危険性もないだろう。

金貨一枚は銀貨十枚である。ヤエトの俸祿は穀物相場にもよるが、だいたい銀貨で三枚。所帯持ちは、内職しないと食べられないといわれている。

太守副官になったのだから祿高が上がってもよいはずだと今頃考えながら、彼はジェイサルドを見た。

「持ち合わせはおありですか」

ヤエト自身は、着の身着のままで第三皇子のところを出て来たから、財布もなにもない。

「行方をくらますのに、都でかなり使いまして……」

知らぬ間に、そんなこともしていたらしい。

ジェイサルドが懐から出した巾着の中身を覗きこみながら、商人が尋ねた。

「金貨はないんですか」

「足がつくから使いづらい」
「……ああ、そうですね。目立ちますからな」
　掴み出した手の上に並ぶのは小さな銅貨ばかりで、金貨三枚どころか、一枚ぶんもあるかどうか。商人の信用貸しで、ヤエトだけ送ってもらえないだろうか。いや、ヤエトひとりでは旧城趾から城まで辿り着く前に遭難する、最低でももうひとりは――と考えて、ああ、とヤエトはつぶやいた。
「忘れていました」
「なにをです？」
「角灯を取ってください」
　元気かどうかはともかく、帰って来いという命令を果たすためだ。使っても問題ないだろう。
　ヤエトは、角灯の底から金貨を取り出した。

第



章

1

雪が心地よいと感じたのは、最初だけだった。

一刻も早く済ませたいという術者の意向を重んじ、一行は防寒具を身に着け、荷物を抱えて小屋に入った。中は無人である。術者は外か、屋根裏か床下にいるのか。対価を隅に置き、指示された場所に座る。

とたん、景色がふっ飛んだ。

一瞬で北嶺だ。あまりにも呆気なく、唐突な移動だった。

——どういう力だ。無茶苦茶じゃないか。

よろけるように一歩踏みだすと、ずぶりと雪にのめりこんだ。ジェイサルドが腕を摑み、尚書官殿、と彼を呼びながら引きずり出した。

「城の方角はわかりますか」

ヤエトは眼をしばたたいた。ジェイサルドの眉に、もう雪が積もっている。

「はい？」

「商人めが、わからぬと申すので」

「だから冬は嫌なんですよ」

このまま立っていると全員が雪像になるな、と思いながらヤエトは周囲を見た。

予想していたほどひどくはないが、吹雪である。あたりは暗く、見通しはほとんど効かない。かろうじて、折れた柱が見える——正確には、その形を覆うように雪が積もっているのが見えた。

「たぶん、わかります」

ジェイサルドはうなずいた。たぶんでは困るといいたかっただろうが、口にはしない。

「お願いします」

「早くしてくださいよ」

「尚書官殿のお邪魔をするな」

体力が保つといいが、と思いながらヤエトはあたりを見回した。

意識を集中するための対象を探して、はじめに思い浮かんだのは巨鳥の姿だった。

――シロバだ。

シロバなら、確実にここに来ている。そして、城へ戻っているはずだ。

あまり見栄えのするとはいえない毛並みの鳥の姿を、ヤエトは探した。少しずつ加速して時を遡る。

無意識に腰のあたりを手で探ったが、お守りは防寒具の内側で、握ることはできなかった。

――助けてくれ、シロバ。

ぼんやりと、鳥の輪郭が見えて来た。

その向こうに自分の姿がある。崖がある。あちら側へ向けて歩いたら、一巻の終わりだ。

巨鳥はヤエトに背を向けた――こちらへ歩いて来る。かれらは道の上に立っているようだ。

「こちらだと思います」

シロバの幻影に寄り添うようにして、ヤエトは歩きはじめようとしたが、すぐ雪に埋もれた。

「儂が先頭に。おい商人、尚書官殿を背負え」

「こんな背の高い人をおぶっても、足を引きずってしまうから意味がないですよ……」

文句をいいながらも、ナグウィンはヤエトを背負った。ほとんど間を置かず、うわ、と声をあげる。

「こりゃまずいですよ。すごい熱だ」

「わかっている」

自分の考えが声に出たかとぎょっとしたが、喋ったのはジェイサルドだった。

ヤエトはシロバの幻を少し先まで進めた。

「もう少し、左です。本来は鳥で通る道なので、かなり斜面が……」

「尚書官殿がなんかいってます！　もっと左とか」

ジェイサルドが唸ったのが聞こえた。

「わかった、儂が背負う」

「それじゃ体力が保たんでしょう」

「道がわからんではどうしようもない」

自分で歩けますと主張する気はなかった。体力を

温存するすべがない。
「あそこに見える出っ張りが――」
指さしたが、過去の景色を視界に留めていると、今はどう見えているのかわからない。といって、せっかく摑んだシロバの幻影を手放す気にもなれない。これを逃せば、二度と摑み直せるかどうか。
「――見えますか」
「不自然な盛り上がりのような？」
「土塁です。古い、防衛線で。それに沿って行けば、城へ通じる道に、たぶん……」
商人が吹きつける雪の向こうを透かし見るようにした。この天候では道を見分けるのも困難だろう。
さらにシロバを進めてみると、鳥は土塁を無視して斜面を上がりはじめた。経路としては参考にならないが、城の方角はわかる。
「道はありませんが、城は、あちらです」
ジェイサルドはうなずいた。
「商人、しっかりついて来い。そなたの面倒までは
みきれんからな」
「もう用済みでしょうしね」
ひがみっぽいつぶやきを、ジェイサルドは笑い飛ばした。
「なんの、城に着くまでという証文があろう。さあ行くぞ！」
視界ぎりぎりのところで、ヤエトはシロバの動きを止め、それを維持した。少しも難しくはない。なにも考えなくても呼吸をできるのと同じだ。どうやって、などと悩む必要はない。ただ、できた。
ただし、体力は消耗する。彼が視ているのは何十日も前の景色だ。昨日や一昨日に遡るのとは違う。
ジェイサルドが雪をかき分ける音を聞きながら、眼を閉じた。
世界が揺れる。閉じた目蓋の裏で、シロバがヤエトの顔を覗きこむ。琥珀色の眼が、不思議そうに彼を眺めている。
「尚書官殿」

胸のあたりから声が聞こえた気がした。ジェイサルドがなにか尋ねている。
「……はい？」
「この方角で合っていますか」
ヤエトはぼんやりと周囲を見回した。焦点がぶれているらしく、シロバの姿が行きつ戻りつ、いくつも並んで視える。
「大丈夫です。鳥について行ってください」
「鳥？」
商人の手が背にふれた。
「急ぎましょう。雪で形は変わってますが、この地形には見覚えがあります。たぶん合ってますよ」
ジェイサルドは余分な口をきかず、さらに力強く雪をかき分けはじめた。反対に、商人はずっと喋りつづけていた。なにか欲しいものはないですかとか、北嶺にあるもので都に持って行ったら売れそうなものはないですかとか、やたらと質問ばかりする。
頭がうまくまわらず、半分も答えられない。それでも懲りずに質問はつづく。尚書官殿のお好きな食べ物はなんですか。お酒がお嫌いなら飲み物はなにがお好きですか。そういえば、差し上げた瓶はもう空になりましたか……。
途中、二回ほど休止した。商人が懐から出した小瓶をヤエトの口にあてた。強い匂いが鼻をつく。
「飲んでください。薬です」
酒好きは皆そういうのだ。顔をそむけようとして果たせず、飲まされてしまう。やはり酒だ。
「行くぞ」
ヤエトを揺すり上げたジェイサルドの肩越しに、斜面が見える。その奥に巨大な黒い影があった。
――竜？
ぼやける視界をはっきりさせようと眼をしばたたくと、影の輪郭は淡くなり、羽根のように散った。
「城だ……」
窓という窓に灯火が見える。街道を見下ろす矢狭間からも、ほそい光の筋が見てとれる。

それは幻影だったのか、見守るうちに姿が薄れ、たちまち吹きすさぶ雪に紛れて消えてしまった。

だが、吹雪の向こうに黒く浮かぶのは、北嶺の主城だ。だいぶ雪に埋もれているが、間違いない。

「おや、まあ！　悪鬼殿、城ですよ、城！」

ヤエトはもうジェイサルドの背につかまる気力もなかったが、なぜか落ちずに済んでいた。いつの間にか、綱でくくられているらしい。

冒険には綱を持ち歩くのが基本、と彼は考えた。以前もたしか、綱を持っていればと思ったことがあるはずだ。今回も彼は手ぶらだったが、誰かきちんと知恵がまわる者がいたのだろう。

――いや、手ぶらではなかったか。

商人が手にしている角灯は、彼のものだ。淡い光がわずかに闇を遠ざける。黒々と伸びた影はやがて夜に呑みこまれる運命だが、影が生まれるのは光ゆえだと、大人になったヤエトは知っている。

子どもではない、と思いながら眼を閉じる。

揺れる灯火の向こうに錆びた覗き窓、軋む扉、そして浮かび上がる鏡の中の人影。

目隠しをした白い貌が、ゆっくりとヤエトの方を向く。長い髪のあいだに手がすべりこみ、目隠しをほどきはじめる。華奢な手首には重たげな枷。

鎖がじゃらりと鳴った。

「開門！」

はっとして眼を開くと夢は消え、黒い石造りの城門が見えた。

「開門！」

叫んでいるのはジェイサルドだ。拳を握り、重い扉を叩く。鎖で巻き上げる扉は石製で、夏のあいだは開きっぱなしだが、さすがに冬は閉めるらしい。

「吹雪で聞こえないんでしょうか」

「これしきの風でか？」

「門に……」

ヤエトが口を挟むと、ふたりは口を閉じた。商人が、あやすように声をかける。

「はい、門です。城門に着きましたよ、尚書官殿」
「門衛が、いないのでは？」
商人はぐるりと眼をまわして見せた。
「ありそうな話だ。でも、どうやって入ります？　ここで凍え死ぬのは嫌ですよ」
「わたしが、呼んでみます」
「は？　さっきから悪鬼殿が全力で呼んでいますよ。お気がつかれる前からずっとです」
説明するのが面倒で、ヤエトは手で払うような動作をしたが、ろくに動かなかった。
「下ろしてください」
ジェイサルドが綱をほどくと、ヤエトはよろけながら城門の前に立ち、手をついた。
――来てくれ、シロバ。
北嶺の乗り手は、鳥と心を繋ぐという。帝国人も、鳥を乗りこなすために心を繋いだ。
鳥には、人の心を読む力があるということだ。
ヤエトは帝国人の血を引いていない。故郷ではそれなりに名門で通っていた古王国の家系に生まれ、心話の能力はまったく持ち合わせがない。
神は種々の恩寵を与えたもうが、人は神ではないゆえに、複数の恩寵を使いこなすことはできないのだ。だから過去視の力を持つヤエトは、絶対に心話を使うことはできない。北嶺の人々のように鳥と心を通じ合わせることなど、不可能なのだ。
ずっと、考えていた。シロバが彼を乗せることができるのは、あの鳥に強い心話能力があり、ヤエトの心を読むことができたからではないか、と。
心を繋ぐことを前提に人を乗せる種だ。シロバだけが暗闇に船出するほど無謀とは思えない。
シロバはヤエトの心を読める。きっとそうだ。
――シロバ。
額を門につけた。冷たさが、心地よい。
――たのむ、迎えに来てくれ。
もちろん、シロバに聞こえているのかどうか、ヤエトにはわからない。よくて一方通行、予測がはず

れれば不通の経路を開こうとしているのだ。
それでも、思いつけるのはこれだけだった。
「来い、シロバ」
ささやいて、そのまま座りこんだ。
あわてた商人が彼の腕をとった。
「しっかりしてください、尚書官殿にはわたしが引退するまで現役でいていただかねば困るんです。寝ちゃいけません。ねえ、尚書官殿！　尚書官殿！」
ジェイサルドがヤエトを引き上げた。
「商人、尚書官殿をたのむ」
「たのむ……って悪鬼殿はどうなさるんで」
「登ってくる」
「おやめなさい。この壁は返しがついてます。よく見えないでしょうけど、あの上端のあたりが反り返ってるんです。雪が積もって、しかもこんなに寒いのに、指の力だけで体重を支えられっこないです」
自分より詳しいな、と思いながらヤエトは薄目を開けた。それから、ああ、とつぶやいた。
「来ました」
門が、動いていた。
がらがらと鎖を巻き上げる音がする。少しずつ上がっていく石壁の下に、尖った嘴が覗いている。
その横に、小さな頭がひょいとあらわれた。厩舎長の下で働いている少年だ。ヤエトを認めるや、興奮して叫んだ。
「厩舎長、ほんとうに尚書官殿です！」
「ほかに誰かいるか」
「商人のナグウィンと、尚書官殿の護衛の三人だけですよ！　早く入れてください、凍え死にます……とくに尚書官殿がね！」
ナグウィンが叫び返すと、厩舎長の声がした。
「またあんたか。無茶しおる。おい、手伝え」
少年は姿を消し、シロバも嘴を引っ込めた。苛立たしげに足踏みをする大きな爪が見える。
門はなかなか上がらない。
「なるほどね。鳥をお呼びになったのですか」

「門に門衛がいなくても、厩舎に厩舎長がいないことは、ないですから」
　商人は感心したようにうなずいた。
「賢者の言葉だ。さあ、もうひと踏ん張りです。じきに入れますからね、あたたかくして休むといいですよ。厨房で煎じ薬を作りましょう」
「いえ……やることを済ませてからです」
　連れのふたりが顔を見合わせたのを気配で感じたが、ヤエトは気にしなかった。
　少し上がった門の下から、シロバの嘴がまた覗いた。久しぶりに見ると、ひどく大きく感じる。
「無理ですよ、そのお身体では」
「なにを、なさりたいのです」
　左右から同時にいわれて、笑いたくなった。
「太守に、お会いせねば」
「後では駄目なんですか？」
　――少しでも早く。
　ヤエトは門の前に横になると、声をかけた。
「シロバ」
　巨鳥はヤエトの考えを読んだ。隙間から頭を押し入れたヤエトの襟首に嘴の尖端をひっかけると、一気に引き抜いた。
　目眩がして天地の別もわからなくなったが、すぐに、シロバがまた襟首をつまんで立たせてくれた。
「……ありがとう」
　礼をいいながらその首に手をまわし、体重を預けた。とても立っていられない。目がまわる。商人の叫び声が、門の外から響く。
「尚書官殿!?」
　ヤエトはあたりを見回した。巻き上げ機に取り付いているのは、厩舎長と助手のふたりきりだ。
「太守はどこに？」
　巻き上げ機を回す手を休めて息を吐くと、厩舎長は胡散臭いものを見るような眼でヤエトを眺めた。
「俺が知っとるわけなかろう。皆は議場におるから、そこで聞くといい」

「議場に？」
　足もとから声がした。雪まみれになりながら、ジェイサルドが狭い隙間から這い入ったところだった。
　彼は不運にもシロバの足にふれてしまい、ひどく威嚇されたが、動じるどころか逆に睨み返して立ち上がると、言葉をつづけた。
「こんな夜更けに、なぜです」
「ウィーシャが人を集めおったんだ。厩舎にも使いが来たが、皇帝陛下は鳥臭い厩舎長には用などなかろう、と追い返してやった。おかげで、あんたがたを助けることができたんだがな」
　ヤエトはシロバの背に埋めていた顔を上げた。
　彼をみつめる皇妹の眸、芳香に満ちた中庭の空気まで含めて、あの夜の記憶が一気によみがえる。
　――これは知っているかしら？
　独特の口調。ひそめた声と白い喉、ほそい指に鈍く光る銀の指輪。
「ウィーシャというと、あの……陛下の伝達官ですかな。すると、竜声を伝えているところですか」
　ジェイサルドは、伝達官が自分をとり戻しはじめた場に居合わせている。名を覚えていたらしい。
「竜声だかなんだか知らんが、この三日ほど、皇帝がどうした、帝国がこうしたと騒がしくてならん。あんた……ウィーシャはいずれ正気に戻るといっておったな？　正気とは思えんぞ」
　――陛下が皇女のところに遣った伝達官と、うまく連絡がとれなくなっているの……。
　皇女にかけられた術のことばかり気にして、伝達官の一件は頭から抜け落ちていた。
「太守はなんと？」
「だから、知らんよ俺は、偉いさんのことなど」
　不安が強過ぎて、気もちが悪い。吐き気がする。
　――どうする。
　どうにかするしかない。そのために、ここまで来たのだ。
「服の中まで雪が入ってしまいましたよ。冷たくて、

やっていられない……どうなさったんです？」
　ようやく門の内に入った商人は、見るからに雰囲気のよくない三人を眺めて、きょとんとした。
　派手な音をたてて、門が落ちた。巻き上げ機から駆け戻って来た少年が、ヤエトの袖を引く。
「太守様のご様子がおかしいというおふれがあり、今は伝達官様がすべてを取り仕切っておいでです」
「三日前から？」
「たしか、それくらいです。太守様のお姿は、もっと長いあいだ拝見していません」
「まさか……」
　商人がなにかいいかけ、両手で口をふさいだ。
「どうすればよいのでしょう」
　すがるように尋ねる少年の表情は、セルクにそっくりだ。
「なすべきをなし、なさざるべきは糺します」
　ヤエトは厩舎長を見た。老人は腕を組み、不機嫌に彼を見ている。急いで飛び出して来たのだろう、ろくに防寒具もつけていない。鼻と頬が真っ赤だ。
「ウィーシャの鳥は元気ですか」
「歳の割にはな。最近、ウィーシャが顔を出さんので、拗ねておるよ」
　ヤエトは少年の肩を摑むと、命じた。
「戻って、その鳥を連れて来なさい。あるじを取り戻す手伝いをしてやりましょう」
「尚書官殿は？」
「議場へ行きます」
「お供つかまつります」
　ジェイサルドが素早くヤエトの腕をとった。シロバとジェイサルドに両側から支えられて歩きだすと、商人が途方に暮れたように尋ねた。
「わたしはどうすりゃいいんです？」
「あんたは俺と来な。議場のことは、官吏どもにまかせておけばいい」
　厩舎長の声を背に聞いて、ヤエトたちは議場へ向かった。近づくにつれ、激昂した北嶺人たちの大声

が聞こえてきた。
「……から！　……など……見捨てるというのか」
「誰が……などと！」
「やめろやめろ！」
思わず大きく息を吐き、つぶやいた。
「戻って来た、って気がするじゃないか？」
シロバにすがったまま、ヤエトは議場に入った。
ジェイサルドは一歩下がって背後を守っている。
中は、殺気立った男たちでいっぱいだった。ほとんど全員が、声を限りに怒鳴りあっている。
「なんだ、この騒ぎは」
誰も気にとめない。ヤエトがそこにいることにさえ、気づいていないのだ。
壇上を見て、ヤエトは喘いだ。
凄まじい竜気に、視界が揺れた。静かに椅子に座っているその人物が、議場全体を支配している。
——伝達官だ。
正確には、伝達官に宿った何者かが、その場を完全に制御していた。
——誰がやっている。
皇女の姿が視えたように、ウィーシャをあやつっている者の姿が視えねばおかしい。だが、そこに視えているのは、北嶺人のあの娘自身の姿だ。
ヤエトは混乱し、議場を見渡した。
竜気のまばゆさが、ヤエトの視界を白く熱した。彼は眼をしばたたいた。その場にいる人々の姿が視えなくなる。誰も、いない。
「いい加減に俺のいうことを聞け！」
イスヤームの声がヤエトを現実に引き戻した。そちらを見れば、いつもはととのえている髭が、顔の下半分で爆発している。冗談のようだ。
「こんなことをしている場合じゃないんだ。集落がひとつ、沈黙したんだ。皆、考えろ！」
「馬鹿をいえ、敵は南から来てる」
「違う、麓の騎士団が俺たちを売ったんだ！」
「騎士団が北嶺を売ってなんの得がある。冷静に考

えろ！」
「そんなものは知るか、糞泥南方人どもにたぶらかされでもしたんだろうよ！　いいか、俺たちはここから一歩も出ちゃならないんだ。出たら死ぬ」
「殺されるぞ！」
「助けに行かねば、家族はどうなる」
「どこへ行けばいいんだ！」
誰かが吠えた。
「指示をくれ。たしかな指示を！」
ヤエトは手近の誰かに声をかけようとしたが、誰も彼の方を見ない。
そのとき、シロバが息を吸った。首に手をかけたヤエトがはっきり感じるほど、大きく。
そして、啼いた。
一気に場が静まり返った。
全員の注意は、今やシロバに向いていた。
――無条件で鳥第一の北方人め。
今度は、ヤエトの番だ。
「太守は何処（いずこ）におわす」
望んだほど大きな声は出ない。それでも、静まった議場にはよく響いた。
イスヤームが、人をかき分けて近づいて来た。
「なぜ、あんたがここに」
「今、帰着しました」
「ちょうどいい、あんたの意見も聞かせてくれ」
「郡太守を差し置いて、副官の意見など。どうしてここに、太守がおられぬのです」
「しかし――」
ふたたび、ヤエトは腹の底から声を絞り出した。
「太守は、何処におわす！」
イスヤームの動きが止まった。
「太守は休養中である」
壇上から、伝達官が答えた。扇子をもてあそびながら、ヤエトの方を見もせずに尋ねる。
「副官が、なぜ今ごろになって姿をあらわす？」
伝達官がひとこと喋るたびに、竜気が散乱した。

力が捻れ、はじけ、そして収縮する。揺れ砕ける世界の向こうに、ぼんやりと伝達官の姿が見えた。
「太守のご命令で、都に滞在しておりました」
「遠方よりよく戻ったな。部屋でゆっくり休むがよい。送って行け」
扇の先が動くと、背後に控えていた騎士たちが前に出た。ルーギンの姿がない。エイギルもいない。
「暫しお待ちを。わたしが都を発ちましたのは、北嶺に派遣された陛下の伝達官と、連絡がつかなくなったと聞き及んだためです」
伝達官は笑った。
「おもしろい冗談でもいっているつもりか？」
「貴様、無礼だぞ！」
騎士のひとりが剣把に手をかけた。
「無礼はどちらか！」
ヤエトは必死で足を踏み締めていた。
床が揺れる。天井も、壁も、とり囲む人々の顔も、なにもかもが激しく揺れている。大河の流れの中に放り込まれたようだ。
だが、音はない。
さっきまでの騒ぎが嘘のように、議場は静まり返っていた。ヤエトの声だけが、響き渡る。
「陛下の伝達官から本来の竜声を奪う行為は、臣民への欺瞞であり、帝国への叛逆であろう！」
伝達官は扇を広げ、口もとを隠した。
「語るに落ちたな、尚書官。皇帝の伝達官を断罪するそなたこそ、大逆をなす者」
「語るに落ちたはそちらであろう。太守は、と申したな。娘とは呼べるまい。たとえ歪めても恩寵は恩寵、真実の神より賜りし力でいつわりは語れぬ」
「詭弁を……」
「そなたは真上陛下ではない。誰だ？」
伝達官は扇で口を隠し、無言で彼を見返した。
もうひと押し、ヤエトは問いを狭めた。
「真上陛下ならば、すぐにもお答えになれよう。それができぬそなたは、陛下ではない。何者だ？」

「戯言は、聞き飽きた」
ぱちりと固い音をたてて、扇が閉じた。その先が、ヤエトに向けられる。
「成敗せよ」
伝達官の周囲にいた騎士の約半数が、ヤエトに向かった。先んじて、ヤエトの背後に控えていたジェイサルドが前に出る。
抜き打ちの一閃が、先頭の剣をはね飛ばした。シロバが威嚇の声をあげ、嘴を噛み鳴らす。
背後から腕を引かれ、ヤエトはよろけた。
「鳥に戦わせろ、あんたがいたら動けない！」
イスヤームだ。彼はヤエトを自分の後ろに回し、ほとんど放り投げるように手をはなした。床に転がったヤエトは、かろうじて吐き気をこらえた。
胸が苦しい。もう駄目だ、もうこの場で気を失ってやる、と思いながら眼を開けた。
――ああ、鳥が来たな。
混乱した議場の中を、鳥が駆ける。北嶺人も騎士たちも無視して、一目散に壇上へ向かう。
伝達官が、悲鳴をあげた。
背後に控えていた騎士が、前に出る。
ジェイサルドは蹴り、払い、拳でうちのめし、悪鬼の名に恥じぬ戦いぶりだ。シロバも奮戦して、ヤエトの方に来ようとする騎士を寄せつけなかった。
体重を支える役に立たない膝をなんとか動かそうとしていると、誰かがその手を摑んで引き上げてくれた。イスヤームだ。
「あの鳥はなんだ？　あんたの仕業か」
「伝達官の、鳥だ」
心臓が波立って、それだけ喋るのが精一杯だ。
「伝達官の？」
「ウィーシャ。北嶺の娘だ」
堂々と顔を晒しているのに、誰も気づかなかったらしい。幼馴染みのセルクも、親戚だというダニウも……いったい、皆はなにを見ているのか。
イスヤームが壇の方をふり返り、顔をしかめた。

「馬乗りどもから鳥を守れ！　さわらせるな！」
壇に近い北嶺人が、一斉に動いた。丸腰なのに、剣を構えた騎士に向かっていく。
「セルク！」
イスヤームが、落ちていた剣を拾って投げた。
壇からそう遠くない場所に立っていたセルクが、反射的に手を出し、それを受け取る。
まるでよくできた剣劇を見ているようだ。
奇妙なのは、セルクが動かないことだ。彼は呆然と剣を見、そしてヤエトを見た。
「なにをしている、セルク！　戦え！」
イスヤームがヤエトの手をはなし、前に出た。ヤエトはよろめいてシロバの方へ戻った。
そのあたりの騎士は、あらかたジェイサルドがかたづけていた。まだ戦える者は、用心深く間をとっている。
「ジェイサルド殿、あの鳥を、……」
咳込んで最後までいえなかったが、ジェイサルドの反応は早かった。床を蹴り、一気に壇上へ迫る。鳥に向けられていた剣の一本がたちまちはね飛ばされ、残る騎士の何人かは腰を抜かし、ひとりは転がり落ちた。そこへ、北嶺人がよってたかって押しつぶし、自由を奪った。
だが、伝達官の背後に立っていた騎士が、ここに至って勇気をふるい起こし、動いた。
唐突に、彼は剣を突き出した。
羽毛が舞い、血がしぶいた。
一瞬後、伝達官は扇をとり落として絶叫した。
言葉にならない叫びだった。
同時に、竜気が弱まったのを感じた。
どうやって壇上に到達したのか、自分でもわからないが、いつのまにかヤエトは伝達官の前にいた。
血が止まらない、という声が聞こえた。誰かが厩舎長を呼びに走り去る。紫の肩衣に、血が点々と飛び散っているのが見えた。鳥の、血だ。
叫んだ姿勢のまま、伝達官は硬直していた。

ヤエトはその手を握っていた。さっきまで扇を持っていた手だ。冷たかった。

「ウィーシャ殿」

反応はない。

白い頬にも、血が飛んでいる。手を上げるために意志の力を総動員せねばならなかったが、ヤエトはその血を拭い、冷えきった頬を両手で挟んだ。

「自分を明け渡しては、いけない」

伝達官の双眸を覗きこむ。どこかの能天気な詩人が奇蹟に喩えた、青い眸。だが今は、光を失い曇っている。生きながら死んでいるかのようだ。

誰かが膝をつく気配を感じたが、そちらを見るのも億劫だ。早く、すべてを終わらせたい。

「尚書官殿……俺は……」

セルクだった。ヤエトはささやくように答えた。

「名を呼んでやりなさい。彼女を助けるのです」

これは、自分の仕事ではない。

名前の魔法が力を増しているなら、幼馴染みや親族が呼ぶ素朴な行為にこそ、効果があるはずだ。

「でも、俺は――」

「太守は、どこです。騎士団長は？」

「ルーギン殿は……牢に」

ヤエトは頭を抱えた。辿り着いたら皇女の耳に名前をささやいて、それで成功するにせよ失敗するにせよ、すべて終わると思っていたのに。

「剣をお返しし、牢よりお出しせよ」

手近の騎士の肩を叩くと、その騎士は一瞬、なぜ自分がという顔をしていたが、すぐに走り去った。ヤエトの命令に従ったというより、シロバが嘴を鳴らして威嚇したのでしかたなく、という感じだ。

素晴らしい、と思いながら彼はシロバの首を撫で、武器を取り上げられた騎士たちに尋ねた。

「わたしは太守のもとへ行かねばならぬ。太守は何処におわすか」

騎士たちは顔を見合わせた。ひとりが、ようやく答えた。

「……妙なことを口走って暴れられ、手のつけようのない状況でしたので」
「いいわけは、よい。どこだ」
「……牢に」
そうでなくても熱があるのに、頭の中身が沸騰するかと思った。
「案内せよ」
騎士たちはまた顔を見合わせた。伝達官が倒れ、正気に戻ったのだろう。自分自身のそれまでの行動に、当惑しているように見えた。
皇家の恩寵は通信のみならず、人心をあやつる力をもそなえていると歴史は語っていたが——そのことも失念していたようだ。何百年も前の話だ。
——なんでもかんでも覚えていられるか。
彼には、もっと重要な使命があるのだ。
「俺が行こう」
イスヤームだった。
無言でヤエトを抱え上げたジェイサルドからは、血の匂いがした。

2

牢にあてられているのは、わずかな部屋しか存在しない四層だった。
途中、事態を把握していない兵と揉み合いになったりもしたが、議場から追って来た者が加勢したので、そう時間はかからずに通ることができた。
あの伝達官はおかしかった、とひとりがいうと、皆がうなずいた。一緒にいると、どんどん流される。自分の意見がもてなくなるのだという。
「イスヤーム殿が頑固に反対反対と唱えていなければ、とうに議論は終わってますが」
「反対とは？」
尋ねたのはジェイサルドだ。ヤエトは疲れ果て、頭を上げる気力もない。
「伝達官殿のお指図に、です。出兵に反対、捜索隊

を出すのに反対……あとはなんだったかな」
「たしか、姫様を休ませるのにも反対したはずだ。危急のときに、太守が同席しないなどおかしいと」
「まさか牢に入れていたとは」
北嶺人たちは、皇女が部屋で休んでいるものと思いこんでいたらしい。ジェイサルドが尋ねた。
「いつからだ」
「姫様がおかしな様子をお見せになったのは、……五日くらい前だったか？」
「たしか、それくらいだ。なにやら……自分は国を滅ぼしてしまう、などとおっしゃって」
違う、と唸るようにイスヤームが割って入った。
「国じゃない、この世だ。このままでは、すべて滅びてしまうと錯乱状態になられた」
「朝議の途中で不意に肩を抱いて、うずくまってしまわれたのです」
やはり、間に合わなかったのか。
皇妹が正しく、彼の努力はすべて無駄だったのか。
――それがなんだ。
自分はなすべきことをなす。それだけだ。
雪の吹きつける中庭へ出ると、ジェイサルドは案じるようにヤエトを見た。
「廊下でお待ちになりますか。儂が責任をもって殿下をお連れしましょう」
「いいえ」
ヤエトの意向を確認すると、ジェイサルドはくどくど止めたりしない。行くぞと周囲に声をかけ、歩きはじめた。
闇をかき分けるように、かれらは進んだ。
途中、数人の騎士が前にあらわれた。いきなりつっかかった北嶺人を躱し、敵ではありませんよと両手をひらひらして見せたのは、ルーギンだった。
ヤエトを見てもおどろいた風ではないのは、誰かに聞かされていたのだろう。ジェイサルドの存在の方が、意外だったらしく、眉を上げて尋ねた。
「貴殿がなぜ、ここに？」

「皇妹殿下より、尚書官殿を無事に北嶺まで送り届ける任を賜りました」
「厄介なことをまかされましたね」
微笑んで、ルーギンはヤエトに視線を向けた。
熱に浮かされた視界はやたらと光りかがやいて、ただでさえ美形のルーギンが、神々しく見える。
「無茶をなさる。冬の北嶺へ戻って来るなど」
「……太守のところへ」
「大丈夫、お連れしますよ」
「余人を交えず」
「おっしゃるように」
ルーギンに再会した中庭から、建物の中に入るあいだの記憶がとんでいる。気を失ったのだろう。
予定では、とっくに倒れているはずだったのだ。
「この中へは、わたしが。ご遠慮ください」
ルーギンは丁重に、しかし有無をいわせずジェイサルドからヤエトを引き取った。
目の前の扉がゆっくりと開くのを眺めながら、あ、とヤエトは思った。
——あの夢だ。
もちろん、夢ではなく現実だ。それとも、夢なのだろうか？　自分が正確に現実を認識できているのかどうか、判断がつかない。
鏡ではなく、円い窓があった。鎧戸は開かれ、硝子もなく、雪片が室内を舞い飛んでいる。
誰かが灯火をさし入れた。
華奢な手首にまとわりつく枷の黒さが、目に染みるようだった。
「お暴れになったので。窓も……閉めてもご自分で開けてしまわれて」
誰かが弁解していたが、それはヤエトの心の表面を滑り落ち、奥までは届かない。お外ししろ、とルーギンが命じ、重たい音を発して手枷は落ちた。
「皆、退がれ」
身動きしない皇女の前にヤエトをそっと下ろすと、ルーギンは真顔で告げた。

「よくわかりませんが、幸運を」
扉が閉じた。
うずくまる小さな身体を、ヤエトはみつめた。
床に残された灯火は風に揺れ、彼の視界を混乱させるばかりだった。
影が踊り、銀色の雪片が踊る。皇女の黄金の髪も今は褪せ、骨のように白く見える。世界は色を失って、闇の底に沈んでいくように思われた。
皇女の周囲に竜気はなく、絶望の匂いが濃い。
——知っている。
この絶望の色と形を、ヤエトは知っている。
腕を上げようとしたが、たとえようもなく重い。まるで鎖に繋がれているかのようだ。
「太守」
指先が、皇女の手にふれた。冷たかった。
北嶺ではじめて幻視に囚われたとき、聞こえてきたのは、皇女の声だった。時間の霧を切り裂いて彼の耳に届いたことを、はっきり覚えている。
——手が氷のようだ。
この手と手を繋いで過去の情景を視せたことを、思いだした。怖いのだ、と皇女は彼に教えてくれた。呼び声が怖い——あのとき、気づいていれば。
名被せの術が完成していれば、戻す方法はない。それだけは、皆が確言した。
皇女の手を握ったまま、どうしても口を開くことができない。なんということだ、と彼は思った。自分は怯えている。皇女が答えなかったらと、怖じ気づいている。
——怖がっていてどうする。やってみせろ。
間に合ったかどうか、呼んでみねばわからない。預けられた重たい荷物を、皇女に返すため——そのために、戻って来た。帰って来たのだ。
さあ、とヤエトは自分に命じた。
——呼ぶんだ。
ヤエトは身体を傾け、皇女の耳に口を寄せた。
「ミムウェ様」

頬と頬がふれあい、くちびるが、かすかに耳をかすめた。どちらもひどく冷たい。

皇女が冷たいのではなく自分が熱いのだろうか。身体が燃えるようだ。

目眩がひどくなって、ヤエトは皇女の肩に身を預け、くり返した。

「ミムウェ様」

引きずられる、と思った。

熱のせいなのか、それとも邪術に対抗するために起きた現象だったのか。締め上げられた、と感じた。無数の棘に苛まれているようだ。息苦しい。手足の先から感覚がなくなり、全身が痺れ、身体が鉛のように重くなる。

これが皇女を捉えている力だ、と思った。

引き剝がすための精神力も、体力も、もはや自分には残っていないのではないかと彼はあやぶんだ。

皇女は強い。我に返ることさえできれば、呪いと戦うこともできるだろう。その時間稼ぎをするあいだだけでもいい、呪師が被せたこの絶望を、自分の方に引き寄せることができれば。

「ミムウェ様」

皇女の身体がふるえた。

――今だ。

その震動で揺らいだものに、ヤエトは摑みかかった。そして引いた。

ほかに説明のしようがない。幻視を制御するために、ぎゅっと握るとか放すとかいう表現しかできないのと同じだ。今の彼は尋常の世界を突き抜け、呪術の場へ踏み込んでいた。皇女の名を唱えることで、繋がってしまったのだ――だから、彼は引いた。

同時に、その絶望の本来の持ち主が歩んだ人生のすべてが押し寄せた。

過去を視ることなら、ヤエトは慣れている。だが、こんな体験ははじめてだった。この世に生まれ落ちた瞬間から、最後の呼吸までのすべて、ひとりの人物を構成する体験を、一気に感じとらされた。



——これが、名前の呪力か。

皇女に被せられようとしていた名前と、その名がそなえる要素。凄まじい後悔と執着に、ヤエトは自分を見失いそうになった。

——償おうとしているのか。

向こうには、深い闇があった。闇に呑みこまれる細い糸が、呪師の気配をかすかに伝えている。行け、とそれはうながす。行ってやり直せ、と。

「違う」

無意識に、声が出た。

——あんたがたは、死者の声を聞くのかね？

厩舎長の声が耳によみがえる。

北嶺の民は正しい。死者が言葉を語り、地上に影響を及ぼすのは悪いことだ。今ならわかる。

皇女にとり憑いた古い絶望は、わずかな共通点を探しては爪を立て、食らいついたのだろう。身内の裏切り、逃れられぬ立場。自分たちは同じだとささやきながら、皇女の名を奪ったのだ。

ヤエトは叫んだ。

「違う！」

絶望の形は人それぞれだ。ひとつ似ているからといって、すべて似たものではあり得ない。

——彼は、恐れている。

なにを？

——世界が終わってしまう。

終わっていない。世界はここにある。これからも、つづいていく。

「去れ！　ミムウェ様は、そなたとは違う！」

気がつくと、彼は絶望の名を手放していた。もう、その人生は視えない。なにも感じられない。

荒い息を吐き、ヤエトは引きちぎられた呪力の残滓を見据えていた。

輪郭は歪み、すり切れている。この名の本来の持ち主は、とうに命を落としているのだ、と彼は思った。ここにあるのは、その粗悪な複製に過ぎない。

すがりつくものがなければ、消えてしまう。皇女

という依り代を失えば、この場には留まれない。

哀れな、という想いが胸を過った。絶望の内に命を落とした上、それを呪師に利用され……なんという救われぬ運命か。

「すべては、遠い昔に終わったこと――」

つづく言葉は、勝手に浮かんできた。

「先のことは、その時代の者が引き受ける」

彼自身が口にしたというより、誰かが彼の口を借りて喋ったような、そんな感覚をともなっていた。

せつない吐息のような音を残して、呪力は消えた。深い闇の彼方に繋がる紐帯を辿り、呪師のもとへ戻っていくのだろうか。消えたとは思えなかった。

ヤエトは大きく息を吐いた。頭が回らず、なにも考えられない。

未だ動かない皇女の名を、ヤエトは呼んだ。

「ミムウェ様」

自分は間に合ったのか、それとも遅きに失したのか。古い名前を剝ぎ取っても、皇女の本来の名が失われていたら、どうすればいい？

「ミムウェ様……」

彼の腕の中で、皇女の身体が身動ぎした。そして、小さな声が聞こえた。

「うん」

ほっとすると同時に、ヤエトは困惑した。

――腕の中？

ヤエトは、自分が皇女を抱きしめていることに気がついた。いつこうなったのか、まったくわからない。おおかた、呪師の力に対抗するため無意識にすがりついたのだろうが、困ったことだ。

まずい、どうやって身を引くのが自然だろう、と考える暇もなく、胸元から皇女の声が聞こえた。

「ヤエトか」

「はい」

反射的に答えてから、もういいかな、と考えた。そろそろ、気を失ってもかまわないだろうか――いや、このまま昏倒すると、皇女がつぶれてしまう。

もう少し頑張らねばならない。つまり、不自然だろうとなんだろうと身を離し、ひとりでつぶれる。それを目標にしよう、と思った。

——あとは知るか。

「まことか。ヤエトなのか」

「ただ今、帰着いたしました」

「……遅いぞ」

「申しわけ——」

「謝るな。寒くてたまらん。ここは、どこだ？」

世界が揺れていた。ふるえているのだ、と思った。自分がふるえているのか、皇女のふるえが伝わって来ているだけなのか。

ヤエトの顎の下で皇女の肩が動き、向こうから身を離してくれたとわかった。

心の底からほっとしたところを、下から覗きこまれた。少しやつれている以外は、彼の知る皇女そのものだった。

——間に合った。

今ごろ、実感がこみあげてきた。

ほとんど感動しかけたヤエトに、皇女は命じた。

「寒いといっているのだぞ？　なんとかせよ」

「……わたしの外套を、お取りください」

「病人から服を奪う真似などできるものか」

自分は外套など不要なのに、とヤエトは思った。喉も、鼻の奥も、耳も、すべて熱い。

皇女は大きく息を吐いた。

「とにかく、なにがどうなっているのかを説明せよ」

ヤエトは散らばっていこうとする思考をなんとかまとめ、言葉にしようと努力した。

「陛下の伝達官ですが、陛下以外の者にあやつられていたようです」

皇女は眉を上げた。

「まさか」

「太守は名被せの術をかけられておいでした。もう少しで、成功するところでしたが——」

「わかっている」

「――伝達官にもなにか起きたのでしょう。議場で北嶺の者どもに支配を及ぼして、凄まじい竜気を発していました」
「過去形か。それは終わったのだな？」
「決着がついたと……思いますが」
「まだ、なにかあるのか？」
「北方の蛮族が攻めて来るものと思われます」
長い説明で息が切れた。ヤエトの顔をじっくり見ると、皇女は眉根を寄せた。
「それでしまいか？」
伝えたいことは山ほどあるが、どこまで話すべきかの判断も、今のヤエトには難しかった。
「おそらく……」
「では、休め。ひどい顔だ」
答えようとしたが、もう口を動かすのもだるい。
崩れかかったヤエトの上体を支えると、皇女は彼の腕をきつく摑み、一瞬、真顔で眼を覗きこんだ。
「死ぬな」
その命令だけは困ると何回教えればよいのだろう。それこそ、死ぬまで覚えてもらえないのか。
――困ります、太守。
そう思っただけで言葉にはならないまま、ヤエトは気を失った。

3

目覚めると、枕辺にナオの姿があった。
ヤエトが眼を開いたのを見ると、ナオは彼の口に水の飲み口をあてがい、くちびるを湿らせた。熱でひび割れて粘つき、開かなくなっていた口が動くようにしたのだ。
「お気の毒ですが」
ナオは額を冷やすための布を水に浸しながらつぶやいた。ご臨終です、とつづきそうな暗い調子だ。
「また生き延びたようですね」
ヤエトが咳込むとナオは立ち上がり、彼の視界の

外に消えた。誰かと話をしているようだ。
身体が軋んだ。寝ているのに、目眩がする。全身を倦怠感が包んでいて、どこを痛いとかつらいとか感じてよいのか決めかねた。
とにかく、ナオがここにいるのだから、皇女は無事なのだろう。
それとも、あれは夢だったのかもしれない。
皇女を救ったというのは、彼の願望がもたらした夢で、現実にはまだ北嶺に着いただけ、いきなり倒れて寝込んでいるのかもしれない。
不安に胸が苦しくなり、呼吸が荒くなった。
空気が動いた。ぼんやりと眼を開けると、ヤエトを見下ろすナオと視線が合った。
「しっかりなさい。なんのために戻って来たの」
皇女の名を呼ぶために帰ったのだ。それはもう果たしたのではなかったのか、やはりすべては夢だったのか……と思うあいだにまた意識を失った。
次に正気を取り戻したときは、もう少しまともにものを考えられるようになっていた。
今回は、痛い場所ははっきりしている。首筋だ。首の後ろから後頭部にかけてがちがちに強張り、腫れ上がっているように感じた。かすかに吐き気も覚えたが、それもひどい頭痛のせいだろう。
まず見えたのは、眼を閉じたジェイサルドの顔だった。なにか考えているようだったが、彼はすぐ、ヤエトが目覚めたことに気づいた。
「まだお寝みになっていた方がよろしいですぞ」
「状況は」
「今は、お倒れになった次の次の朝です。夜は明けているはずですが、吹雪で真っ暗、視界はほぼありません。外部からの連絡はなし。皇女殿下はお元気です。……どれくらい、ご記憶ですか？」
「自分がやったことは、だいたい……」
ジェイサルドはヤエトの背に手をすべりこませると、彼の身体を起こし、水を呑ませた。
「伝達官は、おおむね正気に戻りました。ただ、皇

帝陛下との繋がりが切れてしまったのではないかと申しております。元伝達官、というべきですかな」
「鳥は？」
「伝達官の？」
ジェイサルドがヤエトの表情から肯定の意を汲んだように、ヤエトもまたジェイサルドが答えるより早く、その結末を察していた。
「死にました。失った血が多過ぎたようです」
答えながらヤエトを横たわらせ、上掛けを直して肩をくるみこむ。
「シロバは」
思いついて確認すると、ジェイサルドは少しおもしろがっているような顔を見せた。
「貴殿の鳥のことですかな？　特別にうまいものでも食べさせてやれと厩舎長に申しつけたのですが、鳥の食べ物は俺が決める、帝国の馬乗りどもに鳥のことがわかってたまるかと、却下されました」
厩舎長の中では、馬乗りたちの評価はかなり下がっているだろう。この一件で、ヤエトへの好意も失われたかもしれないな、とちらりと思った。
ウィーシャの鳥は、彼が殺したも同然だ。
「貴殿は、お休みになれましたか」
「昨日はずっと寝ていましたよ。長く寝ると、腰が痛くていけません。お若いかたにはわからんでしょうが、歳ですな。尚書官殿は大丈夫ですか？」
ヤエトは微笑んだ。
「どこもかしこも痛いです」
「一時は、お命があやうかったのです」
そうですか、とヤエトは口の動きだけで答えた。ナオの言葉を借りれば、今回もまた彼は生き延びてしまったのだ、残念ながら。
ところで、とジェイサルドが口調を変えた。
「ひとつ、お尋ねしたいのですが。伝達官も呪師にやられたとお考えですか」
「いえ、……違うでしょう」
伝達官が心を繋ぐ相手は、皇帝なら皇帝、皇女な

ら皇女と決めたら変更できないものだ。皇家の恩寵は、呪師のように外から被せるのではない。圧倒的な質量の意志を押しつけ、相手を自分の鋳型にしてしまうようなものだとヤエトは理解している。

今回の一件では、皇帝とは別の誰かがウィーシャの中にあらたな鋳型を作った。そのため、元からあった皇帝の鋳型は変質し、徐々に使えなくなっていったのではないか。

まったくの仮定ですがと前置きして、ヤエトは自分の推測のあらましをジェイサルドに伝えた。

「なるほど、では呪師とは関係ないと」

「皇家の恩寵は、基本的には血族同士で心を繋ぐ力です。血の繋がらない者にも安定して発動させるのが、伝達官という機構……それを一歩推し進めて、あらたな鋳型を伝達官の中に作ってしまおうという思いつきを得たのは、無理に名を被せる呪師の術を間近に見たからかもしれません」

「様子がおかしいのは、この北嶺の伝達官に限らぬそうですが……それも皆、同じことだと？」

確認するようにヤエトを見下ろして、ジェイサルドは一瞬、口をつぐんだ。

「失礼、ずいぶん喋らせてしまいました。お疲れではないですかな？　なにか、お召し上がりになれますか」

「いや、まだ……」

「厨房で重湯でも作らせましょう」

そのまま立ち上がり、彼は部屋を出て入った。

ヤエトが病人で、無理はさせられないということを、不意に思いだしたようだ。

あたりはやけに静かだ。風が弱まったのだろうか、吹雪の音も聞こえない。

ヤエトは目を閉じ、息を吐いた。まだ熱が下がりきったわけではないとわかる。吐息がこんなに熱くては、駄目だ。

静寂の向こうから悲鳴が聞こえたような気がして、はっと目を開いた。

――空耳か。

あれはウィーシャの悲鳴だ。

力の容れ物として翻弄された彼女を、哀れだと思った。白い頬に飛んだ血を、呆然と見開かれたあの眼に宿った悲嘆を、思いだす。

この世に呼び戻されて、はたして彼女は幸せだといえるのだろうか。

それをいえば自分もそうだ。意識を取り戻してよかったと、心の底から思えるだろうか？

――疲れた。

残念ながらというナオの暗い声を思いだして、笑いたくなった。痰のからんだ咳をふたつほど出して、なんとか堪える。

死の縁から這い上がってはじめに聞く言葉があれでは、生き返るのをやめたくもなる。

そればかりか、なんのために戻って来たのかと叱られたはずだ。

眼を閉じてから、そうだった、と思いだす。

――太守に申し上げねばならない。

ジェイサルドが戻って来たら皇女に伝言を頼もうと考えながら、ヤエトは眠ってしまった。

次に目覚めたのは、薬湯を飲むために起き上がらされたときだった。身体を支えているのはジェイサルドだが、椀を持っているのはナオだ。

「ゆっくり飲んでください」

ヤエトが正気に戻っていることに気づいているのかどうか、ナオの口調はずいぶんやさしい。

うながされるままに飲んでから、その腕を摑む。

「太守にお目通りを願いたい」

「もう夜更けです。明日になさいませ」

「起こしてもらえますか」

「毎朝、お起こししていますよ、お薬の時間に。あなたがすぐに寝てしまわれるだけです」

「お伝えすべきことがあるのです」

「左様ですか。では、お好きにどうぞ」

空になった椀を手に、ナオは部屋を出て行った。

「ジェイサルド殿、お願いします。是非」
「まだ寝ておいでの方が賢明だと思いますが」
答えながら、ジェイサルドはヤエトの背をゆっくりと寝台に戻し、元の通りに横たわらせた。
「賢明とは縁遠くなりました」
「復縁なさるとよろしいですな」
ヤエトがため息をつくと、ジェイサルドは笑って後ろをふり返った。
「ちょうどよい、交替しましょう。お言葉に甘えて、儂は寝ませてもらいます」
「ご苦労」
その声に、ヤエトはぎょっとして寝台から跳ね起きた。とたん、激しい頭痛に襲われて後悔することになる。
ジェイサルドは一礼して部屋を出、扉を閉めた。その扉の前に、人影がふたつ。背が高い方はルーギンで、低い方は皇女だ。
「ルーギン、寝かせてやれ」
「御意」
「とんでもない、太守の御前で」
「わたしが寝ていろと命じたのだ。起き上がったら命令違反だと思え」
ルーギンが、ヤエトの上体を寝台に押し戻しながら諭した。
「お伝えすべきことがあるそうではないですか。くだらない口喧嘩に浪費する時間も体力もないのでは？　顔が真っ白だ、とても長くは喋れませんよ」
ヤエトをおとなしくさせると、彼は例の皇妹から拝領した椅子を引いた。皇女がやって来てすとんと座るなり、前置きなしで話しはじめた。
「川沿いの、もっとも下流に近い村からの連絡が途絶えているのは、知っているか」
そういえば、議場に辿り着いたときに、そんなことを聞いた気がする。
「連絡……とは？」
北嶺人はこの天候でも平気で出歩けるのだろうか。

もし可能だといわれても大しておどろかないが、などと考えていると、ルーギンが種を明かした。
「《雪鳩》というのがいたでしょう。姫様が姿をくらましてしまわれたときに、北嶺人たちが出して来た鳥です。各村に飼われていて、代表はそれぞれ自分の村の《雪鳩》の消息がわかるのだそうです」
「下流の村というと……イスヤームの？」
「よく覚えてますね」
感心したようにうなずいたルーギンの後を、皇女がせっかちに引き取った。
「皆なにやら切羽詰まった表情だったが……気配が消えたというばかりで、説明が要領を得ぬのだ。なにが起きたかは、よくわからぬと。ひとまず様子をみていたが、もう三つもの村が沈黙したという。わたしが正気を失って三日後と、そして昨日」
自分は何日寝ているのだろうと考えながら、ヤエトは尋ねた。
「位置は？」
「国境の川沿いに、上流へ向かっている」
ヤエトは地図を思いだそうとした。流れを半分ほど制覇されたということか。
――湖の方には、まだ到達していないか……。
ちょうどイスヤームの村があるあたりで、川はもう一本の流れと合流している。これはセルクの村がある湖の方から来る流れで、北嶺の中心部を流れているといっていい。
「これは、そなたの申しておった、北方蛮族の襲撃なのか？」
寝ていた自分になにが答えられるというのかと思ったが、根が律儀なのでつい真面目に考えてしまう。
「わかりませんが……村三つともなれば、人為を疑うべきかと存じます」
「調査のために兵を出すべきか？」
「この天候でも行けるといっているのですか？」
答えたのはルーギンだった。
「できると主張する者はいる。だが、危険は大きい。

わたしも含めて、大多数は無理だと止めたのだけど……肝心の、姫様のお気もちが決着しなくてね。それで、そんなにご不安なら尚書官殿のご意見を伺いましょうと申し上げて、今、ここにいると」

「……ナオに叱られた。せっかく黄泉路を引き返させたのに、また突き落とすつもりか、と」

皇女の口調はかなり萎れていたので、よほど厳しく叱られたのだろう。

「吹雪がおさまる気配はないのですか？」

「ない」

ヤエトは息を吐いた。考えを凝らそうとすると、頭痛がひどくなる。

「わたしの判断を、あまりお信じいただいても困るのですが――熱にうかされた病人ですので」

「ナオにもいわれた。今のそなたはものの役に立たないから諦めろと」

そこまでいわなくてもよいのではなかろうか。

「病人の戯言と聞き流してくださっても結構です」

「前置きが長いぞ」

「吹雪で確認のしようもなく、次々と連絡が途絶えるのは不自然です。確実に、なにかが仕組まれているはず。しかし、策もなく兵を出せば、相手の仕掛けた罠にはまりこむとお考えになる方が賢明でしょう。籠城なら負けはしません。内側から崩す作戦も失敗したものと考えていいでしょうし、冬が終われば麓から援軍も呼ぶことができます」

「兵を出すわけではない。偵察をさせるだけだ」

「偵察にしても、相手が見せたいものを見せられるに留まりましょう。すると、次の手は相手が打たせたい手を打たされることになります」

吹雪だ、とヤエトは思った。吹雪がこちらを制御する。辿る道筋も、見るものも、相手が選ぶ。

「つまり、村に人を遣るのは反対と」

ルーギンが、ヤエトの意見をかるくまとめた。

「そうなります」

「ところで、姫様に申し上げたいことがあるとか」

暗に、自分は座を外そうかと提案している。
ヤエトは皇女から視線を外し、ルーギンを見上げた。騎士は問いかけるように眉を上げた。
「今回の一件、おそらく三の君が裏で糸を引いておいでだと、わたしは考えております」
ルーギンは、ほんのわずか息を詰めた。
「証拠は？」
「ありません。ですが、三の君のお邸に呪師が出入りしているのを見ました。わたしだけでなく、亡くなった伝達官も――」
喉に痰がからんで声が詰まった。彼が感極まったと思ったのか、礼儀正しく視線を逸らしてくれた皇女とルーギンを観察しながら、さて、とヤエトは気を引き締めた。
どこまで説明するべきか。
ルーギンにも、ある程度は事実を教えておかねばならない。ヤエトがまた黄泉路へまっしぐら状態になったとき、事情を知る者がいなくては困る。
「失礼しました。その呪師が、皇女殿下を支配下に置くという意味のことを口にしていたのを漏れ聞きましたので――それで、急ぎ帰ったのです」
「漏れ聞いた？　確かなのですか」
「確かな情報ですが、出所は明かせません」
皇女は無言だった。ただ大きな眼をいつも以上に見開いて、じっとヤエトをみつめていた。
ルーギンは額に手をあてた。
「証拠もない、情報の出所も明かせない……自分がなにをしているか、わかっているのでしょうね？　だいたい、三の君になんの得があるのです。帝位を狙うご兄弟を陥れるならともかく、妹君ですよ」
味方にしても大した意味がないと、兄は妹を見限ったのだ。
それなら最大限に利用しよう、と。
思ったままを口にするほど無神経にもなれず、ヤエトは言葉を選んで答えた。
「引き換えに、お手に入るものがあります」

「北嶺ですか？　しかし、当地の価値はいかほどもないと、いつかおっしゃっていたではないですか」
「北嶺は、忠誠を釣り上げるための餌に過ぎません。三の君のお邸に、赤毛の男たちが出入りしていたという話があります。北嶺より北の蛮人だと――」
「ヤエト」
皇女に名を呼ばれ、はい、と彼はそちらを見た。
やはり、横になったままでいるのは妙な気分だった。どうすれば畏まった姿勢ということになるのかわからなくて、落ち着かない。
「我が伝達官を殺したのも兄上なのか？」
「おそらく」
「蛮族の侵入も、兄上の指図なのだな？」
「わかりませんが……」
「わからぬなどという返事は必要ない！」
不意に激昂し、皇女は立ち上がった。椅子が背後に倒れたほどの勢いだ。
「姫様、お静かに」
「すべて憶測に過ぎません、太守」
「わたしがここにいなければ、北嶺は攻められなかったのだ。そうであろう！」
考えてもいなかったところを攻められたのは、ヤエトの方だ。なるほど皇女ならそういう風に考えても無理はないと、心得ておくべきだったのだが。
「お静まりを。北嶺と北方蛮族との諍いの歴史は古く、数限りなくくり返されて来たことです。太守おひとりが責めを負うことではありません」
皇女は苛立たしげに床を踏み鳴らすと、もうよい、と叫んで部屋を飛び出した。ルーギンは扉の先まで歩を進めたが、控えていた副官に声をかけて皇女を追わせると、自身は室内に戻って扉を閉めた。
倒れた椅子を直し、腰を下ろす。
「もう少し、話せますか？」
「病人の戯言でよろしければ」
「三の君が姫様を陥れようとなさっているのは、たしかなのですか？」

「わたしはそう確信しています、としか。それより、貴殿にはお礼を申し上げねば」
「なぜ？」
「脱出できたのは、皇妹殿下のお力添えあってのことです。ここまで無事に来られたのも、ジェイサルド殿のお力が大きい」
ヤエトの予想に反して、ルーギンは皇妹ではなく、もうひとつの人名に反応した。
「あの男は化け物ですよね。……彼はね、悪鬼と契約をかわしたといわれているんですよ。不死身の肉体を手に入れるために、人の心を失ったとね」
どうやら、ルーギンもジェイサルドの前身を知っているらしい。それはそうか、と思った。恋する相手の身辺警護をまかせている相手だ。
「盗賊団の名ではなく？」
ルーギンは微笑んだ。
「もちろん、盗賊団の名はそこから来ているんですよ。箔をつけるための作り話だそうですが、実話であってもおどろかないな」
「皇妹殿下もご重用なさっていたのでしょう。わたしに貸してくださったのも、貴殿のためですね」
「いや、それはない」
こと皇妹が関わると恋する乙女のようなルーギンにしては、やたら割り切った回答だ。
ぽかんとしているヤエトに、彼は淡々と告げた。
「あのかたにとって、色恋と政治の駆け引きは別物ですよ。そして、優先なさるのは後者だ。わたしなど、ちょっと楽しいおまけ程度のものですよ」
それはどうかと思ったが、反論する元気はなかったので、流すことにした。
「太守が呪師にとらわれてしまったら、始末をつけるためかとも思ったのですが」
ルーギンは寝台に肘をつき、顎を支えて唸った。
「どうかな。それもあるかもしれない。でも、それだけじゃない、といったところかな」
「三の君にも援助をなさっておいでなのですか」

「ラキニー様がですか？」
　ヤエトがうなずくと、ルーギンは苦笑した。
「誰にでも。三の君に限りませんよ。全員に満遍なく愛を、そして貸しを。取り立ては唐突でね……利子が嵩んで命で支払わねばならないこともある」
「はあ……」
　この男の趣味も変わっている……と思っていると、ルーギンはにやりと笑った。
「変わった趣味だな、と思ったでしょう？」
「ええ、いや、まあ……。それより吹雪ですが」
「吹雪がどうしました」
「北方の蛮族は、天候をあやつる力があると聞き及びました。とくに神官は《雷霆の使者》といって、雷を自在に呼ぶとか」
　ルーギンは顔をしかめた。
「真面目な話ですか？」
「太守にも申し上げたかったのですが……」
　あんな激烈な反応をするとは思わなかったので、報告の順番をあやまった。
「わたしがお伝えしておきましょう」
「恩寵の力が強まっているようなのです。つねならぬ脅威となった呪師の力然り、当地で伝達官が一同を支配し得たのもまた、そのせいかと」
「……その話も、証拠はない？」
「ありません」
「まったく……面倒なことばかり教えてくださる」
「ですから、吹雪が都合よくやむことはないでしょう。もし天候が好転したら、罠を疑うべきです。太守はご自分を責めておいでのようでしたが、罪悪感から兵を出しても、被害が増えるばかりです」
　ルーギンは立ち上がり、ヤエトを見下ろした。その表情は、少し哀しそうだった。
「わかりました。恩寵の力が強まっていることは、お伝えします。ですが、それ以上の説得は、先生のお役目ですよ。騎士は本来、命じられたら死地へでも赴くという価値観で行動するものですから」

「では、病人に説得しろと？」
「尚武尚書と官がふたつに分かれているのは、相互に補うためではないのかな。竜種を大空に羽撃かせるためには、左右の翼が必要かと。もう何日、わたしがひとりで頑張らされているとお思いです」
「牢の中で、ずいぶん休養をとられたようですが」
ああ、とルーギンはうっとりするような笑みを浮かべて答えた。
「太守が囚われたことに抗議しようと、牢に入ったんだけどな。感激してくれたのは女官ばかりで」
一瞬、頭痛を忘れた。
「ご自分で入られたのですか……」
「皆、差し入れ持参で訪ねてくれてね。むさい男たちは来ないし、隠居ってこういうものかな。だったら、わたしも早く隠居したいな」
「いや、……現役の方がもてると思いますよ」
「とにかく、気を入れて養生なさい。さっさと治さないと、わたしが先に隠居してしまうよ」
では、と一礼して騎士は去った。
ヤエトは痛む頭に気をつかいながら寝返りをうち、腰を捻って背中の筋を伸ばした。寝てばかりいると、全身がこわばってしまう。
――これで謎はひとつとけたが。
ルーギンが勝手に牢に入った理由は、だいたい見当がつく。皇女が異常な状態だったのは事実とはいえ、彼の立場ではあるじの拘束を認めることもできまい。さりとて、抵抗すれば味方に犠牲を出し、遺恨が生まれるばかりだっただろう。
みずから入牢するのは、賢明な判断だったといっていい。しかし――。
――セルクは、なにをしていたんだ。
皇女以外の太守など認めないとまで断言していたくせに、手をつかねて眺めていたのか？
そういえば、あの《雪鳩》をあやつっていたのがセルクだったのかどうか、確認していない。
指を突つかれて痛かったことを思いだし、苦笑し

た。つくづく、勢いだけはある男だ。
どちらの手だったか、と考えながら両手を眺めてみたが、薄暗い室内ではよく見えず、悩んでいるあいだに寝入ってしまった。

4

さらに三日ほど養生して、ようやくヤエトは床を払うことができた。ナオは不服そうだったが。
「また倒れられても、今度はわたしは存じません」
本来はまだ寝ているべきだという意味をこめて断言しながら、それでも起き上がることを許してくれたのは、皇女のためだろう。
閉塞した状況に、皇女は参っているようだった。
皇女だけではない。城にいる官吏のほとんどが、現状に疲れていた。同朋を失ったのではないかという恐れ、敵の正体が見えないことへの怯え、そしてなにも行動できないことへの鬱屈。
ちょっとしたことで諍いが起きかねない。
なんとかした方がいいな、とヤエトは思った。
朝議の場で四つめの村の鳥が沈黙したという報告がなされると、した方がいいな、などという暢気なことはいえない状況になった。
「兵は出さないと決まっているんだ、今さらなにを話す必要がある？」
大声でいったのはダニウだ。伝達官の正体が出奔した従妹だとわかっても、あれはもはや一族の女ではない、と断言したらしい。
「それとも、気を変えて兵を出すか？　出すにしても、どうせ北嶺の人間を使うんだろうな。平地の人間に、冬の北嶺は無理だ」
「その平地の人間が三人も、城に辿り着いたがな」
言葉を返したのはグランダクだ。ジェイサルドが教えてくれたのだが、ヤエトが何日で議場に姿を見せるかで賭けをはじめて、セルクと殴り合いの喧嘩になったらしい。

その創意と元気を別の分野に応用してほしい。
「馬鹿らしい。どこの出身だろうと、この吹雪には勝てん。死にに行くようなものだ」
イスヤームが唸るように答えると、ダニウは鼻で笑った。
「腰抜けのいいわけか」
「自信があるなら、おまえが行け。骨くらいは拾ってやる、雪が溶けたらな」
「ずっと閉じこもっていて満足なのか。いつまでも殻の中にいられると思いこんでいる雛みたいだ」
「俺が雛なら、おまえは卵以前だな。人を煽る以外にやることがないなら、おとなしく生まれる準備でもしておけ」
適当に罵言を省略しながら議事をとりつつ、これは取り次ぎ役の仕事に似ているな、とヤエトは考えた。都で皇帝に会ったのが、ひどく昔に思える。
「そなたらの考えは、それだけか」
皇女が口を開いて一同を見渡した。
それで一応静まるのだから、ある程度は皇女の権威が認められている状態といっていいだろう。
――だが、夏より雰囲気がよくない。
あきらかに、反感や疑いを抱いている者がいる。
城内から崩されるのは阻止できたはずだが、生じてしまった亀裂を埋め戻すまでには至っていない。
彼がいないあいだに、なにがあったのか。皇女の錯乱はどの程度だったのか、牢に入れられるまでの経緯はどうだったのか――体力にゆとりがあれば覗き視ればよいだけのことだが、今はとても無理だ。
「少なくとも吹雪がやむまでは、現状を維持すると決めた。その方針を覆すに足る意見はなかった。よって、兵を出すことはせぬ」
淡々と告げて皇女は立ち上がり、議場を去った。
――ずいぶんと、萎れておいでだ。
兄の様子がおかしいとは知っていても、実際に裏切られればつらいだろう。しかも、そのために任地の民を危険に晒してしまったとあっては。

皇女がもう少し図太い性格ならよかったのだが、ああ見えてけっこう繊細でおられる、とヤエトは頭を掻いた。そして、議場の遠い方の出口に向かおうとしている後ろ姿に声をかけた。

「セルク殿」

「えっ」

――見かけの割に繊細といえば、こいつもだ。

後ろめたいことでもありそうな顔をしているが、ヤエトの勘では、どうでもいいことを気に病んでいるだけだ、この男は。

「お話ししたいことがあります。ご都合のよいときに、わたしの部屋に来てください」

「……はい」

「セルクがすっぽかす方に、酒を一杯賭ける」

横から口を出して、グランダクはにやりと笑った。セルクがとっさに言葉を返せないのが、なによりの証拠といったところだろう。ヤエトは真面目な表情をつくり、セルクに念を押した。

「返事だけして、来ないつもりですか？」

「そんなことはしない」

「ほんとうに？」

「グランダク、夕食のときにおまえの酒を貰うからな、覚悟してろよ！」

セルクに噛みつかれてもにやにや笑っているグランダクに向かって、ヤエトはうなずいた。

「貴殿には、わたしから一杯奢りましょう。ではセルク殿、後でまた」

ヤエトは自室へ戻った。すっかり護衛官におさまったジェイサルドが同行している。

部屋には、薬湯が用意されていた。ヤエトが命じたものではない。手回しがよいにもほどがある。

「これを飲むと眠くなるんです」

「無論、そのためのお薬です。床を払ったその日に、あまり動き回られても困りますので」

「セルクが来るまで起きていたいのですが」

「お起こしします」

しかたなく、ヤエトは少しのつもりで横になった。ジェイサルドはいつまで自分の護衛をつとめているつもりだろうと考えているあいだに、うとうとしてしまったようだ。

気がつくと、揺り起こされていた。

「セルク殿がおいでです」

「ありがとう。少し、はずしていただけますか」

ジェイサルドはセルクを部屋に招じ入れ、自分は出て行った。

「おかけなさい」

セルクを座らせると、ヤエトは自分も身を起こし、寝台に腰かけて相手の顔を見た。

どうやら、虚勢を張る程度には元気になったらしい。反発心でいっぱいという表情で見返してきた。

「話とはなんだ？」

「あの《雪鳩》は、あなただったのですか？　わたしの指を突ついたのは」

セルクの顔から表情が消えた。おや、とヤエトは思った。この反応は予期していなかった。

「黙っていては、わかりません」

「……あれは、戻って来られなかった」

セルクがあやつっていた、ということだろう。

「猛禽にでも襲われましたか？」

「俺のせいで……気をゆるめたら、途中で繋がりが切れて……みつけることが、できなくて……」

今にも泣きだしそうだ。

なるほど、元気がない理由はそれか、とヤエトは納得した。なにごとも鳥が第一の北嶺人だ。自分の落ち度で鳥を失えば、こうなってもしかたない。

「生き延びている可能性は？」

「低地では、長く生きられない」

「ご心痛のところ申しわけないのですが、……この天候でも、《雪鳩》を飛ばすことはできますか？」

セルクはヤエトの顔を見ずに答えた。

「できると答えたら、やらせるんだろう」

「あなたがやると決めれば、皆、従うのではないで

すか？」
セルクの手がぴくりと動いた。
――やはり、そうか。
つとめて静かに、ヤエトは言葉をつづけた。
「帝国が来る前、北嶺を主導する立場にあったのは誰だったのか、ずっと考えていました。長老ではない。彼は、帝国の支配下に入ることに反対したといっていましたからね」
少し間を置いて、セルクは大きく息を吐いた。
「家系なんだ。俺の一族は、ここの城主の末裔で、それだけが理由で皆に一目置かれている」
ヤエトは眼をしばたたいた。
早口に、セルクは説明をつづけた。
「いっておくが、王じゃない。王家の城は、あの呪われた廃城だ。ここは違う」
「……さぞ力のある人物だったのでしょう」
おそらく重臣か、王家の傍系だろう。
しかし、あの滅びの予感に押しひしがれていた男が、セルクの遠い祖先かもしれないとは。
――思いこみの強さは、血筋ゆえか。
あの男のように、世界が終わると信じて絶望するセルクの姿を想像するのは、あまりにも容易だ。
「昔のことは知らん。帝国には……あの頃はまだ、親父が元気だったんだ。だから、親父が皆の意見をまとめた。使者として来た貴族に惚れこんで、この人になら従おう、戦をするよりずっといい、と」
「お父上は、今は？」
「怪我をして、あまり家から出ない。右足が、動かないんだ。鳥にも乗れない。平地ならともかく、岩場では平衡を取りきれなくて落ちるから」
「なるほど」
「でも、なんで俺だと？」
「あなたが皆に注目されているからです」
「そうかな……」
はっきりいえば、愚かな意見でもなんでも、セルクの発言なら一回は皆がおとなしく聞き、迎合する

者さえいるからだ。

「それと、太守を見失ったときのことです。あのとき、《雪鳩》を使おうといったのは、厩舎長ではなかった。あなたがたがなによりも守りたいのは、鳥たちのはずです。それを、あなたが一存で使うと決め――誰も逆らわなかった」

セルクが皇女のために《雪鳩》を使おうと思っても、不思議はない。しかし、北嶺の民の皆が皆、同じように皇女を慕っているわけではないのだ。

それでも、《雪鳩》を使う力がある者は皆、従った。セルクの落ち度を償うために。

「なんでも、わかってしまうんだな」

「そんなことはない。今も、わかっていませんよ。あなたがなぜ、太守が牢に入れられるような事態を見過ごしていたのか」

セルクは強張った表情をほぐすように微笑んだ。

「俺も、よくわからないんだ」

「なにが？」

「伝達官がいった。姫様は、自分を見失っておられると。それに、イスヤームの村の《雪鳩》と連絡がとれなくなった。あそこの村は、百と十四人、住んでるんだ。戸籍を作り直すときに確認した……百十四人だ。俺たちは、いつも離れて暮らしてる。だけど、《雪鳩》を通じて消息が知れるから、皆が無事なことはわかっているんだ。でも……」

セルクの話はあちこち移動して、筋が通らない。そこを我慢して暫く聞いてやったところ、おおまかな話はこうだった。

ちょうどイスヤームの村の《雪鳩》の気配が消えた頃、皇女の様子がおかしくなった。伝達官は、皇女は邪悪なものに魅入られたと告げた。皆がそれを信じた。騎士たちまでもが、伝達官に従って皇女に剣を向けた。

そこでセルクは迷ってしまったのだ。

彼は、偵察はすべきだと思った。しかし、皇女は人を遣ろうとしなかった。

自分なら吹雪をついて《雪鳩》を飛ばすことができる——だが、《雪鳩》の耳目を使って偵察ができると、帝国の人々には明かせない。

「勝手に偵察しなかったのですか？」

「しようとしたんだが、……厩舎長が、どうしてもやるなら、自分を殺してからやれ、と」

「……かなり無謀なことなのですか」

「川のあたりは切り立った崖が多いから、風が強いと、小型の鳥では流されてしまうんだ」

——結局、偵察できないんじゃないか。

ため息をなんとか押し殺し、ヤエトは尋ねた。

「それは、どこも同じ条件ですか」

「うまく風を読めばなんとかなるはずだ」

ヤエトが考えこむあいだに、セルクはまた自分の話をはじめた。

「それで、無理をして鳥に探させたんだ……尚書官殿を。都まで飛んだんだが、……変なものがいて、邸の庭には入れなくて。尚書官殿が邸を出た頃は暗くて、途中で見失ってしまった。諦めて帰ろうかと思っていたときに、出会って……姫様に呪いがかけられていると教えられて、ああ、伝達官がいっていることは本当なんだと思った。姫様は、おかしくなってしまわれたんだ、と」

「それは——」

「北辺から侵入があるともいわれて、やっぱりイスヤームの村はまずい状況なんだと思った。このままでは百十四人、見殺しにすることになると」

それで、といいながら、セルクの声は暫し途切れた。《雪鳩》を失ったことを思いだしたのだろう。

「……尚書官殿が戻って来て、太守はどこかと尋ねたとき、答えられない自分に気がついて、愕然とした。副官の意見など聞いてどうする、太守はどこか、といわれた——俺は姫様を守りもせず、尚書官殿を探してしまった。そのために鳥まで失って……やっと手に入れた助言も活用せず、諦めていた」

「では、今度は諦めなければよいのです」



いたたまれない気分になりながら、ヤエトは今にも泣きだしそうなセルクを励ました。
「《雪鳩》になにができるか、太守にお伝えするのです。危険はあるが、偵察はできるかもしれないと――きちんと納得していただけばよい」
「でも、皆が反対する」
「説得すればいい。それが、貴殿の仕事です」
「そんな、簡単に――」
「周囲が貴殿の決定権を尊重するなら、それに応えねばなりません。皆が進んで賛成するなんて、そんな奇蹟を待っているのですか。偵察に行くべきだと思うなら、皆を説得なさい。自信があるなら押し切ればよいのです。そして、結果に責任を持てば」
セルクは無言だ。思わず手が出て、肩を摑んでいた。揺さぶりたいのを堪えて、告げた。
「セルク殿、いつまでも決めないままではいられませんよ。人の上に立つ者には、全員の賛成を待つなどという贅沢は許されていません。嫌われる覚悟で、信じることを推し進めるしかないのです」
「……わかった」
「明日の朝議には、偵察隊を出す決議がとれるようになさい。期待しています」
「今夜中に」
答えて、セルクは立ち上がった。
扉に手をかけてから、あ、と声をあげて立ち止まり、ふり返る。
「シロバの奴が拗ねていると、厩舎長が」
「拗ねている？」
「あんなに活躍したのに、尚書官殿が訪ねて行かないから。病気で動けないんだとは説明しておいたけど、顔を出してやった方がいい」
「……それはどうも。後で行ってきます」
「好物は、砂糖だから。厨房で分けて貰うといい」
もちろん、ヤエトはすぐに厨房から砂糖を取り寄せて厩舎に行き、シロバの機嫌をとった。
シロバを外に引き出しての対面だ。

重ね着させられた防寒具の重みにふらつきながら、鳥の頭を掻いてやる。よほど気もちいいのだろう、シロバは恍惚とした表情で頭をすり付けてきた。

これはすごいと感心しながら掻いていると、押しつけて来る力に負けて、ヤエトは尻餅をついた。

シロバは少し考えてから、ヤエトの腕を摘んで引き上げた。賢い鳥だ。見ていた厩舎長は、腹を抱えて笑っている。

「……セルク殿が、無茶なお願いにあがるかもしれません。認めてやってくださいますか」

「奴はいつだって無茶ですよ。認めるかどうかは、内容によりますね」

ヤエトは苦笑した。

「そうですね、失礼しました」

「いや、尚書官殿のご意見は重要だ。参考にさせてもらうとしましょう」

「……ウィーシャの鳥は、申しわけないことを」

頭を下げると、厩舎長は首を左右にふった。

「あんたが謝ることじゃない。むしろ、あれでよかった。……ただ忘れられて死んでいくより、自分があるじと決めた相手に尽くして死ぬ方が、奴にとってもよかったでしょうよ」

――生き延びられれば、もっとよかった。

ウィーシャは間に合ったのだろうか。鳥が死ぬ前に、名を呼んで抱いてやることはできたのか――そこまで見届ける余裕もなく、今も知らないままだ。

「鳥として生まれるのも悪くないですね」

なんとなくつぶやいてみると、厩舎長は遠慮なく大声で笑った。

「尚書官殿みたいな虚弱な鳥の面倒は、みたいとは思いませんがね！　苦労させられるだろうな。いや、しかし苦労するだけ愛着も湧くし、……悪くないかもな。うん。きっと、かわいいな」

「……なにがです。役に立ちませんよ」

「鳥ならね。だけど、あんたは人間だ。弱いなりに、使いようもある」

さらりといって、厩舎長はシロバの背から雪を払った。シロバは、世話になるものかという風に身体を揺すり、勝手に厩舎に戻ろうとした。ほんとうにヤエトに会いたがっていたのかと、疑わしくなる。

「また来なさい。シロバはいつでも待ってますよ」

厩舎長がシロバを厩舎に戻らせたとたん、ジェイサルドはヤエトを抱え上げ、ものすごい勢いで部屋に運びこんだ。

「熱が上がると、儂がナオ殿に叱られますので」

「……そういう理由ですか」

「あの女性は、シーハの末裔ですな」

「シーハ……というと、医師神を奉じた街ですか」

「さすが、よくご存じだ」

満足げにうなずいて、ジェイサルドはヤエトを寝台に押しこんだ。

「行商人の娘だと聞きましたが」

「薬の行商でしょう。医師神を守り神としたシーハの民は、治療の技にすぐれていたのはもちろんですが、かれらが調合すれば、そのへんに生えている草でも薬になるとか申しましてな。薬だけでもご利益があるといわれておりました」

「それで、また生き延びてしまったわけか……」

ジェイサルドは重々しく首を左右にふった。

「いけませんな。生き延びてしまった、など。命の恩人には、とても聞かせられません」

「ナオ殿が、おっしゃったのですよ？『お気の毒ですが、また生き延びたようですね』と」

「ずいぶん怒っていらっしゃいましたからな。身体を粗末に扱い過ぎだとか、いつでも死んでやるみたいな姿勢の人間は嫌いだとか」

「嫌われているのは知っています」

「でも、ナオ殿のたいせつな姫様のために、必要なかたなので、しかたがないと」

どうでしょう、とつぶやいてヤエトは眼を閉じた。尚書官など、いくらでも置き換えができる。自分にしか果たせない使命はなし遂げたし、平均的な知性

と体力の持ち主なら誰でも、後任はつとまる。
横になってみると、思ったより疲れていた。
——体力が落ち過ぎだ。
頑張り過ぎたかもしれない。朝議に顔を出した上、セルクを焚き付け、シロバの機嫌までとったのだ。
——しかし、セルクがこの城の城主の子孫とは。
あの男から数えて何代になるのだろう。
「ジェイサルド殿」
「はい」
「呪師が名被せに使う名は、どうやって決めるのです。いや、探して来るのですか」
「詳しくは存じませんが、いくつか定型のものがあるそうです。自殺させたいときの名とか、肉親を殺させたいときの名とか……」
「陰鬱な気分になる設定ばかりですね」
「今この世に実在する誰かの名を被せることもあります。その場合、同じ人物がふたりは存在できませんから、本人を殺しに行くそうです」
「なるほど、呪師が忌み嫌われるわけだ……」
ジェイサルドですら、呪師について話すときは、かすかに感情の色が見え隠れする。自身が狙われた経験があるからなのかもしれない。
「名被せに使う名は、生きているあいだに奪わねば効力が薄いとかで——奪うというのがどういうものかは存じませんが。とにかく、そうやって奪った名を、呪師どもは弟子に伝え、さまざまな状況に対応できるよう、わざを磨いて来たのでしょう」
「なるほど……」
「皇女殿下に被せられた名に、なにかご不審な点でもありましたか」
——するどいな。
これだから、ジェイサルドには気を抜けない。
「本来の持ち主はどんな人物なのだろうと、考えていました。なぜ、呪師に名を奪われたのだろうと」
「たとえば、自殺させたいときに使う名に、ヴァハーラームというのがあるのですが」

ジェイサルドはさらりと口にして、ヤエトをぎょっとさせた。
「大丈夫なのですか」
「これは儂が被せられそうになった名でしてな。調べてみたところ、そう古いものではありませんでした。この男は借金苦で自死に追い込まれたのですが、貸し主が呪師に売ったんですよ」
「……は？」
「貸した金が回収できそうもないから、せめて呪師から金をせしめようとした。証文を、売ったんですな。それからは、生き地獄です。呪師が姿を見せたら誰も寄りつかない。食べるものも、飲むものも、なにも手に入らなくなる。親戚も親友も、諦めてしまうのですよ。もちろん本人も」
ジェイサルドは両手を首に回して見せた。それで困り果てて首を吊った、ということなのだろう。
「死ぬ前に、名を奪うのですよね？」
「左様。それゆえ、狙った人物の脇で、死ぬのを待つ必要があるのですな」
気が滅入る話だ。
少し迷って、ヤエトは口にした。
「わたしは、姿を見たように思うのです。名の持ち主は、北嶺人だった。金髪で……眼が青かった」
「呪師が北嶺人の名を奪う機会があるとは、あまり思えませんが――ここに呪師が姿をあらわしたら、目立つなんてものではない」
しかし、あれは北嶺人で間違いない。ここの城主だったはずだ。セルクの打ち明け話を持ち出すまでもなく、それは確実なことなのだ。
――どういうことだろう。
ジェイサルドは暫く黙っていたが、やがて口を開くと、静かに告げた。
「もしも、使われた名が北嶺人のものなら、かれらにとって悲劇と考えられる結末へ導く名だったのでしょう。北嶺の民にとって、もっとも破滅的な運命とは――鳥を殺すことではありませんかな」

ヤエトは思いだしていた。
あの男の名にふれたとき、ほんの一瞬で相手の全人生を把握したと思ったことを。それは片端からあふれ出て、今ではほとんど記憶に残ってはいない。だが、たしかになにかがあった。鳥に関する、悲劇的な記憶が含まれていた。
「なるほど……」
ヤエトは寝返りをうち、壁の方を向いた。
――思いだしてみる価値があるかもしれない。

5

翌日、ヤエトは朝議に出席できなかった。また発熱してしまったのだ。
滞りなく《雪鳩》の使用が承認され、数名が志願して鳥に心を繋いでの偵察が始まった――というところまでは、ルーギンが教えに来てくれた。
「昨夜のうちに、姫様とわたしのところへは知らせがありました」
セルクにしては上出来だと感心していたら、イスヤームがやったことだという。感心して損をした。
平静を装っていても、事態をもっとも案じているのはイスヤームに違いない。根回しもするだろう。
「風向き次第ですが、午後には様子がわかるそうです。その風向きも、鳥を向こうにやるのに都合がよく吹いているそうで……帰りが大変かな」
「こちらに都合がよい風ですか……」
「罠だとしても、どうしようもないね」
ルーギンは立ち上がった。
「この後は、どちらへ？」
「部下たちが元気を持て余しているので、中庭で雪中訓練でもやろうかと。女官たちが見物してくれるので、皆はりきってますよ」
「戦闘になると思いますか」
「春まで籠城したら、こちらの勝ちですからね。向こうはなんとしても門の外に出させたいはず」

偵察のために《雪鳩》を使えと焚き付けたのは、よくなかったかもしれない。だが、なにかきっかけがなければ、セルクはこのまま腐ってしまう。

もちろん皇女もだ。自分を滅ぼすために北嶺の、外縁部の民から犠牲が増えるばかりだと知っていて、百日近くも城に閉じこもっていられるだろうか。

そのふたりだけではない。家族が、同朋が危機に瀕しているとわかれば、制止をふりきって出て行ってしまう者もいるだろう。

未だにそれが起きていないのは、最初に犠牲になったと思しき村の代表であるイスヤームが、己を律して皆の見本となっているからだ。

だが、それもどこまで保つか。北嶺人は直情径行の者が多いのだ。策もなく飛び出して行ってしまう前に、なんとかせねばならない。

このままでは負ける、とヤエトは感じていた。

「まあ、戦えば勝ちますよ、わたしが」

気楽にいって、ルーギンは部屋の隅に控えているジェイサルドに視線を遣った。

「ジェイサルド殿のご助力も期待できるしね」

「儂のお役目は、尚書官殿をお守りすることです」

「では、この人を戦場に引っ張って行けばいいですね。百人力だ」

「ナオ殿に毒殺されますよ」

「わたしはね、殺されるなら女性にと決めているのです。ナオ殿なら文句はありませんよ」

笑いながら、ルーギンは部屋を出て行った。

午後遅く、一報が入った。

「建物すべてうち壊され、焼け焦げて、人も鳥も気配がないそうです」

報せに来たのはイスヤームの遠縁の少年だ。彼の出身は二番目に消息が途絶えた村だが、イスヤームの村にも親戚や知人は多い。

赤くうるんだ眼をして、寝台の前に膝をついた。

「尚書官殿、お助けください」

これにはヤエトがおどろいた。

「助ける？」
「なにか、お知恵を。どうすれば、落ち着けますか。外に出ないのが上策ということはわかっているのに、心が暴れるのです。胸が……痛くて、熱くて、安全な場所にいる自分が嫌で、……」
そこで鼻をすすり、失礼しました、と少年は顔をこすった。
「連れ去られたのでしょうか」
ジェイサルドが低く尋ねたので、たぶん、とヤエトはうなずいた。死体が転がっていれば、そういう報告があるだろう。
帝国にも奴隷はいるが、数はあまり多くない。今の皇帝が、皆殺しか融和政策かという極端な手法で築いた国だから、生かして再利用された戦争捕虜がほとんどいないのだ。
第三皇子との密約に、そういった条件が含まれていてもおかしくない。
――捕虜の移送には手間がかかるものだ。
どこかにまとめて捕らえ、反抗心を叩き折ってからにしたいところだ。移送のために兵を分けるのも不合理だろう。まだ近くにいるのではないか。
「人は感情に動かされるものです。それは恥ではありません。恥ずべきは、感情に曇らされて判断を間違うことです」
「はい。心得ました」
立ち上がった少年の手を、ヤエトは摑んだ。
「皆、まだ生きていると信じなさい。そうすれば、考えることもできます。どうやって救おうかと」
「なにも、考えつけません……」
「今すぐでなくてよいのです。思いついたらなんでも教えてください。わたしは北嶺のことをよく知りません。どんな意見でも、貴重な財産です」
少年はうなずいて退室した。
――いよいよ、城内から崩れるな。
人の気分に影響を与えるのはセルクや皇女のような存在だが、このふたりが先頭に立って落ちこんで

いる今、城にたてこもる人々の雰囲気が沈んだものになっていても、しかたはない。
ルーギンの雪中訓練も、尚武官のあいだでは効果があるだろうが、尚書官は駄目だ。
――つまり、自分の受け持ちをなんとかせねばならないわけか……。
ヤエトは人の気もちを盛り上げるのがうまくない。むしろ盛り下げる方が得意だという自覚がある。
それでも、なんとかせねばならない――この先、事態は悪化する一方に違いないのだから。
はたして翌日、偵察に使われた鳥の三羽が戻らなかったことを知らされた。雷に打たれたという。
――《雷霆の使者》の能力は、そこまでか。
鳥と心を繋いでいた者は、即座に昏倒したほどの衝撃を受け、今も起きあがれないという。
報せをもたらしたのは、ルーギンだった。
ナオと結託したジェイサルドの防御は固く、部下では突破できなかったのです、と騎士は微笑んだ。
「どう思います」
「やられましたね」
鳥か人が来ると踏んだ場所に、恩寵の力が強い神官が待ち伏せていたわけで、やはり、都合のよい風が吹いたのは、意味のないことではなかったのだ。
「こちらが戦場を選べないのが痛いな。諍いの歴史が長いから、相手は北嶺人になにができるのかも熟知しているようだ。力の使いどころも心得ている」
「しかし、恩寵の力といっても絶対ではない。いずれ、気力体力が尽きます」
「そう。でも、疲弊させないと話にならない」
「戦場を選ぶとしたら、どこにしますか」
「わたしが？　そうだな、この城かな」
「攻めさせますか」
「雷を落とされるのは嫌だけどね。鳥を使えば、攻めて来る敵を蹴散らすこともできるだろうし」
「鳥を飛び立たせる工夫はないでしょう」
「いや、四層の中庭がそれですよ。壁の内側に刻み

があって、斜めになっているところがあるでしょう。あれは、鳥を飛ばせるための仕掛けだと思う」

セルクに登れといわれた壁のことかもしれない。よくそんなことに気がつくな、と感心した。

ルーギンは室内を見渡し、ヤエトの机の上に積まれた紙束の中から、城の見取り図を出して来た。

「ほら、ここ。厩舎の裏。鳥なら、この岩場から上に行ける。四層から滑空すれば、飛ぶ力がなくても城の外まで一気に行けるんじゃないかな。つまり、門を開けなくても出兵できる」

「開けないと、撤兵はできない」

「それは、鳥なら……いや、微妙かな」

「無理でしょう。無理なように作ったはずだ」

「セルクの村あたりも、いいかもしれない」

暢気に提案して、ルーギンはまた机をあさった。今度は北嶺の地図を広げる。

「ここは奇跡的に平地がある。帝国の兵なら、この地形で戦うのが気楽かな。比較的、足もとを気にしなくて済むからね。それに――」

言葉を切って、ルーギンは顔を上げた。同時に扉が開き、厩舎の助手が飛びこんで来た。

「助けを求める鳥が来ました！」

「鳥？」

「《雪鳩》です。各村に、北方人が来ているから警戒しろという通達はしてあるので……今度は、相手に先んじて気づいたようです。ただ、思いのほか数が多く、手のほどこしようがないそうで、これから隣の村まで逃れるそうです」

限界だな、とヤエトは思った。たぶん、もう抑えきれない。

「どの村です」

ルーギンが地図を見せると、少年は指さした。

「ここです」

今まで向かっていた、細い方の川沿いではない。湖からの流れに沿った村だ。

セルクの村から、夏場なら鳥で半日というところ

か。ここは、案外距離が近い。
「隣の村とは、湖の方に？」
尋ねると、少年はうなずいた。
ルーギンが唸った。
「これは、兵を分けているな」
「そうでしょうね。おそらく、細い川の方にふり分けた戦力より、湖に向けて進ませた方が多い」
「しかし、姿をあらわす時期を今にしなくてもよい気もするな……」
「食料の問題ではないですか？　糧道が確保できているわけではないし、ひとつずつ潰して進んでいる方の部隊と違って、補給ができない」
「できれば、一気に城まで寄せたかっただろうな」
「一気に寄せても、容易には入れないでしょう」
「どうかな？　奴らが、城を内側から揺さぶる作戦が完全に失敗したと知らなかったら、城門を開けてもらえることを期待しているのかも？」
「あり得ますね……でも、どうでしょう。それについては、都から連絡がいっているのでは？」
ルーギンは眉根を寄せた。珍しく真剣な表情だ。
「彼自身にとって、北嶺はさほど重要ではないでしょう。伝達官を使っての煽動も失敗し、呪師もしりぞけられた。もし、彼が伝達官を秘密裏に作り増していたとしても、北嶺にふり分けるかな？　しないだろうね。無理して援助するかな？　もちろん、しない。北方の男たちが成功すれば、戦果は受け取るでしょう。同盟も組む。でも、積極的に援助したという証拠は残せない。彼にとって、北嶺は主戦場ではない――そうでしょう？　むしろ、都での駆け引きに本腰を入れざるを得ない局面じゃないかな」
ルーギンは地図から顔を上げ、ヤエトを見た。淡い色の眼が、珍しく生気に満ちている。
「勝てば最大限に利用するだろうけど、負けても痛手を受けないことの方が重要なはず。違うかな？」
「違わないでしょうね」
ヤエトの答を聞くと、ルーギンはにっこり笑って

身を起こし、地図を眺め直した。そして、いつものように断言した。
「彼は、欲張らない方がいいと思うな。戦えば、わたしが勝つからね」
「……わかりました。そこまでおっしゃるなら、兵を出す方向で、太守にお話ししましょう」
呆気にとられている厩舎の少年に、ヤエトは地図を渡した。
「これを机に戻して。それから、議場に皆を集めなさい。急ぐ必要はありません。冷静に」
「はい！」
返事もそこそこに、少年は駆け出した。
「ルーギン殿、太守にお話しせねばならないことがあります。即刻、わたしを太守のもとへお連れください――ジェイサルド殿、議場をお願いできますか。わたしのことなら、ルーギン殿が面倒をみてくださいますので」
「目的は？」
「皆の気もちを揃えてもらいたいのです。先走って出奔する者が出ることは、なんとしても避けねば」
無言でうなずくと、ジェイサルドもすぐに部屋を出て行った。彼なら、五番目の村が襲撃されていることで皆が浮き足立っても、怒鳴りあいよりひどい事態にならないよう、抑えてくれるだろう。
「男を運んでもつまらないんですよ。骨がさわる感じが、こう……。無駄に背が高いのも面倒だし」
文句をいいながら、ルーギンはヤエトを抱き上げた。そして、軽いなぁとつぶやいた。
「先生、ちゃんと食べてますか」
「食べられる範囲で。次に抱き上げてもらうときは、脂肪をつけておきましょう」
「いや、太った男は断然遠慮します。持ちづらそうだし――おい、姫様のところへ行くぞ。先触れせよ。尚書官殿をお連れすると、お伝えするのだ」
廊下に控えていた騎士が、一礼して駆け去った。
ジェイサルドと違い、ルーギンは防寒具まで気を

つかってヤエトを持ち運ぼうとは思いつかない。これは寒い、とふるえながらヤエトは尋ねた。
「ところで、ほんとうに勝てますか？」
「勝ちますよ。勝てそうもなかったら、負ける前に死ぬことにしています」
「……は？」
「そうすれば、負けなくて済みますからね」
「呆れた理屈だ」
ルーギンは笑い、気楽な口調で答えた。
「先生にはいわれたくないな。基本的には、勝って生き残るつもりなんですからね」
「そう願いますよ」
ルーギンはにっこり笑ってから、前を見た。
「おや、まずいな。無駄口を叩き過ぎた」
ヤエトもそちらを見上げ、苦笑した。
階段の上に、皇女の姿が見えた。
矢狭間から吹き抜ける風に髪を乱し、残りの段を一気に駆け下りて来る。
「わたしに伝えたいこととは、なんだ」
「鳥に、翼を取り戻したいですか」
皇女の躊躇は、ほんの一瞬だった。
「欲しい」
「今、吹雪はどうです」
「さして強くない」
「そうでしょう、敵はわたしたちに出兵させたいはずだ。ちょうどいい、済ませてしまいましょう」
「なにをだ」
「どうか、なにもお尋ねにならず、ご同行願えませんか」
「いいだろう」
皇女は即答した。
「わたしも？」
ルーギンの問いに、ヤエトはうなずいた。
「お願いします。ひとりでは、鳥に乗れないので」
「鳥、ですか？」
「城趾へ行きます」

皇女は顔をしかめたが、即座に、周囲に控える者たちに命令をくだしはじめた。
「誰か、尚書官に外套を持って来い。厩舎へ行って、鳥を引き出しておけ。わたしとルーギンが乗る」
「護衛は――」
「駄目です」
ヤエトが制止した。皇女が視線を合わせ、理解の色が広がった。
「ルーギンはよいのだな？」
「はい」
「よし。もしものときは、わたしが成敗しよう」
即決即断を相変わらずだと思うべきか、久しぶりに皇女らしい表情を見たというべきか。
厩舎へ向かう主君の後を追いながら、ルーギンは若干、複雑な表情だ。
「……なんだかすごく物騒な会話が」
「女性に殺されたいのでしょう、夢がかなうかもしれませんね」
「もうちょっとこう……女性らしい女性がいいな」
遅れて厩舎に辿り着くと、皇女は不機嫌な厩舎長から鳥を受け取っているところだった。
「わたしが尚書官と同乗すべきだな。荷物を持っていては戦いづらいだろう、もしものときに。護衛を連れていないのだから、そなたに頼ることになる」
うなずくルーギンに、皇女は顎で示した。
「わたしではこれを引き上げられぬ。乗せてやってくれ」
荷物とか、これとか、扱いがぞんざいになっていく中、外套が三つも届き、ぐるぐる巻きにされたヤエトは鳥の背に押し上げられた。
「門を開けよ！　我らが出たらすぐに閉じ、帰りを待て！　日没まで戻らなければ死んだものと思い、後は騎士団副長エイギルの命に従え！」
次々と命じると、皇女はヤエトの後ろにひらりとまたがった。
「城趾まではルーギン、そなたが先導せよ」

「御意」
先に門をくぐったルーギンの騎乗ぶりは、雪道であることを感じさせなかった。鳥の足が、ほとんど沈まないのだ。
上下動の少なさから、皇女の鳥も同じように、雪の表面だけを蹴って走っているのだろうと察することができた。
――これも恩寵の力なのか。
これほど巨大な鳥が飛ぶための力だ、ほんの少し残っているだけでも、雪上の走行を容易にする程度のご利益はあるのだろう。
「なにをするつもりだ」
いきなり背後から尋ねられて、ぎょっとした。肩というより、ほとんど背中に向かって声をかけられているようなものだ。
「呪師が太守に被せようとした名のあるじは、わたしが幻視したことがある男でした」
「なに？」
「太守のお部屋の前で吐いた、あのときです」
皇女は少し考えてから尋ねた。
「それを呪師が知っていたと？」
「そのことは、今はお考えにならなくて結構。……太守からあの名を引き剝がそうとしたとき、わたしは一瞬、そのすべてを感じとりました」
名前は、名前があらわすそのもの自体をまるごと包含している――と考えるのが、名前の魔法だ。
呪師が被せようとした名を皇女から引き剝がしたとき、ヤエトは必然的にその被せられようとしていた名だけを感じた。
断片的に残った記憶を辿って、彼は理解した。
「あの男が、鳥たちから飛ぶ力を奪ったのです」
皇女は冷静に問い返した。
「契約の剣が砕けたのは、王のせいだったはずだが？」
「神との契約の剣は、二本あったのです」
「そんな話は聞いたことがない」

「王が竜を呼んだせいで、恩寵は呪いとなった。北嶺に攻めて来た敵軍を退却させても、北嶺自体が滅びてしまう。あの男は、残ったもう一本の剣を砕けば契約が完全にくつがえされ、竜を元いた場所へ戻せると踏んだのでしょう。彼の読みは当たり、竜は消えましたが……そのとき、鳥も飛翔の力を失ったのです」

ジェイサルドがいっていたように、北嶺人にとっての悲劇とは、鳥を害する行為に手を染めることだ。鳥から飛翔の力を奪い去った男は、それゆえに苦しみを味わい、絶望した。その名がどうして呪師の手に入ったのかは、あまり考えたくない。

前を行くルーギンの背が、少し遠くなった。皇女が鳥の足を緩めたのだ。

「どうなさいました」

「いや……そなたがわたしにやらせようとしているのは、なんだろうと思っていただけだ。情けないな、尻込みしたらしい」

ヤエトは手綱を握る皇女の手に手を添えた。

「もうご存じだと思いますが、わたしは、思いつきでものをいっているだけの愚か者です。先々を見通した戦略は、ありません」

「たのもしい話だ」

「城にお戻りになりたいと思われたら、いつでも」

「そしてルーギンを置き去りにするのか？　それは少しおもしろそうだな」

そんなことをいって笑ったが、皇女は結局、そのまま城趾まで鳥を走らせた。

「おふたりとも、剣は《青鉄》ですね？」

ヤエトはじたばたと見苦しくもがきながら、鳥の背から降りた。皇女とルーギンがそれにつづく。

「大丈夫か」

「終わったところで、わたしはそのまま気を失うかもしれません。これからご覧にいれるものを、よくご記憶ください」

ルーギンは不審げにヤエトを見た。

「なにを見せてくださるのです」
「貴殿は護衛です。わたしたちは暫く動かなくなるかもしれません。邪魔をせず、見守っていてください。あまり長いあいだ戻って来なければ、太守を揺り動かして、城に連れ戻してください。では太守、お手を拝借いたしたく存じます」
ヤエトはさしだされた皇女の手を握ると、城趾の方に向き直った。場所は、見当がついている。
「動かないのに戻って来るとはどういう意味です」
「太守に、わたしの恩寵の力をお見せします」
ルーギンは口をぽかんと開けたまま、二の句を接げなくなったようだ。
「太守、わたしの手から伝わるものを、視たいと念じてください。強く」
「わかった。ヤエト――」
「はい？」
皇女はヤエトの手を握り返した。小さな手だ、とヤエトは思い、この手の持ち主にさらなる試練を与えるのだと考えて、今さら躊躇を覚えた。
しかし、皇女の声が彼の背を押した。
「いや、よい。案ずるな」
「では参ります」
どっ、と周囲の景色が吹き飛んだ。百年単位で意識して時間を遡っていくのは、はじめてのことだ。
――これはきついな。
握った手の感覚が、かろうじて彼を現世に留めている。
凄まじい勢いで、崩壊した城が元の姿を取り戻し、鳥たちが上空を乱舞した。城は形を変え、建造途中の骨組みになり、やがてひとつの礎石に戻った。
ヤエトはその時間を捕らえ、固定した。
礎石の上に、人が立っていた。流れる黄金の髪、そして奇蹟のように青い眸。
手にした剣に銘はない。刃には、血がついていた。自分で傷をつけたのだろう、指先から血がしたたっている。

――これからだ。
ヤエトは皇女の手を握る手に力をこめた。
男は両手をひろげ、空を仰いだ。次いで、石の上にひれ伏した。
血がこすれて広がり、不気味な模様を描いた。
「ツェートー！」
朗々と、声は響いた。谷間に谺して、いつまでも消えないほどだった。
ツェートーよ、と声はあたりを巡った。
「竜よ、我が声が聞こえるか！」
大地がふるえた。
『聞こえるぞ、人の子よ』
地の底からたちのぼる気配は、大気をも震動させた。あたりはその声でいっぱいになり、やがて耳を圧する轟音となった。
『聞こえるぞ』
「ツェートーよ」
地下から響く声に比すれば、あれほど堂々としていた男の声も、薄っぺらに感じてしまう。
『なんだ、我れにツェートーと名づけし者よ』
「ツェートーは、ツェートーではないのか？」
『我れは眠れる神』
言葉は大地から吹き上がった。男の髪は逆立ち、着衣ははためいて、騒がしい音をたてた。
『そなたが目覚めさせたのは、我が一部分に過ぎぬ。それをツェートーと名づく。我れはツェートーである。信じよ』
「一部分？　そんなはずはない」
『ツェートーと呼ばわれば、応えるのはツェートーだ。それで相違ない。なにを気にすることがある』
男は地面の揺れをものともせず、立ち上がった。
「我が供物、我が血、我が名を受けたか」
『そなたの供物とそなたの血、そなたの名を受けた。ツェートーは、そなたを知る者となった』
男は剣を石の上に立てた。その刀身を日に晒してかがやかせ、答えた。

「我れに竜をあやつる力を！」
『……竜』
男は苛立たしげに剣を動かした。
「そうだ。ツェートーは竜だ。眠れる竜だ。それを、目覚めさせてやる！」
地下からの声は、ゆっくりと答えた。
『人の考える竜とは、少々違っているやもしれぬ。そなたの思うところを申し述べてみよ』
男は不機嫌に口を引き結んだが、やがて、渋々と答えはじめた。
「まず、大きい」
『大きい』
「ツェートーは黒竜だと聞き及ぶ。それから、矢のように空を飛ぶと」
『黒くて、空を飛ぶものか』
「そして強い」
は、は、は、と息が抜けるような音がした。竜は笑っているようだった。
『よかろう、そなたとそなたの血族は、そなたが思う竜を手に入れるであろう。ツェートーの力の及ぶ範囲で、それは飛び、それは生きる。そなたらの言葉を聞き、従い、そして戦うであろう』
「我れが欲するのはツェートーだ！　眠れる黒竜そのものをだ！」
『そなたが呼びだしたのは、ツェートーだ。そなたが名づけ、そなたが呼び、そなたが招く』
「我が血にかけて！」
『我れがまたたきひとつするあいだに育ち、子を生し、戦い、殺し、みずからもまた死にゆく者よ。これがツェートーの角だ』
遠い山並が、ゆらゆらと揺れ動いた。嶺（みね）がかがやき、遠雷がとどろく。
『儚（はかな）き者よ、これがツェートーの爪』
彼方の丘陵が波打ち、剝き出しの岩肌がぎらりと黒く光った。
『ツェートーの心臓は地下にある。誰もツェートー

を殺すことはできない。ツェートーが地上に出れば大地は崩れる。そなたも、そなたの血族も死ぬ』

風が渦を巻いた。思わず男がしゃがみ、頭を腕で覆うほどの勢いだ。それは次第に回転を速め、唸り、しかし少しも移動せずに回りつづけた。

やがて風がやんだとき、そこには小振りな剣が一本、からりと音をたてて倒れたところだった。

はっとして男は自分の腰を探った。たしかに身に付けていたはずの短剣が、鞘だけ残して消えていた。

『黒くて素早く空を飛ぶものが手に入る。ツェートーが力をそそいだ、ツェートーの子。うまく使え』

男は短剣を静かに拾い上げ、そっと鞘に戻した。そして、そのまま宣言した。

「我が命、我が血、我が名にかけて。ツェートーを喚ぶ剣を！」

次の瞬間、大地が弾けた。

砂礫が嵐のようにあたりを飛び交い、男は悲鳴をあげた。彼の全身を、容赦なく石は襲っていた。彼ははじめから持っていた剣――すなわち、彼の手を傷つけて血を流させた剣を手放した。そのとたん、唐突にあたりは静まり返っていた。

『ツェートーをときはなつ覚悟ができたら、銘を読むがよい。ツェートーが地上に出るとき、ツェートーはツェートー以外の部分もともなわねばならない。世界はその重みに耐え得ぬ。裂けて、壊れる。それが決まりだ、人の子よ』

剣を拾い上げて刀身に刻まれた銘を確認する男の姿を遠くに眺め、ヤエトは気を引き締め直した。

自身が属すべき時間に打ち込まれた楔、握りしめた人の手を辿って、一気に今に戻る。

とたん、くらりと景色が回った。

「ヤエト！」

動いたのは、皇女の方が早かった。崩れるヤエトを支えようとして支えきれず、ルーギンを呼ぶ。騎士は皇女からヤエトを引き剝がした。

「……あの神なら、翼をとり戻せます」

ヤエトが苦しい息の下からささやくと、ルーギンが素早く問い返した。
「神？　なんの話です」
ヤエトの身体を揺するルーギンに向かって、皇女がひとこと命じた。
「黙れ」
ルーギンは口をつぐんだ。
皇女はゆっくりと雪に埋もれた廃墟の方に向き直り、つぶやいた。
「神に呼びかけよう。砕けた剣を元に戻し、黒く、速く飛ぶものの力を取り戻してくれと」
竜種である皇女が、別の神とあらたな契約をかわすことは不可能だ。だが、あの恩寵を望んだのは人でも、与えられたのは鳥たちだ。契約の剣さえ復活すれば、飛翔の力は戻るはず。
ヤエトは確信していた。神の注意を惹くことも、今なら可能だろう。
皇女は雪の中に数歩、踏み入った。
「我が血を贄となし、その名を呼ばん」
皇女は腰の剣を抜きはなった。光が舞い、血がしたたって雪上に花を咲かせた。
風が唸りをあげて吹き過ぎる。
「ツェートーよ！　眠りから醒めよ！」
皇女の声は廃墟に谺した。ツェートー、と谷が呼んだ。声がぐるりと回る。
「ツェートー！」
『もう先から目覚めておる』
積もっていた雪がふるえて飛び散り、あたりに白銀の破片が乱舞した。
ヤエトは膝をついた。
これは凄まじい。竜気どころの騒ぎではない。
ルーギンがヤエトを呼んでいるようなのはわかったが、ほとんど声は聞こえない。皇女が前へ進むのを見てはいても、まるで自分の目で見ているのではないかのようであるのと同様、すべてが遠い。
『我が与えし剣を砕いておいて、今さら何用だ』

「砕いたのはわたしではない」
『同じ血だ』
声は断じた。
やはり、とヤエトは思ったが、声にはならなかった。皇女はヤエトに背を向けたまま膝をつき、抜いた剣を地面に横たえた。
「ツェートーよ、力を貸してくれ。黒く、速く飛ぶ強いものを、わたしのもとにもたらしてくれ」
声が発する気配が濃くなり、あたり一帯がそれに包まれた。
『そなたからは、我れの厭う者の匂いがする。刻印がある……』
声の注意はヤエトとルーギンにも向けられた。
『違う血の者までおる。この者にも刻印がある。ひととき目蓋を下ろしていただけというのに、地上は変わったものだな、人の子よ』
「黒竜よ、ひとときではなかったのだ」
『ひとときに過ぎぬ。我が眠りの永きに比ぶれば』
声の気配が弱まった。皇女は叫んだ。
「ツェートー！」
『よかろう』
どっと雪が散った。
その下に眠っていたはずの瓦礫が鳴動し、皇女の周囲に立ち上がる。
「姫様！」
「駄目だ」
ヤエトは駆け出そうとするルーギンの足を摑んだ。
「邪魔をするな！」
ルーギンはヤエトを引きずって前へ進んだが、見えない壁に撥ね除けられ、雪の中に倒れた。
『我が力を与えよう、人の子よ』
石と雪の向こうから、皇女の声が聞こえた。
「望むところだ」
『さて、そなたの望み通りかどうか。人は皆、おのれの望みを知らずに希う。そういう生き物ゆえな』
皇女がいる方から突風が吹きつけ、ヤエトとルー

ギンはからみ合ったまま転がった。ルーギンはヤエトの手を引き剝がすと、立ち上がり、風に向かって猛然と進みはじめた。

ヤエトは、ただ頭を低くして風がおさまるのを待つことしかできなかった。

そのまま、どれくらい時間がたっただろう。

気がつくと皇女に揺さぶられていた。

「ヤエト」

ほっとしたように彼を見下ろした皇女の眼を見返したが、視界がぼやけてうまく焦点が合わない。

「無事か？」

「太守は……？」

「大事ない。首尾も上々」

皇女はにこりと笑ったが、すぐ気遣わしげに眉をひそめた。

「ルーギン、来てくれ！　すごい熱だ」

ルーギンがヤエトを抱き上げ、鳥の背に乗せた。

そのあたりから、記憶は断続的になっている。

ふわふわしている、と思った。自分がこの世に存在しているという実感がない。身体がつらいとか、だるいとか、痛いとか。そういう境地を飛び越してしまい、なにも感じない。

覚えているのは、城を囲む雪原の白さがあまりにも美しく感じられたことと、飛び出して来たセルクの間抜け面。それから、皇女が厩舎の扉の前に立ち、見よ、と叫んだことくらいだ。

その声を合図に鳥たちは羽撃き、空へと舞い上がった——いつかヤエトが視た、はるかな昔の情景そのままに。

——美しい。

不自然なほどの静寂に包まれて、ヤエトはその光景を眺めていた。

わずかに青みを帯びた灰色の空に、鳥たちは舞う。雲の上へ、抜けていく。玉虫色にかがやく羽毛、その雄大な飛翔。

たとえこれが呪いであっても、美しいことだけは



認めねばなるまい——そう思いながら、ヤエトは眼を閉じた。

6

次に倒れたらもう知りませんというナオの宣言は、どうやら本気だったようだ。

ヤエトが意識を取り戻したとき、枕辺を守っていたのはナグウィンだった。

商人は自分もうとうとと寝入りかかっていたが、ヤエトが眼を開いたのに気がつくと、ほっとしたような笑顔を見せた。

「よかった。これで首が繋がりましたよ」

さあ、薬を飲んでとうながされ、なんとか頭を起こして薬をすすった。

ふわふわした感じは消え失せて、今は身体がひどく重かった。

「戦ですよ、尚書官殿。あの黒い鳥に乗って、みんな飛び出して行ってしまいましたよ」

——では、夢ではなかったのだ。

夢であってくれた方が、よかったかもしれない。

「もう少しお休みなさい」

いわれるまま、ヤエトはまた眠ってしまった。

浅い眠りがつづき、枕許の人影はナグウィンから厩舎長へと変わり、またナグウィンに戻った。

「まだ、お戻りでないのですか」

「まだですよ。どなたかお戻りになったらお起こしますから、もっと眠ってください」

寝台に押し戻されてようやく、自分が無理に身を起こそうとしていたことに気がついた。

商人はヤエトの額を拭ってくれた。冷たい布が、たちまち熱くなる。濡らした布のことをスーリヤというのだったか。

——いや、あれは召使いの名だ。

あちらこちらと浮ついた記憶はうまくおさまらず、すごい熱だ、と皇女の声が聞こえた気がして目蓋を

上げてみれば、真っ暗な部屋には誰の姿もなく、遠くで人の声が聞こえるだけ、ということもあった。眠っているのかいないのか、どれだけ時間がたったのかわからない。

相変わらず、身体が重い。寝台に寝ている気がしない。これは絶対に寝台どころか床を突き抜け、地の底へと落ちているに違いない、と思う。

「これを、飲みなさい」

口にあてられた椀の中身を流しこまれ、しかし嚥下できずに咳込み、すべて吐いた。

呼吸をするだけで、胸が焼けるように痛む。

苦痛から逃れるために気を失い、そしてまた苦痛で目覚める。それがどれくらいつづいただろうか。

ふと気がつくと、痛みを感じなくなっていた。

暗闇の奥、はるか彼方に光が見える。その光が少しずつ大きくなるのを眺めながら、ああ、これで救われると思った。

轟々と風が鳴っている。北嶺の高い嶺を吹き渡る風だ。翼を取り戻した鳥たちが、風切り羽根を鳴らす音だ。

そのとき、光が消えた。

なにかに遮られた。ふたたび、深みへと落ちていく。とどめようもなく、ただ墜落する。

身体の重みを感じ、それが彼を在るべき場所へと牽引する力を感じ……勢いよくどさっと落ちた。

ぱっ、と眼が開いた。身体に入っていた力が抜け、ヤエトは大きく息を吐いた。

汗をかいていた。全身がべとついて、気もちが悪い。心臓は跳ね回り、こんな狭い身体の中にはおさまりきれぬとでも勘違いしているようだった。

誰かが覗きに来た。ナグウィンだ。視線が合うと、尋ねられた。

「気がつかれましたか」

「……」

なにか答えようとしたが、口が開かない。ねばつくくちびるを無理に開いても、喉からは痰がからん

だごろごろという音が出ただけだった。
「薬湯をお持ちしましょう」
ナグウィンは、姿を消した。
ヤエトは眼を閉じ、大きく息を吐いた。喉が詰まる。痰で窒息するかも、とぼんやり考えた。
風が動いた。
薄暗い室内に光がさす。廊下からだ、と思った。誰か入って来たのだ。誰だ、と視線を動かした。黒い人影がゆらめいている。視界が歪んで、まるで水底の景色のようだ。
竜気がたちこめている。黄金の光が揺れ、ヤエトをからめとろうとしていた。
「……」
声が出ない。それどころか息が詰まりそうだ。
彼の上に屈みこんだのは、竜気のかたまりだった。
——ウィーシャか。
皇帝との繋がりをそこなわれた伝達官。まさか、自由にさせているとは——いや、戦で人手がたりなくなったところをついて、拘束を逃れたのだろう。
力を失ったと思わせ、油断させたのだ。
たしかに、ウィーシャは皇帝との繋がりを失ったのかもしれない。だが、皇帝ではない誰かとの繋がりは残っていたのだ。考えてみれば、当たり前だ。放置すべきではなかった。
——後知恵だな、相変わらず。
ウィーシャに宿る竜気は不定形にゆらめいている。本来のあるじではないものと繋がるため、不安定なのだろう。そういえば、広間で対峙したときにも、竜気自体が人の姿をとることはなかった。
その力の渦から、ついと手がのびる。痩せた指が、ヤエトの喉にふれた。
なるほど、どうやら殺されるらしい。
いつでも死ねる覚悟はあるつもりだったが、いざ殺されるとなると怖いものだな、と思った。
弱った心臓の鼓動が、これを限りと激しさを増す。これでは、手をくだされる前に死ぬかもしれない。

「生かしておいたのが、間違いだった」
ウィーシャの顔が近づいて来た。美しい、と思った。今までで、もっとも生気に満ちて見える。
その顔の輪郭が揺らぎ、闇にとけた。濃密な竜気がウィーシャの顔を覆い、別人に変わる――冷徹な眼差しは、いつか幻視した第三皇子のそれと同じ。
顔だちは、胸が痛むほど皇女に似ていた。
「そなたは邪魔だ」
ささやくように告げられた。
病苦から解放されるのは大歓迎だが、自分の死がなにかに利用されるのは、正直いって腹立たしい。だが、これは利用されるだろう。
手をくだしたのがウィーシャであると知られれば、北嶺人と帝国人のあいだに亀裂がはしる。
指が喉にまわった。
無駄だと思いながらも反射的に手が動き、ウィーシャの腕を摑んだ。だが、ウィーシャの手はヤエトの喉にまわったまま動かない。
――なぶり殺すつもりか。
死にたくない、殺すなら早くしてくれ――相反する想念が交錯する。ウィーシャはなおも動かない。
そのとき、部屋全体が強く光った。
喉への圧迫感がゆるみ、霞む視界の向こうでウィーシャがくるりと回ってよろめくのが見えた。
凄まじい竜気。
これと同じものを知っている、と思った。
「愚か者め」
低い声につづいて、声の主が姿をあらわした。
呼吸が苦しくなかったら、声をあげていただろう。
それは皇帝だった。全身を黄金の炎に包み、往時の覇気を身に帯びて泰然と歩を進めて来た。
「少しおとなしくして見せたら、たちまちこれだ。我が子らの、頼もしくもあさましいことよ」
ヤエトに語っているのではない。倒れて姿の見えないウィーシャに、いやウィーシャに宿ってヤエトを殺そうとした第三皇子に語っている。

「陛下……」
「少し、やり過ぎたな」
低い声は、刃のようにするどい。一音ずつ、一語ずつが耳に刻みこまれるようだ。
ヤエトは呆然とその声を聞いていた。
なぜ皇帝がここにいるのか、というところまで考えが及ばない。どうやって……誰が、という言葉が浮かんでようやく、気がついた。
——伝達官だ。
肩衣を与えられた正規の伝達官以外に、皇帝から隠密の任務を託された人物が、北嶺に紛れこんでいたに違いない。
「そなたの皇帝はな、生き延びるためならなんでもする男だ。知らなんだか？」
一歩、皇帝は動いた。まるで、意志のある炎だ。近寄れば、燃やし尽くされるだろう。
「おのれが標的にされたと思えば、怖くてたまらぬわ。西の兄上のお気もちが、今にしてわかる。そなたらは皆、我が敵よ。だがな、我が子よ……ふたたび同じように逃げると思うか？　帝国の頂点に座しているというのに、ただ逃げだすと思うたか」
皇帝の喉がふるえた。笑っている、とヤエトは想った。笑っている、相手の怯えぶりを。
「どうか……陛下」
ウィーシャがすすり泣いた。
ヤエトは喉を押さえながら必死で身を起こした。とても寝ていられる状況ではない。
ウィーシャは床にしゃがみ、膝を抱えて子どものように泣いていた。すでに彼女に宿っていた者は遁走し、竜気は微塵も残っていなかった。
見下ろす皇帝の表情は、冷たい。
絶対的な優位に立った者が、弱者を見下ろす視線だ。生死も含め、相手の運命のすべてを握ったと確信したときに見せる、あの顔だ。
身体がふるえた。熱のせいなのか、おそろしいからか。それとも、怒りのためか。

ヤエトは寝台をころがり落ちた。
その音に、皇帝がふり返る。ウィーシャが喘いだのが、はっきりと聞こえた。
何度か咳をして、ようやく声が言葉になった。
「陛……下」
――なにをやっているんだ。
もう少しで自分を殺すところだった相手だ。それをなぜ、救おうとしているのか。
高潔な、と伝達官ならいうだろう。だが、違う。
――ただの阿呆だ。
寝台の足もとのあたりにうずくまるウィーシャと皇帝のあいだに、ヤエトは身を割り込ませた。
「退け。その娘は始末せねばならん。心を緩め、あるじ以外の侵入を許した罰だ」
「なりま……せん」
「退かねば、そなたも斬る」
それも困るが、しかたがない。もう動けないのだ。
ヤエトは剣が鞘をはなれるときの、ぞろりという無気味な音を聞いた。沙漠越えのときに始終聞かされたおかげで、馴染みの音だといっていい。
当時、ヤエトは糧食の管理をしていた。わずかな配分の差を巡って味方同士で斬りあう者もあり、沙漠越えも終盤にかかる頃は、地獄だった。
気が狂うかと思うほど長かったあの昼と夜。どうして生き延びてしまったのだろう、と今でも思う。死んでおけばよかったのに。
自分は皇帝を憎んでいるのか。
――それも違うな。
ヤエトがやりきれないのは、弱者を支配する強者の奢りを目の当たりにすることだ。それが帝国という巨大な国家の、いや帝国に限らず人の社会というものの宿命だと知っていても、看過できない。
だから自分は阿呆だというのだ。
皇帝自身を憎みきれないのは、彼もまた帝国の犠牲でしかないと知っているからだ。
親子兄弟で争い、血を流す呪いから、皇帝は逃げ

きれない。血の粛正を沙漠の向こうに置き去りにしたはずなのに、結局、追いつかれている。

「腹の立つ奴よ。街を焼いたといっては意見し、娘をたぶらかし、その上、面と向かって逆らう」

ヤエトはぎょっとして顔を上げた。

皇帝はおもしろくなさそうに剣を眺めた。

「忘れたとはいわせぬ。そなたは申した。ふたたび街を興したとしても、同じものはできはしない。どんな偉大な君主も、時を戻すことはできない」

まさか覚えていたとは思わなかった。諫言自体はともかく、ヤエトという存在を記憶していたとは。

略奪の興奮に、軍は乱れていた。補給物資を得るだけでよい、破壊する必要などない——通りかかった貴族に文句をつけたところ、自軍の総大将だったのだから、ヤエトは運がない。

いや、その場で手討ちにされなかったのだから幸運なのか。走って来てヤエトを地面に押し倒し、平伏させた当時の上官は、感謝しろと恩着せがましくいったものだ。

それきりなんの沙汰もなかったので、てっきり忘れ去られたものと思っていたが、違ったようだ。

「たしかにな。時は戻せぬ。賢者の教えよ」

そうつぶやくと、皇帝は慣れた手つきでぐるりと剣を回し、それを鞘に戻した。

ヤエトは眼をみはった。信じがたいことに、今回も皇帝は彼の無礼をなかったことにするようだ。

だが、その赦免は伝達官には及ばない。厳しい眼差しをウィーシャに向け、口を開いた。

「皇帝の言葉を運び、語るために選ばれし者がその力を悪用されれば、命をもって償う以外にない。二度と我が言葉を預けることはできぬし、騙りの手先に使われるとわかっていて放逐もできぬ。時は戻せぬのだ。始末をつけてやるのが、我がつとめ」

「しかし……」

「来い、ウィーシャ」

「御意」

ヤエトの背後から返答が聞こえた。
白い手が、彼の肩を一瞬だけ摑んだ。
「……ありがとうございました」
かたわらを黒い衣がすり抜けるのを、彼は留めることができなかった。
扉が閉まると、室内は闇に鎖された。ヤエトは床に転がり、荒い息を吐いた。目眩がひどく、とても動けそうにない。
強い力ではなく、体重をかけられたわけでもない。なのに、肩を摑まれた感覚が消えなかった。
遠い記憶の底から、白い影がささやいた。
――過去を視る力など、無駄なものですよ。
まったくだ、とヤエトは思った。
その気になれば、いずれ彼は知ることができる。ウィーシャがどこでどうやって死んだのかを。
だが、そのときにはすべては終わってしまっている。過去は変えられない。時は、戻らない。
なにひとつ、救えはしない……。
ヤエトは眼を閉じ、すべてが夢であればよいのにと思った。

7

ヤエトは長いあいだ死線をさまよった。あれほど遠い過去を覗きこんだのだから、当たり前である。
熱が下がっても、つとめに戻ることは許されなかった。床を払ったとたんに倒れた前歴がある。
なんのかんので仕事の話を持ち出しそうな北嶺の人間は入室が禁じられ、看病は部外者であるジェイサルドとナグウィンが交替でつとめた。
「今にも死にそうな割には、しぶといですよね」
ナグウィンにそう評されたときは、思わず反射的に謝罪の言葉を口走ってしまった。
「すみません」
「謝ることはないでしょう。見るからに死にそうにない上、ほんとうにしぶといのが悪鬼殿。見た目は

今にも死にそうなのに、なかなかしぶといのが尚書官殿、ということですよ」

「そういうそなたは、死にそうにない割には、ひ弱い……と？」

ジェイサルドが揶揄するには理由がある。ナグウィンは一回、ひっくり返ったらしいのだ。それもヤエトの看病疲れで、と聞かされた。

「わたしは普通の人間なんですよ、悪鬼殿みたいな化け物じゃなく」

「儂が戦に出ているあいだくらい、なんとか保つと思ったのですがな」

皇女と部下たちは、飛翔の力を取り戻した鳥を駆って、北方人と熾烈な戦いをくりひろげたらしい。

当初は《化鳥の騎士団》の復活におどろき、なすすべもなく逃げ散った敵兵も、やがて風雪や雷の力で対抗して来たという。

しかし、今や戦場を選ぶのは北嶺の側だ。敵の術者が力尽きれば、あとは一方的な展開だった。

詳細を知りたがるヤエトのために、戦闘の経緯を報告しに来たのはルーギンだった。

それも完全に熱が下がってから三日も様子を見て、これなら少し起きていてもいいでしょうと、ようやく許されての面会だ。

へたな牢獄より自由がないですよと会うなり愚痴ってしまい、ルーギンに笑われた。

「完治なさったら、空へお連れしましょう。空はいいですよ、自由でね」

「すぐに乗りこなせましたか」

「まあね。人が乗りこなすというより、鳥が人を乗せこなしたと、正直にいうべきかな」

「怖くはなかったのですか？」

いくら鳥が飛べるようになったといっても、即座にそれに乗って戦いにおもむくのは無謀だろう。鳥に命じて敵の頭上から石を落とさせるとか、潜んでいる敵を追い立てて戦いやすい場所へ移動させるとか、ヤエトが考えていた運用はその程度だった。

だが、皆が鳥に乗って出撃したという。冗談だろうと問い質したが、ジェイサルドもナグウィンも真顔で実話だと答えるだけだ。

鳥に乗れないジェイサルドは、その鉤爪に捕まって出撃したというから、やはり化け物だ。

呼ばれてやって来たルーギンも、やはり皆が飛んだという。こうなると、信じるしかない。

騎士は爽やかに断言した。

「怖いなんて考えていたら出撃できません」

「ですが、北嶺の民ならともかく……平地育ちの騎士団の面々も、皆？　太守もですか？」

「北嶺の民だって、鳥とのつきあいが長いといっても、実際に空を飛ぶのは未体験ですからね。もっといってよければ、騎乗して戦うということに関しては我々の方が慣れていますから」

「……なるほど」

あまり露骨なところを見せないので忘れがちだが、そういえば、この男は人一倍負けず嫌いなのだった。

空を飛ぶのが怖いと感じたとしても、誰にも告げるまい。ましてや北嶺人に劣るなどと認めるくらいなら、死んだ方がよいと思うだろう。

団長がそれなら、騎士団員もそれに倣うしかない。高空に舞い上がるのが怖くても、尻込みするなどという贅沢は許されない。気の毒に、とヤエトは思った。自分は尚書官でよかった。

「高空から射たときの矢の威力は、凄まじいですよ。長弓を使う必要はないと、納得させられました。鳥の翼に弓を当てるわけにはいかないし、短弓が主流になるのも無理はないです。正確に当てるには、まだまだ訓練が必要かな。なにしろ鳥が速くてね」

「では、鳥の復活はうまくいったのですね……」

騎士は微笑んで、小首をかしげた。

「意外ですか？　あなたが目論んだのに」

「わたしはなにもしていませんよ。ご存じの通り、ここで寝ていました」

「恩寵の力を、使われたはずですよね」

人払いはしたはずだが、無意識に室内を見回してしまった。ルーギンはヤエトの答を待っている。
「……その話は、あまり」
「もちろん、他言無用なのはわかっています。姫様に成敗されるにしても、もう少し人生を楽しんでからにしたいしね」
「では、どうぞお尋ねになりませんよう」
「好奇心のせいで狂い死にしそうでも駄目？」
ヤエトはため息をついた。
「役に立たない力です」
「そんなことはない。鳥たちだって――」
「太守がなさったことです」
「――感謝しています、とお伝えしに来たのです」
ルーギンはヤエトの手を握った。
「感謝？」
「わかるんですよ、乗り手には。鳥たちにとって、自由な飛翔は歓喜と同義だ。飛ぶことは、無上の幸せと繋がっている。あれを感じたら、あなただって役立たずだなんて思わない」
「わたしには、感じることはできませんよ」
「存じています。だから、こうして言葉でお伝えしているんです」
ルーギンは一瞬、真顔になった。
それからすぐ手を離し、困った人だというようにかすかに首をふった。
「とにかく、皆が感謝していることだけは、お伝えしましたからね。それにしても、我々の大活躍をお見せできなくて残念だったな」
「いや、人を殺すところを見てもしかたないです」
「……身も蓋もないことをおっしゃいますね。ま、それも先生らしいけど」
「捕虜はいないと聞きました」
「望んでそうしたわけではありませんよ、いっておきますが。かれらは、捕虜になるより自死を選ぶのです。そう教育されているのかな」
血が繋がっていなければ交易も許さないほどだ。

排他的な文化なのだろうと見当はつく。敵の手に落ちて生き延びるという選択肢はないのだろう。

幸い、北嶺人の側にはそういう信念はなく、攫われていた者のほとんどは無事連れ戻すことができた。

しかし、かれらは鳥を失ってしまった。北方蛮族は、襲った村々の鳥をすべて殺していたのだ。

――互いに、相手を許せまい。

未来に暗さを覚えつつ、ヤエトは尋ねた。

「では、侵入部隊は全滅ですか」

「いいえ、一部は川に追い込んで、わざと逃がしました。通信文を射てやったので、こちらの意図は通じたはずです」

「通信文とは？」

「北嶺との境界にある川を越えるな、と。和平の使者を正式に寄越さない限り、あらゆる国境侵犯を許さない……といったところかな」

ヤエトは大きく息を吐いた。

今後も、北方は北嶺を攻めて来るだろう。昔からつづいているのだ、これで終わるはずがない。

今回の一件も、根本は同じだ。ただ、北方が帝国の勢力と結んだため、事態が複雑になった。恩寵の力が増し、敵味方ともに戦闘力が一気に上昇したことも、大きな変化を与えた。

――今後どうなるかは、太守次第だろうな。

皇女が呼び戻されるとして、後任がどういう考えの持ち主か。あるいは、すでに皇子同士の派閥争いが激化している中で、どの派閥に属する人物が任命されるのか。帝国内の情勢の変化とあわせて、気の抜けない時期がつづくだろう。

そのときには隠居していたいものだ、とヤエトは思った。太守副官のような大任からは是非とも離れておきたく、どうしても辞められないなら、せめてあらたな左遷先を得、閑職に就きたいと思う。

どこかに潜んでいるはずの皇帝の伝達官を探し当て、隠居させてくださいと泣きつこう、と心はすでに決まっている。

ルーギンは皇女の騎士団長なのだから、皇女とともに都へ戻るのだろう。
「南麓鎮とは連絡をとりましたか？」
「いえ。実をいうと、その件であなたのご意見を伺いたいところなのですけどね。それをやると、ジェイサルド殿に首を絞められます。そろそろ扉が開いて踏み込まれてもおかしくない頃合かもしれない」
「おとなしく絞められるんですか？」
「もし彼の手を逃れても、次は姫様に睨み殺されますよ。姫様を差し置いて長時間の面会を許されたというだけでも、肩身が狭いのに。しかも、姫様が面会をなさるための口実を奪ったとあっては……いやはや、どんな申し開きもできないな」
「楽しそうですね」
素直な感想を述べただけだったが、ルーギンは疲れた表情を見せた。
「先生はほんとうに、張り合いがない」
「なにがです」
「とにかく、次は姫様を呼んでおあげなさい。先生が生き延びておられることを、ご自分の眼でたしかめたいと仰せでしたから」
ヤエトは眼をしばたたいた。
「わたしは太守の副官です。こちらからお呼びすることなど、できません」
「……しかし、姫様だってあなたを呼びつけるわけにはいかないでしょう。病人ですよ？」
「病だろうが死にかけだろうが、ご命令とあらば出頭すべきです。太守は気軽に部下のもとへお顔をお出しになりますが、あれは歓迎すべからざることと存じます」
ルーギンはなんともいえない顔をしてヤエトを見ていたが、やがて笑いだした。
「いいでしょう、よくわかりました。姫様に、そうお伝えしておきますよ」
なぜ笑われるのかはわからなかったが、その夜、皇女がひそかに訪ねて来たときには、ルーギンが彼

の言葉を正確に伝えてくれたのかどうか、ひどく疑わしく思われた。

ただ訪ねて来るだけでも外聞がよくないのに、夜である。熱は下がっているので、付き添いは誰もいない。これがまた妙な噂になって皇帝の耳に入ったらと思うと、渋い顔をせざるを得ない。

皇女もはじめから不機嫌を隠していないから、お互い様というべきか。

「以前も申し上げましたが、かるがるしく男性とふたりきりになられては、なりません」

意見をしても、むすっとした顔で椅子に座っているだけだ。

しかたなく、ヤエトは冷たい床の上に座った。

「なにをしている」

「皇女殿下の御前で、横になっているわけには参りませんので」

皇女はため息をついた。それから、よし、と小さくうなずいた。

「外套を着けろ。命令だ」

反論する前にそれを封じられては、身支度をするしかない。皇女は部屋の窓を全開にし、吹きこむ風に煽られて、ヤエトはよろけた。

「来い」

「どちらへ？」

「いいから、来い」

窓の外、一回層下の屋根の上に鳥が待っていた。はじめからそのつもりだったのか、とヤエトは思った。無駄に計画的だ。

「飛び下りろ」

長いあいだ寝てばかりで、なけなしの筋力がさらに衰えたヤエトにしてみれば、かなりの冒険だ。

「失敗しそうです」

「案ずるな。鳥が受け止める」

――おかしい。尚書官なのに。

尚武官でなくてよかった、とほっとしたばかりのはずなのに。結局、こうなるのか。

「ほら、手を繋いでやる」
　断る暇もなく手を握られ、狭い窓枠に並ばれた。身体をぎゅっと押しつけられて、このままでは窓の形にかたまってしまいそうだ。
「行くぞ」
　こうなってしまっては、否やもない。しかたなく、ヤエトは空に飛んだ。
　身が竦むような感覚に包まれ、生まれたことを後悔しながら、彼は鳥の背に拾われた。同時に皇女も飛び下りている。
「少し待て。くくりつけてやる、落ちないように」
　くちびるが強張って言葉が出ないうちに、皇女は作業を済ませ、ヤエトの前、ほとんど鳥の首の付け根あたりに座って手綱を握った。
　鳥はかろやかに助走をはじめて、雪を蹴立ててふわりと五歩で宙に浮き、六歩で翼が空気をとらえて飛翔へと移った。
　――寒い。
　剝き出しの頬が切れそうなほど冷たい風に、ヤエトは思わず肩をすくめた。
「真っ向から風を受ける馬鹿がいるか。身体を前に倒せ。手綱を持つのだ」
　少し飛ぶと、寒さに慣れた。今宵は雲も少なく、白銀にかがやく稜線は、幻めいて美しい。
「こうでもせぬと、安心して話ができぬのでな」
「……安心、とは？」
「陛下の伝達官が潜んでおる」
　ヤエトは皇女の頭を見下ろした。月光を浴びて白っぽく見える巻き毛が、ふわりと彼の胸にかかる。皇女はのけぞるようにヤエトを見上げた。
「知っていたか？」
「誰がそうかは、確信できませんが……」
「ほう。推測はしているのか。誰だと思う？」
「ナグウィンではないかと」
「当たりだ」
　侵入者たちとの本格的な戦闘が始まって以降、城

に残っていた者が誰かを考えれば、おのずと突き当たる結論だ。行商人が皇帝直属の間諜であっても、そう不思議はない。

——皇帝は皇女が心配なのだ。

特別な移動手段まで使って、かれらを冬の北嶺に来させるほどなのだから。

それより、ヤエトには気になることがあった。

「陛下の伝達官に聞かれて都合の悪い話が、おありなのですか」

皇女は顔を前に戻した。

「……うん。あるな」

第三王子に処罰がくだったかどうか、今なら話の流れで尋ねられる、とヤエトは思った。

だが、彼はその問いを呑みこんだ。

——悲しませるだけではないか。

尋ねれば、ヤエトが襲われたことを話さねばならなくなる。兄皇子のさらなる裏切りの事実を、伝える必要があるだろうか。好奇心を満足させる以外、意味があるのか。

黙っている皇女に、彼は先をうながした。

「なんでしょう？」

「鳥のことをどうするか、とか」

「鳥？」

「わたしは神と契約した。そうだな？」

「いえ、……契約をしたというより、再確認したというべきでしょう」

「どういう意味だ？」

「……太守、寒過ぎます。どこかに降りていただけませんか」

「よかろう」

皇女が選んだのは、旧城趾だった。妥当なところだな、とヤエトは思った。晴れているとはいえ、冬の夜に出歩く者はいないだろうが、この呪われた場所であれば、人がいる可能性はさらに低い。

地上に降りてしまえば、そう寒くもなかった。風を受けなくて済むぶん、ずっとましだ。

「乗ったままでよい。あたたかいしな」
皇女は鳥の背をまたぎ直し、彼と向きあった。
「それで？　再確認とは」
「皇女殿下は、竜種であらせられます。すでに神より恩寵を賜りし者が、あらたな神と契約を結ぶことは不可能です」
「それは……そうだが、しかし実際、わたしは契約をしたではないか」
「北嶺に与えられた恩寵は、二種類に分けられます。ひとつは、鳥との心話能力です。これは近年まで伝えられ、消えてはいませんでした」
「考えてみれば、それもおかしなことだな」
顔をしかめる皇女に、ヤエトはうなずいた。
「剣が砕けたのは、竜を地上に顕現せしめるにあたっての負荷に耐えかねたのかと思いますが、それは契約の破棄にはあたらなかったのかもしれません」
なにをもって恩寵の力を奪う基準となすかなど、神自身にでも尋ねてみなければわからない。
弱まり、おそらく変質もしただろうが、鳥と語る力が今に伝わっていることは、揺るぎない事実だ。
「もうひとつは、失われていた飛翔の能力です」
「それを、わたしがよみがえらせた」
「ええ。ですが、これは鳥に与えられる恩寵の力です。人に与えられるものではない」
皇女は眼をみはった。
「……鳥が契約を？」
「どう考えても、恩寵の力自体は、鳥のものです。薄れていたその力を、ふたたび喚起させたのみ……と、少なくとも神はそう捉えておいでなのでしょう。そう考えれば、不自然ではなく納得できます」
ほかにも仮説がないわけではないが、あれこれ並べても皇女を混乱させるだけだ。
「では、竜を呼ぶ力は」
「あんなものは、おまけです。使えない力ですし」
「おまけ……」
「もっとも、竜にとってはあちらの方が本命だった

かもしれませんね。地上に復活したければ、人に呼ばせてしまえばよいのですから」
「それだ」
見よ、といって皇女は腰に佩いた剣を抜いた。《青鉄》特有の澄んだ色の刃が空を切る。その刀身には、見たことのない文字が刻まれていた。
「これは……北嶺本来の文字かもしれません」
思わず口走ってから、ヤエトは自分に呆れた。そういう場合ではない。
「竜を呼ぶ剣だ。このままで、大事ないと思うか」
ヤエトは皇女と自分のあいだに横たえられた剣を見下ろした。月が、映っている。
「呼びたければ銘を読め、と」
「そういっていたな」
「お読みになれますか？」
ヤエトでさえ、知らない文字だ。皇女は首を左右にふった。
「読めぬ」
「問題ありません。そのまま、お腰に」
ヤエトは剣に刻まれた銘をしげしげと眺めた。不思議な文字だ、と思う。古王国の文字に似た形もあるにはあったが、これは偶然だろう。基本的には、違う系統の文字に見える。
「わたしは、北嶺を離れられなくなったと思うか」
やや強張った声で問われ、ヤエトは我に返った。そんなことを気にしているのか、と思わず笑みが漏れてしまう。
「土地に縛られるのは鳥だけでしょう」
「だが、この剣を寄越したのは同じ神だぞ」
視線を上げると、思いのほか真剣な眼差しに出会い、ヤエトは笑みをおさめた。
「なにか、お感じになるところが？」
「いや……それはないが、鳥を土地に縛った神だ。わたしも縛られたと考える方がよくはないか」
「たしか、昔語りの断片をセルクに聞いたことがあります。この国の最後の王族は、遠くへ逃げ去った

と。ですから、人には及ばぬ縛めかと存じますが」
「そうか」
皇女の表情はまだ冴えない。
「陛下にはお話しになりましたか」
「いや」
「……太守は、今でもお逃げになりたいですか？」
え、と皇女は小さく声をこぼし、しかしすぐに頭を左右にふった。
「それは、諦めた」
「事実はどうあれ、動けなくなったとおっしゃれば、都には戻されずに済みます」
皇女は眼をみはった。どうやら、土地に縛られてしまったかもという予期せぬ事態に動揺し、そこまでは考えが及んでいなかったらしい。
「嘘をつけと」
「嘘ではないかもしれません。確認しなければ――それも太守の御身を危険に晒さねば、わかり得ないことです。当面、北嶺を離れることはできぬとお伝えになっても、なんら不自然はありません」
呆然と、皇女はヤエトを見返した。それからゆっくりと剣を持ち上げ、あらためて不思議な文字が刻まれた刀身を凝視した。
「北嶺の、あるじになるということか」
「太守はすでに北嶺郡の支配者でいらっしゃいます。鳥たちは、飛翔の力を取り戻したのが誰かを知っています。鳥が認めれば、民も認める。お望みならば、独立なさることも可能でしょう」
今度は皇女は声を漏らさなかった。ただ、まじまじとヤエトの顔を見た。
「本気か」
「思いつきを口にしているに過ぎません、いつものように」
「いつものように無責任にか」
「ただ無責任なつもりでもありませんが」
皇女は笑いながら剣を鞘におさめた。
「わたしが独立するとなれば、副官はそなたぞ？」

そう来たか、と思った。皇女が独立してしまえば、皇帝の伝達官に泣きついても意味はない。
「今すぐでなくとも」
「視線が泳いでいるぞ、尚書官」
「帝国からの独立を真剣にお考えなのであれば、時宜を見ることが肝要かと存じます」
「可能ではあると思うのか？」
「無論。空を制する力は無視し得ぬほどのもの。またそれを、皇子殿下が手に入れられたなら、即座に戦ともなりましょうが、失礼ながら、皇女殿下のものでございますれば……違う道も選べましょう」
「若い男が送りこまれるわけか」
「若くない男も候補に含まれると思います」
皇女は吹きだした。
「真面目な顔をしてなにをいうかと思えば」
皇女の身になって考えたつもりだったのだが。ヤエトは小さく咳をした。
「とにかく、太守は力をお手になさいました。無理強いを撥ね除けることも、おできになりましょう」
「わかった。当面、都へ戻ることはできかねると、陛下にはご説明申し上げよう。たしかに嘘ではなかろう。だが、そなたが申すのがまことなら——つまり、恩寵の力は鳥に与えられただけであるなら、わたしがここに居座る正統性はどこにある？」
ヤエトは少しおどろかされた。
——また、竜種らしくないことをお考えだ。
「先にも申しましたが、鳥が」
「……鳥が？」
ヤエトは微笑んで、皇女にうなずいた。
「鳥が認めてくれるでしょう。ルーギン殿に聞かされました——飛翔の喜びは、鳥たちにとって無上のものであると。鳥たちの翼に風を取り戻した恩人が誰か、皆が知っているのではありませんか？」
「だが、それはそなたが」
「契約の剣を手になさったのは、太守です。わたしではありません」

釈然としないという顔をしていた皇女の上体が揺れた。反射的に抱きとめると、皇女の背中を突いて倒した犯人と視線が合った。
「……太守の鳥が、その通りだと申しております」
「真実とは、痛いものだな」
皇女は顔を上げると、少し照れたように微笑んで、するりと鳥の背から降りた。それから、鳥の首に腕をまわし、その頬に頭をすりつけた。
「クラルめ。わかったから、突つき癖はやめろ」
「この鳥はクラルという名なのですか？」
「うん。こやつは雌で小柄だが、とても気が強くてな。はじめはなかなか心を許してくれなかったが、今ではわたしの親友だ」
きっと、気が合うと思ったから皇女に乗らせたのだろう。厩舎長の判断は、いつも正しい。
鳥の背をかるく撫でてやると、クラルはまたヤエトの顔を見た。皇女は笑った。
「クラルが、なにか申しましたか」
「なんでもない。わたしにも秘密くらい持たせろ」
「いくらでも、お好きなだけどうぞ」
「苛つく男だな、そなたは」
「申しわけありません」
「まあよい、許す」
うなずいたきり、長いあいだ皇女は黙っていた。鳥の羽に顔を埋めて、動かない。俯いた顔に黄金の髪がかかって少しも表情が見えないまま、暫く時間が経過した。
「太守？」
答がない。
思わず手が動き、髪をかき分けていた。
指先が頬にふれると、やはり冷たいと感じた。その手を、皇女の手が摑んだ。
「そなたが死んだら、どうしようかと思った」
「遺品は適当に処分してください。書き物の道具は、厩舎の助手と厨房の助手に」
皇女は答えない。手を握る力が強くなっただけだ。

思いだして、ヤエトは言葉をたした。
「それから、申し上げたかどうか記憶にないのですが……ナグウィンには特権を確保してやると約束したので、報いてやってください。適当に」
「……わたしに遺してくれるものはないのか」
ヤエトは返す言葉に窮した。皇女に贈って恥じないものなど、持ち合わせがない。
「それは」
「それは？」
「美しい思い出、とか？」
皇女はまた俯いた。肩がふるえている。どうやら笑っているらしい。
「とか？　とはどういう意味だ……ふざけおって」
指先に、湿ったものを感じた。
涙だろうかと思う。ルーギンは、皇女は泣かないといっていたのに。
「申しわけありません」
「そなたを失うのではないかと思ったのに、止めることもできなかった」
「……は？」
皇女は顔を上げた。やはり泣いている。
「過去に遡ったときだ！　神々の時代を覗くのだ、そなたの体力が保たぬのではないかと……」
どう応じてよいかわからず、ヤエトは微笑んだ。
「それでも、信じて任せてくださったではありませんか。なによりも、ありがたいことです」
「もうやらぬぞ。二度と、させぬからな！」
ヤエトは声音をあらためた。
「それよりも、太守……申しわけありません。伝達官殿を……死なせてしまいました。同じ邸にいながら、お救いできませんでした」
「そなたのせいではない。放念せよ」
「後ろから斬られて、お亡くなりになったようでした。ほとんど、即死に近かったかと」
皇女は乱暴に目もとを拭うと、確認した。
「視たのか」



「偶然です。最期を迎えられた部屋に案内されて」
そうか、とつぶやいてまた、皇女は俯いた。
「責めを負うべきは、そなたではない。わたしだ。……不憫なものよ、伝達官とは」
「ウィーシャ殿は……皇帝の伝達官だった娘は？」
「自死したそうだ。出征中のことだったので、報告を受けただけだ。詳しい経緯は知らぬ」
やはり、とヤエトは思った。皇帝は、第三皇子がヤエトを襲った事実を娘に伝えていない。傷つけるまいとしてか、なにか別の理由があるのか。ともあれ、ウィーシャは戦闘の陰に隠れて忘れられた。
――彼女自身が選んだ死なのだろうか。
自分で選んだことであってほしいが、自死を望んだとは思いたくない。矛盾している。
伝達官には自分自身などあっても残酷なだけではないかと、そう思っていた。
だが、それは不遜な考えだと、今は思うようになっていた。都で出会った皇女の伝達官の人生を、否定することなどできない。彼は間違いなく、彼自身として生きていた。
――しかし、彼は死んだ。ウィーシャも。
どちらも、伝達官であるがゆえに命を落とした。
「わたしに力があるというなら、二度と伝達官を持たぬという選択をしてもよいだろうか」
どう答えるべきか迷った挙げ句、ヤエトはその問いには直接的な答を与えずに済ませた。
「あのかたは、皇女殿下の伝達官であることを誇りに思っていらっしゃいました」
「そうか」
「太守が去られた後は、幸せな心地がすると」
「それは――」
皇女はなにかいいさして、やめた。気が変わったらしく、不意に怒ったような口調で告げた。
「伝達官の死に責任を感ずるなら、そなたは死ぬな。部下にそう勢いよく次々と死なれては困る」
「案外しぶといらしいです」

「しかし、あまり外に長居させるわけにもいかぬな。まだ、話したいことがたくさんあるのだが」
「わたしも、申し上げたいことがいくつも」
皇女は弾かれたように顔を上げた。
「まことか？」
おどろかれて、むしろヤエトの方が面喰らった。
「おかしいでしょうか？」
「いや……おかしくはないが」
「ですが、残念ながら体調がすぐれず、無理をするとすぐに倒れるのも事実です。あとひとつずつ、にいたしましょう。太守からどうぞ」
「そなたから申せ」
「それでは……いつか都におりましたときに、ずいぶん過去に遡って幻視したことがありましたが」
「ああ、倒れたときか。予言を視たと」
よく覚えているな、とヤエトは舌を巻いた。
「気になる内容ですので、申し上げておきます」
自分の中で反復し過ぎて、楽器を抱えた男の台詞はほとんど暗記してしまっている。ヤエトが語り終えると、皇女はうなずいた。
「おもしろいな」
「おもしろい……ですか？」
「実際、昨今では恩寵の力が増している。わたしはその女王とやらの故実には詳しくないが、たしか魔物を従えて戦をしたと伝えられていたか？」
「はい」
「それを退けるために、人外の力を封じる戦いがあったのだろう。封印とはいずれ薄れ、弱まって消えるが必然。予言というほどのことでもなかろう」
そういわれてみれば、そのようにも思える。
「あの幻視が必然を語るものであれば、これからは多難な世になりましょう」
「その男は竜を呼べといったのだろう？　知らずに、わたしはこの剣を手に入れたが——銘を読まねばならぬ日が来れば、それは予言といえるだろうな」
ヤエトは凍りついたが、皇女は不敵に笑って言葉

をつづけた。
「世界を滅ぼすほどの力か。どうなるかな。……さて、わたしの番だな？　ヤエト」
「はい」
「わたしはな、そなたに我が翼臣となってほしい。わたしを支えてほしいのだ」
翼臣とはまた古風な表現を、とヤエトは思った。
尚武尚書の二官が揃って竜種を支えて羽撃かせるというのが本来の意味だが、竜種が「我が翼臣」といえば、とくに信頼を置く腹心という意味になる。
「斯様な虚弱な男にですか？」
「案外しぶといそうだ」
「太守……」
皇女は困惑する彼を見上げて断言した。
「そなたなら、わたしが道を誤ることのないよう導いてくれると思うのだ。心から我が名を預けることができるのは、そなただけだ」
「身に余る光栄に存じます。しかし――」
「謙遜は無駄だ。すでにそなたは、やってのけた。遠方よりはるばる帰還して我が名を呼び戻しておいて、無理ですとか駄目ですとか、許さんからな」
「ですが」
「わかった。問題を単純化しよう。そなたはわたしが嫌いなのか好きなのか、どちらなのだ」
どこが単純化だ。まったく関係ないではないか。
「謹んで、副官としてのつとめを果たすのみで」
「どちらか、と訊いている」
「……嫌いではないと思います」
皇女はしつこく問いつめた。
「どちらか、だ。男らしく、はっきりせよ」
「男らしさの持ち合わせはございません」
「年頃の娘が好きか嫌いかと尋ねているのだから、もう少しそれらしい反応はできぬのか」
つきあいきれない。ヤエトはため息をついた。
「太守のためなら死ねます、とでも？　佞臣をお望みであれば、ほかでお探しください」

皇女はくちびるを尖らせると、鳥の背にひらりと飛び乗った。
「ああもう腹の立つ奴！　帰るぞ！」
皇女はその後もなにかぶつぶつとつぶやいていたが、鳥の助走と羽撃きの音に紛れて、ヤエトの耳には届かなかった。
少し怒らせ過ぎたかもしれない。
「太守」
「まだなにか文句があるのか！」
「いえ、太守は素晴らしいかただと思います」
「しらじらしい」
鳥なら毛を逆立てているところだろうな、と思った。シロバが、怒るとこんな感じになる。
「わたしの怖いもののことを、ご記憶でしょうか」
「……まだとり憑かれているのか、夢に？」
案ずるようにふり返られて、ヤエトは微笑した。
「わたしの祖先を幽閉していたのは、当時の皇帝陛下です。皇祖、と呼ばれているかただと思います」
皇女は言葉を失った。肩を落として前に向き直り、ひとことつぶやいた。
「すまぬ」
そんなつもりで話したのではない。ヤエトは手綱を握る皇女の手に手をかさねた。
「こうしてお手を繋がせていただければ、わたしが視たものを太守もご覧になれるのは、それぞれの父祖がかわした誓約の名残りだと思います」
「そうだったのか」
風が耳もとで唸り、相手にしっかり声を届けようと思えば、腹からきちんと発声せねばならない。寒さに強張る頬を、ヤエトは必死で動かした。
「わたしにとっては、皇祖様よりも我が太守の方がずっと、偉大なかたです」
皇女は笑った。
「それは少し、言葉が過ぎるぞ」
「本心から申し上げております。皇祖ほどの英雄ですら、古王国の力を独占したいと希い、手放せなか

ったのです。太守は、それがおできになる」
皇女は手綱をとる手を返し、ヤエトの指に指をからめて握った。
「そうであればよいと思う。だがな、いずれ、わたしも権力の誘惑に屈する日が来るだろう。握ったこの手を放したくないといったら、どうする？」
「そうですね……いろいろと、生活に不自由が生じると思います」
「まぜ返すな。わたしには、そなたが必要なのだ」
「お役に立つかどうか」
「役に立つに決まっている。そういうことに関しては、そなたは第一人者だからな」
どういう意味だろうと考えていると、皇女はふり向いて、笑った。
「隠居生活がどれほど魅力的か、力を捨てるのが楽しいかを、いくらでも説いてくれそうではないか」
「それでお仕えすることになるのであれば、たしかにわたし向きの仕事ですね」
「やっとわかったか。そういうことだ！」
不吉な予言のことがなくても、時代の趨勢は混沌としている。
皇位を巡っての争いは激化の一途を辿るだろう。すでに皇女自身、同腹の兄に裏切られている。平穏な日々が待っているとは思えない。
――この先、どこまでつきあえるのか。
行けるところまでは、行ってみよう、と思った。
逆に考えれば、どうせ行けるところまでしか行けはしないのだから。
「まずい」
「どうなさいました」
「セルクに気づかれた。大事な尚書官殿を勝手に持ち逃げしたと、烈火のごとく怒っている」
「それも鳥を通じてわかるのですか？」
「そうだ。厩舎の鳥が考えていることなら、だいたいわかるぞ。シロバは少し難しいが、今はわかる。自分をさし置いてクラルがそなたを乗せたから、も

のすごく機嫌が悪い」
　急いで戻らねば、とつぶやいた皇女の手を、ヤエトは握り返した。
「もう少し、やきもきさせてやりましょう。狭い部屋に閉じこめられ、見張られるのは飽き飽きです。空は、心地よいですね」
　おそろしく寒いですが、という言葉を呑みこんだ。皇女はふり返り、かがやくような笑顔を見せた。
「そなたが気に入ってくれて、よかった」
「空を、ですか？」
「そうだ。そなたが取り戻してくれた翼なのに、まだ飛んでいなかっただろう？　そなたこそ、この自由を味わうべきだと思ってな」
「お心遣い、かたじけなく存じます」
「当分また閉じこめられるぞ。ゆるりと楽しめ」
　たしかに、空は自由と結びついていた。
　かつて、どこにあると問われて心の中にと教えたものは、今や四方にひろがり、尽きることなどないかに思われた。
　それが錯覚に過ぎなくとも――少なくとも今は、空駆ける翼はかれらのものだった。

（了）

あとがき

さして創作意欲も高くないくせに、書けば長くなるという矛盾した性質があり、おかげでこの上下巻を書くのに一年ほどかかりました。誇張でなく。

わたしは「寡作」や「遅筆」といった枕詞で語られる作家のようなのですが、寡作はともかく遅筆はそんなでもないと思う……と自分では考えていました。ですが、なまぬるかったですね。OK、遅筆です！　よし、これで問題ありません。

いや、問題ないどころか、問題ありまくりですが。

おかしいです、去年までは一か月少々で一冊書けていたのに……。なんでこんなに大変なんですか、この本。一時はもう書き上がらないのではないかと思いました。

でも、終わりました。終わったのです。これで休めます。休みまくりです。

浮かれていたところ、遅筆な作家から原稿をもぎ取るという偉業をなしとげた編集者・内田さんに、続編を書くとしたらどれくらいの長さになりますか、と訊かれました。

はじめから「シリーズ化もできるように」というご依頼でしたので、いろいろ仕込んではありますが、ええと……いくらでも書けてしまいそうです。きりがないです。設定が設

定なので、過去へも遡ることができますし。
あっそうだ、視点人物のヤエトが死ぬまで、ということ——
「死なせません」
——で。って。瞬殺されました。反応速いよ！
また別の日には、今後の展開について訊かれました。
今後ですか……こうなって、ああなって、……という感じなんですけど、こんな風になっているところに、あれが起きるというパターンもあり。もう少し話を大きくすると、これをこうする手もあるし……どうにでもなっちゃいますね。どうなるんでしょうね。
まあ、つづきを書かなければ、関係な——
「許しません」
——いですがって、また瞬殺されました。ここぞというポイントでの却下が神速！
こんな感じで、どうやら続編を書かねばならないという方向に話が進みつつあります。続編を読みたければ内田さんを応援だ！　頑張れ内田さん！

ということを、あとがきに書いてもよいですか、四ページもあるので自分のことを書くだけでは間がもちません……と相談してみたところ。
「かまいませんが、頑張るのは妹尾先生ですよ？」

……まあ。それは。たしかに書くのはわたしですが、やる気は内田さんから供給してもらうんです！

「はい、わかりました。どんどん供給します」

いい人だなぁ。よーし頑張るぞ……って、あれっ？　わたしは休みたいんじゃなかったかな、と頭の片隅でちらりと思いました。遅いよ。完全にあやつられています。

しかも、ヤエトは殺させません、とあらためて宣言されました。

ヤエトといえば、上巻につづき素晴らしいイラストを描いてくださったこときさんも、ヤエトがお気に入りだとか。たしかに、愛を感じます。下巻の口絵でも、さりげなくかっこいいです。

しかし、口絵といえばジェイサルド。上巻でまだチョイ役でしかなかった彼に、あまりにも素敵なキャラクター設定画が出てきたので、下巻では彼も活躍することですし口絵に登場してもらいましょう、と提案したのはわたしですが……想像を凌駕するかっこよさ。惚れてしまいそうです。どうしましょう。

続編の主人公はジェイサルドにして、八面六臂の大活躍――「許しません」という声がどこからともなく聞こえてきました。空耳おそるべし。

話が逸れましたが、漠然としかイメージしていなかったキャラクターが、にょきにょき

と絵になって出てくるのを見ると、小説書いててよかったなぁ！　と思います。

ことぎさんのイラストは、やる気少なめのわたしの鼻先にぶら下げられた人参のようなものです。貴重なパワーをいただきました。ありがとうございます。

そしてもちろん、この本が出版にこぎつけたのは、寛大かつ気長に見守ってくださる読者のみなさまのおかげでもあります。待った甲斐があったと感じていただける本になっていれば、これほど嬉しいことはありません。

続編もそのうちお届けできる雰囲気ですので、もしお気に召したら、また次の本でお会いしましょう。

少し、お待たせするかもしれませんが……どうも遅筆っぽいので。

二〇〇八年十一月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部

幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

Colophon

翼の帰る処[ところ]——下

THE HOME OF WINGS——Lower volume

二〇〇八年十一月三十日——第一刷発行

著者——妹尾ゆふ子 せのおゆふこ
発行人——伊藤嘉彦
発行元——株式会社 幻冬舎コミックス
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六二一二(編集)
発売元——株式会社 幻冬舎
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六二一二(営業)
振替 〇〇一二〇—八—七六七六四三
コンセプトデザイン——コードデザインスタジオ
印刷・製本所——共同印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は
送料当社負担でお取替致します。
幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2008
ISBN978-4-344-81493-6 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344814936

1920293009001

翼の帰る処——下

THE HOME OF THE WINGS——Lower volume

北嶺太守である皇女に療養を命じられ、都に戻ってきたヤエト。皇女の実兄の元に身を寄せるが、そこで皇位継承権を巡る政争にヤエトは巻き込まれてしまう。一方、北嶺でヤエトの帰還を待つ皇女の身にも陰謀の魔の手が迫っていた！　皇女を救い出すため、ヤエトは都を脱出し、雪に閉ざされた北嶺へ向かおうとするが——。
歴史の光陰が織りなす壮大なるファンタジーロマン、ここに完結!!